

ISSN 0916-4375

Research

独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター

臨床研究業績年報

Vol.42 2022

Institute for Clinical Research

Osaka National Hospital

独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター 臨床研究センター

Research
R-CRIONH

＜目 次＞

I. 研究業績

診療部門

＜総合診療部＞	1
＜腎臓内科＞	4
＜糖尿病内科＞	6
＜輸血療法部＞	10
＜血液内科＞	12
＜血友病科＞	20
＜呼吸器内科＞	27
＜脳卒中内科＞	29
＜感染症内科＞	35
＜精神科＞	76
＜消化器内科＞	78
＜循環器内科＞	91
＜小児科＞	106
＜外科 肝胆膵外科・上部消化管外科・下部消化管外科・呼吸器外科・乳腺外科＞	107
＜形成外科＞	129
＜整形外科＞	132
＜脳神経外科＞	144
＜心臓血管外科＞	158
＜皮膚科＞	162
＜泌尿器科＞	164
＜産科・婦人科＞	167
＜眼科＞	170
＜耳鼻咽喉科＞	173
＜放射線診断科・放射線治療科＞	175
＜口腔外科＞	182
＜救命救急センター＞	183
＜麻酔科＞	193
＜臨床検査科＞	195
＜リハビリテーション科＞	207
＜臨床腫瘍科＞	210
＜薬剤部＞	214
＜看護部＞	221
＜栄養管理部＞	223
＜ケアサポートチーム＞	225
＜臨床心理室＞	229
＜メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」＞	232

<臨床工学室>	234
<院長室>	238

臨床研究センター

<臨床研究センター>	240
<幹細胞医療研究室>	256
<再生医療研究室>	259
<分子医療研究室>	267
<エイズ先端医療開発室>	275
<HIV感染制御研究室>	290
<臨床疫学研究室>	296
<がん療法研究開発室>	302
<高度医療技術開発室>	323
<医療情報研究室>	326
<災害医療研究室>	328
<臨床研究推進室>	332
<レギュラトリーサイエンス研究室>	335

II. 研究助成一覧	337
------------------	-----

III. 全研究業績の区分分類と業績件数の総括表

診療科全体の研究業績の区分分類と業績件数の総括表	340
臨床研究センター全体の研究業績の区分分類と業績件数の総括表	340
全研究業績の区分分類と業績件数の総括表	340
研究業績の区分基準と記号	341

I. 研究業績

-診療部門-

総合診療科

中島 伸

総合診療科は常勤医師 2 名、非常勤医師 6 名、内科専攻医 1～2 名、初期研修医 1～3 名、診療看護師 3 名で日々の診療を行っています。対象疾患は肺炎や尿路感染などの感染症を中心として、不明熱、外傷（脊椎圧迫骨折、軽症頭部外傷など）、めまい、脱水症など多岐に及んでおり、入院患者数は 15 名程度です。また、これらの中から興味深い症例や治療成績評価についての学会発表を行いました。幸い、2 編の論文が査読付き学術雑誌に受理されました。今後は論文数を増やしていきたいと考えています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-3

森 寛泰、中島 伸：大阪医療センターにおける診療看護師（JNP）の活動実績。国立医療学会誌「医療」、76(3)：205-209、2022 年 6 月 20 日

森 寛泰、山口壽美枝、竹本雪子、福田貴史、松本謙太郎、和田 晃、大西光雄、平尾素宏、中島 伸：診療看護師（NP）が一次・二次救急患者に対応するための包括的指示書の作成。日本 NP 学会誌、7(1):1-10、2023 年 (in press)

A-6

中島 伸：これが本当のテレメディシン？「レジデントノート」24(1):p144-146、羊土社、2022 年 4 月 1 日

中島 伸：初期研修医の心得「レジデントノート」24(3):p545-547、羊土社、2022 年 5 月 1 日

中島 伸：第 5 のバイタル「レジデントノート」24(4):p701-703、羊土社、2022 年 6 月 1 日

中島 伸：決めつけは禁物「レジデントノート」24(6):p1069-1071、羊土社、2022 年 7 月 1 日

中島 伸：ゴール設定を考える「レジデントノート」24(7):p1241-1243、羊土社、2022 年 8 月 1 日

中島 伸：3 つの格言「レジデントノート」24(9):p1617-1619、羊土社、2022 年 9 月 1 日

中島 伸：車の修理は医師の仕事に似ている「レジデントノート」24(10):p1765-1767、

羊土社、2022年10月1日

中島 伸：嗅覚や聴覚のチェックをしていますか？「レジデントノート」24(12):p2165-2167、羊土社、2022年11月1日

中島 伸：知っておこう、高次脳機能障害「レジデントノート」24(13):p2335-2337、羊土社、2022年12月1日

中島 伸：裸眼立体視ノススメ「レジデントノート」24(15):p2725-2727、羊土社、2023年1月1日

中島 伸：緩まない糸結びの原則「レジデントノート」24(16):p2881-2883、羊土社、2023年2月1日

中島 伸：医学用語の書き間違いに注意しよう「レジデントノート」24(18):p3241-3243、羊土社、2023年3月1日

B-4

森 寛泰、山口壽美枝、竹本雪子、中島 伸、大西光雄：当院の救急診療における診療看護師と（NP）と医師との協働からの考察。第25回日本臨床救急医学会、大阪、2022年5月26日

森 寛泰、山口壽美枝、竹本雪子、中島 伸、大西光雄：診療看護師を（NP）を活用した診療体制から持続可能な救急医療を考察する。第25回日本臨床救急医学会、大阪、2022年5月26日

森 寛泰：当院の救急外来における包括的指示書の作成過程と内容について。第25回日本病院総合診療医学会、宮城、2022年8月19日

森 寛泰、山口壽美枝、竹本雪子、中島 伸：NHOにおける医師の働き方改革推進に向けたJNPの活用方法の考察。第37回国立病院総合医学会、2022年10月6日

森 寛泰、山口壽美枝、竹本雪子、福田貴史、松本謙太郎、和田 晃、佐々木匡子、大西光雄、中島 伸：救急初期診療における診療看護師（NP）の臨床推論能力の検証。第8回日本NP学会学術集会、愛知、2022年11月12日

森 寛泰：総合診療内科についての実践報告。第1回THCU NPフォーラム、2022年11月23日（東京）

B-8

中島 伸：ポリファーマシー。令和4年度大阪府医師会「医療安全推進指導者講習会」、大阪、2022年11月26日

B-9

森 寛泰:読売新聞医療ルネサンス「変わる看護師 <5> 指示待たずに救急対応」、
2022年8月6日

IgA 腎症はもっとも多い原発性糸球体腎炎である。本疾患は若年者に発症しやすく、病巣感染との関連が指摘されている。これまで病巣感染や血尿の観点から検討してきた経験を踏まえ、日々の臨床では病巣感染を見つけ、可能な限り除去する努力を行っている。また IgA のヒンジ部の O 型糖鎖を質量分析器で定量し、糖鎖と治療反応性との関連を過去に報告してきた。また、IgA 腎症では糖鎖が短い、腎組織が類似している紫斑病性腎炎においても、糖鎖は短くなっていることを最近の共同研究で報告している。

IgA 腎症に関しては、これまでの基礎的、臨床的検討を行ってきた豊富な経験をもとに、専門外来を開設しており、日本全国、北は北海道から南は沖縄まで全国各地の大学病院、基幹病院より紹介を受けている。

またネフローゼ症候群においても、病巣感染と関連があることがわかりつつある。微小変化型ネフローゼ症候群において、病巣感染巣の外科的治療によりステロイドを使用することなく完全寛解導入に成功した世界初の症例を英文報告している。その他の組織型のネフローゼ症候群でも、病巣感染の除去にて、ステロイドを使用せずに寛解することに成功している。これらの豊富な経験を基に、ネフローゼ症候群に関しても日本全国の大学病院や基幹病院より紹介を受けている。

腎臓領域では、利尿薬の使い方も重要である。水利尿薬であるトルバプタンの使用経験は豊富であるが、その薬剤の細胞内液や細胞外液に対する影響等を論文報告している。本薬剤は、多発性嚢胞腎でも用いるが、本疾患についても専門外来を開設しており、多くの医療機関より紹介を受けている。

腎機能が低下した患者さんでは、血管石灰化が起りやすく心血管イベントを起こしやすい。そのため、血管石灰化に関連のある因子も検討し論文文化している。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Iwatani H, Yamato M, Bessho S, Mori Y, Notsu S, Asahina Y, Koizumi S, Kimura Y, Shimomura A: Tolvaptan Reduces Extracellular Fluid per Amount of Body Fluid Reduction Less Markedly than Conventional Diuretics. Intern Med., Intern Med. 1;61(17):2561-2565. 2022 年 9 月

Kimura Y, Mori Y, Notsu S, Bessho S, Kobori A, Kubota T, Shimomura A, Iwatani H: Severe leukocytopenia due to copper deficiency induced by zinc supplementation in a patient on peritoneal dialysis: a case report. CEN Case Rep. 12(1):78-83. 2023 年 2 月

Kimura Y, Yamamoto R, Shinzawa M, Aoki K, Tomi R, Ozaki S, Yoshimura R, Shimomura A, Iwatani H, Isaka Y, Iseki K, Tsuruya K, Fujimoto S, Narita I, Konta T, Kondo M, Kasahara M, Shibagaki Y, Asahi K, Watanabe T, Yamagata K, Moriyama T: Alcohol Consumption and a Decline in Glomerular Filtration Rate: The Japan Specific Health Checkups Study. Nutrients. 22;15(6):1540. 2023 年 3 月

A-4

岩谷博次：播種性血管内凝固症候群、別冊 日本臨床 腎臓症候群（第3版）III, 142-147, 2022
年10月

B-4

堀田亜州美、岩谷博次、足立綾音：保存期慢性腎臓病（CKD）集団指導導入による患者教育の効果—血液データ・尿データなどの視点からの分析—。第25回日本腎不全看護学会、名古屋、2022年10月15-16日

岩谷博次、茂木孝友、森 優希、七條綾子、塚本美輝、木村良紀、下村明弘：減少体液量あたりの細胞外液減少比率は、トルバプタンの方が従来型利尿薬よりも有意に少ない。第65回日本腎臓学会総会、神戸、2022年6月11日

森 優希、岩谷博次、塚本美輝、茂木孝友、七條綾子、木村良紀、下村明弘：バンコマイシン（VCM）による腎障害では尿カリウム（K）排泄が亢進する。第65回日本腎臓学会総会、神戸、2022年6月11日

B-6

東 俊樹、下村明弘、塚本美輝、小堀愛美、窪田卓也、七條綾子、森 優希、木村良紀、岩谷博次：慢性リチウム中毒に対して血液透析と持続的血液濾過透析の併用が有用であった1例、第237回日本内科学会近畿地方会、大阪、2022年9月10日

玉川裕城、小堀愛美、塚本美輝、窪田卓也、七條綾子、森 優希、木村良紀、下村明弘、岩谷博次：ミトコンドリア脳筋症に合併した重症低ナトリウム血症の1例、第237回日本内科学会近畿地方会、大阪、2022年9月10日

B-8

岩谷博次：高カリウム血症に対する新たな治療戦略。大阪市中央区東医師会・法円坂地域医療フォーラム、大阪、2022年5月21日

岩谷博次：New Era in Chronic Kidney Disease。～次世代のCKD診療を考える～、大阪、2022年5月17日

B-9

岩谷博次：腎臓病の話。LOVE FLAP FM 大阪（ラジオ出演）、大阪、2022年5月5日

糖尿病内科

加藤 研

当科は糖尿病の治療ならびに合併症の早期発見に努め、患者の QOL 改善に取り組んでいる。

糖尿病は、患者数も多く根治が困難な慢性疾患であるが、こんにち多くの新薬が上市されており、専門医が個々の患者の病態に合わせた治療法、治療薬を提案していくことが重要である。

当科の取り組みとして、看護部・栄養管理室・薬剤科・臨床検査科・リハビリテーション科と糖尿病チームを組織し、共同で糖尿病教室・糖尿病デーの催しを行い患者への情報提供に取り組んでいる。看護部とフットケア外来、栄養管理室と透析予防外来、看護部・栄養管理室とともに 1 型糖尿病センターを開設し専門医療を提供している。最近の糖尿病治療分野ではグルコースセンシング機器としての CGM（持続グルコースモニタリング）や isCGM（間歇スキャン式持続グルコースモニタリング：腕に留置したセンサーに読み取り機をかざしてグルコース値をモニターする）またインスリン注入機器としてはインスリンポンプ（CSII）のみならず SAP（Sensor Augmented Pump：持続グルコースモニター付きインスリンポンプ）など、先進糖尿病治療デバイスの進化が目立っている。当科ではそのような先進デバイスを駆使し糖尿病患者のより質のよい血糖コントロール実現に寄与している。

また、最近では内分泌専門医の資格をもつ医師とともに内分泌疾患の精査、負荷試験入院も受け入れ、診療領域の幅を広げている。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Masuda T, Katakami N, Taya N, Miyashita K, Takahara M, Kato K, Kuroda A, Matsuhisa M, Shimomura I. : Comparison of continuous subcutaneous insulin infusion treatment and multiple daily injection treatment on the progression of diabetic complications in Japanese patients with juvenile-onset type 1 diabetes mellitus. 「J Diabetes Investig.」 13(9) : P1528-1532、2022 年 9 月 13 日

ISCHIA Study Group (Murata T, Hosoda K, Nishimura K, Miyamoto Y, Sakane N, Satoh-Asahara N, Toyoda M, Hirota Y, Matsuhisa M, Kuroda A, Kato K, Kouyama R, Miura J, Tone A, Kasahara M, Kasama S, Suzuki S, Ito Y, Watanabe T, Suganuma A, Shen Z, Kobayashi H, Takagi S, Hoshina S, Shimura K, Tsuchida Y, Kimura M, Saito N, Shimada A, Oikawa Y, Satomura A, Haisa A, Kawashima S, Meguro S, Itoh H, Saisho Y, Irie J, Tanaka M, Mitsuishi M, Nakajima Y, Inaishi J, Kinouchi K, Yamaguchi S, Itoh A, Sugiyama K, Yagi K, Tsuchiya T, Kodani N, Shimizu I, Fukuda T, Kusunoki Y, Katsuno

T, Matoba Y, Hitaka Y, Abe K, Tanaka N, Taniguchi R, Nagao T, Hida K, Iseda I, Takeda M, Matsushita Y, Tenta M, Tanaka T, Kouyama K, Fukunaga M.) : Prevention of hypoglycemia by intermittent-scanning continuous glucose monitoring device combined with structured education in patients with type 1 diabetes mellitus: A randomized, crossover trial . 「Diabetes Research and Clinical Practice.」 195 : 110147、2022年11月14日

Sakane N, Kato K, Hata S, Nishimura E, Araki R, Kouyama K, Hatao M, Matoba Y, Matsushita Y, Domichi M, Suganuma A, Sakane S, Murata T. Fei Ling Wu. : Protective and risk factors of impaired awareness of hypoglycemia in patients with type diabetes: a cross-sectional analysis of baseline data from the PR-IAH study. 「Diabetology & Metabolic Syndrome.」 2023年3月 in press

A-2

加藤 研 : CSIIまるわかりQ&A「糖尿病ケア+ (プラス)」 : 19 (5) 株式会社メディカ出版、大阪、2022年9月1日

A-3

種田灯子、光井絵里、河本佐季、西村英里香、山口大旗、是近彩香、岸由衣加、秦誠倫、山本裕一、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤研 : 抗HIV療法開始後に1型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関与が疑われた3症例「糖尿病」66(1) : P18-25、糖尿病学会、2022年9月21日

B-4

村田 敬、坂根直樹、黒田暁生、三浦順之助、廣田勇士、加藤 研、豊田雅夫、神山隆治、鴻山訓一、島田 朗、川嶋 聡、的場ゆか、目黒 周、楠 宜樹、肥田和之、田中剛史、利根淳仁、清水一紀、鈴木渉太、西村邦宏、細田公則 : 1型糖尿病におけるisCGMのスクリーン頻度と相関する要因の探索 : ISCHIA研究post-hoc解析。第65回日本糖尿病学会年次学術集会、神戸、2022年5月12日

片上直人、三田智也、吉井秀徳、白岩俊彦、安田哲行、岡田洋右、黒住 旭、馬屋原豊、金藤秀明、遅野井健、山本恒彦、栗林伸一、前田和久、横山宏樹、小杉圭右、林功、住谷 哲、津川真美子、良本佳代子、加藤 研、中村 正、川嶋 聡、佐藤泰憲、綿田裕孝、下村伊一郎 : トホグリフロジンによる糖尿病大血管症の進展抑制効果の検討 : UTOPIA Extension study。第65回日本糖尿病学会年次学術集会、神戸、2022年5月12日

益田貴史、片上直人、今田 侑、藤川 慧、細江重郎、田矢直大、渡邊裕堯、大森一生、佐々木周伍、下 直樹、高原充佳、宮下和幸、加藤 研、河盛 段、黒田暁生、安田哲行、松久宗英、下村伊一郎 : 日本人若年発症1型糖尿病患者の合併症進展にイン

スリンポンプ療法が及ぼす影響の検討。第65回日本糖尿病学会年次学術集会、神戸、2022年5月13日

加藤研、秦 誠倫、西村英里香、荒木里香、鴻山訓一、畑尾満佐子、松下裕一、的場ゆか、村田 敬、坂根直樹：1型糖尿病における無自覚低血糖の頻度と危険因子に関する研究：PR-IAH研究。第65回日本糖尿病学会年次学術集会、神戸、2022年5月14日

山本 祐、西村英里香、岸由衣加、是近彩香、山口大旗、河本佐季、秦誠倫、山本裕一、加藤 研：SAP導入による詳細インスリン設定を契機に内分泌疾患の診断につながり、ホルモン補充療法にて血糖コントロールが改善した2症例。第65回日本糖尿病学会年次学術集会、神戸、2022年5月14日

B-6

河本佐季、秦 誠倫、岸由衣加、是近彩香、山口大旗、西村英里香、山本裕一、加藤研：神経性食思不振症により低血糖脳症を来した1例。第236回日本内科学会近畿地方会、大阪、2022年6月25日

松井俊郎、秦 誠倫、和田直記、西浦 葵、西村英里香、河本佐季、小椋紫芳、加藤研：糖尿病ケトアシドーシスと甲状腺クリーゼ疑いを同時に認め多腺性自己免疫症候群3型と診断した1例。第237回日本内科学会近畿地方会、大阪、2022年9月10日

玉川裕城、秦 誠倫、松井俊郎、和田直記、西浦 葵、西村英里香、河本佐季、小椋紫芳、加藤 研：糖尿病ケトアシドーシスと甲状腺クリーゼ疑いを同時に認めた1例。第59回日本糖尿病学会近畿地方会、神戸、2022年11月5日

石田みどり、井上裕美子、藪 みなみ、荒川和子、高松愛梨、山本純也、和田紋佳、河部彩香、山本真弓、宮城正和、内川巖志、内藤裕子、竹野 淳、福山雅代、小椋紫芳、秦 誠倫、加藤 研：がん患者に対する先進糖尿病デバイスを用いた血糖コントロール支援～当院の多職種連携の取り組み～。第31回日本がんチーム医療研究会、大阪、2023年3月4日

B-8

加藤 研：インスリン患者により身近な存在となったFreeStyleリブレを基本から振り返る。FreeStyleリブレ5周年記念WebSeminar、大阪、2022年4月11日

加藤 研：1型糖尿病に有益なCSIIの機能。～CSIIが救う1型糖尿病の世界について～、リアルタイムCGMキャラバンアドバンス、京都、2022年4月16日

加藤 研：770G オートモードの利点・注意点。第65回日本糖尿病学会年次学術集会、神戸、2022年5月13日

加藤 研：当院の1型糖尿病患者に対する取り組みについて～1型糖尿病患者の診療に必要なこと、大切なことは？～。インスリンWeb講演会、大阪、2022年6月2日

加藤 研：1型糖尿病領域で活躍する先進糖尿病デバイスについて。第43回循環器病談話会、大阪、2022年6月4日

加藤 研：SGLT2阻害薬、糖尿病専門医の立場からの使用法について。第21回大阪糖尿病患者教育担当者研修会（ODES）、大阪、2022年6月18日

加藤 研：糖尿病とチーム医療～先進糖尿病治療とカーボカウントについて。Diabetes Web Seminar、兵庫、2022年6月22日

加藤 研：リアルタイムCGMや先進糖尿病デバイスの活用について～低血糖をキーワードとして考える～。先進糖尿病デバイスセミナーin和歌山、和歌山、2022年9月16日

秦 誠倫：原発性アルドステロンの診断と治療/当院での内分泌irAEへの取り組み。糖尿病・内分泌と腎臓を考える会、大阪、2022年10月14日

加藤 研：シン・1型糖尿病ライフ～1型糖尿病の誤解について考える～。ヤング公開スクール大阪'22、大阪、2022年12月4日

河本佐季：神経性食思不振症により低血糖脳症を来した一例。True Simplicity Seminar in 大阪、大阪、2022年12月9日

松井俊郎：糖尿病ケトアシドーシスとバセドウ病による甲状腺クリーゼ疑いを当時に認めAPS3型と診断した1例。第10回大阪1型糖尿病塾、大阪、2023年1月28日

加藤 研：当院での先進糖尿病デバイスの活用について。良質な糖尿病治療を目指して、大阪、2023年2月24日

B-9

西村英里香：FM 大阪『LOVE FLAP』、大阪、2023年2月16日

輸血療法部

柴山浩彦

輸血担当検査技師：児玉眞由美、富田加奈江（認定輸血検査技師）、
藤井由香、川地璃奈

輸血療法部では、安全かつ適切な輸血療法の実践をめざして輸血の管理、検査、供給を行っている。同種血輸血製剤に関しては、発注および在庫調整を適切に行い、病棟や外来での輸血依頼や手術の状況に応じて、常時、必要量を払い出しできる状態を維持し、低い廃棄率での過不足のない管理を実現できるように努力している。2022年度の赤血球製剤の使用単位数は7523単位（2021年度：6590単位）、廃棄率は0.32%（2021年度：0.18%）、血漿製剤は3248単位（2464単位）、廃棄率は0.19%（0.64%）、血小板製剤は11360単位（5880単位）、廃棄率は0.35%（0.59%）と、3製剤とも、2022年度の使用量は2021年度を上回り、廃棄率は低いまま推移している。2022年1月～12月のFFP/RBC比が0.38（<0.54）、ALB/RBC比が1.93（<2）であり、輸血適正使用加算の算定基準を満たした。また、各製剤の払い出しの際に、製剤ごとに色の異なるバッグを用いて運搬する運用を9月から開始した。

輸血副作用に関する情報収集も、輸血部の重要な任務であり、輸血後副作用調査、また、日赤からの遡及調査のため、輸血を受けた患者の血液を2年間、適切に保存している。また、輸血副作用発症時の情報収集を行い、日本血液センターへ報告し、必要があれば精密検査の依頼を行っている。2022年度に、日赤に副作用の報告をおこなったのは、16件あったが、いずれも軽微な副作用であった。また、日赤からの遡及調査は11件あり、献血者のCOVID-19感染によるものやHBc抗体陽性によるものなどであり、適切に対応した。

さらに、各部署で安全な輸血療法が継続的に実施できるよう、院内で作成した輸血療法マニュアルの更新を定期的におこなっており、今年度は2023年2月13日付けでの改定版（第5版）を作成した。今回の改定では、大幅な改訂となっており、輸血をおこなう際の手順を、実際の輸血に即した形式で記載したものとなっている。輸血を初めておこなう医師でも、輸血のオーダー、同意書の取得、輸血の実施が、迷わずおこなえるマニュアルであると考えている。

自己血貯血の実施に関する院内の整備や教育等も行っている。2022年度には、血液内科において、自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法が実施され、採取した自己末梢血幹細胞の保存・管理も自己血と同様に、電子カルテ上で実施できるように電子カルテの改修がおこなわれ、問題なく運用された。

上記の輸血療法に関する諸問題を協議し、より安全で適切な輸血療法が実施できるように、医師、看護師、臨床検査技師、薬剤部、事務等の各部門の委員で構成される輸血療法部運営委員会を年6回開催している。

最後に、2023年2月27、28日に実施された病院機能評価において、サーベイヤーによる輸血療法部門の部署訪問の際にも、児玉技師が、サーベイヤーの質問に適切に回答した。

(文責：柴山浩彦)

【2022 年度 研究発表業績】

B-8

富田加奈江：知っておきたい輸血のこと。第 8 回医療安全研修会、大阪、2022 年 11 月 9 日

柴山浩彦：安全な輸血療法をめざして 4 ～骨髄異形成症候群 (MDS) と輸血後鉄過剰症～。令和 4 年度チーム医療推進のための研修 3 (輸血)、WEB 講演、2023 年 2 月 13 日

血液内科

柴山浩彦

常勤医：長手泰宏、戸田淳、非常勤医：中谷綾

令和3年4月1日より、私と長手泰宏医師が常勤医として、中谷綾医師が非常勤医として、当院での血液内科の診療が再開され、令和4年4月1日より、戸田淳医師が新たに常勤医として加わった。当科の診療の対象となる疾患は、白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍性疾患のみならず、再生不良性貧血（AA）、免疫性血小板減少性紫斑病（ITP）（いずれも難病指定の疾患）などの非腫瘍性血液疾患も含んでいる。それらの疾患の患者の診療を、入院および外来にて実施している。令和3年度の1年間のべ入院患者数は約140名であったが令和4年度には約280名に倍増した。うち最も多かったのは悪性リンパ腫の約160名であった。次に、急性白血病が47名、多発性骨髄腫が23名、慢性白血病が10名、骨髄異形成症候群が10名であった。また、非腫瘍性血液疾患のAAが2名、ITPが3名、自己免疫性溶血性貧血が2名、血栓性血小板減少性紫斑病が1名、後天性血友病Aが3名、ALアミロイドーシスが1名、入院した。多発性骨髄腫患者3名に対し、自己末梢血幹細胞移植併用の大量化学療法を実施した。外来通院のべ患者数も令和3年度は約1650名であったが、令和4年度には、約2500名に増えた。それらの患者のうち、約5分の1の患者が外来化学療法室にて抗癌剤治療を受けている。血液内科の化学療法についても、令和4年度にあらたに保険承認された薬剤もあり、新たなレジメン登録をおこなった。また、血液疾患の診断のためには、骨髄検査が重要であり、外来および入院にて令和3年度には113件の骨髄検査を実施したが、令和4年度の検査件数は183件に増加した。初期研修医も、常時2~3名が、当科を2ヶ月ずつラウンドした。研修医には、常時4名の入院患者の副主治医となってもらい、退院サマリーを15件前後記載してもらっている。また、当科外来に初診となった患者の問診、診察、鑑別診断をおこなう外来研修を、研修医1名あたり、複数回実施した。研修医には、入院中に受け持ちした患者において、その診断・治療が興味深かった場合は積極的に学会で症例報告を行ってもらった。令和4年度には、日本内科学会近畿地方会で1件、近畿血液学地方会で2件、発表してもらっている。臨床研究としては、関西骨髄腫フォーラム（KMF）という多発性骨髄腫およびその類縁疾患の多施設共同のレジストリー研究の研究事務局を私が務めている。西日本臨床血液研究グループ（W-JHS）で実施している医師主導臨床研究のうち、MM-01試験、MM-02試験、HL-01試験の3試験の研究代表医師を務めている。また、日本血液学会で実施中の「日本における骨髄腫関連疾患の予後に関する大規模多施設前向き観察研究」（JSH-MM-15研究）の研究事務局を務めている。さらに、難治性ITP患者を対象とした治験を受託し開始となっている。

（文責：柴山浩彦）

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Edahiro Y, Ohishi K, Gotoh A, Takenaka K, Shibayama H, Shimizu T, Usuki K, Shimoda K, Ito M, VanWart SA, Zagrijtschuk O, Qin A, Kawase H, Miyachi N, Sato T, Komatsu N, Kirito K. Efficacy and safety of ropeginterferon alfa-2b in Japanese patients with polycythemia vera: an open-label, single-arm, phase 2 study. *Int J Hematol* 116(2): 215-227, 2022.

Morita Y, Nannya Y, Ichikawa M, Hanamoto H, Shibayama H, Maeda Y, Hata T, Miyamoto T, Kawabata H, Takeuchi K, Tanaka H, Kishimoto J, Miyano S, Matsumura I, Ogawa S, Akashi K, Kanakura Y, Mitani K. ASXL1 mutations with serum EPO levels predict poor response to darbepoetin alfa in lower-risk MDS: W-JHS MDS01 trial. *Int J Hematol* 116(5): 659-668, 2022.

Sunami K, Fuchida SI, Suzuki K, Ri M, Matsumoto M, Shimazaki C, Asaoku H, Shibayama H, Ishizawa K, Takamatsu H, Ikeda T, Maruyama D, Imada K, Uchiyama M, Kiguchi T, Iyama S, Murakami H, Onishi R, Tada K, Iida S. Anti-CD38 antibody isatuximab monotherapy for Japanese individuals with relapsed/refractory multiple myeloma: An update of the phase 1/2 ISLANDs study. *Hematol Oncol* 2022 Nov 26. doi: 10.1002/hon.3105. Online ahead of print.

Hino A, Fukushima K, Kusakabe S, Ueda T, Sudo T, Fujita J, Motooka D, Takeda AK, Shinozaki NO, Watanabe S, Yokota T, Shibayama H, Nakamura S, Hosen N. Prolonged gut microbial alterations in post-transplant survivors of allogeneic haematopoietic stem cell transplantation. *Br J Haematol* 2022 Dec 5. doi: 10.1111/bjh.18574. Online ahead of print.

Shimazu Y, Kanda J, Kaneko H, Imada K, Yamamura R, Kosugi S, Shimura Y, Ito T, Fuchida SI, Uchiyama H, Fukushima K, Yoshihara S, Hanamoto H, Tanaka H, Uoshima N, Ohta K, Yagi H, Shibayama H, Onda Y, Tanaka Y, Adachi Y, Matsuda M, Iida M, Miyoshi T, Matsui T, Takahashi R, Takakuwa T, Hino M, Hosen N, Nomura S, Shimazaki C, Matsumura I, Takaori-Kondo A, Kuroda J; Kansai Myeloma Forum. Monocyte or white blood cell counts and β_2 microglobulin predict the durable efficacy of daratumumab with lenalidomide. *Ther Adv Hematol* 2022 Dec 13;13:20406207221142487. doi: 10.1177/20406207221142487. eCollection 2022.

Shimazu Y, Kanda J, Kosugi S, Ito T, Kaneko H, Imada K, Shimura Y, Fuchida SI, Fukushima K, Tanaka H, Yoshihara S, Ohta K, Uoshima N, Yagi H, Shibayama H, Yamamura R, Tanaka Y, Uchiyama H, Onda Y, Adachi Y, Hanamoto H, Takahashi R, Matsuda M, Miyoshi T, Takakuwa T, Hino M, Hosen N, Nomura S, Shimazaki C, Matsumura I, Takaori-Kondo A, Kuroda J. Efficacy of elotuzumab for multiple myeloma

in reference to lymphocyte counts and kappa/lambda ratio or B2 microglobulin. *Sci Rep* 2023 Mar 29;13(1):5159. doi: 10.1038/s41598-023-32426-6.

A-4

柴山浩彦:V. 病型各論－疾患概念・疫学・分類・臨床像・診断・治療・予後・話題－6. ヘアリーセル白血病 日本臨床第 81 巻増刊号 3「新リンパ腫学－基礎・臨床の最新動向－」P.216-220、日本臨床社、2023 年 3 月 31 日

B-2

Kirito K, Edahiro Y, Ohishi K, Gotoh A, Takenaka K, Shibayama H, Shimizu T, Usuki K, Shimoda K, Ito M, Scott A. Van Wart, Oleh Zagrijtschuk, Albert Qin, Kawase H, Miyachi N, Sato T, and Komatsu N : PHASE 2, OPEN-LABEL, MULTICENTER, SINGLE-ARM STUDY INVESTIGATING THE EFFICACY AND SAFETY OF ROPEGINTERFERON ALFA-2B IN JAPANESE PATIENTS WITH POLYCYTHEMIA VERA. EHA2022 (欧州血液学会) 2022 年 6 月 10 日、e-Poster

Iino M, Horigome Y, Harazaki Y, Kobayashi T, Handa H, Hiramatsu Y, Kuroi T, Tanimoto K, Matsue K, Yoshida T, Mori I, Abe M, Akagi K, Hayashi T, Ishida T, Ito S, Iwasaki Hi, Kuroda J, Maeda T, Shibayama H, Sunami K, Takamatsu H, Tamura H, Shinozaki T, Iida S : A Prospective, Multicenter, Observational Study of Ixazomib plus Lenalidomide-Dexamethasone in 295 Japanese Patients with Relapsed/Refractory Multiple Myeloma. 第 19 回 IMS (国際骨髄腫学会) 2022 年 8 月 25-27 日、ポスター発表、Los Angeles, CA, USA

B-3

柴山浩彦 : 特別シンポジウム 2 臨床医学領域「Kansai Myeloma Forum (KMF)の過去・現在・未来」。第 47 回日本骨髄腫学会学術集会、岐阜、2022 年 5 月 20-22 日

B-4

柴山浩彦、板垣充弘、半田 寛、横山明弘、斉藤明生、小杉 智、太田秀一、吉満誠、田中康博、倉橋信悟、淵田真一、飯野昌樹、清水隆之、森内幸美、外山耕太郎、三谷絹子、築根 豊、嘉田晃子、田村秀人、安倍正博、岩崎浩己、黒田純也、高松博幸、角南一貴、木崎昌弘、石田貞夫、齋藤俊樹、松村 到、赤司浩一、飯田真介 : Primary survival analysis of Japanese patients with plasma cell neoplasms in novel drugs era. 第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14-16 日

枝廣陽子、大石晃嗣、後藤明彦、竹中克斗、柴山浩彦、清水隆之、臼杵憲祐、伊藤雅文、Scott A. VanWart、Oleh Zagrijtschuk、Albert Qin、河瀬弘明、宮地就久、佐藤俊明、小松則夫、桐戸敬太 : Safety and efficacy of ropeginterferon alfa-2b in Japanese polycythemia vera patients: Phase 2 study. 第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14-16 日

志村勇司、柴山浩彦、伊藤量基、金子仁臣、今田和典、山村亮介、小杉 智、淵田

真一、諫田淳也、田中宏和、花本仁、魚嶋伸彦、福島健太郎、吉原哲、太田健介、田中康博、高橋良一、松井利充、松田光弘、河田英里、恩田佳幸、高桑輝人、八木秀男、野村昌作、島崎千尋、高折晃史、松村 到、保仙直毅、日野雅之、黒田純也：Updated real-world data of 2572 patients with symptomatic myeloma registered in Kansai Myeloma Forum。第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14-16 日

中谷 綾、柴山浩彦、志村勇司、伊藤量基、魚嶋伸彦、山村亮介、淵田真一、金子仁臣、今田和典、小杉 智、松井利充、吉原 哲、内山人二、松田光弘、恩田佳幸、田中康博、花本 仁、高桑輝人、田中宏和、福島健太郎、太田健介、諫田淳也、八木秀男、日野雅之、保仙直毅、野村昌作、島崎千尋、高折晃史、松村 到、黒田純也：Impact of cytogenetic abnormalities in MM of real world data; Retrospective analysis of KMF. 第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14-16 日

島津 裕、諫田淳也、小杉 智、伊藤量基、今田和典、志村勇司、淵田真一、福島健太郎、田中宏和、吉原 哲、太田健介、魚嶋伸彦、八木秀男、柴山浩彦、山村亮介、田中康博、内山人二、恩田佳幸、足立陽子、花本仁、高橋良一、松田光弘、高桑輝人、日野雅之、保仙直毅、野村昌作、島崎千尋、松村 到、高折晃史、黒田純也：Predicting the durable efficacy of elotuzumab by lymphocyte counts and free light chain ratio. 第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14-16 日

B-5

柴山浩彦：招請講演「初発 DLBCL 治療 Update」。第 117 回近畿血液学地方会、神戸、2022 年 11 月 26 日

B-6

山下勇大、長手泰宏、中谷綾、柴山浩彦：Plasmablastic lymphoma と Anaplastic plasmacytoma との鑑別に苦慮した症例。第 113 回近畿血液学地方会、大阪（WEB 開催）、2022 年 6 月 4 日

本堂方人、長手泰宏、戸田淳、中谷綾、上田智朗、柴山浩彦：蛋白漏出性胃腸症を契機に診断された濾胞性リンパ腫と骨髄増殖性腫瘍の同時重複症例。第 117 回近畿血液学地方会、神戸、2022 年 11 月 26 日

濱田弘美、長手泰宏、戸田淳、中谷綾、柴山浩彦：精神疾患を背景にケモフリーレジメンを選択した Ph+ALL の 1 例。第 238 回日本内科学会近畿地方会、大阪（WEB 開催）、2022 年 12 月 10 日

B-8

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。AstraZeneca CLL Web Seminar、WEB 講演、2022 年 4 月 8 日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。カルケンス発売

1周年学術講演会、横浜、2022年4月15日

柴山浩彦「急性白血病の診断・治療の進歩」。城東区/東成区医師会・法円坂フォーラム、大阪、2022年4月16日

柴山浩彦「高齢者にみられる貧血の鑑別」。大阪府中央区東医師会学術講習会、大阪、2022年4月20日

柴山浩彦「Frail患者に対するDRd療法の効果的投与法。」DARZQURO Web Seminar、WEB講演、2022年5月16日

柴山浩彦「再発・難治 DLBCL に対する PBR 療法という治療選択」。Chugai Lymphoma Seminar in NARA、WEB講演、2022年5月27日

長手泰宏「これって悪性リンパ腫！？～診断から治療まで～」。これだけは知っておきたい“血液がん治療”in 法円坂、大阪、2022年6月1日

柴山浩彦「再発・難治性 PTCL に対するハイヤスタによる治療」。Meiji Seika ファルマ Web カンファレンス、WEB講演、2022年6月10日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。首都圏 CLL カンファレンス、WEB講演、2022年6月14日

柴山浩彦「再発・難治 DLBCL に対する PBR 療法という治療選択肢」。Chugai Lymphoma Seminar in WAKAYAMA、和歌山、2022年6月17日

柴山浩彦「CML 治療の新たなる風、セムブリックス」。Novartis Hematology Web Seminar PUT YOUR STAMP ON CML、WEB講演、2022年6月28日

柴山浩彦「サークリサ4レジメンを活かした新たな多発性骨髄腫の治療戦略」。第2回骨髄腫 ZOOM セミナーin 天王寺、WEB講演、2022年6月30日

柴山浩彦「PTCL treatment The Answer ～Brentuximab Vedotin の役割～」。Hematology Webinar、WEB講演、2022年7月7日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。Hematology Expert Lecture in 多摩、WEB講演、2022年7月8日

柴山浩彦「再発・難治性 PTCL に対するハイヤスタによる治療」。第13回二豊造血器疾患フォーラム、WEB講演、2022年7月9日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。三重県 CLL Web セミナー、WEB講演、2022年7月15日

柴山浩彦「WM/LPL に対するベレキシブルの長期治療成績」。チラブルチニブ適正使用セミナー、WEB 講演、2022 年 7 月 21 日

柴山浩彦「血液がんとはどのような疾患か（病態、症状、検査について)」。NPO 法人血液情報広場・つばさ主催フォーラム in 姫路、姫路、2022 年 7 月 23 日

柴山浩彦「多発性骨髄腫」。NPO 法人血液情報広場・つばさ主催フォーラム in 姫路、姫路、2022 年 7 月 23 日

柴山浩彦「初発 CLL に対する Ibrutinib 治療の最新知見」。慢性リンパ性白血病～病態生理と最新治療～、WEB 講演、2022 年 7 月 25 日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。CLL Clinical Online Seminar in 山陰、WEB 講演、2022 年 7 月 28 日

柴山浩彦「再発・難治 MM に対する MRD 陰性を目指した治療戦略」。カイトプロリス WEB ライブセミナー、WEB 講演、2022 年 8 月 19 日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。AstraZeneca Hematology Seminar ～一から考える CLL 治療～、WEB セミナー、2022 年 9 月 1 日

柴山浩彦「初発進展期濾胞性リンパ腫における SIL-2R を用いた治療層別化」。2nd THE Blood ～リンパ腫を語る会～、WEB 講演、2022 年 9 月 5 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。Hematology Web Seminar、WEB 講演、2022 年 9 月 7 日

柴山浩彦「FL のリスク因子から考える治療介入すべき患者像」。GAZYVA Web Seminar、WEB 講演、2022 年 9 月 13 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療における新たな治療戦略」。第 3 回南信血液がん WEB セミナー、WEB 講演、2022 年 9 月 14 日

柴山浩彦「再発・難治性 PTCL に対するハイヤスタによる治療」。ハイヤスタ錠 10mg 発売 1 周年記念講演会 in 滋賀、WEB 講演、2022 年 9 月 15 日

柴山浩彦「WM/LPL に対するベレキシブルの長期治療成績」。ベレキシブル Web Conference、WEB 講演、2022 年 9 月 16 日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。AstraZeneca Hematology Seminar in Akita 2022、WEB 講演、2022 年 9 月 20 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療における新たな治療戦略」。第 12 回リンパ腫セミナー、WEB 講演、2022 年 10 月 3 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療の新展開」。Chugai Lymphoma Symposium in Himeji、WEB 講演、2022 年 10 月 28 日

柴山浩彦「再発・難治 MM に対する MRD 陰性を目指した治療戦略」。Seminar on Hematologic Malignancies in Autumn、WEB 講演、2022 年 11 月 1 日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。AstraZeneca Hematology Web Seminar、WEB 講演、2022 年 11 月 2 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。Chugai Lymphoma Seminar in NARA、WEB 講演、2022 年 11 月 11 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。大阪血液腫瘍 web セミナー、WEB 講演、2022 年 11 月 16 日

柴山浩彦「ネスプとジーラストの最新の話題」。KYOWA KIRIN Hematopoietic Cytokines Seminar、WEB 講演、2022 年 11 月 21 日

柴山浩彦「アドセトリスを用いた初発悪性リンパ腫の治療」。アドセトリス全国 Web 講演会、WEB 講演、2022 年 11 月 24 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。第 6 回 Lymphoma Academy ON LINE、Web 講演、2022 年 11 月 29 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。Chugai Lymphoma Symposium in Osaka、WEB 講演、2022 年 12 月 2 日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。South East Saitama Hematology Conference、WEB 講演、2022 年 12 月 8 日

柴山浩彦「患者の立場で考える再発・難治 CLL 診療の最適化」。CLL WEB SEMINAR FROM NAGOYA、WEB 講演、2022 年 12 月 12 日

柴山浩彦「ベレキシブルによる WM/LPL の治療」。VELEXBRU HEADLINE CHANNEL、WEB 講演、2023 年 1 月 12 日

柴山浩彦「イサツキシマブの新レジメン (Isa20±d) をどう活かしていくか? ~ gain1q の測定意義も踏まえて~」。Sarclisa MM Network Conference、WEB 講演、2023 年 1 月 20 日

柴山浩彦「イムブルビカ最新情報 update」。Hematological Conference in Hanshin、
尼崎、2023年1月26日

柴山浩彦「ベレキシブルによる WM/LPL の治療」。原発性マクログロブリン血症
WEB ライブセミナー2023、WEB 講演、2023年1月27日

柴山浩彦「骨髄腫治療におけるサリドマイドの使いどころ」。骨髄腫フォーラム in
奈良、奈良、2023年2月3日

柴山浩彦「カルケンスによる初発 CLL の治療」。AstraZeneca Hematology WEB
Seminar、沖縄、2023年2月10日

柴山浩彦「カルケンスによる初発 CLL の治療」。造血器腫瘍循環器学講演会 in
YOKOHAMA、WEB 講演、2023年2月16日

柴山浩彦「初発 CLL に対するケモフリー治療」。Round Meeting of Hematology in
TOYONO、大阪、2023年2月21日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。DLBCL up to date WEB セミナー、WEB 講
演、2023年3月1日

柴山浩彦「ベレキシブルによる WM/LPL の治療」。WM/LPL Seminar in Mie、WEB
講演、2023年3月9日

柴山浩彦「カルケンスによる初発 CLL の治療」。AstraZeneca Hematology Seminar
from MinamiOsaka、堺、2023年3月10日

柴山浩彦「再発・難治性 PTCL に対するハイヤスタによる治療」。京都府立医科大学
関連血液疾患学術講演会～ハイヤスタ錠 10mg 発売 1 周年記念講演会～、WEB
講演、2023年3月20日

柴山浩彦「初発 DLBCL 治療 Update」。第 19 回ひがし東京血液疾患研究会、WEB
講演、2023年3月23日

柴山浩彦「カルケンスによる初発 CLL の治療」。Hematology Clinical Seminar、WEB
講演、2023年3月24日

B-9

柴山浩彦：FM 大阪『LOVE FLAP』出演、2022年10月20日放送

柴山浩彦：MBS 毎日放送『医のココロ』テーマ「多発性骨髄腫」出演、2023年3
月26日放送

血友病科

矢田 弘史

血友病科は、血友病診療ブロック拠点病院の一つである大阪医療センターに2021年4月1日に新設された診療科です。開設以来、近隣の多くの医療機関からのご紹介を得て、血友病患者・保因者に加え、類縁疾患であるフォンヴィルブラント病や様々な凝固異常症をもつ患者さんが多数、大阪府下のみならず県外からも当科へ受診されるようになってきております。当科では、凝血学的検査に基づく凝固異常症患者の正確な診断と出血時および定期的な治療に加え、院内各診療科・中央臨床検査部門の多大なる御協力のもとで、手術や観血的処置を要する血友病患者さんの周術期止血治療にも積極的に取り組んでいます。また、近年注目されている血友病患者の長期合併症に対する新たな取り組みとして、リハビリテーション科や中央生理検査部門と協調し、血友病患者の関節症に対する理学的ケアや超音波検査による病態評価についての試みを開始しています。

血友病の治療薬は進歩が著しく、治療効果や病態を評価するのに一般的な凝固検査では対応が難しいような場合が出現しており、当科では様々な凝固検査の手法を用いて複雑な凝固機能の評価を試みています。このような凝固機能の解析や病態に関連する遺伝子解析に関する臨床研究を通じて、将来の新たな治療に役立つエビデンスを発信する取り組みを行っています。

また、現在、全国の血友病診療拠点病院の協力を得て血友病患者レジストリの構築が進められており、当院は将来、このレジストリ運営において重要な機能を果たす医療機関として期待されています。

血友病のように慢性疾患を有する患者のトータルケアの実現には、医師のみならず、看護師、薬剤師、メディカルソーシャルワーカー、臨床心理士などのコメディカルスタッフの協力が不可欠です。大阪医療センターでは、コーディネーターおよび専任薬剤師をはじめ、すでに HIV 合併・非合併を問わず血友病患者の診療経験を積まれているコメディカルスタッフが多く活躍しておられ、血友病科の重要なチームメンバーとして支援頂いています。

今後ともよろしくお願いたします。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Nogami K, Taki M, Matsushita T, Kojima T, Oka T, Ohga S, Kawakami K, Sakai M, Suzuki T, Higasa S, Horikoshi Y, Shinozawa K, Tamura S, Yada K*, Imaizumi M, Ohtsuka Y, Iwasaki F, Kobayashi M, Takamatsu J, Takedani H, Nakadate H, Matsuo Y, Matsumoto T, Fujii T, Fukutake K, Shirahata A, Yoshioka A, Shima M; J-HIS2 study group. Clinical conditions and risk factors for inhibitor-development in patients with haemophilia: A decade-long prospective cohort study in Japan, J-HIS2 (Japan

Hemophilia Inhibitor Study 2). 「Haemophilia」28(5) : P.745-759、2022. (*corresponding author)

Kashiwakura Y, Baatartsogt N, Yamazaki S, Nagao A, Amano K, Suzuki N, Matsushita T, Sawada A, Higasa S, Yamasaki N, Fujii T, Ogura T, Takedani H, Taki M, Matsumoto T, Yamanouchi J, Sakai M, Nishikawa M, Yatomi Y, Yada K, Nogami K, Watano R, Hiramoto T, Hayakawa M, Kamoshita N, Kume A, Mizukami H, Ishikawa S, Sakata Y, Ohmori T. The seroprevalence of neutralizing antibodies against the adeno-associated virus capsids in Japanese hemophiliacs. 「Molecular Therapy Methods & Clinical Development」 27 : P.404-414、2022.

Nakajima Y, Mizumachi K, Shimonishi N, Furukawa S, Yada K, Ogiwara K, Takeyama M, Shima M, Nogami K. Comparisons of global coagulation potential and bleeding episodes in emicizumab-treated hemophilia A patients and mild hemophilia A patients. 「International Journal of Hematology」 115(4) : P.489-498、2022.

Takeyama M, Sasai K, Matsumoto T, Furukawa S, Ogiwara K, Yada K, Onishi T, Shima M, Nogami K. Comprehensive blood coagulation potential in patients with acquired hemophilia A: retrospective analyses of plasma samples obtained from nationwide centers across Japan. 「International Journal of Hematology」 115(2) : P.163-172、2022.

A-4

矢田弘史、野上恵嗣：国内最大規模の血友病患者の遺伝子解析および前向き追跡調査研究(J-HIS2)からみた小児血友病医療の展望 「日本小児血液・がん学会雑誌」 59 (5) : P. 338-347、日本小児血液・がん学会、2023年2月22日

西田恭治 他：「異常子宮出血(AUB)－PALM-COEIN分類に基づいた原因検索と対応－」研修ノート No. 109、公益財団法人日本産婦人科医会、2023年1月

A-6

西田恭治：血友病保因者の健診・診断について。冊子「クロスハート 71号」 P.1-3、一般社団法人日本血液製剤機構、2022年7月

B-2

Nishida Y : Personalized Prophylaxis with Simoctocog Alfa in Adult Japanese Previously Treated Patients with Severe hemophilia A. HTRS 2023 Scientific Symposium, Orlando, 2023年3月12日

B-3

矢田弘史：血友病患者における血液凝固因子製剤治療の意義と展望 ～小児血友病患者の治療を考える～。第125回日本小児科学会学術集会、郡山、2022年4月21日

矢田弘史：血友病診療における遺伝子解析の臨床的意義。第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会、名古屋、2022 年 5 月 28 日

矢田弘史：血友病治療の進歩と未解決課題への新たなアプローチ ～エミシズマブが果たす役割を踏まえて～。第 44 回日本血栓止血学会学術集会、仙台、2022 年 6 月 25 日

矢田弘史、西田恭治：大阪医療センターにおける血友病 A 患者の関節症の実態と関節症発生関連因子に関する検討。第 44 回日本血栓止血学会学術集会、仙台、2022 年 6 月 24 日

矢田弘史、荻原建一、添田哲弘、北沢剛久、野上恵嗣：抗凝固因子低下合併血友病 A 患者モデル血漿におけるエミシズマブの凝固機能のトロンビン生成試験による評価。第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14 日

矢田弘史：血友病治療における未解決課題に対する包括的アプローチに基づく血友病医療の新たな展望と大阪医療センター（血友病診療ブロック拠点病院）における取り組み。第 36 回 日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 28 日

矢田弘史：Genetic background of inhibitor development in patients with hemophilia from Japan Hemophilia Inhibitor Study (J-HIS)。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、Hybrid 開催（虎ノ門）、2022 年 11 月 27 日

矢田弘史：血友病診療における遺伝子解析の意義と展望。第 17 回日本血栓止血学会学術標準化委員会（SSC）シンポジウム、WEB 開催、2023 年 2 月 18 日

松尾陽子、上妻友隆、長尾 梓、徳川多津子、西田恭治、吉里俊幸：血友病保因者の出血傾向：分娩時に凝固因子製剤の補充を行った血友病 A 確定保因者妊婦の出産。第 74 回日本産科婦人科学会学術講演会、福岡、2022 年 8 月 6 日

長尾 梓、徳川多津子、松尾陽子、森下英理子、福武勝幸、西田恭治：遺伝性出血性疾患を有する日本人女性における月経の負担と PBAC の妥当性に関する研究。第 74 回日本産科婦人科学会学術講演会、福岡、2022 年 8 月 6 日

B-4

矢倉裕輝、西田恭治、矢田弘史：大阪医療センターにおけるアルブトレペノナコグアルファの使用経験に基づく薬物動態に関する検討。第 84 回日本血液学会学術集会、福岡、2022 年 10 月 14 日

B-6

中田貴土、鈴木裕二、上野俊之、西田恭治、矢田弘史、青野幸余、三木秀宣：当院外来血友病患者における関節機能障害の現状。第 76 回国立病院総合医学会、熊

本、2022年10月8日

B-7

矢田弘史：思春期における小児血友病患者の診療のポイント。第4回近畿 Hemophilia Seminar Part II、WEB開催、2022年4月25日

矢田弘史：遺伝子変異に基づく血友病の病態と新規治療戦略についての展望。遺伝性疾患の最新治療を考える会、WEB開催、2022年5月24日

矢田弘史：血友病治療の最前線～大阪医療センターにおける取り組み～。Hematology Web Seminar、WEB開催、2022年6月17日

矢田弘史：血友病診療の現状と課題～より良い地域医療連携をめざして～。Osaka Hemophilia Network 2022、WEB開催、2022年6月30日

矢田弘史：血友病患者における COVID-19 ワクチンについて～勸奨にもとづく止血管理とその実際～。Hemophilia Cross Talk、WEB開催、2022年7月21日

矢田弘史：大阪医療センターにおける関節診療の現状。CHUGAI Hemophilia Meeting in Kansai、大阪、2022年10月20日

矢田弘史：血友病診療における多職種連携チーム医療の重要性～血友病診療ブロック拠点病院における取り組み～。血友病診療の多職種連携 2022、WEB開催、2022年10月29日

矢田弘史：血友病 A 治療の最前線～凝固因子活性・凝固機能に基づく保因者ケアの重要性～。血液凝固異常症オンラインセミナー、WEB開催、2022年11月20日

矢田弘史：血友病診療のいまと未来～血友病医療に求められる新たな展開～。第18回東海北陸へモフィリアセミナー、WEB開催、2023年3月11日

矢田弘史：多様化する血友病患者のライフスタイルの中で求められる個別化治療と診療連携。南大阪血友病 WEB セミナー、WEB開催、2023年3月17日
ここまで報告に

西田恭治：関西における関節診療の現状と課題。CHUGAI Hemophilia Meeting 2022、WEB開催、2022年4月2日

西田恭治：女性先天性止血異常症の課題－vWD 女性と血友病保因者を中心に－。第3回近畿血友病診療ネットワーク－保因者を含めた止血異常症の問題－、WEB開催、2022年6月7日

西田恭治：世界の血友病事情－WFH ガイドラインを踏まえて。第16回東北へモ

フィリアセミナー、WEB 開催、2022 年 7 月 2 日

西田恭治：過去から未来へ、地域から世界へー血友病の捉え方ー。ヌーイック発売 1 周年記念講演会 Hemophilia Forum in 九州 2022、福岡、2022 年 7 月 9 日

西田恭治：産婦人科領域における先天性止血異常症。大阪女性ヘルスケア研究会、大阪、2022 年 8 月 20 日

西田恭治：新たな血友病保因者対応。血友病保因者 WEB 講演会、WEB 開催、2022 年 8 月 23 日

西田恭治：Beyond ABR～正しく治療を評価するために～。ACTIV Symposium 2022 血友病診療のあした、東京、2022 年 8 月 27 日

西田恭治：これからの血友病患者支援 2022。ヘモフィリアセミナー2022、浜松、2022 年 9 月 3 日

西田恭治：これからの血友病保因者対応。Hemophilia carrier Web 講演会、WEB 開催、2022 年 9 月 13 日

西田恭治：血友病 B 治療の基本的な取り組みと最前線。血友病 B care seminar、WEB 開催、2022 年 9 月 27 日

西田恭治：国内外の血友病保因者事情 2022。第 21 回 Haemostasis 研究会、広島、2022 年 10 月 22 日

西田恭治：見過ごされがちなフォン・ヴィレブランド病女性。過多月経とフォン・ヴィレブランド病オンラインセミナー、WEB 開催、2022 年 10 月 31 日

西田恭治：血友病医療における連携とはーグローバルからローカルまでー。大阪南エリア血友病診療連携体制に向けて、大阪、2022 年 11 月 16 日

西田恭治：これからの血友病保因者対応。CSL ベーリング WEB 講演会 血友病の保因者健診と製剤の適正使用、WEB 開催、2023 年 2 月 3 日

西田恭治：内科医と産婦人科医にとってのフォン・ヴィレブランド病。フォン・ヴィレブランド病と女性の出血オンラインセミナー in 大阪・兵庫、WEB 開催、2023 年 3 月 18 日

B-8

矢田弘史：血友病診療について～ 当院血友病科の紹介 ～。大阪医療センター令和 4 年度新採用臨床研修医オリエンテーション、大阪、2022 年 4 月 21 日

矢田弘史：血友病患者のいまと未来を支える医療。令和4年度大阪医療センター臨床実習薬学部学生講義、大阪、2022年6月3日

矢田弘史：凝固系出血性疾患。第10回日本血栓止血学会教育セミナー、WEB開催、2022年11月6日

矢田弘史：安全な輸血療法をめざして3血液凝固異常症患者における輸血療法の意義。令和3年度チーム医療推進のための研修3（輸血）、大阪(WEB開催)、2023年2月13日

B-9

西田恭治：DOCTOR'S FLAP。FM大阪ラジオ「LOVE FLAP」、2023年2月2日

【研究助成実績】

令和3年、令和4年、令和5年 独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究(C)）

「血友病 A 患者・保因者の第Ⅷ因子遺伝子型に基づく病態解析と新規個別化治療戦略の開発」

研究代表者 矢田弘史

血友病 A は、血液凝固第Ⅷ因子 (FⅧ) の欠乏によって生じる先天性凝固因子障害症であり、現在の標準的な止血治療は FⅧ 製剤の補充療法による。FⅧ 製剤投与を受けた患者のうち約 20-30% に FⅧ に対する同種抗体 (インヒビター) が出現することが知られている。インヒビターの出現は FⅧ 製剤の治療を無効化するため止血治療を困難にし、より重篤な出血症状をもたらす極めて重大な問題である。インヒビターの発生機序は未だ不明な点が多いが、FⅧ 遺伝子 (*F8*) 変異との関連が注目されている。

FⅧ 活性 (FⅧ:C) が 1% 以上残存する中等症・軽症型患者では、血液中には *F8* 変異に伴い変化した自己の FⅧ (変異 FⅧ) 分子が存在するが、変異 FⅧ の凝血的特性を解析することにより FⅧ:C では評価困難な病態解明につながり、また変異 FⅧ の免疫学的特性がインヒビター発生と深く関わると考えられる。

一方、血友病 A 保因者は、父方母方由来の二つの *F8* を有し、それぞれから生じ得る変異 FⅧ と正常 FⅧ が混在するために、複雑な病態を呈するが、X 染色体不活化の偏りによって、変異 FⅧ の影響がより顕在化し、重篤な出血症状を伴う場合がある。このように、血友病 A 患者・保因者の凝固機能及び *F8* 遺伝子変異を解析することは詳細な病態解明において重要である。

そこで、本研究では、血友病 A 患者及び保因者において、① *F8* 変異の同定と様々な凝固機能評価手法を用いた凝血的特性の解析を行い、② *F8* 遺伝子型及び凝血的特性に基づく病態とインヒビター発生機序を解明するとともに、さらに、特に中等症・軽症血友病 A については、③ 患者個々のもつ変異 FⅧ の特性を応用した新規個別化止血治療戦略の確立を目指す。

令和4年度は、血友病患者および保因者合計 34 人の同意を取得し、全血凝固機能を測定評価した。とくに、血友病保因者に対しては、種々の測定トリガー条件下での全血凝固能を測定することにより線溶性の多様性について明らかにすることができた。その成果は第 45 回日本血栓止血学会にて公表する予定である。

呼吸器内科

小河原光正

呼吸器内科は呼吸器悪性腫瘍（肺癌，胸膜中皮腫など）を専門として診療を行っており，呼吸器外科，放射線診断科，放射線治療科，臨床検査科，臨床腫瘍科と協同で肺癌の診断及び化学療法を含む集学的治療を行っている．また，気管支鏡診断，気管支鏡下の処置に力を入れている．稀な肺悪性腫瘍の症例報告，気管支鏡検査などについて報告を行った．

また，NHO 東京病院を班長とした気管支ぜん息共同の研究にも参加・協力した．

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Suzukawa M, Ohta K, Hashimoto H, Oyamada Y, Miki M, Ogawara M, Inoue Y, Saito M A, a Fukutomi Y, Kobayashi N, Taniguchi M, NHOM-Asthma Study Group : Characterization and cluster analyses of elderly asthma in comparison with nonelderly patients with asthma in Japan. 「Annals of Allergy, Asthma & Immunology」 Published online: 2023 年 1 月 16 日

A-3

藤原綾子、高見康二、安藤性實、木村剛、宮本 智、小河原光正、小島将裕、島川宜子、井上敦夫、栗山啓子：気管孔上部に気道狭窄を伴った金属製気管カニューレの気管内脱落に対し，多科合同で異物除去を行った 1 例「気管支学」 44(2): P. 165-170, 2022 年 5 月

A-5

研究代表者：鈴木真穂、分担研究者：小山田吉孝、三木真理、小河原光正、井上義一、杉山温人、上村光弘、田下浩之、齋藤明子、関本匡大、橋本大哉：高齢ぜん息患者の療養状況に関する問題点の解明とその改善のための効果的な治療方法の策定 報告書。独立行政法人環境再生保全機構委託業務、第 13 期（令和 4 年度）鈴木真穂研究班。2023 年 3 月 1 日

B-4

高見康二、土井貴司、安藤性實、宮本 智、小河原光正、井上敦夫、森 清：3 回手術後に切除不能となり EGFR-TKI 耐性となった多発肺癌に、コンバージョン手術と放射線治療を行った 1 例。第 63 回日本肺癌学会学術集会、福岡、2022 年 12 月 3 日

B-6

田中大地、安藤性實、木村 剛、宮本 智、小河原光正、土井貴司、高見康二、井上敦夫、森 清、眞能正幸：EGFR 遺伝子変異陽性肺癌の治療中に増大を認め、MET 遺伝子変異陽性肺癌と診断した同時多発肺癌の 1 例。第 116 回日本肺癌学会

関西支部会、豊中市、2022年6月25日

前倉俊也、相木佐代、櫻井真知子、小河原光正：嗄声以外に転移性脳腫瘍がコミュニケーション障害に影響していたと考えられた肺癌の一例。第4回日本緩和医療学会関西支部学術大会、Web開催、2022年9月18日

B-8

小河原光正：肺がんの薬物療法について。東成区薬剤師会研修会、大阪市、2022年4月21日。

小河原光正：IV期非小細胞肺がんの免疫治療。保険薬局 Oncology 研修・第8回肺がんシリーズ研修、特定非営利活動法人 薬と医療の啓発塾、大阪市、2022年5月25日。

小河原光正：小細胞がんの治療。保険薬局 Oncology 研修・第10回肺がんシリーズ研修、特定非営利活動法人 薬と医療の啓発塾、大阪市、2022年7月27日

B9.

小河原光正：DOCTOR's FLAP。FM大阪、2022年6月16日放送

脳卒中内科

山上 宏

脳卒中内科は脳卒中診療を中心とした脳神経内科疾患を診療する部門です。脳神経外科と協力した脳卒中診療、痙攣発作や脳炎などの神経救急診療を 24 時間体制で行っています。当科はスタッフ全員が脳卒中専門医であり、その中に脳神経血管内治療専門医、日本神経学会専門医を擁しています。

当科での研究についても脳外科と協力し、来院時に広範囲脳梗塞を認める脳主幹動脈閉塞例に対する血栓回収療法のランダム化比較試験 (RESCUE Japan-LIMIT) を行い、その結果は *New England Journal* に掲載されました。2022 年度には急性期脳出血に対する国際共同比較試験 (FASTEST) や脳主幹動脈閉塞の再開通療法に使用するダイレーターの安全性と有効性に関する研究 (TG-DL) を開始しました。また、脳卒中内科単独で、軽症脳梗塞を対象とした新規経口抗凝固薬の国際治療 (BAY 2433334) に参加、特定臨床研究である心房細動とアテローム血栓症を合併した脳梗塞例に対する抗血栓療法に関する比較試験 (ATIS-NVAF) の代表研究者および事務局を担当しています。同じく特定臨床研究である心房細動を有する脳梗塞に対するアブレーションの効果に関する比較試験 (STABLED) に循環器内科と共同で参加しています。また、全国数施設と共同の埋め込み型心電図計を使用している潜因性脳梗塞の登録研究 (LOOK、CRYPTON-ICM)、抗血栓薬や脳微少出血に関する多施設共同研究に参加しています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Koge J, Yamagami H, Toyoda K, Yasaka M, Hirano T, Hamasaki T, Nagao T, Yoshimura S, Fujishige M, Tempaku A, Uchiyama S, Mori E, Koga M, Minematsu K. Early initiation of rivaroxaban after reperfusion therapy for stroke patients with nonvalvular atrial fibrillation. 「*PLoS One.*」 17(4):e0264760、2022 年 4 月

Kimura S, Toyoda K, Yoshimura S, Minematsu K, Yasaka M, Paciaroni M, Werring DJ, Yamagami H, Nagao T, Yoshimura S, Polymeris A, Zietz A, Engelter ST, Kallmünzer B, Cappellari M, Chiba T, Yoshimoto T, Shiozawa M, Kitazono T, Koga M; SAMURAI, RELAXED, RAF, RAF-NOAC, CROMIS-2, NOACISP LONGTERM, Erlangen Registry and Verona Registry Investigators. Practical "1-2-3-4-Day" Rule for Starting Direct Oral Anticoagulants After Ischemic Stroke With Atrial Fibrillation: Combined Hospital-Based Cohort Study. 「*Stroke.*」 53(5):1540-1549、2022 年 5 月

Nguyen TN, Qureshi MM, Klein P, Yamagami H, et al. Global Impact of the COVID-19 Pandemic on Cerebral Venous Thrombosis and Mortality. 「*J Stroke.*」 24(2):256-265、2022 年 5 月

Toyoda K, Yoshimura S, Fukuda-Doi M, Qureshi AI, Martin RH, Palesch YY, Ihara M,

Suarez JI, Okada Y, Hsu CY, Itabashi R, Wang Y, Yamagami H, Steiner T, Sakai N, Yoon BW, Inoue M, Minematsu K, Yamamoto H, Koga M; ATACH Trial Investigators and the SAMURAI Investigators. Intensive blood pressure lowering with nicardipine and outcomes after intracerebral hemorrhage: An individual participant data systematic review. 「Int J Stroke.」 17(5):494-505、2022年6月

Shimamura N, Naraoka M, Uchida K, Tokuda K, Sakai N, Imamura H, Yamagami H, Tanaka K, Ezura M, Nonaka T, Matsumoto Y, Shibata M, Ohta H, Morimoto M, Fukawa N, Hatano T, Enomoto Y, Takeuchi M, Ota T, Shimizu F, Kimura N, Kamiya Y, Morimoto T, Yoshimura S. The reperfusion therapy brings apixaban administration forward in nonvalvular arterial fibrillation patients with anterior circulation large vessel occlusion or stenosis. 「World Neurosurg.」 162:e503-e510、2022年6月

Fujiwara S, Sakai N, Imamura H, Ohara N, Tanaka K, Yamagami H, Matsumoto Y, Takeuchi M, Uchida K, Yoshimura S, Morimoto T; RESCUE-Japan Registry 2 Investigators. Impact of prior antiplatelet therapy on outcomes of endovascular therapy for acute ischemic stroke with large vessel occlusion: Sub-analysis of the RESCUE-Japan Registry 2. 「J Neurol Sci.」 438:120278、2022年7月

Ishizuka K, Hoshino T, Toi S, Mizuno T, Hosoya M, Saito M, Sato Y, Yagita Y, Todo K, Sakaguchi M, Ohashi T, Maruyama K, Hino S, Honma Y, Doijiri R, Yamagami H, Iguchi Y, Hirano T, Kimura K, Kitazono T, Kitagawa K. Remote ischemic conditioning for acute ischemic stroke part 2: Study protocol for a randomized controlled trial. 「Front Neurol.」 13:946431、2022年8月

Yoshimoto T, Yamagami H, Sakai N, Toyoda K, Hashimoto Y, Hirano T, Iwama T, Goto R, Kimura K, Kuroda S, Matsumaru Y, Miyamoto S, Ogasawara K, Okada Y, Shiokawa Y, Takagi Y, Tominaga T, Uno M, Yoshimura S, Ohara N, Imamura H, Sakai C. Impact of COVID-19 on the Volume of Acute Stroke Admissions: A Nationwide Survey in Japan. 「Neurol Med Chir (Tokyo).」 62(8):369-376、2022年8月

Kamogawa N, Tanaka K, Yamagami H, Yoshimoto T, Uchida K, Morimoto T, Imamura H, Sakai N, Ohara N, Matsumoto Y, Takeuchi M, Shigeta K, Toyoda K, Yoshimura S. Outcomes of Symptomatic Anterior Large Vessel Occlusion by Initial Imaging Assessment Using Diffusion - Weighted Imaging Versus Noncontrast Computed Tomography. 「Stroke Vasc Interv Neurol.」 2:e000170、2022年9月

Fujiwara S, Sakai N, Imamura H, Ohara N, Tanaka K, Yamagami H, Matsumoto Y, Takeuchi M, Uchida K, Yoshimura S, Morimoto T; RESCUE-Japan Registry 2 Investigators. Association between anemic status on admission and clinical outcomes of acute large vessel occlusion. 「J Neurol Sci.」 440:120343、2022年9月

Koyanagi M, Hatano T, Uchida K, Ogura T, Yamagami H, Shibata M, Enomoto Y, Fukawa

N, Matsumoto Y, Sakai N, Takeuchi M, Nonaka T, Shimizu F, Ezura M, Ota T, Ohta H, Morimoto M, Morimoto T, Yoshimura S; ALVO investigators. Safety of Apixaban Monotherapy for Non-Valvular Atrial Fibrillation-Related Acute Stroke with Intra-/Extracranial Artery Stenosis. 「Cerebrovasc Dis.」 Oct 12;1-11、2022 年 10 月

Yoshimoto T, Tanaka K, Koge J, Saito S, Yamagami H, Nakaoku Y, Ogata S, Nishimura K, Yamaguchi E, Chiba T, Kawakami D, Shiozawa M, Kamogawa N, Ohta T, Satow T, Inoue M, Hattori Y, Washida K, Kataoka H, Chung JW, Bang OY, Toyoda K, Koga M, Maruyama H, Ihara M. Impact of the RNF213 p.R4810K Variant on Endovascular Therapy for Large - Vessel Occlusion Stroke. 「Stroke Vasc Interv Neurol.」 2:e000396、2022 年 11 月

Matsubara H, Enomoto Y, Egashira Y, Uchida K, Yamagami H, Sakai N, Yoshimura S. The safety and efficacy of periprocedural intravenous anticoagulants for acute ischemic stroke patients who underwent endovascular treatment: Sub-analysis of the RESCUE-Japan Registry 2. 「J Neurol Sci.」 442:120390、2022 年 11 月

Huo X, Klein P, Raynald, Drumm B, Chen Y, Qureshi MM, Schonewille WJ, Liu X, Hu W, Ji X, Li C, Zhu Y, Abdalkader M, Strbian D, Fischer U, Puetz V, Alemseged F, Yamagami H, et al. Perceptions on basilar artery occlusion management in China versus other countries: Analysis of the after the BEST of BASICS (ABBA) survey. 「J Stroke Cerebrovasc Dis.」 31(11):106804、2022 年 11 月

Drumm B, Herning A, Klein P, Raymond J, Abdalkader M, Huo X, Chen Y, Siegler JE, Peacock M, Schonewille WJ, Liu X, Hu W, Ji X, Li C, Alemseged F, Liu L, Nagel S, Strbian D, Rebello LC, Yaghi S, Qureshi MM, Fischer U, Tsivgoulis G, Kaesmacher J, Yamagami H, et al. Basilar artery occlusion management: An international survey of middle versus high-income countries. 「Interv Neuroradiol.」 15910199221143190、2022 年 12 月

Uchida K, Shindo S, Yoshimura S, Toyoda K, Sakai N, Yamagami H, et al.; RESCUE-Japan LIMIT Investigators. Association Between Alberta Stroke Program Early Computed Tomography Score and Efficacy and Safety Outcomes With Endovascular Therapy in Patients With Stroke From Large-Vessel Occlusion: A Secondary Analysis of the Recovery by Endovascular Salvage for Cerebral Ultra-acute Embolism-Japan Large Ischemic Core Trial (RESCUE-Japan LIMIT). 「JAMA Neurol.」 79(12):1260-1266、2022 年 12 月

Lasek-Bal A, Członkowska A, Qureshi MM, Abdalkader M, Marto JP, Michel P, Yamagami H, et al. International study: Global impact of COVID-19 on stroke care - the Polish contribution. 「Neurol Neurochir Pol.」 57(1):136-139、2023 年 1 月

Nguyen TN, Qureshi MM, Klein P, Yamagami H, et al. Global Impact of the COVID-19

Pandemic on Stroke Volumes and Cerebrovascular Events: One-Year Follow-up.
「Neurology.」 100(4):e408-e421、2023 年 1 月

Siegler JE, Qureshi MM, Nogueira RG, Tanaka K, Nagel S, Michel P, Vigilante N, Ribo M, Yamagami H, et al. Endovascular vs Medical Management for Late Anterior Large Vessel Occlusion With Prestroke Disability: Analysis of CLEAR and RESCUE-Japan.
「Neurology.」 100(7):e751-e763、2023 年 2 月

Edwards C, Drumm B, Siegler JE, Schonewille WJ, Klein P, Huo X, Chen Y, Abdalkader M, Qureshi MM, Strbian D, Liu X, Hu W, Ji X, Li C, Fischer U, Nagel S, Puetz V, Michel P, Alemseged F, Sacco S, Yamagami H, et al. Basilar artery occlusion management: Specialist perspectives from an international survey. 「J Neuroimaging.」 doi: 10.1111/jon.13084. 2023 年 2 月

Shimada T, Matsubara K, Koyama D, Matsukawa M, Ohsaki M, Kobayashi Y, Saito K, Yamagami H. Development of evaluation system for cerebral artery occlusion in emergency medical services: noninvasive measurement and utilization of pulse waves.
「Sci Rep.」 13(1):3339、2023 年 2 月

A-1

山上 宏：急性期の頭蓋内動脈の高度狭窄例に対して経動脈的な血管形成術や、ステント留置術は行うべきか？「脳卒中治療 Controversy」、P162-166、中外医学社、東京、2023 年 3 月

A-3

池田 彩、小林祐佳、益田千可子、出野りか子、文 省太、小澤健太郎、山本司郎、家原卓史、小杉準平、上田恭敬：悪性黒色腫に対するペンブロリズマブ導入後に抗横紋筋抗体陽性の重症筋無力症とギラン・バレー症候群を発症した 1 例「Skin Cancer」 37:P40-45、2022 年

A-4

山上 宏：脳梗塞急性期から慢性期までの抗血栓療法「神経治療学」39（4） P 510-513、日本神経治療学会、2022 年 7 月

山上 宏：急性期脳梗塞に対するインターベンション「循環器ジャーナル」 P 478-487、医学書院、東京、2022 年 7 月

山上 宏：広範囲虚血病変を有する急性期脳梗塞に対する血管内治療「Cardio-Coagulation」 P61-63、メディカルレビュー社、東京、2022 年 9 月

山上 宏：急性期再開通療法 up to date「脳神経外科ジャーナル」、31（12）：P 750-757、三輪書店、東京、2022 年 12 月

B-1

Yamagami H: Result of RCT about anti-platelet therapy for stent assisted coiling. The DAPTS ACE trial. 16th Congress of World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology. Kyoto、2022年8月23日

Yamagami H: Next Target in Acute Ischemic Stroke. Key Note. 16th Congress of World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology. Kyoto、2022年8月24日

Yamagami H: Blood pressure Management in Stroke. 10th Korea-Japan Joint Stroke Conference. Osaka + WEB、2022年9月18日

Yamagami H: IAT for LVO in the Anterior Circulation. East Asian Confernce of Neurointervention 2022. Seoul+WEB、2022年12月9日

Inoue M, Yoshimoto T, Toyoda K, Sakai N, Yamagami H, et al. The very LIMIT for Endovascular Therapy for Acute Stroke with a Large Ischemic Region: RESCUE-Japan LIMIT. International Stroke Conference 2023. Dallas、2023年2月9日

B-3

山上 宏：アテローム血栓性閉塞に対する再開通療法脳動脈 vs 冠動。第9回日本心血管脳卒中学会学術集荷、徳島（Web開催）、2022年4月23日

山上 宏：脳血管狭窄を有する脳梗塞の再発 ～抗血小板薬内服下～。第63回日本神経学会学術大会、東京、2022年5月19日

山上 宏、坂井信幸、尾原信行、今村博敏、岩間 亨、宇野昌明、岡田 靖、木村和美、黒田 敏、後藤 励、塩川芳昭、高木康志、富永悌二、吉本武史、豊田一則、橋本洋一郎、平野照之、松丸祐司、吉村紳一、小笠原邦昭、宮本 享：脳卒中受診状況・急性期治療に対する COVID-19 蔓延の影響：国内と世界の状況。第63回日本神経学会学術大会、東京、2022年5月20日

山本敦史、今井啓輔、山田丈弘、猪奥徹也、崔聡、長正訓、上田凌大、加藤拓真、徳田直輝、毛受奏子、濱中正嗣、傳和眞：退院時に抗てんかん薬が処方されていた急性脳炎・脳症例の特徴。第63回日本神経学会学術大会、東京、2022年5月21日

森山拓也、笠倉至言、木村陽子、山本司郎、永野恵子、山上 宏、土井尻遼介、園田和隆、山崎英一、高下純平、中山 平、岩田智則、上野祐司、藤堂謙一：潜在性脳梗塞に対する植込み型心電計による心房細動検出時期と BNP/NT-pro BNP の関係 CRYPTON-ICM registry。第63回日本神経学会学術大会、東京、2022年5月21日

山上 宏：CEA、CAS と脳神経超音波。第 41 回日本脳神経超音波学会総会、第 25 回日本栓子検出と治療学会（合同開催）、東京、2022 年 6 月 3 日

永野恵子：がん合併脳梗塞と下肢静脈超音波検査でみる DVT。第 41 回日本脳神経超音波学会総会、第 25 回日本栓子検出と治療学会（合同開催）、東京、2022 年 6 月 4 日

山上 宏：RAPID による急性期脳梗塞の画像診断。第 28 回日本血管内治療学会学術集会、名古屋、2022 年 6 月 25 日

B-5

山上 宏：脳血管内治療と脳卒中チーム医療。第 5 回日本神経学会脳卒中特別研修会、2022 年 7 月 2 日

B-6

小川敦史、森山拓也、松下誠貴、山本敦史、木村陽子、山本司郎、永野恵子、山上 宏、小堀愛美、岩谷博次：ウェルニッケ脳症との鑑別を要した視神経脊髄炎スペクトラム障害の一例。第 122 回日本神経学会近畿地方会、大阪、2022 年 7 月 30 日

中江陽彦、小川敦史、森山拓也、松下誠貴、山本敦史、山本司郎、永野恵子、山上 宏、水森祐樹、安部晴彦：巨大左房内に生じた血栓により脳梗塞を生じた 1 例。第 238 回日本内科学会近畿地方会、Web 開催、2022 年 12 月 10 日

感染症内科

渡邊 大

当院は平成9年4月にエイズ治療の近畿地方ブロック拠点病院に選定され、診療・研究・情報発信・教育研修の4つの機能を求められています。毎年100例前後の新規HIV感染者が受診し、令和5年3月末で当院のHIV感染者の累計患者数は約4000名となりました。当科では、HIV感染症に関する多様なニーズに対して、医師・看護師・薬剤師・ソーシャルワーカー・カウンセラー・情報担当官らでチーム医療を実践しています。感染症内科の診療内容は、HIV感染症が全体の9割近くを占めており、その他は免疫疾患、一般感染症（一類、二類を除く）などです。

「主な診療と研究」

日和見感染症に対する治療や予防の進歩と抗HIV療法の確立によって、エイズによる死亡者数は減少しました。当科では、AIDS指標疾患であるニューモシスティス肺炎、サイトメガロウイルス感染症、カンジダ症、クリプトコッカス髄膜炎、非結核性抗酸菌症など多彩な病原体による日和見感染症の診療を行っています。抗HIV療法では、ガイドラインに則した最新の治療を提供し、10割近くの患者で治療が奏効しています。抗HIV療法は患者の予後を改善し、パートナーへの感染も予防することから、現在では全ての感染者に治療の開始が推奨されています。抗HIV療法は長期間にわたり正確な内服を継続しなければならないため、その身体的・精神的負担は現在も残されています。さらには、非AIDS関連悪性腫瘍の増加、糖尿病や心・腎合併症など生活習慣病への対応の必要性も増してきています。研究については臨床研究センター・エイズ先端医療研究部の紹介文をご参照ください。

「情報発信と教育研修」

HIV感染症は、病原体も感染経路も予防方法も明らかであるにも関わらず蔓延しています。日本では、他の疾患と比べ30～50歳代の比較的若年者が主要な年齢層です。ブロック拠点病院である当院にHIV感染者の診療が集中していますが、中核拠点病院を始めとした各拠点病院と連絡会議や研修会を行い、地域全体で診療できる体制を目指しています。研修のための各種マニュアルや冊子を作成し、無料で公開・配布しています。HIV/AIDS先端医療開発センターのホームページからも、最新の情報発信を行っています (<https://osaka.hosp.go.jp/department/khac/>)。近年、HIV感染者の高齢化に伴い、HIV感染症以外の疾病の対策や長期療養の必要性が一層高まりました。地域の医療機関や訪問看護との連携も積極的に行っています。症例相談、針刺し等の職務感染防止への対応、生活療養支援など、さまざまな相談にすみやかに対応できる体制を目指しています。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Yoshihara Y, Kato T, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T : Altered white matter microstructure and neurocognitive function of HIV-infected patients with low nadir CD4. 「J Neurovirol.」 28(3): P.355-366, 2022 Jul 1

Kushida H, Watanabe D, Yagura H, Nakauchi T, Hirota K, Ueji T, Nishida Y, Uehira T, Yoshino M, Shirasaka T : Evaluation of plasma doravirine concentrations in patients with HIV-1 undergoing hemodialysis. 「J Infect Chemother.」, 2023 Feb 9. Online ahead of print.

A-1

四本美保子、渡邊 大 : 抗 HIV 治療ガイドライン 2023 年 3 月、令和 4 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV 感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究」、2023 年 3 月 31 日

A-2

白阪琢磨 : 抗 HIV 薬。治療薬ハンドブック 2023、P.450-475、株式会社じほう (2023 年 1 月)

A-3

種田灯子、光井絵理、河本佐季、西村英里香、山口大旗、是近彩香、岸由衣加、秦 誠倫、山本裕一、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤 研 : 抗 HIV 療法開始後に 1 型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関与が疑われた 3 症例「糖尿病」66(1): P.18-25、日本糖尿病学会、2023 年 1 月 30 日

A-4

白阪琢磨 : ガイドライン改訂の Points “DHHS ガイドライン改訂のポイント” 「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1) : P.11-15、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

白阪琢磨、矢倉裕輝、今橋真弓 : Q&A 形式 Case Study “ART 開始、もしくは変更後に体重増加を認め、さらに INSTI 服薬における不眠を認める症例について、ART を継続するうえで注意すべき点、対処法はなにか” 「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1) : P32-38、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

松下修三、白阪琢磨、立川夏夫、Cal Cohen : 座談会 “LTTS を見据えた HIV 診療の現状と課題” 「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1) : P.52-61、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

白阪琢磨 : HIV 感染症患者に対する医療体制の現状と展望「公衆衛生」87(1): P.32-41、医学書院、2023 年 1 月

満屋裕明、白阪琢磨、岡 慎一、南 留美、生島 嗣 : 座談会 HIV 診療の過去・現

在・未来-医学はどう戦ったか、教訓とされた課題「医学のあゆみ」284(9): P.628-639、医歯薬出版、2023年3月

白阪琢磨: HIV 感染症の治療の原則とその進展「医学のあゆみ」284(9): P.648-656、医歯薬出版、2023年3月

A-5

白阪琢磨: エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和4年度研究報告書、P.4-8、2023年3月31日

白阪琢磨、山崎厚司: 高校生世代に向けた予防啓発の実践と教材開発の検討。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和4年度研究報告書、P.56-57、2023年3月31日

白阪琢磨: HIV 感染症への対応等に関するアンケート調査。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和4年度研究報告書、P.58-63、2023年3月31日

白阪琢磨: エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究。公益財団法人友愛福祉財団委託事業「エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究」令和4年度報告書、2023年3月31日

上平朝子: 大阪医療センターにおける HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の検討。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「血液製剤による HIV/HCV 重複感染患者に対する肝移植を含めた外科治療に関する研究」令和4年度分担研究報告書、2023年3月31日

渡邊 大: 近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和4年度研究報告書、P.42-47、2023年3月31日

渡邊 大: 近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和2～4年度総合研究報告書、P.52-59、2023年3月31日

B-2

Oka S, Holohan V, Shirasaka T, Choi J Y, Kim Y-S, Chamay N, Patel P, Polli J W, Garside L, D'Amico R, Talarico C, Baugh B, Wyk J: Asian phase 3/3b experience with long-acting cabotegravir and rilpivirine: efficacy, safety and virologic outcomes through week 96. Asia-Pacific AIDS & Co-Infections Conference (APACC) 2022, 16-18 June 2022, virtual program.

B-3

上平朝子、坪倉美由紀：CRE アウトブレイクの経験。第 37 回日本環境感染学会総会・学術集会、横浜、2022 年 6 月 17 日

渡邊 大：LTTS 達成のために BIC/TAF/FTC が果たす役割について。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

西田恭治：薬害保因者遺族にとっても欠くことのできない保因者健診。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

白阪琢磨：HIV 感染症：治療の手引き「What's New」。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 20 日

B-4

白阪琢磨、川戸美由紀、橋本修二、三重野牧子、天野景裕、大金美和、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、八橋 弘、岡 慎一：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 1 報 健康状態と生活状況の概要。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

川戸美由紀、三重野牧子、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 2 報 悪性新生物、循環器疾患、その他の疾患。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

三重野牧子、川戸美由紀、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 3 報 健康意識とこころの状態。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、瀧永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、杉浦 互：2021 年度の国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

渡邊 大、照屋勝治、横幕能行、南 留美、遠藤知之、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、岡 慎一：実臨床でのビクテグラビル/エムトリシタビン/テノホビルアラフェミナド(B/F/TAF)の有効性、安全性及び忍容性の評価:BICSTaR Japan の 12 ヶ月解析結果 (2 回目)。第 36 回日本エイズ学会学

術集会・総会、浜松、2022年11月18日

四本美保子、木内 英、渡邊秀裕、渡邊 大、白阪琢磨：早期治療開始が必要な HIV 感染症患者に対する抗 HIV 療法開始までの期間。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

阪野文哉、川畑拓也、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：MSM 向け HIV・性感染症検査キャンペーン（2021 年度実績報告書）。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

大谷眞智子、椎野禎一郎、西澤雅子、林田庸総、湯永博之、佐藤かおり、豊嶋崇徳、渡邊 大、今橋真弓、俣野哲朗、菊地 正：薬剤耐性 HIV 調査ネットワーク：国内 HIV-1 CRF07_BC の流行動向に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：コロナ禍における HIV 陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

矢倉裕輝、藤原綾乃、榎田宏幸、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大、白阪琢磨：HPLC 法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピピリンの同時定量に関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：AIDS 発症に影響する心理的要因に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

米田奈津子、渚るみ子、中濱智子、東 政美、佐井木梨花、大楠裕子、白阪琢磨、渡邊 大：当院に通院する HIV 陽性者の大規模災害に対する備えの現状と課題の検討－災害への備えと避難行動について－。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

B-5

渡邊 大：将来を見据えた薬剤選択の意義。第 92 回日本感染症学会西日本地方会学術集会、長崎、2022年11月5日

B-6

佐倉彩佳音、矢倉裕輝、藤原綾乃、松本絵梨奈、駒野 淳、渡邊 大、白阪琢磨：
日本人 HIV-1 感染症患者におけるビクテグラビル投与に伴う、代謝酵素及び腎尿
細管トランスポーターの遺伝子多型と臨床検査値の変化との関連性。第 35 回近
畿エイズ研究会学術集会、奈良、2022 年 6 月 4 日

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪
琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関す
る検討。第 35 回近畿エイズ研究会学術集会、奈良、2022 年 6 月 4 日

平賀紀行、白阪琢磨、四本美保子、川津友佳、原岡正志、小野誠之：エイズ予防
指針の提唱する医療体制下で現在認められている臨床的課題についての検討。第
74 回日本泌尿器科学会総会、北九州、2022 年 11 月 4 日

B-7

白阪琢磨：HIV 治療薬の変遷から考える積極的な切り替えの意義。ViiV HIV
Webinar 2022、WEB 開催、2022 年 4 月 7 日

白阪琢磨：ART ガイドラインをどう読むか～患者ニーズを加味した ART 選択。
HIV インターネット講演会、WEB 開催、2022 年 4 月 19 日

渡邊 大：長期療養時代を見据えた治療ゴールの再設定。HIV 感染症 Dr. &
Pharmacist collaboration セミナー、WEB 開催、2022 年 5 月 28 日

渡邊 大：LTTS 達成のための抗ウイルス効果、耐性バリアとアドヒアランス。Gilead
Infectious Disease Symposium 2022 BICTARVYR® 3rd Anniversary Meeting、WEB 開
催、2022 年 6 月 25 日

白阪琢磨：HIV 感染症治療 最新の知見。HIV UP-TO-DATE Webinar、WEB 開催、
2022 年 8 月 19 日

渡邊 大：長期服薬歴のある HIV 感染症患者の治療について～HIV 感染症と併発
症の治療、高齢化に向けた課題など。北陸ブロック医療等相談会、福井、2022 年
10 月 1 日

白阪琢磨：将来を見据えた薬剤選択の意義。ViiV HIV Webinar 2022、WEB 開催、
2022 年 11 月 8 日

上平朝子：長期合併症を踏まえた HIV 治療戦略。第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファ
レンス第 2 部 Web 講演会、WEB 開催、2023 年 1 月 28 日

B-8

白阪琢磨：政策医療「HIV/AIDS 医療の現状と当院の役割」。令和 4 年度新規採用
職員研修、大阪、2022 年 4 月 5 日

上平朝子：COVID-19 感染対策。2022 年度第 1 回院内定期講演会（感染管理）、大阪、2022 年 5 月 26 日

白阪琢磨：医学の進歩がどう感染症を克服してきたかーHIV 感染症を例に挙げて。大阪大学医学部講義「医学序説」、大阪、2022 年 6 月 3 日

上平朝子：大阪医療センターのコロナ診療の現状。第 55 回法円坂地域医療フォーラム、大阪、2022 年 6 月 11 日

白阪琢磨：症例検討：HIV 陽性者を診る。大阪大学医学部講義「臨床医学持論」、大阪、2022 年 7 月 12 日

上平朝子：HIV 感染対策と病診連携。大阪府医師会令和 4 年度 HIV 医療講習会、大阪、2022 年 8 月 5 日

西田恭治、田沼順子、長谷川康、長尾 梓、曾山明彦：HIV/HCV 重複感染患者に対する肝移植を含めた外科治療のこれから。令和 4 年度市民公開シンポジウム、東京、2022 年 8 月 6 日

白阪琢磨：HIV 陽性者の人権課題ーHIV、AIDS 等の現状と課題。大阪府人権総合講座（前期）人権問題科目、大阪、2022 年 8 月 31 日

白阪琢磨：HIV/エイズの基礎知識～医療と最新の治療について。大阪府令和 4 年度 HIV/エイズ基礎研修、WEB 配信、2022 年 9 月 2 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・検査・日和見疾患・治療。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 9 月 5 日

西田恭治：HIV/AIDS 患者の背景 薬害エイズについて。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 9 月 5 日

廣田和之：STD（性行為感染症）の診断。令和 4 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 6 日

上平朝子：HIV 感染症の基礎知識。令和 4 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 6 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 4 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 7 日

西田恭治：薬害 HIV。令和 4 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 7 日

上地隆史：日和見感染症。令和 4 年度/奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 7 日

上平朝子：事例紹介。令和 4 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 8 日

白阪琢磨：HIV 感染症の疫学。令和 4 年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022 年 9 月 9 日

白阪琢磨：疫学と抗 HIV 治療ガイドライン。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

渡邊 大、矢倉裕輝：初回抗 HIV 療法の実際。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

上平朝子：日和見感染症診療－PCP を中心に－。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 4 日

上平朝子、矢倉裕輝：症例検討。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 4 日

西田恭治：血友病診療・凝固因子製剤の使い方。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 4 日

西田恭治：薬害 HIV。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 7 日

渡邊 大：新規抗 HIV 薬。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 12 日

上平朝子：免疫再構築症候群（IRIS）。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 13 日

B-8

廣田和之、坪倉美由紀：インフルエンザの診療と感染対策。2022 年度 ICT/感染制御部主催研修会、大阪、2022 年 10 月 21 日

廣田和之：STD（性行為感染症）の診療。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 25 日

上地隆史：日和見感染症。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 25 日

松村拓朗：入院症例の管理の実際。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 26 日

渡邊 大：HIV 急性感染。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会（1 ヶ月コース）、大阪、2022 年 10 月 27 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・検査・日和見疾患・治療。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

西田恭治：HIV/AIDS 患者の背景 薬害エイズについて。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

白阪琢磨：HIV 講義。大阪大学 4 年次臨床導入実習講義、大阪、2022 年 12 月 2 日

宇津本理夫、廣田和之：暴言暴力への「具体的な」対応術。第 9 回医療安全研修会、大阪、2022 年 12 月 14 日

白阪琢磨：HIV/AIDS 総論・感染対策。令和 4 年度医療従事者のための HIV 研修会、大阪、2022 年 12 月 18 日

白阪琢磨：HIV 感染症で期待される病診連携と新たな課題。令和 4 年度 HIV 地域医療連携研修会、大阪、2023 年 1 月 23 日（大阪府医師会）

上地隆史：日和見疾患の病態と治療 ニューモシスチス肺炎・HIV 脳症・サイトメガロウイルス網膜炎。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

廣田和之：性感染症の基礎知識。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

上平朝子：長期合併症を踏まえた HIV 治療戦略。第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス第 2 部 Web 講演会、WEB 開催、2023 年 1 月 28 日

廣田和之：薬剤耐性（AMR）対策。2022 年度第 2 回院内定期講演会（感染管理）、大阪、2023 年 2 月 9 日

白阪琢磨：地域における HIV 陽性者支援のための HIV/エイズの基礎知識。大阪府高齢者支援に関わる介護サービス事業者等向け HIV/エイズ研修会、WEB 配信、2023 年 3 月 10 日

白阪琢磨：HIV/エイズ予防と治療に関する最新情報と今後の検査機関に期待するもの。スマートらいふネット スタッフ研修会、大阪、2023年3月11日

B-9

白阪琢磨：HIV/エイズについての基礎講座。厚生労働省主催「レッドリボンライブ 2022～みんながエイズを話に来た！～」、WEB配信、2022年12月28日（ニコニコ生放送）

近畿ブロックのHIV医療体制整備

研究分担者 渡邊 大

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター臨床研究センター
エイズ先端医療研究部 HIV感染制御研究室長

研究要旨

【目的】本研究では、近畿ブロックにおける HIV 診療の課題を明らかにし、HIV 診療の向上を目的とする。【方法】患者動向の調査に加え、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議、研修会の企画と実施、資料の作製などを行った。【結果】患者動向では新規 HIV 感染者数の減少、AIDS 患者の減少、CD4 数 200/μL 未満の患者の増加を認めた。研修会の実施数については回復傾向が認められた。【結論】近畿ブロックではコロナ禍以前よりも研修会の開催数は減少したものの、リアルな研修会を実施し、HIV 診療の向上に貢献したと思われる。新型コロナウイルス感染症の流行の影響をうけたものの、今後の HIV 診療の医療体制の構築および研修会のあり方については今後の検討すべき課題である。

A. 研究目的

エイズ診療は日本を8つのブロックに分けた診療体制が構築されている。その中で、近畿ブロックは大阪・兵庫・滋賀・京都・奈良・和歌山の2府4県から成り立っている。2007年にそれぞれ府県で中核拠点病院が定められ、ブロック拠点病院である大阪医療センターとともに、地域における医療体制の整備を行っている。本研究では、近畿ブロックにおける HIV 診療の課題を明らかにし、HIV 診療の向上を目的とした。

HIV 診療にはさまざまな解決すべき課題が残されている。本年度の研究として、HIV 検査の受検や医療機関の受診を行わずに AIDS 発症に至る心理的過程を明らかにすることについても研究を行った。

B. 研究方法

患者動向の調査に加え、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議、研修会の企画と実施、資料

の作製、ホームページによる情報発信、拠点病院への HIV 診療に関するアンケート調査を行った。研修・教育に用いた資料は次の通りであった（表1）。

- あなたに知ってほしいこと（2022年9月発行〈第17版〉）
https://osaka-hiv.jp/pdf/anatani_shittehoshii_v17.pdf
- HIV/AIDSの正しい知識～知ることから始めよう～（2019年2月発行〈第2版〉）
https://osaka-hiv.jp/pdf/h31_knowledge_hiv_aids.pdf
- 抗HIV治療ガイドライン（2022年3月発行）
<https://hiv-guidelines.jp/pdf/guideline2022.pdf>
- Healthy & Sexy（2014年3月発行）
<https://osaka.hosp.go.jp/wp-content/themes/osaka-iryuu/img/department/khac/medical/resource/healthy-sexy2014.pdf>

表1 研修・教育に用いた資料

名称	作成者	研究班	主な使用方法
あなたに知ってほしいこと	大阪医療センター	「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班	研修会・講習会で配布
HIV/AIDSの正しい知識～知ることから始めよう～	社会福祉法人武蔵野会	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布
抗HIV治療ガイドライン	大阪医療センター	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布
Healthy & Sexy	大阪医療センター	「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班	研修会・講習会で配布
あなたとあなたのイイひとへ	大阪医療センター	「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」班	研修会・講習会で配布

- あなたとあなたのイイひとへ（2014年3月発行）
<https://osaka.hosp.go.jp/wp-content/themes/osaka-iryuu/img/department/khac/medical/resource/anatato2014.pdf>

AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については、大阪医療センターに通院中のHIV感染者のうち、AIDS発症の状態でのHIV感染が判明した10例を対象に、半構造化面接を行った。

（倫理面への配慮）

研修・教育に用いた症例呈示では、患者個人が特定されない等の配慮を行った。AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については倫理審査をうけ、承認を得た。

C. 研究結果

当院の2022年の初診患者数は102例であり、累計カルテ数として4047例に到達した（図1）。初診患者数は2010年の264例をピークに減少傾向であった。2017年から2019年までは154～166例と初診患者数は横ばいであった。新型コロナウイルス感染症の流行と共に、2020年の初診患者数は128例と大きく減少した。2021年と2022年はさらに減少し、それぞれ115例と102例であった。初診患者のうち、新規診断患者は63例であった（図2）。新規診断患者数は初診患者数と同様に2010年をピークに減少していた。AIDS患者の占める割合については、20%から30%の範囲で大きく変動していた。2020年と2021年はそれぞれ20.8%と23.8%であり、例年と比較して低めで推移していた。無症候性キャリアの

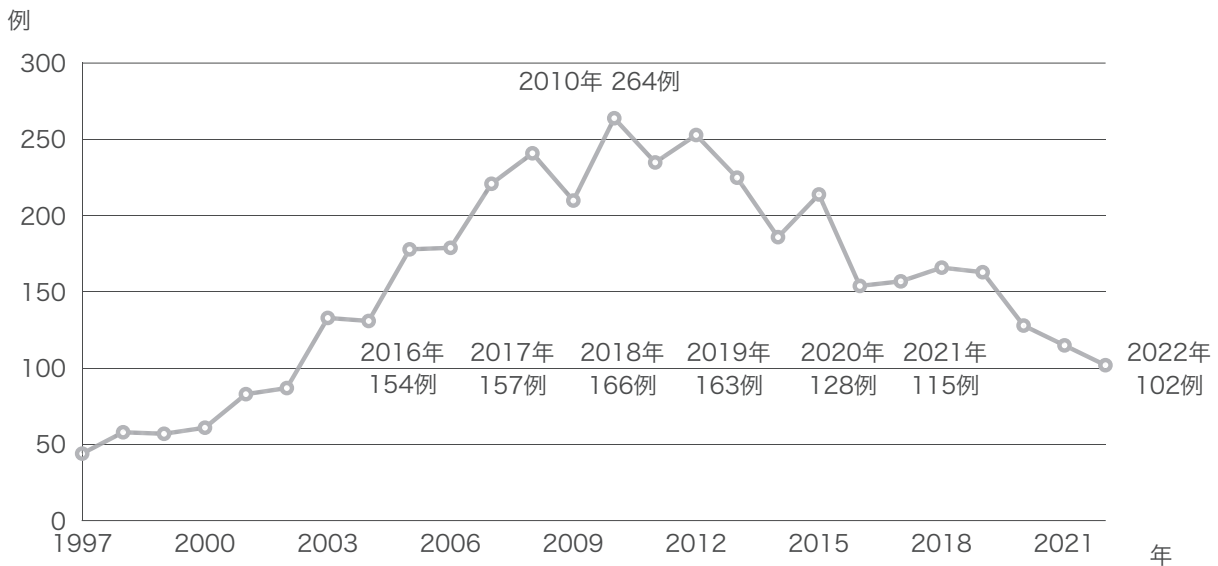


図1 初診患者数の年次推移

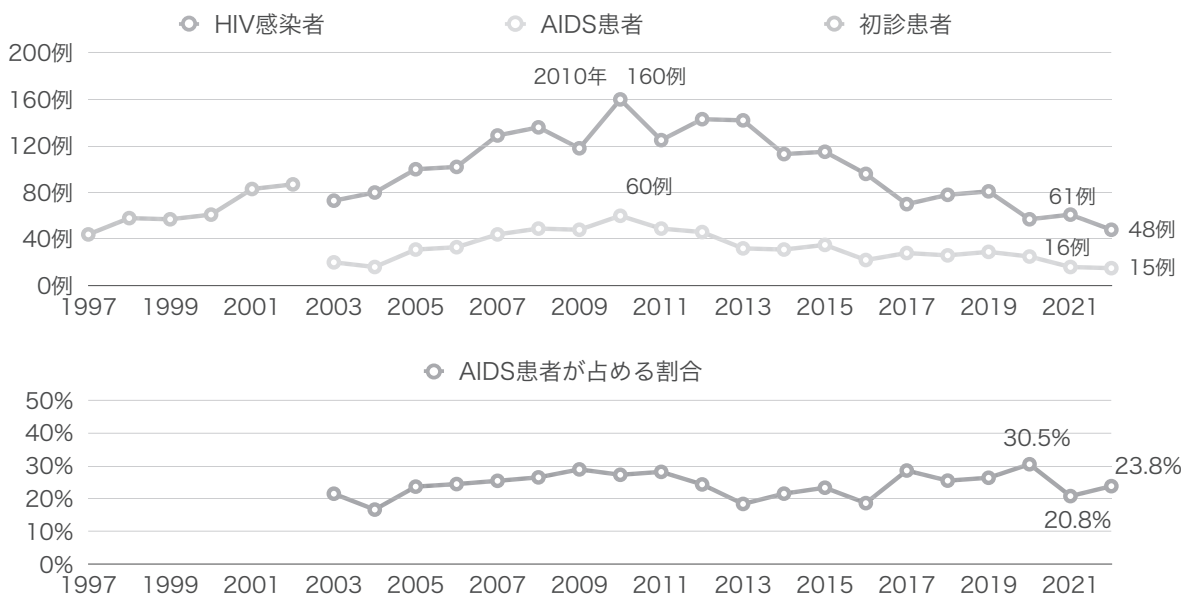


図2 新規診断患者数の年次推移とAIDS患者が占める割合

新規診断患者うちCD4陽性Tリンパ球数が200/ μ L未満の割合は46.8%であった。2020年は52.0%と高く、2021年は26.4%と低値であり、ここ3年で大きな変動を認めた（図3）。他院で診断され、当院に転院となった患者数は引き続き減少しており、転勤などの人の移動に制限がかかった可能性が示唆された（図4）。2019年から2022年の新規未治療患者

（過去の診断され未治療のまま転院した患者を含む）の診断時の患者背景を図5に示す。ここ2年と異なり、急性期で診断される症例が減少していた。献血で診断された症例は今年度も少なからず認められた。以上のことから、HIV未診断者の受検行動の変化が推測された。

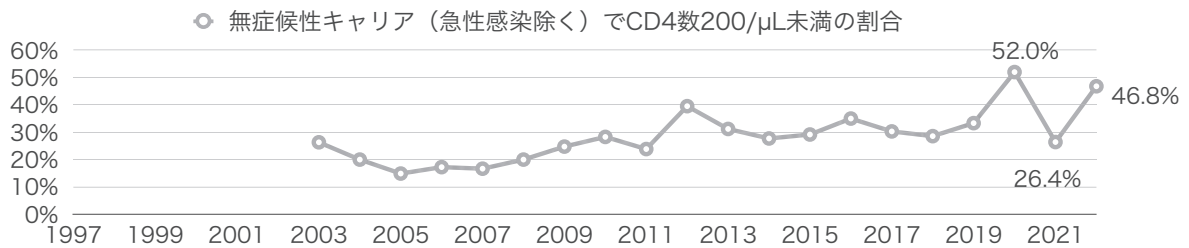


図3 無症候性キャリアでCD4数200/ μ L未満の割合



図4 転院患者数の年次推移

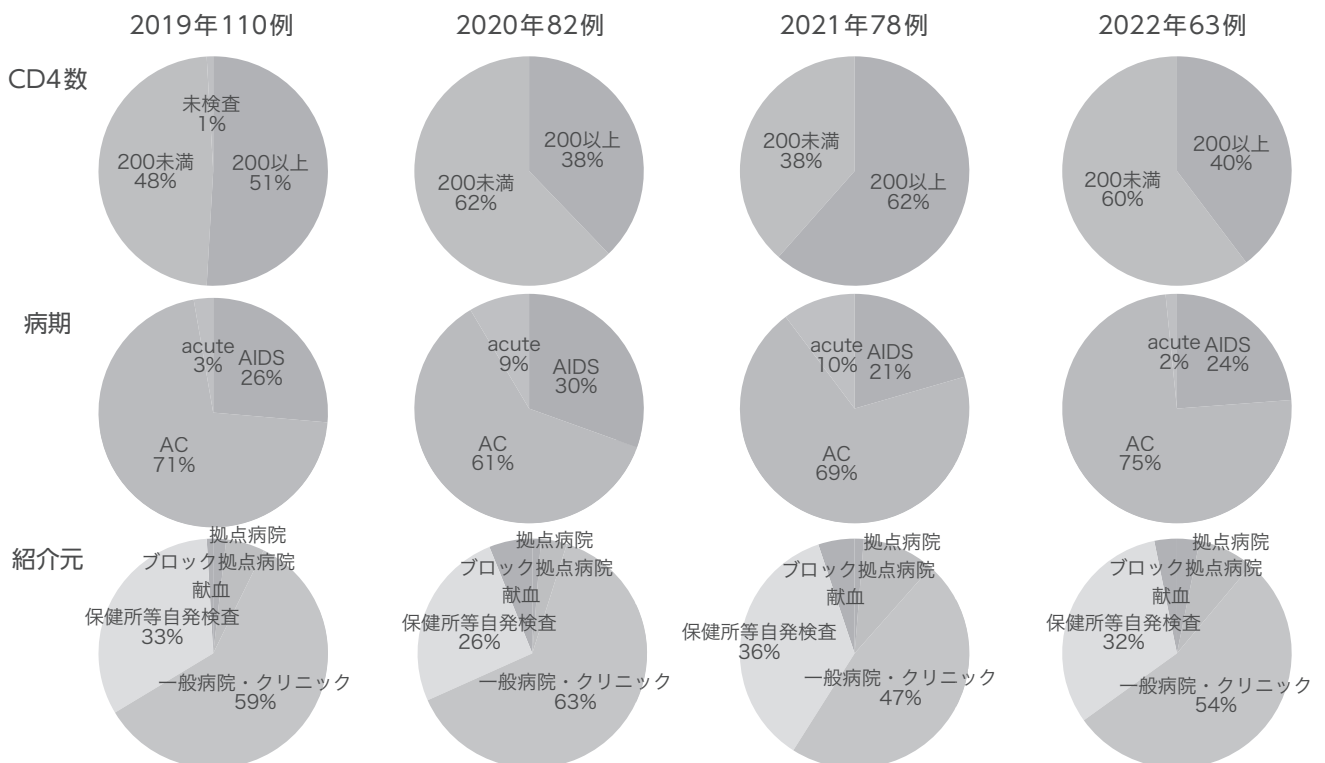


図5 2019-22年の新規未治療患者の診断時の患者背景

次に、2022年度の研修会の実施実績を表2に示す。実施した研修会はリモート開催を含む8件（実施予定を除く）であり、昨年度の5件と比較すると実施回数は増加した。開催を行ったのはブロック拠点病院である当院が主催したもので、中核拠点病院が計画した研修会・講習会はいずれも開催されなかった。ソーシャルワーク研修会は、昨年度は開催をリモートに変更することにより参加者は大きく増加したが、今年度は減少した。HIV感染症医師一ヶ月実地研修に関しては、今年度も1名の参加があり、HIV感染者・AIDS患者の診療に関する実施研修を行った。

今年度は中核拠点病院打ち合わせ会議を実施することができず、近畿ブロック都道府県・エイズ拠点病院等連絡会議も時間短縮して開催した。

資料では『あなたに知ってほしいこと』の改訂を行った。健康診断や歯科検診の必要性を追記するとともに、抗HIV薬として初めて登場した持続性の注射薬に関する内容を追記した。診断直後の症例を対象とするパンフレットであるため、内容は紹介のみにした。

AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については、AIDS発症の状態でのHIV感染が判明したHIV感染者10名を対象に、半構造化面接を行った。KJ法により、受検の阻害要因を計108抽出し11のグループに編成した。直接的な要因は、「感染判明後の性行動の制約への抵抗」「スティグマ」「検査の不便性」「健康管理への無関心」が挙げられた。健康管理に無関心となる背景には、病気について考えるのを避ける「病気の否認」、HIVを自分と無関係とみなす「心理的切り分け」、診察や健康診断だけで健康状態を完全に把握できているとする「医療への万能の期待」、体調不良の深刻さや、HIV感染の罹患時の健康

や生活面への影響を過少に見積もる「病気の重大性の過小評価」、HIVに感染する程度を過度に低く見積もる「感染可能性の過小評価」、「自罰的思考」「精神状態の悪さ」等の影響がみられた。

D. 考察

近畿ブロックにおいては新規HIV感染者の発生件数は減少傾向であった。これに新型コロナウイルス感染症の流行が加わり、患者動向に大きな影響をうけた。AIDS患者が減少していることや、診断時のCD4数の分布を考慮すると、患者数の減少は診断の遅れによるものではなく、新規感染が減少しているためと考えられた。新規感染が減少している中でのAIDS患者の占める割合や無症候性キャリアのCD4数が200/μL未満の割合の評価は困難である。2022年の急性感染が減少した原因としては、新しい確認検査法の登場がその1つとして挙げられる。いままではウエスタンブロット法が臨床で用いられる唯一の抗体確認検査であった。それが2022年の春頃からGeeniusとよばれるHIV-1/2抗体確認検査法に置き換わった。この検査法はIC法を基礎とするものであり、ウエスタンブロット法と比較すると偽陽性（ここでは判定保留とする）・偽陰性とも減少しており、早期に陽性を判定することが可能、つまり感染から検査が陽性になるまでの期間が短縮されている。急性感染の減少は、これらの影響をうけた可能性は否定できない。

AIDS発症に至る心理的背景に関する研究については、必ず死に至るという誤認などから、恐怖感情が喚起されるほどにHIVを脅威とみなすことにより病気を否認し、健康管理に表面的に無関心となる過程がうかがえられた。反対に、薬を飲めば死に至らないため放っていても大丈夫というように、病気の

表2 研修会の実施実績

名称	目的	主な対象	昨年度の参加人数	今年度の参加人数
HIV/AIDS看護研修(第1回 初心者コース)	知識普及	看護師	25	11
HIV/AIDS看護研修(第2回 初心者コース)	知識普及	看護師	開催なし	16
HIV感染症研修会	知識普及	多職種	17	50
HIV医療におけるコミュニケーションとチーム医療研修会	実習	多職種	13	23
HIV感染症医師一ヶ月実地研修	実習	医師	2	1
近畿ブロックエイズ診療拠点病院ソーシャルワーク研修会	教育・講習	MSW	51	21
近畿ブロックHIV医療におけるカウンセリング研修会	教育・講習	カウンセラー	リモート	2月開催予定
HIV/AIDS看護研修(応用コース)	教育・講習	看護師	延期・開催予定	11
HIV/エイズに関する研修会(和歌山県立医大)	知識普及	その他医療関係者	開催なし	開催なし
歯科における院内感染対策研修会(兵庫医科大学病院)	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	開催なし	開催なし
HIV感染症に関する講習会(滋賀医科大学医学部附属病院)	知識普及	その他医療関係者	開催なし	開催なし
歯科における院内感染対策研修会(兵庫医科大学病院)	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	開催なし	開催なし
歯科における院内感染対策研修会(兵庫医科大学病院)	知識普及	歯科医師、歯科衛生士	開催なし	開催なし

重大性を過小評価することで無関心となる過程も示唆される。感染リスク集団をステレオタイプ化することによりHIVを心理的に切り分け、感染可能性を過少に見積もる過程も推察される。以上のように、病気の知識を正しく獲得し、リスクや脅威を客観的に認識することが困難となる心理的過程により、受検行動が阻害されることが明らかとなった。今後は量的研究により結果の妥当性を検証し、受検促進の効果的な方法を検討する必要がある。

E. 結論

近畿ブロックでは去年よりも開催数は減少したもののリアルな研修会の実施し、HIV診療の向上に貢献したと思われた。新型コロナウイルス感染症の流行下におけるHIV診療および研修会のあり方については今後の検討課題である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

海外

なし

国内

- 1) 佐倉彩佳音、矢倉裕輝、藤原綾乃、松本絵梨奈、駒野 淳、渡邊 大、白阪琢磨：日本人HIV-1感染症患者におけるビクテグラビル投与に伴う、代謝酵素及び腎尿細管トランスポーターの遺伝子多型と臨床検査値の変化との関連性。第35回近畿エイズ研究会学術集会、2022年6月4日、奈良
- 2) 渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV感染者におけるヒトヘルペスウイルス8型関連バイオマーカーに関する検討。第35回近畿エイズ研究会学術集会、2022年6月4日、奈良
- 3) 渡邊 大：将来を見据えた薬剤選択の意義。長期的な観点から考える抗HIV感染症治療。ランチョンセミナー10。第92回日本感染症学会西日本地方学術集会、2022年11月5日、長崎
- 4) 大谷眞智子、椎野禎一郎、西澤雅子、林田庸総、湯永博之、佐藤かおり、豊嶋崇徳、渡邊 大、今橋真弓、俣野哲朗、菊地 正、薬剤耐性

- HIV調査ネットワーク：国内HIV-1 CRF07_BCの流行動向に関する研究。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
- 5) 安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：コロナ禍におけるHIV陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究
 - 6) 四本美保子、木内 英、渡邊秀裕、渡邊 大、白阪琢磨：早期治療開始が必要なHIV感染症患者に対する抗HIV療法開始までの期間。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
 - 7) 矢倉裕輝、藤原綾乃、櫛田宏幸、吉野宗宏、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨：HPLC法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピビリンの同時定量に関する検討。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
 - 8) 神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：AIDS発症に影響する心理的要因に関する研究。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
 - 9) 渡邊 大、照屋勝治、横幕能行、南 留美、遠藤知之、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、岡 慎一：実臨床でのビクテグラビル／エムトリシタビン／テノホビルアラフェナミド（B/F/TAF）の有効性、安全性及び忍容性の評価：BICSTaR Japanの12ヵ月解析結果（2回目）。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
 - 10) 阪野文哉、川畑拓也、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：MSM向けHIV・性感染症検査キャンペーン（2021年度実績報告）。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
 - 11) 渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV感染者におけるヒトヘルペスウイルス8型関連バイオマーカーに関する検討。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、静岡
 - 12) 菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、湯永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、

仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、
杉浦 互：2021年の国内新規診断未治療HIV感
染者・AIDS患者における薬剤耐性HIV-1の動
向。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、
2022年11月18日、静岡

- 13) 米田奈津子、渚るみ子、中瀨智子、東 政美、
佐井木梨花、大楠裕子、白阪琢磨、渡邊 大：
当院に通院するHIV陽性者の大規模災害に対す
る備えの現状と課題の検討－災害への備えと避
難行動について－。第36回日本エイズ学会学
術集会・総会、2022年11月18日、静岡
- 14) 渡邊 大：LTTS達成のためにBIC/TAF/FTCが
果たす役割について。ランチョンセミナー1。
第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022
年11月18日、静岡

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

HIV感染症患者に対する 医療体制の現状と展望

白阪琢磨

しらかさ・たくま●独立行政法人国立病院機構大阪医療センターHIV/AIDS先端医療開発センター長/公益財団法人エイズ予防財団 理事長
〒540-0006 大阪市中央区法円坂2-1-14 大阪医療センター / shirasaka.takuma.ca@mail.hosp.go.jp

ポイント

- ◆ HIV感染症は毎日1錠の服薬を継続することでエイズ発症もなく、非感染者と同様の寿命が期待される疾患である。
 - ◆ 治療で血中のHIVウイルス量を検出できないまでに抑え込み続けられ、性行為による他への感染もない。
 - ◆ エイズ診療拠点病院との連携は必要であるが、今後のHIV診療の軸足は診療所に移るべき時代が来た。免疫機能障害の自立支援医療等の複数施設での認定も必須である。
-

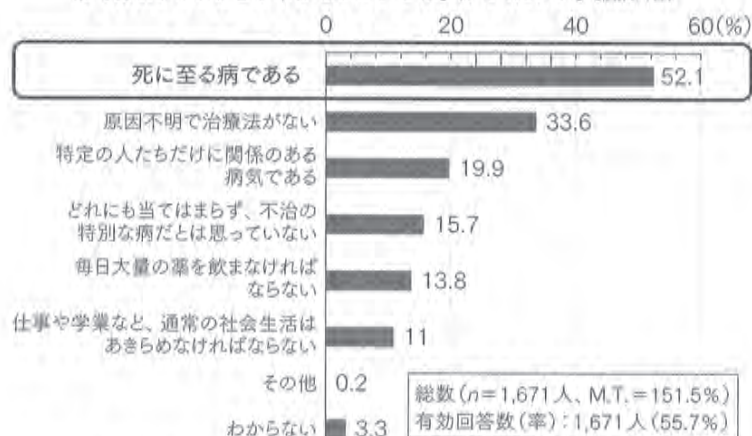
#HIV感染症 #HIV/AIDS #薬害HIV訴訟 #エイズ患者 #U=U

1 はじめに

医療体制は患者に適切な医療を提供するための体制であり、それは医療を提供される患者を中心に構築されるのが肝要である。HIV (human immunodeficiency virus) 感染症の医療体制は、現存する医療資源の中で、HIV陽性者により適切でより良い医療をいかにして提供ができるかを模索しながら築かれてきた。

HIV感染症は1981年に世界で初めて米国で報告された比較的新しい感染症である¹⁾。米国の大都市を中心に若者の男性に多く散発する原因不明の細胞性免疫不全症が報告され、発症者が男性同性愛者に多かったことからゲイ病と呼ばれたりしたが、治療のために血液凝固因子製剤の投与を受けた血友病患者や、輸血歴のある高齢の女性などでも同様の症状が報告され、1982年に後天性免疫不全症候群 (acquired immunodeficiency syndrome: AIDS) と命名された。当時は治療薬がなく、エイズ発症後約2年でほぼ全員が死に至る病であり、恐怖をおおるようなメディアの報道と相まって人々に恐れられ、各地でいわゆるエイズパ

あなたはエイズについてどのような印象をお持ちですか。
あてはまるものをこの中からいくつでも挙げてください。(複数回答)



2018年1月11日から21日にかけて全国18歳以上の日本国籍を有する3,000人に行ったHIV感染症・エイズに関する世論調査(附帯調査)より

図1 2018年公表の内閣府世論調査(附帯調査)結果(文献5より転載)

ニックが発生した。1983年にはエイズ患者から病原体であるHIVが分離・同定され、HIV感染症の臨床経過、病態、感染経路も明らかとなり、1987年には世界初の抗HIV薬が米国で承認された¹⁾²⁾。その後、抗HIV薬の開発と治療法の臨床研究が飛躍的に進歩し、現在では、治療を受けているHIV陽性者の平均余命は非感染者と大差がなく、糖尿病や高血圧のような慢性疾患と位置付けられるまでになった。さらに、治療状況が良いHIV陽性者では性行為による感染が実質的にないことが、いくつかの大規模臨床研究で明らかにされ³⁾⁴⁾、本疾患のイメージは大きく変化した。しかしながら、わが国の2018年の世論調査の結果(図1)⁵⁾を見ても、エイズに対する偏見差別はいまだに存在していると言わざるを得ない。治療の進歩に伴って、新に出現した課題を解決し、今後、HIV医療体制が乗り越えるには、国民のHIV/AIDSに対する正しい知識の普及と、医療あるいはケア提供側および地域での正しい対応が必要と考える。

本稿では、わが国におけるHIV医療体制構築の経緯、現状、今後の展望につき述べる。

Ⅰ わが国におけるHIV医療体制構築の経緯

1. HIV/AIDSの発見から薬害HIV訴訟和解まで

海外では主に男性同性間あるいは異性間での性的接触、薬物使用時の針等の共用による感染と考えられるエイズ患者報告数が増加を続ける中、治療薬がない状況でも医療提供をどう行うかの議論がされた。米国で1987年にHIV抗体検査が輸血液の安全性のために承認され、医療現場でもHIV感染症の診断のため利用されるようになった。ウインドウ期の問題、陽性者のプライバシーの取り扱い、医療上の感染対策が議論され、未診断HIV陽性者を念頭においた医療現場での感染対策としてuniversal precautions(普遍的予防策)が唱えられ、その後、現在の標準予防策になった。医療現場では誤刺等による医療従事者の職業暴露後のHIV感染予防対策が、限られた事例の検討から提唱され、基本的には現在も使用されている。

医療以外の分野では、治療がまだ十分でなかった頃から、陽性者やその支援者の心理・精神的支援や生活支援などに取り組むNGOが登場した。英国ではエリザベス・テイラーが1991年にエリザベス・テイラー・エイズ基金を設立し、HIV陽性者とその支援団体の支援活動を始め、ダイアナ妃は陽性者との握手やハグなどではHIVは感染しないことを身をもってホームページに写真掲載するなどして世界に発信し、偏見差別の是正に尽力した。1988年にWHO(世界保健機関)は世界規模でのエイズまん延の防止、エイズ患者やHIV感染者に対する偏見・差別の解消を目的として、12月1日を世界エイズデーと定め、活動のシンボルとしてレッドリボンが使用された。

わが国では、エイズは米国での最初の報告以来、対岸の火事との認識が長らくあり、HIV医療体制の構築を急ぐ危機感に乏しかったきらいがあった。1985年、国内での第1号患者の認定はエイズ上陸としてマスコミの話題となった。しかし、実際には、この患者以前にも、日本には海外からの輸入HIV混入非加熱血液凝固因子製剤を治療で投与しHIVに感染した1,400人を超える血友病患者がいた。この事実は長い間公表されなかった。1986年に松本事件、1987年に神戸事件や高知事件とわが国でもエイズパニックが起こった。このパニックの中、1988年に、いわゆるエイズ予防法が成立した。現在のHIV医療体制が立ち上がる前から、HIV抗体陽性の血友病患者を血友病医師が診療していたことと、1985年に東京都立駒込病院(当時)が公にエイズ診療を開始したことは特筆すべきであろう。

さて、前述のエイズパニックによって、HIVあるいはHIV陽性者に対する異常なまでの拒否反応が社会に広がり、この現象はHIV陽性者の診療拒否にまで至った。HIV陽性者と主治医を取り巻く厳しい医療環境の中で、厚生省（当時）は地方自治体と共に、1993年から各地にエイズ診療を引き受ける病院としてエイズ治療の拠点病院（以下、拠点病院）の選定を進めた。選定は困難を極め、選定された拠点病院もほとんどが公表されなかった事実は、その頃の厳しい社会情勢を反映しているといえる。

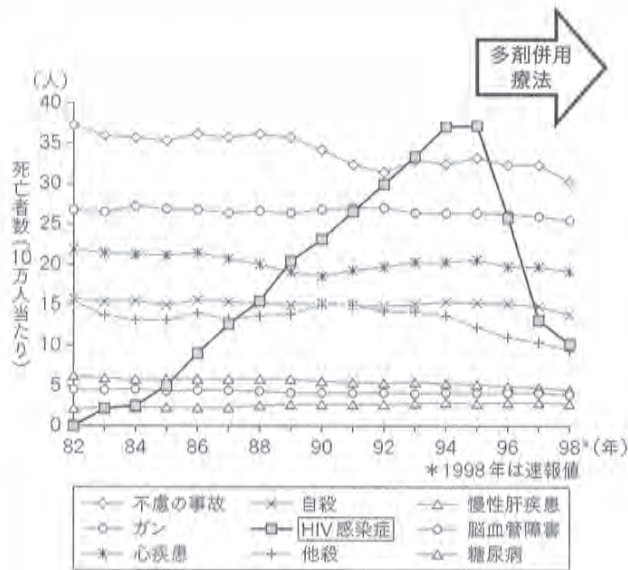
2. 薬害HIV訴訟の和解以降

1989年に大阪と東京でHIV感染血友病患者が、国と製薬メーカーを相手に提訴した「薬害エイズ訴訟」が、1996年3月29日に正式に和解を迎えた⁶⁾。和解に基づく恒久対策の一環として東京の国立国際医療センター（当時）にエイズ治療研究開発センター（AIDS Clinical Center、以下、ACC）が新設され、全国8ブロックに14のエイズ診療におけるブロック拠点病院（以下、ブロック拠点病院）が選定された。こうして現在のHIV医療体制（ACC—ブロック拠点病院—拠点病院）の骨組みが確立された。厚生労働省は、和解に基づき、毎年、原告等と協議を続け、HIV医療体制の整備を続けている。1999年4月にいわゆる感染症新法が施行され、HIV感染症は現在、第5類に分類され報告や対応等が新たに定められ、医療体制を含むエイズ施策は、同法に基づく「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」（エイズ予防指針）が、およそ5年ごとに改定され、実施されている。

Ⅰ HIV感染症治療の現状

1. 抗HIV療法の進歩

HIV感染症の本態は、HIVによるヒトの細胞性免疫機能の進行性の破壊である。HIVは細胞内でHIV自身の3つの酵素（逆転写酵素、インテグラーゼ、プロテアーゼ）の働きによって増殖する。1987年、満屋裕明博士らによって発見された世界初の抗HIV薬であるジドブジン〔(zidovudine: ZDV)、別名アジドチミジン (azidothymidine: AZT)〕が処方薬として承認された。前述の3つの酵素を標的とした阻害薬の開発が進み、1995年ごろに登場したプロテアーゼ阻害薬など3剤の抗HIV薬の併用療法が画期的な治療効果を示し、HIV陽性者の予後を大きく改善



1982年から1998年の米国の25歳～44歳の死因別年間死亡率(10万人当たりの死亡者数)の推移を示した。太い折れ線がHIV感染症/AIDSの死亡を示す。1981年に世界初の報告があったHIV感染症/AIDSによる死亡者数は年々急激に増加し、1994年と1995年は男女を合わせた死亡率の1位となったが、米国では1995年ごろから始まった抗HIV薬の多剤併用療法が著明な臨床効果を示し、数年で5位以下となった。〔米国立健康統計センター(NCHS)のデータより〕

図2 米国の25～44歳の死因別年間死亡率の推移

した(図2)。現在はプロテアーゼ阻害薬に続き登場したインテグラーゼ阻害薬を中心とした治療が標準的となり、1日1錠の配合剤あるいは、2022年5月に承認された注射薬により治療法の幅が広がった。現在の抗HIV療法は優れた治療効果を示し、予後を目覚ましくし、治療を継続することで、性行為による他への感染も防止できることが明らかにされた。これは“Undetectable = untransmittable”(U=U)としてHIVについての新しいメッセージとして、多くの国々のメディアなどで情報発信されている(図3)⁷⁾。実際に、U=Uの情報提供を受けたHIV陽性者では、服薬アドヒアランス、治療効果共に、そうでない群よりも有意に良いことも示されている⁸⁾。なお、わが国では身体障害認定制度の対象疾患にHIVによる免疫機能障害が認定されており、多くのHIV陽性者は更生医療等の医療費助成制度を利用しながら治療を開始・継続している。

2. HIV陽性者の診療状況の変化

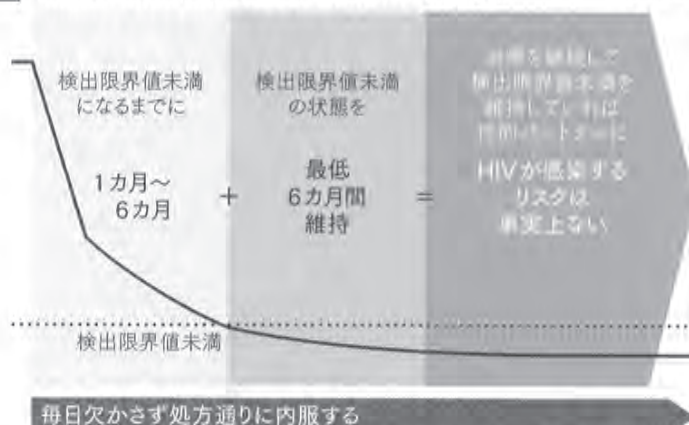
標準的抗HIV療法が確立するまでは、HIV陽性者に発生する日和見感染症やエイズ関連悪性腫瘍の診断・治療が診療の中心であり、生命予後もエイズ発症後平均2年とされ、陽性者の精神・心理的、社会経済的支援の比重も大きかった。抗HIV療法の進歩で、文字通り慢性疾患となった。さらにU=Uが唱えられる現在では、非感染者とほぼ同様なライフスタイルを送れるようになった。米国における

U=U

Undetectable = Untransmittable



[U=U] is the campaign credited with beginning to change public perception of HIV transmissibility. December, 2017



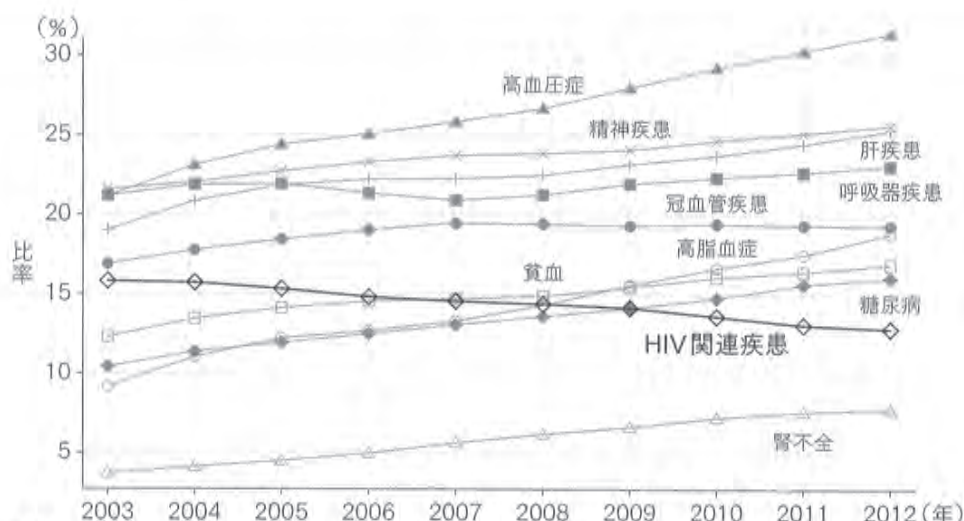
- グラフは研究結果を概説したもので、毎日欠かさず抗HIV薬を処方通りに服薬し続けると、概ね1～6カ月で血中のHIV量が測定限界値（実施された臨床研究では200コピー/mL）未満となる。その状態を6カ月以上継続できたHIV陽性者が大規模臨床研究に参加し、固定のパートナーとのコンドーム不使用の性行為でパートナーは誰も感染していなかったという結果を示している（研究については陽性者とパートナーの両者に説明を行い同意を得て実施された）。
- グラフ上部のU=Uとは、undetectable equals untransmittableの頭文字から取ったキャンペーンで、効果的な抗HIV療法を受け、血液中のHIV量が検出限界値未満（undetectable）に継続的に抑えられているHIV陽性者は性行為により他の人にHIVが感染することはない（untransmittable）ことを表している。また、その結果を米国のワシントンポスト紙が記事にした内容の一部も示した。
- なお、他の性感染症、陽性者との注射針の共有、陽性者の母乳による授乳は感染可能性を否定できないとされている。

図3 U=Uの解説（グラフは文献7より和訳して転載）

HIV陽性者の合併症を見ると、合併症のない陽性者が年々減少し、合併症の推移では高血圧症、高脂血症、糖尿病などの生活習慣病や精神疾患が増加傾向にある（図4）⁹⁾。HIV診療の現場は抗HIV療法に加え、生活習慣病や加齢に伴う認知症や種々の疾患の対応の比重が増えてきている。大阪医療センター（当院）の調査では、およそ20年間で通院患者の中で50歳以上の占める割合が15%から34%に増大した。

I HIV医療体制の現状と拠点病院の役割

ACCはわが国のHIV医療のリーダーとして既存の専門医療と共に先進的HIV診療を行い、欧米と同等のHIV医療を提供する施設とされている。ブロック拠点病院の役割は、診療（全科対応）、臨床研究（治験など）、研修・教育、情報発信の4機能を担い、各地域のHIV診療レベルの向上と維持に努めること、拠点病院



2001～2012年のMedicaid Analytic eXtract (MAX) のHIV有病率の高い14州 (New York, California, Florida, Texas, Maryland, New Jersey, Pennsylvania, Illinois, Georgia, North Carolina, Virginia, Louisiana, Ohio, そしてMassachusetts) であり、米国のおよそ75%に相当する) からデータを抽出した。本図は2003～2012年の10年間における対象者の上位10位の合併症の推移を示す (計5,843,394人・四半期)。

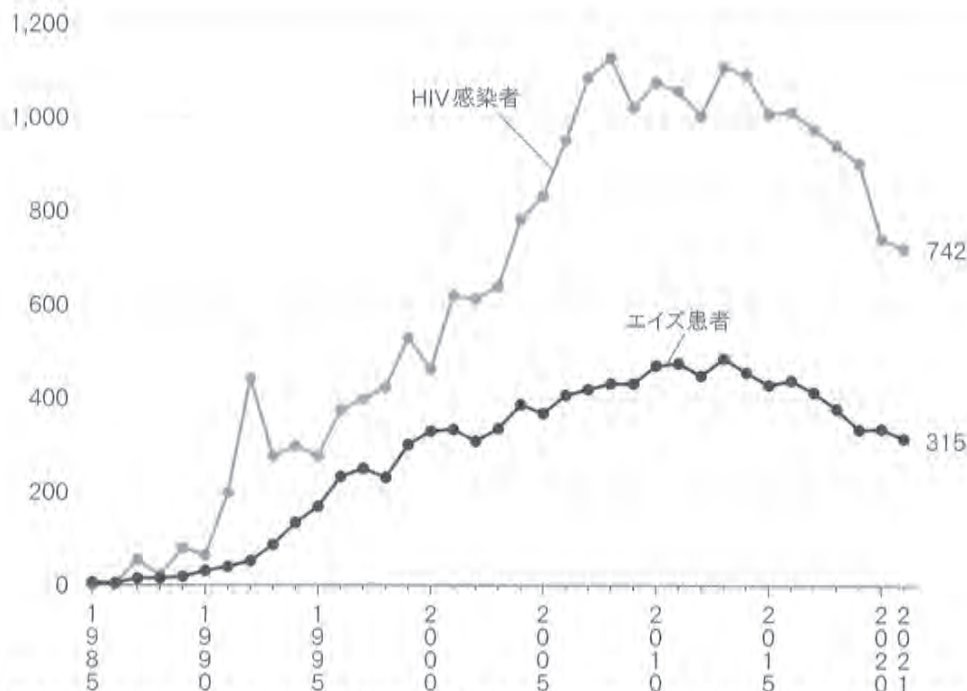
図4 米国におけるHIV陽性者の合併症の推移 (文献9より転載)

の役割は各地域のHIV診療を担うことと位置付けられている。2006年4月には改定エイズ予防指針に基づき、各都道府県に1カ所の中核拠点病院制度が創設され、より手厚い医療を陽性者に提供できる体制が整った。

エイズ動向委員会の報告によれば、2021年の新規HIV感染者が742件、エイズ患者が315件で、両者を合わせると1,057件であり、近年横ばいか減少傾向がうかがえる (図5)¹⁰⁾。ただ、新規報告数に占めるエイズ患者の割合は約20年間あまり変化がなく3割を占めていた。この割合は、エイズ発症前に受検できなかったHIV陽性者の割合とも言え、約20年間約3割が続いており、早期発見が促されているとは言い難い。累積生存患者数は今後も増加を続けると予想され、HIV医療体制の整備は重要である。

今後の展望

1997年にHIV医療体制の骨格が、2006年4月には各都道府県に総合的なエイズ医療体制確保と診療の質向上のため中核拠点病院が整備されるなど、HIV感染症の治療体制は一定の成果を上げてきた。また1997年には、現在の多剤併用療法が日本でも開始され、チーム医療の構築等も加わり、拠点病院等でのエイズを含むHIV診療・ケアの質も向上した。治療の進歩に伴い、HIV陽性者の健



報告の始まった1985年から2020年までの毎年の推移を示した。わが国ではHIV検査で陽性と判明した時に既にエイズを発症していればエイズ患者、まだ発症していなければHIV感染者として保健所を通じて国に報告される。報告後はその後の病状変化でも変更はされない。報告は日本国籍、外国籍両者を含む。血液製剤による感染者は含まれていない。HIV感染者は2008年ごろ、エイズ患者は2011年ごろをピークに緩やかに減少傾向となっている。

図5 わが国の新規HIV感染者・エイズ患者報告数の推移(文献10より転載)

康面は大きく改善・維持されたものの、HIV陽性者の併存する疾病構造の変化や、高齢者の対応など新たな課題が現れ、HIV医療・診療・ケアの体制についても解決されるべき新たな多くの課題が出現している。本項では医療従事者の育成と、地域連携の重要性に焦点を絞って述べる。

1. 若手医療従事者の育成

エイズが初めて報告された1981年から、治療法が登場した1997年くらいまでは、多くの日和見感染症やエイズ関連腫瘍は適切な診断と治療で治癒可能な病態であり医師にとってチャレンジングであるが、ある意味でやりがいもある疾患であった。それに関わることを希望する意欲的な若手医師や、専門的知識とより患者の立場に立ったきめ細やかなケアの提供が必要とされるHIV陽性者の担当を希望するコメディカルも少なくなかった。しかし、HIV/AIDSの治療が目覚ましく進歩した現在、大きく様変わりをした。治療が困難なエイズ症例も減り、多くの陽性者は外来での

定期通院で加療と、合併する生活習慣病などの対応が主となった。そういう医療内容の変化もあってか、HIV感染症/エイズ診療に興味を示す若手医師やコメディカルも少なくなった印象がある。ハンセン病、結核、難病なども同様かもしれないが、HIV診療医など医療従事者の育成は、わが国のHIV医療体制の整備・維持に必要と考える。

2. 地域医療との連携

新規報告数は横ばいあるいは減少傾向になったが、前述のように、HIV陽性者の累積生存者数は増え続けると推定される。これまではエイズなど重症の日和見感染症やエイズ関連悪性腫瘍の診断と治療という急性期の対応が主であり、各地の急性疾患の中核的病院でもあるエイズ拠点病院等は大きな力を発揮したが、現在、それらの頻度は減少し、治療で病状が安定し健康状態の比較的良好なHIV陽性者では、治療の主体は外来での定期的な通院加療に大きく比重が移っている。多くの拠点病院は高度、超高度急性期病院であり、拠点病院と密な連携の下で、血友病C型肝炎ウイルス (hepatitis C virus: HCV) 複合感染者などを除けば、抗HIV療法も含めて地域の医療機関での診療がむしろ望ましいと考える。

| おわりに

HIV感染症の医療体制整備の歴史と現状および将来への現時点での課題と展望を述べた。HIV医療で開発された抗HIV薬は、近年、非感染者の性行為での感染予防に応用され、有効であることが示されている。HIV感染予防は行動変容、コンドーム使用に、化学的予防法を加えることで、新規感染をさらに減少できると予想される。治療の分野では治癒を目指した治療薬の開発や予防あるいは治療的ワクチン開発も進められており、やがて世界から新規のHIV感染をなくすことも夢ではないだろう。

わが国では、いわゆる薬害HIV訴訟と和解によって、HIV医療体制が構築・整備が推進されて来た。和解前には多くの国民にエイズに対する強い偏見・差別があったが、薬害エイズ被害者支援という社会的ムーブメントと裁判での和解は、国民が少なくとも薬害HIV、さらにはHIV感染症/エイズを理解し、受け入れる精神的土壌となり、その後の医療体制の構築がよりスムーズになったといえるだろう。薬害HIV訴訟の和解後はHIV関連報道も減り、国民の意識からHIV感染症/エ

イズが薄れ、本感染症が身近でなくなったように思うが、一方で、毎年1,000人前後の新規感染報告がある。前述のように、今後もHIV感染症の医療体制の整備と維持は必要であり、特に若手医療従事者の育成と拠点病院を中心とした地域連携体制の新たな構築が望まれる。

HIV感染症の拠点病院、検査相談、疫学や啓発に有用なウェブサイト^{11)~14)}も活用されたい。

文献

- 1) 鏡輪眞澄(監), エイズ対策研究会(編): エイズ対策. 東京法規出版, 1995
- 2) 鏡輪眞澄(監), エイズ対策研究会(編): エイズ対策補遺1999. 東京法規出版, 1999
- 3) Alison J Rodger, et al: sexual Activity Without condoms and Risk of HIV Transmission in sero-different couples when the HIV-Positive Partner IS Using suppressive Antiretroviral Therapy. JAMA 316: 171-181, 2016
- 4) Alison Rodger, et al: HIV transmission risk through condomless sex in gay couples with suppressive ART: The PARTNER2 study extended results in gay men. The 22nd AIDS International conference on HIV science, Amsterdam, 23-27 July 2018
- 5) 内閣府: 「HIV感染症・エイズに関する世論調査」の概要. 平成30年3月 <https://survey.gov-online.go.jp/hutai/h29/h29-hiv.pdf> (2022年10月20日閲覧)
- 6) 松本剛: 葉書エイズ国際会議 大阪HIV訴訟弁護団発行資料集. 大阪HIV訴訟弁護団, 1996
- 7) NIAID: 10 Things to Know About HIV Suppression. June 12, 2020 <https://www.niaid.nih.gov/diseases-conditions/10-things-know-about-hiv-suppression> (2022年10月20日閲覧)
- 8) Okoli C, et al: Undetectable equals untransmittable (U=U): awareness and associations with health outcomes among people living with HIV in 25 countries. Sex Transm Infect 97: 18-26, 2021
- 9) Cole MB, et al: Trends in Comorbid Conditions Among Medicaid Enrollees With HIV. Open Forum Infect Dis 6 (4): ofz 124, 2019
- 10) 厚生労働省エイズ動向委員会: 令和3(2021)年エイズ発生動向(概要). <https://api-net.jfap.or.jp/status/japan/data/2021/nenpo/r03gaiyo.pdf> (2022年10月20日閲覧)
- 11) 厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業: 拠点病院診療案内. <https://hiv-hospital.jp> (2022年10月20日閲覧)
- 12) 全国HIV/エイズ・性感染症検査・相談窓口情報サイト: HIV検査相談マップ. <https://www.hivkensa.com> (2022年10月20日閲覧)
- 13) 日本エイズ学会: ホームページ. <https://jaids.jp> (2022年10月20日閲覧)
- 14) エイズ予防情報ネット: ホームページ. <https://api-net.jfap.or.jp> (2022年10月20日閲覧)

エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究

研究分担者 白阪 琢磨 (国立病院機構大阪医療センター 臨床研究センター長)

研究協力者 四本美保子 (東京医科大学臨床検査医学分野 講師)
西浦 博 (京都大学大学院医学研究科 教授)
大北 全俊 (東北大学大学院医学系研究科 准教授)
江口有一郎 (医療法人コメディカル総合研究所 所長)
渡部 健二 (大阪大学大学院医学系研究科 教授)
栗原 健 (大阪医科薬科大学薬学部 特任教授)

研究要旨 わが国のエイズ対策は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき平成 11 年に策定された「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針 (以下、エイズ予防指針という。)」に沿って講じられてきた。同指針は、エイズの発生動向の変化等を踏まえ、3 度の見直しが行われ、直近の改正は平成 30 年 1 月から施行され、改正後のエイズ予防指針に基づき、国と地方の役割分担の下、人権を尊重しつつ、普及啓発及び教育、検査・相談体制の充実、医療の提供などの施策に取り組みられてきた。本研究班は平成 30 年改定の現エイズ予防指針に基づき、陽性者を取り巻く課題等に対する各種施策の効果等を経年的に評価し、一元的に進捗状況を把握し、課題抽出を行い、次回の改定に資することが主な目的である。具体的には「エイズ予防指針の施策実施の評価と課題抽出に関する研究 (研究分担者: 四本美保子)」内に各分野専門家で構成される委員会を設け、課題一覧の作成、課題一覧とこれまでの事業及び研究、各種ガイドラインとの関連性の整理、課題の抽出等の作業を段階的に進める。可能であれば各種課題の解決策の検討を行う。予防指針の改定においても、HIV 陽性者のケアカスケードの推計と将来予測は重要であり、「日本におけるケアカスケードの推定に関する疫学研究 (西浦博)」で実施する。最近、効果に優れた ART によって「U=U」という臨床研究に裏打ちされた新しい考え方が出現し、HIV 感染症のイメージを大きく変えつつあり、倫理的側面からの研究を含め「HIV 領域の倫理的課題に関する研究 (大北全俊)」で実施する。治療によって慢性疾患となり、感染性も実質的に無視出来るまでになっている事を、国民の大半が正しく理解していないことが前回の世論調査で示され、有効な啓発方法の検討を「一般若年層を対象とした有効な啓発方法の開発研究 (江口有一郎)」で行い、有効であれば予防指針に提示する。医療現場でも未だに HIV に対する診療忌避が散見され、医学生や薬学生への卒前・卒後の HIV 教育プログラムの必要性を「医学教育に効果的な HIV 教育プログラムの開発研究 (渡部健二)」あるいは「薬剤師の HIV 感染症専門薬剤師育成プログラムの開発研究 (栗原健)」で検討する。研究成果を基に一般診療医あるいは医学生の卒前卒後教育にも役立つ手引きを作成する。最終的にエイズ施策推進に資する事とする。

研究目的

研究 1 (四本) 本研究では「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針 (以下、エイズ予防指針)」の次回、指針改正に向けて、課題ごとに平成 30 年改正エイズ予防指針に基づく各種施策の進捗状況の把握と現在の課題抽出を行い、次回の改正に資する。研究 2 (西浦) 日本におけるケアカスケードの推定に関する疫学研究で、わが国全体の推定値に関する現状を把握し、特に新型コロナウイルス感染症の流行が拡大した中での診断への影響を定

量化する。研究 3 (大北) 医療従事者等への HIV 陽性者の診療の手引き作成などに資するべく、HIV 対策の倫理的課題を明確化し望ましい取り組みの方向性を提示する。研究 4 (江口) 顕在層は SNS など現実世界と近いメディアに接触し、潜在層は掲示板など匿名性が高いメディアに接触しているのではないかと仮説を検証するため、① HIV 検査を知ることや受けることのきっかけ、② MSM に親和性があるメディアを明らかにする。研究 5 (渡部) 大阪大学医学部で効果的な HIV 教育プログラムを実施

し、医学部生の HIV 関連知識の定着および HIV 診療に対する意識変容を目的とする。研究 6 (奈良) 大学での薬学教育、および卒後の薬剤師養成課程における HIV 感染症の教育プログラムと、その評価方法の開発を目的とする。研究 7 (白阪) 高校生世代に向けた啓発を実施し、高校での授業で利用される、あるいは授業を補完する eラーニングサイトを開発、公開し、エイズ予防指針に示された教育機関等での普及啓発に資する。研究 8 (白阪) 診療所勤務医師の HIV 診療調査を実施し、実態と関心などを知り、今後の HIV 感染症に関する病診連携につき検討する。

研究方法

研究 1 現状について、青少年・MSM、陽性者、予防啓発、検査、臨床、倫理、行政などの各専門家の立場からの意見の収集を行ない、分野毎に評価と課題の洗い出しを行い、関連資料を収集し整理した。研究 2 エイズ予防指針の改正に向け、流行対策の策定支援の基礎となる推定システムを構築するために、エイズ動向委員会の疫学データを基に実施できる推定手法の改善を図った。特に、新型コロナウイルス感染症の流行前と流行中での時間当たりの診断ハザードの変化と、それに伴う全 HIV 感染者中の診断者の割合の変化について統計学的推定を実施した。研究 3 記述倫理的研究 (国内報道記事見出し調査・一般医療者に対する意識調査) 及び規範倫理的研究 (患者医師関係に関する倫理的課題や U=U、enabler に関する文献研究) を行った。研究 4 Web アンケート調査として事前調査と本調査を行った。前者はアンケートモニタの男性全員に事前質問を送信し、回答者から無作為抽出で 10,000 件を抽出して調査を行った。後者は MSM かつ 20～50 歳代の各年代に先着順で 100 名に達するまで回答を募り、その結果の調査を行った。研究 5 大阪大学医学部の 1 年次、4 年次、6 年次を対象とした教育介入研究を行った。授業前後でアンケート調査を行い、HIV に関連する知識の定着および HIV 診療に対する意識の変容を調べた。なお、本研究の倫理審査を受審した。研究 6 昨年度作成した教育プログラムを、全国のエイズ拠点病院と連携薬局に配布し、各施設の教育状況と、教育プログラムについてアンケート調査を実施した。研究協力者の所属施設において、昨年度作成した教育用ツールを利用して教育プログラムを試行した。研究 7 啓発内容、eラーニングサイト開発にあたり高校保健教育教諭にアンケート調査を行い、結果を反映させる。啓発活動においては費用対効果の高い方法、媒

体等を検討し、公開したサイトの情報を盛り込みサイトの広報を合わせて行う。研究 8 大阪府医師会員に大阪府内各医師会を通じてアンケート回答用 WEB フォームを周知し、WEB を通じて各機関から直接回答を得た (令和 4 年 6 月 16 日～同年 7 月 31 日。1 機関は 1 回答まで)。結果を集計し分析した。

(倫理面への配慮)

HIV 陽性者へのアンケート調査などでは、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を遵守する。

研究結果

研究 1 ①基本的な知識の普及啓発として U=U や「コンビネーション予防」の記載、②予防に有効な国内施策を講ずるため諸外国から学ぶことの重要性、③ HIV 治療の進歩による疾患概念の変化に応じた医療体制として、拠点病院中心から、拠点病院と診療所等との地域連携強化へ軸足を移す事などを改正指針に反映すべきとの意見がされた。研究 2 令和 2 年および令和 3 年の年間新規感染者数は 954 人 (95% 信頼区間: 421～1487) と推定された。同様に、1 年あたりの推定診断率はそれぞれにおいて 14.0% (95% 信頼区間: 12.4～15.7) であり、未診断の HIV 感染者数は平成 21 年の約 7600 人をピークに減少傾向にあり、令和 3 年には 4360 人と推定された。全 HIV 感染者のうち 86.6% (AIDS 未発症者に限れば 81.7%) が診断されていると推定された。研究 3 記述倫理的研究のうち一般医師に対する HIV 診療に関する意識調査 (WEB) では約 200 例より HIV 診療及び HIV 感染症に対する意識や態度について回答を得た。規範倫理的研究では、UNAIDS などの国際的ポリシーで人権課題などを enabler と位置付けする意味を明確化した。研究 4 事前調査の回答者 10,000 件のうち MSM の割合は 12.5% であり、MSM 432 名全員が日頃利用する SNS・プラットフォームサービスは LINE、YouTube、Twitter の順で割合が大きかった。性的指向関連の情報の収集や交換のためのアプリ等では、Twitter、9monsters、YouTube がよく利用されていた。9monsters はカミングアウト群で特に利用が高い傾向であった。研究 5 本研究につき倫理審査委員会の承認を得た。「死に至る病気である」などエイズに対する疾患イメージの保有率は一般人に近く、授業により大幅に是正された。HIV に感染するリスクに対する正しい理解が促進され、将来 HIV 診療に関わろうという意識変化が確認された。研究 6 調査は令和 4 年 7-9 月に実施し 60 施設から回答を得た (回収率 60.0%)。HIV 感染症に関する

講義の実施状況は薬学生：43.3%、薬剤師スタッフ：21.7%、今後担当する薬剤師：26.6%であった。教育プログラム使用希望の回答施設は88.3%。教育用ツールが提供されれば90%以上の施設が使用希望の回答があった。研究7 口コミやSNSなど、不確実な噂に左右されやすい10代の若者を対象に、HIV検査普及週間に際し、FM放送を用いHIV/エイズに関するメッセージを、若者に人気の番組前後の時間帯に放送した。eラーニングの内容、伝え方について検討を行った。またシステム改修の検討を行った。研究8 回答は290件であった。HIV感染症の治療効果については、「ある程度理解している」と「あまり理解していない」が同数であった。「術前、もしくは内視鏡等の検査前の感染症の検査」の実施は3割であった。回答者の約8割が、「日常診療で、HIV診療の経験が無い（直近3年間）」との結果であった。全体の約3割が、今後のHIVの診療対応を「可能」あるいは「検討する」と回答した。

考察

研究1 他の研究班の専門家の意見も得られ、改正に向けた前向きで有意義な意見を得た。研究2 いわゆるケアカスケードの最初の90（感染者中の診断者の割合）が未達成である（86.6%）ことが判明した。一因として新型コロナウイルス感染症の流行による保健所等の業務逼迫や検査控えによる診断率低下が推定されるが、日本の新規感染者数の減少傾向は継続していると考えられた。研究3 一般医師に対する調査では、HIV診療に対する積極性や守秘義務など倫理的課題に対する態度との相関変数は、年齢などが析出され、手引き作成で留意すべき点が明らかとなった。またenabler概念は日本の予防指針で、特に人権に対する取り組みの位置付けで検討すべきと考えられた。研究4 「Twitter」はMSM顕在層と潜在層の両方が用いるメディアであった。また「9monsters」を利用しているユーザはカミングアウトの割合が高いことから、9monstersはMSMの顕在層が集まるメディアであった。またMSM潜在層の情報収集先として主にWebコンテンツが考えられた。研究5 本HIV教育プログラムは、HIVに関する啓発活動として大きな成果を挙げ、HIVに対する理解の促進やHIV診療参加への意識変容を導く可能性が示唆された。研究6 薬学生への講義は約半数の施設で行われていた。薬剤師スタッフや今後担当する後任の薬剤師への教育は今後の課題と考えられた。教育プログラムや教育用ツールへの高いニーズがあり、本研究によってHIV感染症診療で重要な服薬支援の均てん化に資すると考えられた。

研究7 啓発メッセージCMの放送期間中エイズ予防財団のYouTube動画の視聴数が上昇したが、メディアを利用した知識伝達の効果の直接的測定は困難であり、指標の検討が必要と考えた。研究8 HIV陽性者の受入を行うには、拠点病院や専門病院との連携体制の構築、各種マニュアル作成や研修会参加を挙げた回答者が多く、更なる取り組みが必要と考えた。

自己評価

1) 達成度について

各研究で進捗状況に差があるが、計画を概ね達成できた。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

研究1 近年の新しい知見に基づいて新たな課題を抽出し、わが国のエイズ対策の根幹を成す予防指針改正に資することは社会的意義が大きい。研究2 得られた推定値はHIV/AIDSの予防に直結する点で理論疫学研究の実装の潜在的可能性が極めて高い。研究3 一般医師対象の本調査を社会学専門の研究者と協働で実施する事によって、科学的により妥当な調査・分析を行なえると考えられ、さらに当該調査は国内外でこれまでにあまり行われておらず独創的かつHIV医療の今後の一般化を見据えて重要な研究と考える。国際的に重視されているEnabler概念を国内に導入する事も重要な研究と考える。研究4 アフターコロナによるインバウンドの再増加を含むライフスタイルの変化をWebの視点から今後推察する上で、貴重な研究である。研究5 大阪大学医学部の医学生が医師となり、どこの医療機関に従事しても、HIV感染者を適切に診療することが出来ると期待される。研究6 大学および卒後の薬剤師養成課程におけるHIV感染症に関する教育プログラムが現在存在しないことから、学術・教育的意義は大きい。薬局薬剤師については厚労省の「患者のための薬局ビジョン」でHIV感染症患者に対する高度薬学管理機能が提言されるなど、達成できれば社会的意義は大きい。研究7 HIV低流行国では感染予防教育の必要性、重要性が軽んじられる恐れがあり、eラーニングシステムを利用した費用対効果の高いHIV感染症予防教育は重要と考える。研究8 医師会での調査は少なく、今後のHIV診療の病誌連携を進める上で、本研究の意義は高い。

3) 今後の展望について

研究1 次年度は「第一 原因の究明」、「第二 発生の予防及びまん延の防止」のうち『検査』、「第

七 施策の評価及び関係機関との連携」などについての議論を予定する。研究2 地域別・年齢群別の推定を実施し各特性の明確化、新型コロナウイルス感染症の流行の影響の定量化、異なるデータを利用し推定の拡充に取り組む。研究3 いずれの研究も論文として公表し、国内の今後の対策に向けた提言として手引き等にまとめる予定である。研究4 急速な変化を遂げる Web による情報発信のトレンドを駆使した HIV 受検啓発を進める。研究5 アンケート回答数を増やすための対策を施し、複数年度で本研究を実施することにより、研究の精度を高めていく。研究6 教育プログラムや教育用ツールに対して高いニーズのあることが明らかになったので、今年度の結果をまとめ、最終年度は薬学生と薬剤師スタッフに対する教育プログラムと、その評価方法の完成を目指す。研究7 新型コロナウイルス感染症の流行により感染症全般に関する正確な情報が必要とされていると考える。対象に応じた効果的な教育・情報提供システムの開発と啓発のさらなる検討が必要である。研究8 各種研修会への参加率も低い現状があり、会員への周知方法を含め対応策を検討し、HIV 診療への不安や疑問点の解消が、行政および医師会等関連団体の役割と考える。

結論

研究1 HIV 陽性者を含む各分野の専門家による議論は重要であり、次年度も引き続き専門家の声を反映させた検討を行う。研究2 診断者割合をモニタリング可能な状態に築くことができた。今後、きめ細やかな検査拡大に伴う疫学的インパクトを評価する疫学的なモデル推定体系を打ち立てていく。研究3 記述倫理的研究としての一般医師を対象とした意識調査は、HIV 診療の一般化に向けて重要な知見を得ることに資するとともに今後より大規模かつ定期的な調査の必要性を示唆するものである。規範倫理的研究の対象とした enabler 概念は、国際的ポリシーと調和のとれた今後の日本のポリシー策定に向け検討を要する重要な概念と考える。研究4 性的指向にまつわる情報収集や情報交換のためによく使うアプリ・ウェブサービスがあるかを自由記述で質問したところ、Twitter、9monsters、YouTube が利用されていた。9monsters とは主に MSM 向けのマッチングサービスであり、特にカミングアウト群で利用が高い傾向があった。研究5 大阪大学医学部学生を対象とした HIV 教育プログラムを実施した。アンケート結果は、意識調査、理解度調査、意識変容調査として重要な示唆に富むものであったが、回答数は十分でなく単年度実施であり結果の解

釈は限定的である。今後も同プログラムを継続して実施することにより、アンケートの分析精度を高める必要がある。研究6 服薬指導等を充実させることで、服薬アドヒアランス低下による治療の失敗を防ぎ、医療費の抑制に寄与し、国内のエイズ対策推進に対して効果が期待できる。研究7 10代の若者を対象に、HIV 検査普及週間に際し、FM 放送を用いた予防啓発を行った。高校生世代に向けた eラーニングシステムに関する情報を収集した。研究8 今回のアンケート調査結果を踏まえ、今後の HIV 診療の病診連携を進めたい。

今年度までの研究成果をまとめ、改正に資する資料作成と提案を行ない、最終年度は残った課題につき検討する。

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

特になし。

研究発表

白阪琢磨

- 1 白阪琢磨：HIV 感染症患者に対する医療体制の現状と展望 公衆衛生 87 (1)：2023年1月
- 2 Yoshihara Y, Kato T, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T. Altered white matter microstructure and neurocognitive function of HIV-infected patients with low nadir CD4. *J Neurovirol.* 2022 Jun; 28(3): 355-366, Epub 2022 Jul 1
- 3 Kagiura F, Matsuyama R, Watanabe D, Tsuchihashi Y, Kanou K, Takahashi T, Matsui Y, Kakehashi M, Sunagawa T, Shirasaka T. Trends in CD4+ cell counts, viral load, treatment, testing history, and sociodemographic characteristics of newly diagnosed HIV patients in Osaka, Japan, from 2003 to 2017: a descriptive study. *J Epidemiol.* 2021 Sep 11. Online ahead of print.

四本美保子

- 1 Ryoko Sekiya, Takashi Muramatsu, Akito Ichiki, Yushi Chikasawa, Masato Bingo, Mihoko Yotsumoto, Takeshi Hagiwara, Kagehiro Amano, Ei Kinai: Young age is a key determinant of body weight gain after switching from tenofovir disoproxil fumarate to tenofovir alafenamide in Japanese people living with HIV. *J Infect Chemother.* in press
- 2 平賀紀行、白阪琢磨、四本美保子、鬼一衣里、原岡正志、小野誠之、エイズ予防指針の提唱する検査・相談体制下で現在認められている課題についての検討。日本性感染症学会第35回学術大会、

北九州国際会議場、2022年12月

- 3 四本美保子、木内英、渡邊秀裕、渡邊大、白阪琢磨、早期治療開始が特に進められている HIV 感染症患者に対する抗 HIV 療法開始までの期間。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、アクトシティ浜松、2022

西浦 博

- 1 Nishiura H. Estimating the incidence and diagnosed proportion of HIV infections in Japan: a statistical modeling study. PeerJ. 2019 Jan 15;7:e6275.

大北全俊

- 1 大北全俊、井上洋士、山口正純、白阪琢磨：Undetectable=Untransmittable (U=U) とは何か：「ゼロ」の論理について、日本エイズ学会誌 22 (1)、pp.19-27、2020
- 2 景山千愛、横田恵子、花井十伍、大北全俊：HIV・AIDS 報道における 1992 年の位置：報道見出しの急増期に着目して、フォーラム現代社会学 21、p3-15、2022

江口有一郎

- 1 Kitajima Y, Takahashi H, Akiyama T, Murayama K, Iwane S, Kuwashiro T, Tanaka K, Kawazoe S, Ono N, Eguchi T, Anzai K, Eguchi Y. Supplementation with branched-chain amino acids ameliorates hypoalbuminemia, prevents sarcopenia, and reduces fat accumulation in the skeletal muscles of patients with liver cirrhosis. J Gastroenterol. 2017 Jul 24. doi: 10.1007/s00535-017-1370-x.

渡部健二

- 1 渡部 健二、河盛 段、木村 公一、和佐 勝史：大阪大学における MD 研究者育成プログラム 10 年の成果、日本生理学雑誌 82、pp.12-16、2020

栞原 健

- 1 栞原健、薬事衛生研究会：薬事関係法規・制度解説 2020-21 年版、薬事日報社、2020 年 4 月 1 日

高校生世代に向けた予防啓発の実践と教材開発の検討

研究代表者	白阪 琢磨 (国立病院機構大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター)
研究協力者	山崎 厚司 (公益財団法人エイズ予防財団) 辻 宏幸 (公益財団法人エイズ予防財団、 国立病院機構大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター)
研究要旨	令和2年度に「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」で行った大阪市民5,665人を対象とした調査によると、最近2年間にHIV/エイズに関する情報に接した者は920人16.2%で、341人37.1%が24歳未満の若者であった。また、接した媒体としては、学校の授業が最も多く256人27.8%であった。これらのことから、多くの高校ではHIV/エイズを含むテーマが授業で取り上げられていることが推察された。そこで、高校の授業を補完し、正しい知識の定着を図るため、高校生世代に向けた啓発を実施するとともに、高校の授業で活用される教材を開発する。 啓発の実践として、FM放送を利用しスポットCMを行った。また、高校生世代向け教材の開発として、HIV/エイズに特化したオンライン学習システム開発の検討を行った。

研究目的

令和2年度に「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」で行った大阪市民5,665人を対象とした調査によると、最近2年間にHIV/エイズに関する情報に接した者は920人16.2%で、341人37.1%が24歳未満の若者であった。また、接した媒体としては、学校の授業が最も多く256人27.8%であった。これらのことから、多くの高校ではHIV/エイズを含むテーマが授業で取り上げられていることが推察された。そこで、高校の授業を補完し、正しい知識の定着を計るため、高校生世代に向けた啓発を実施するとともに、高校の授業で活用される教材を開発し、後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針(平成30年1月18日)に記された「感染に関する正しい知識を普及できるように、学校教育及び社会教育との連携を強化して、対象者に応じた効果的な教育資材の開発等により、具体的な普及啓発活動を支援するように努める」に資することを目的とした。

研究方法

1) 高校生世代に向けた啓発の実践

FM放送を利用し、若年リスナーの多い時間帯にスポットCMとしてHIV/エイズに関する基礎知識や検査情報、啓発メッセージを放送する。

また、HIV感染予防等に関する啓発動画を作成し、YouTubeにて配信する。

2) 高校生世代向け教材の開発

これまでであったような冊子の副教材ではなくオンライン学習システムとするため、eラーニングシステムの構築を行う。また、学習指導要領、教科書、教職員のための指導の手引等資料の記載内容の確認を行う。保健体育科教諭、養護教諭等にアンケート調査を行うなど、協力を仰ぐ。

(倫理面への配慮)

啓発の実施にあたっては、HIV陽性者を含む、目にしたすべての人に不快感を与えない内容とするよう配慮する。

研究結果

1) 高校生世代に向けた啓発の実践

大阪府を放送対象地域とするFM802を利用し、以下の通り啓発を行った。

①スポットCM放送

種類：20秒CM×4タイプ

放送期間：5月25日～6月7日(HIV検査普及週間)

放送本数：25回

内容：

(1)「自分自身のために検査に」

6月1日から7日まではHIV検査普及週間です。HIVの検査は全国の保健所で、無料で受けられます。名前を告げる必要もありません。あなた自身のため、そして大切な人のために、検査は大切です。エイズ予防財団は、HIV/エイズの啓発を推進しています。

(2) 「エイズは不治の病ではない、だから検査に」
エイズって聞いて何を思いますか？エイズは今や不治の病ではありません。HIV ウィルスに感染しても、適切な治療で、これまでと変わらぬ生活を送ることができます。感染は検査でしか分かりません。6月1日から7日までは HIV 検査普及週間です。エイズ予防財団

(3) 「HIV/エイズは他人事ではない だから検査に」
最近すっかり聞かなくなった HIV / エイズですが、日本でも、去年は、およそ 1000 人の感染報告がありました。HIV / エイズは誰もが関係のある感染症です。HIV の検査は全国の保健所で受けることができます。エイズ予防財団は HIV / エイズの啓発を推進しています

(4) 「男女かけあいバージョン」

男：6月1日から7日まで、HIV 検査普及週間って聞いたけど、どうやって検査するの？

女：HIV 検査は、全国の保健所で、ただで受けられるみたいよ。

男：へえ、そうなんだ。知らなかった！

女：検索したら、すぐにわかるから、チェックしよう！

男女：HIV・エイズについて興味を持とう。

エイズ予防財団

②生 CM

放送回数：80 秒 × 1 回

放送日：5月31日（火）8時10分頃

番組：TACTY IN THE MORNING、DJ: 大抜卓人

内容：ここで、エイズ予防財団からのお知らせです。

明日6月1日から7日までは、「HIV 検査普及週間」です。「最近 HIV やエイズという言葉、聞かなくなったな」と思われる方もいるかもしれませんが、日本でも去年は、およそ 1000 人の感染報告があり、世界に目を向けると、年間でおおよそ 150 万人が新たに HIV に感染したと推計されています。このように今なお、HIV / エイズは他人事ではない感染症です。

ただ、恐れる必要はありません。医療の進歩により、HIV に感染していても適切な治療で、健康な状態で生活を続けることができ、エイズ・HIV において死に至ることは大きく減少したと言われています。

HIV に感染したかどうかを知るためには、検査を受けないとわかりません。「検査ってどう受けるの？」と思われかもしれませんが、関西各地の保健所や施設で、無料匿名で受ける事ができます。検査も簡単で、少量の血液を採取して、結果を待つだけです。

今週末には心斎橋で、臨時 HIV 検査も実施さ

れます。日時は6月4日（土）17時から18時30分で、場所は長堀橋駅徒歩1分の、大阪検査相談・啓発・支援センター chotCAST（チョットキャスト）となります。検査結果は採血後、およそ1時間30分でわかります。その他にも、各施設で検査を実施していますので、気になる方は「HIV 検査相談マップ」と検索してみてください。この機会に HIV、エイズについて考えて、行動してみませんか？

以上、エイズ予防財団からのお知らせでした。

2) 高校生世代向け教材の開発

研究期間終了後の運用に備えるため採用した、日本製オープンソースの e ラーニングシステム iroha Board について、デザインや運用方法などについて検討を進めた。具体的には、ランディングページ（サイトの説明、使用法等）の作成、ID、パスワードの付与等について検討した。

エイズ予防財団作成パンフレット「HIV/エイズの基礎知識」を基に、オンライン学習コンテンツの制作にとりかかった。

考 察

メディアを利用した啓発の実施による効果を直接的に測ることは難しい。放送期間中、大阪検査相談・啓発・支援センター chotCast で行った臨時 HIV 検査受検者へのアンケートに、受検理由として「ラジオを聞いて」と回答した者があり、行動を促す一定の効果があったと考えられる。広報活動と検査機会提供の連携が重要であると考えられる。

エイズに対する偏見や差別を解消するためには、学校での学習機会に合わせた啓発が効果的であると考えられる。

結 論

メディアを利用した広報と保健所等における検査機会提供の、よりいっそうの連携が必要である。

HIV・エイズに関する情報に触れる機会は少なく、エイズに対する偏見や差別を解消するためには、学校での学習機会に合わせた啓発が効果的であると考えられ、適切な教材の開発と啓発の継続が必要である。

健康危険情報

該当なし

研究発表

該当なし

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

HIV 感染症への対応等に関するアンケート調査

研究分担者 白阪 琢磨（国立病院機構大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター）

研究協力者 宮川 松剛（大阪府医師会理事）

研究要旨 HIV 感染症の治療はエイズ治療の拠点病院、各都道府県の中核拠点病院、あるいは各ブロックのブロック拠点病院が主に担っている。近年の HIV 感染症の治療の目覚ましい進歩によって、HIV 陽性者の予後は大きく改善し、治療状況の非常に良好な HIV 陽性者では性的接触での感染も無い事が大規模臨床研究で明らかにされ、今の治療が登場した 1996 年頃に HIV 感染症 /AIDS のパラダイムシフトが起きたとされる。治療で AIDS 発症による死亡者が減少し、HIV 陽性者の平均余命が非感染者と大きな差がなくなり、加齢あるいは合併する生活習慣病の対応が強く求められている。累積患者数は増加を続け、拠点病院等の診療を大きく圧迫している現状もあり、地域での病診連携のニーズが高まっている。

今回、大阪府医師会にご協力を戴き、診療所勤務医師を対象に HIV 診療調査を実施し、その実態と関心などを知ることが出来た。本研究結果を今後の HIV 感染症に関する病診連携の検討に資する事としたい。

研究目的

HIV 感染症は治療が進歩し、慢性的対応が可能となってきたにも関わらず、エイズ診療拠点病院での対応が集中している。維持期の一般診療（HIV 治療ではない高血圧や胃炎等の日常的に行われている診療）であっても、地域の医療機関での対応が困難であるとされる場合がある。

本調査は、大阪府内の一般医療機関における HIV 感染症の診療実績や術前検査の実態、今後の受入対応可否等を把握することを目的に実施した。

また直近 3 年間の HIV 診療経験の有無については、回答者の約 2 割で「経験あり」であり、今後の診療については、約 3 割で対応（検討する含む）するとの結果であった。

研究方法

対象者：大阪府医師会員 調査方法：大阪府内医師会を通じてアンケート回答用 WEB（Google）フォームを周知。WEBフォーム上から各機関が直接回答。
調査期間：令和 4 年 6 月 16 日～令和 4 年 7 月 31 日

研究結果

回答数は 290 件であり、回答者の従事職（職種）は、診療所管理者 238 件（82%）、診療所勤務医 16 件（6%）、病院管理者 17 件（6%）、病院勤務医 10 件（3%）、その他 9 件（3%）であった。府内医師会経由で会員宛に広く周知した結果、医師自身の回答が 9 割を超えている。HIV 感染症に関する治療効果の把握状況については、回答者の約半数が「理解している」との回答。術前の検査実施は回答者の約 3 割で実施していることがわかった。

<HIV感染症への対応等に関するアンケート調査>

【調査目的】

HIV感染症は治療が進歩し、慢性的対応が可能となってきたにもかかわらず、エイズ診療拠点病院での対応が集中している。維持期の一般診療（HIV治療ではない高血圧や胃炎等の日常的に行われている診療）であっても、地域の医療機関での対応が困難であるとされる場合がある。

本調査は、大阪府内の一般医療機関におけるHIV感染症の診療実績や術前検査の実態、今後の受入対応可否等を把握することを目的に実施した。

【調査実施者】

大阪府医師会

【調査対象等】

対象者：大阪府医師会員

調査方法：大阪府内医師会を通じてアンケート回答用WEB（Google）フォームを周知。
WEBフォーム上から各機関が直接回答。

調査期間：令和4年6月16日～令和4年7月31日

【調査結果】

回答数は290件であり、回答者の従事職（職種）は、診療所管理者238件（82%）、診療所勤務医16件（6%）、病院管理者17件（6%）、病院勤務医10件（3%）、その他9件（3%）であった。府内医師会経由で会員宛に広く周知した結果、医師自身の回答が9割を超えている。HIV感染症に関する治療効果の把握状況については、回答者の約半数が「理解している」との回答。術前の検査実施は回答者の約3割で実施していることがわかった。

また直近3年間でのHIV診療経験の有無については、回答者の約2割で「経験あり」であり、今後の診療については、約3割で対応（検討する含む）するとの結果であった。

以下、詳細を記載する。

【結果】

1) 回答数等

WEBアンケートの回答件数は290件。回答者の内訳は以下の通りである。

（※その他は、診療所や病院の看護師、事務スタッフ等による回答であった）

診療所管理者	診療所勤務医	病院管理者	病院勤務医	その他※
238	16	17	10	9

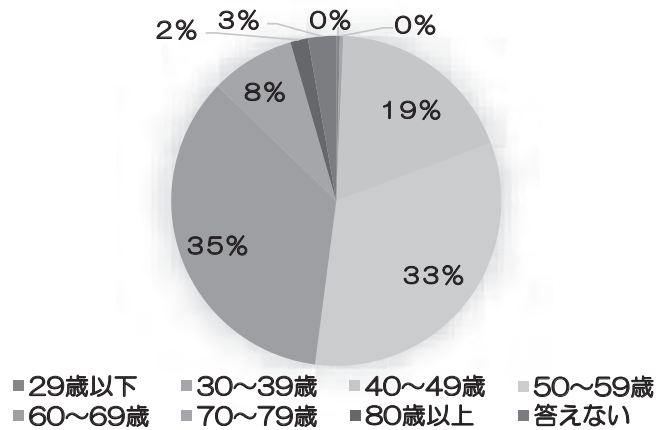
また、290件の回答者を、①年齢別、②医療県別に集計すると下記となった。

回答者のうち、医師以外が代理で回答している場合があり留意が必要であるが、本調査に回答した年代としては、60～69歳代が最も多く、医師の平均年齢とほぼ重なる結果となった。

①年齢別

29歳以下	1
30～39歳	1
40～49歳	54
50～59歳	95
60～69歳	102
70～79歳	24
80歳以上	5
答えない	8

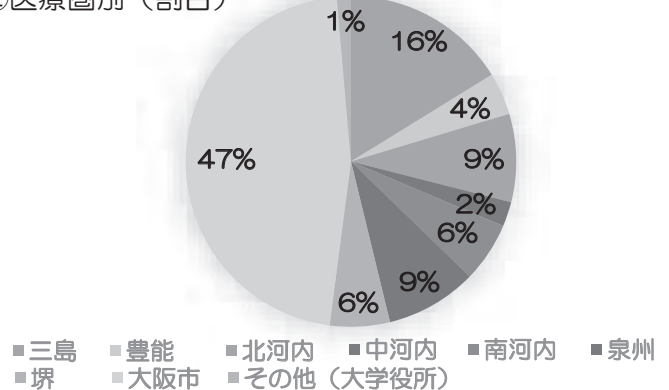
①年齢別（割合）



②医療圏別

三島	47
豊能	12
北河内	25
中河内	7
南河内	17
泉州	26
堺	17
大阪市	135
その他（大学役所）	4

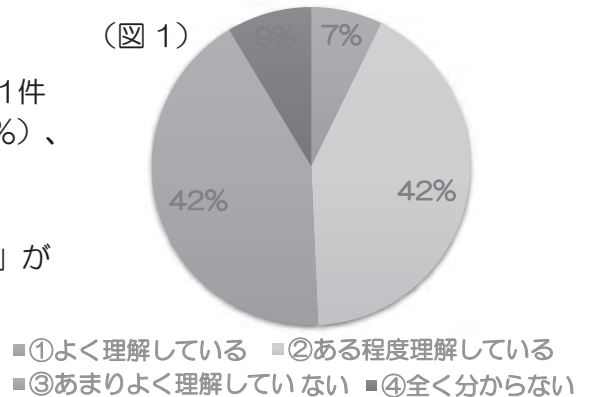
②医療圏別（割合）



2) HIV 感染症の治療効果の把握状況

回答数 290 件のうち、「①よく理解している」が21件（7%）、「②ある程度理解している」が122件（42%）、「③あまりよく理解していない」が122件（42%）、「④全く分からない」が 25 件（9%）。
「ある程度理解している」と「あまり理解していない」が同数との結果になった（図 1）。

（図 1）

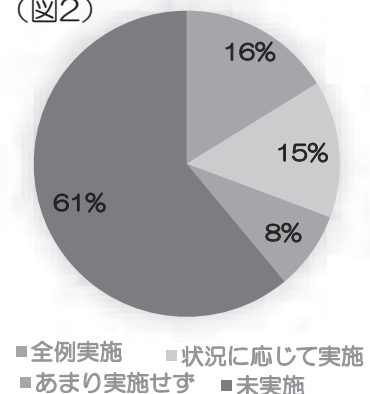


3) 術前、もしくは内視鏡等の検査前の感染症の検査実施状況

回答者の6割が感染症の検査未実施との結果であった。「全例実施」と「状況に応じて実施」を合わせると、回答者の約3割は検査を実施していることが分かった。

（図2）

全例実施	状況に応じて実施	あまり実施せず	未実施
47	42	24	177

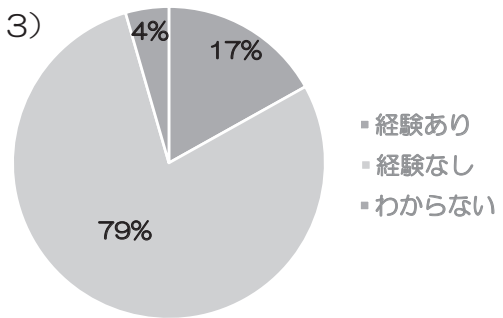


4) HIV の診療経験の有無（直近3年間）

回答者の約8割が日常診療で、HIV 診療の経験が無いとの結果であった(図3)。

経験あり	経験なし	わからない
49	228	13

(図3)

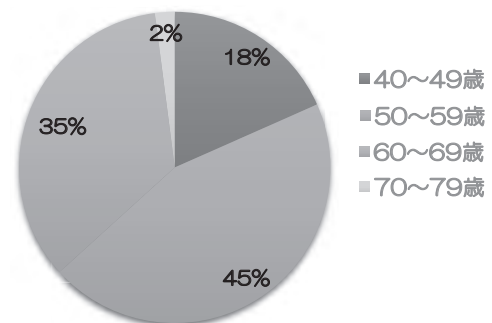


「経験あり」と回答した49件を更に、年齢別と医療圏別で集計すると下記となった。49件の回答者の診療科は、内科系29、小児科1、耳鼻咽喉科4、眼科1、救急科1、整形外科2、消化器外科2、泌尿器科3、皮膚科2、呼吸器外科1、外科2、その他1、であった。内科系以外の診療科においても、日常診療においてHIV 診療の経験があることがわかった。

①年齢

40～49歳	9
50～59歳	22
60～69歳	17
70～79歳	1

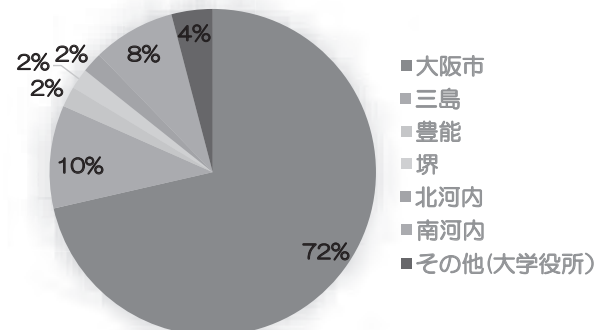
①年齢別（割合）



②医療圏別

大阪市	35
三島	5
豊能	1
堺	1
北河内	1
南河内	4
その他(大学役所)	2

②医療圏別（割合）

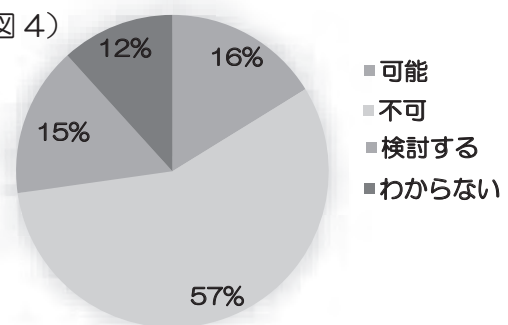


5) 今後のHIVの診療対応の可否

回答者のうち、「可能」あるいは「検討する」が全体の約3割を占めた(図4)。

可能	検討する	不可	わからない
47	45	164	34

(図4)

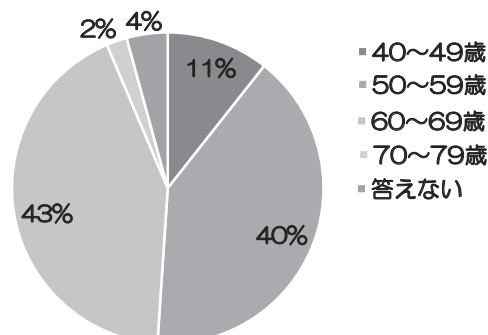


今後対応可能と回答した 47 件を、年代と医療圏別で集計すると下記となった。回答者が主に大阪市内会員であることに留意が必要であるものの、エイズ拠点病院をはじめとする専門医療機関の所在地と重なるものと推察される。

①年代

40～49 歳	5
50～59 歳	19
60～69 歳	20
70～79 歳	1
答えない	2

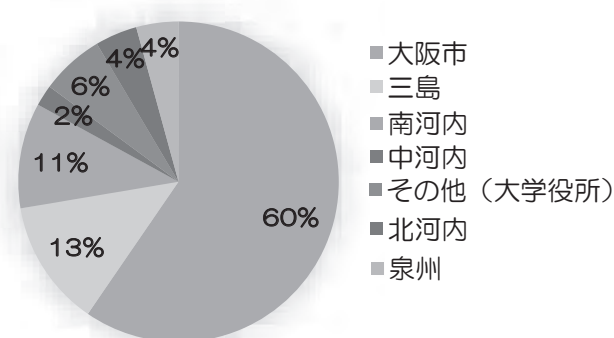
①年代別（割合）



②医療圏別

大阪市	28
三島	6
南河内	5
中河内	1
その他（大学役所）	3
北河内	2
泉州	2

②医療圏別（割合）



6) HIV 陽性者の受入を行う際に、必要な事項等（自由記述）

自由記述での回答を求めたところ、78 件の記載があった。そのうち、主なものを下記に列記する。

- ・ 診療情報提供書、拠点病院や専門病院との連携体制の構築
- ・ 各種マニュアル作成や研修会参加、院内スタッフの知識向上
- ・ 病歴情報、治療歴情報、CD4 量 etc.

この78件の回答のうち、前問「5) 今後の HIV の診療対応の可否」の回答状況を確認すると以下の通りとなり、「可能」あるいは「検討する」が約 6 割を占めた。設問 5 自体で、診療対応が「可能」あるいは「検討する」と答えた会員は 92 名であることから、HIV 陽性を診断した医療機関からの診療情報の提供や感染対策への理解が更に進むことで、地域における HIV 診療所対応を更に広げることにつながるものと推察される。

●自由記述回答者 78 名における今後の HIV の診療対応の可否

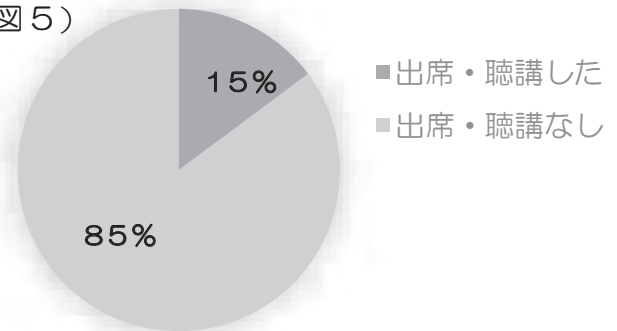
可能	検討する	不可	わからない
31	19	21	7

7) 大阪府医師会主催のHIV研修会に出席、あるいは聴講（web）状況（過去5年）

回答者のうち、出席あるいは聴講経験のある者は全体の約1割であった（図5）。

出席・聴講した	出席・聴講なし
43	247

（図5）



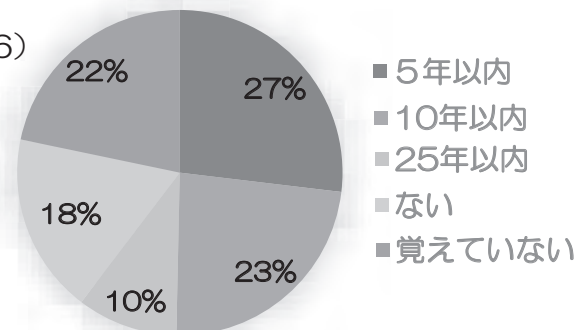
また、この43名のうち、前問「5）今後のHIVの診療対応の可否」の回答状況を確認すると、「対応可能」が18件、「検討する」が9件、「不可」が10件、「わからない」が6件との結果であった。研修会参加経験と診療対応の可否に大きな影響はないと思われる。

8) HIV感染症/AIDSの治療についての情報の入手時期

回答者の約半数が、過去10年以内に治療に関する情報を入手していた。

5年以内	10年以内	25年以内	ない	覚えていない
78	68	29	52	63

（図6）



また、情報の入手時期と、「前問「5）今後のHIVの診療対応の可否」の回答状況の関係を整理すると以下の通りとなった。情報の入手時期が「5年以内」「10年以内」の場合、「受入可能」と「検討」を合わせると、64件（水色セルで表示）であり、情報の入手時期が近いほど、受入対応を前向きに捉える会員が多いと思われる。

情報の入手時期		受入可能	検討	不可	わからない
5年以内	78	28	16	29	5
10年以内	68	6	14	37	11
25年以内	29	4	5	18	2
ない	52	4	3	39	6
覚えていない	63	5	7	41	10

【まとめと考察】

今回のWEB調査では、回答のあった290件の内でHIVの診療経験のあると回答があった医療機関は49件で17%との結果であった。平成27年に実施した会員調査では、調査方法、回答数が異なるものの、診療経験のある医療機関は、14.0%であり、ほぼ同数か若干の微増となっている。

本調査自体の回答者が60～69歳に多く、30～40歳代回答者は、大阪府医師会会員の年齢構成を考えると少なく、同年齢層のHIV診療の関心が他年齢層よりも低いと考えられ、今後の研修・広報等を再度検討する必要がある。

また、HIV陽性者の受入を行う際に必要な事項等に関しては、拠点病院や専門病院との連携体制の構築、各種マニュアル作成や研修会参加を挙げた回答者が多かった。過去の調査では、HIV陽性者を受け入れることが難しいとする理由として、「HIV陽性者への対応手順が整理されていない」「診療中に急変した際のバックアップ体制が得られるのか心配」など、医療機関の体制が整っていないことが上位を占めており、現在も同様の現状と推察される。回答者の約半数が、過去10年以内に治療に関する情報を入手していたが、本会の各種研修会への参加率も低い現状が明らかとなり、周知方法を含め対応策を検討するとともに、不安や疑問点の解消が、行政および医師会等関連団体の役割と考える。

考 察

今回のWEB調査では、回答のあった290件の内でHIVの診療経験のあると回答があった医療機関は49件で17%との結果であった。平成27年に実施した会員調査では、調査方法、回答数が異なるものの、診療経験のある医療機関は、14.0%であり、ほぼ同数か若干の微増となっている。

本調査自体の回答者が60～69歳に多く、30～40歳代回答者は、大阪府医師会会員の年齢構成を考えると少なく、同年齢層のHIV診療の関心が他年齢層よりも低いと考えられ、今後の研修・広報等を再度検討する必要がある。

また、HIV陽性者の受入を行う際に必要な事項等に関しては、拠点病院や専門病院との連携体制の構築、各種マニュアル作成や研修会参加を挙げた回答者が多かった。過去の調査では、HIV陽性者を受け入れることが難しいとする理由として、「HIV陽性者への対応手順が整理されていない」「診療中に急変した際のバックアップ体制が得られるのか心配」など、医療機関の体制が整っていないことが上位を占めており、現在も同様の現状と推察される。

結 論

大阪府内医師会を通じて周知しWEBでのアンケートを実施した。以前の回答では、HIV陽性者を受け入れることが難しいとする理由として医療機関の体制が整っていないことが上位を占めており、現在も同様の現状と推察された。今後は、不安や疑問点の解消が、行政および医師会等関連団体の役割と考える。

健康危険情報

該当なし

研究発表

該当なし

知的財産権の出願・取得状況（予定を含む）

該当なし

精神科

田宮裕子

当科の主な業務は、精神科身体合併症病棟入院中の方への対応、コンサルテーション・リエゾン、専門外来などである。精神科身体合併症病棟に入院になる場合は、当院総合救命救急センターを経由しての入院となるため、重篤な身体合併症のある症例がほとんどである。近年では自殺企図による多発外傷後当科に転科になる症例も多く、自殺企図後の精神状態を適切に評価し再度危険な行為を行わないように援助することは精神科医の重要な役目となっている。日々多くの自殺企図患者に対応しており、自殺企図に至る要因を分析し再企図予防に有効な因子などについて調査研究を行っていきたいと考えている。

一般診療科入院患者の不眠、気持ちの落ち込み、せん妄などの精神症状に対応するコンサルテーション・リエゾンも総合病院で働く精神科医にとっては重要な業務である。高齢化に伴い、入院後せん妄を呈する患者は増えている。実際今年度のリエゾン件数は 635 件となっており、年々他診療科からの依頼件数は増えている。せん妄を発症することで合併症のリスクも高まり、臥床期間も長期化するため、認知機能の低下や下肢の筋力低下をきたし ADL の低下を招くこととなる。特に高齢者では手術中の麻酔による睡眠覚醒リズムの障害が術後せん妄を惹起しやすいと考えられており、術後せん妄の予防することが重要である。そのためせん妄ハイリスクにある患者に対しては、術前からせん妄評価を行うようにしている。

専門外来として摂食障害外来と物忘れ外来を開設している。摂食障害の外来治療では改善しない場合は、短期間の教育入院を実施している。教育入院では、生理的に必要な栄養を摂取できるようになることを目的にしたプログラムである。栄養士と協働で行う栄養療法に加え、認知の偏りを是正するための認知行動療法や適度な運動習慣を獲得するための運動療法などを組み合わせた多職種によるチーム医療を実践している。摂食障害は精神疾患の中でも特に死亡率が高く、慢性化することでさらに治療が奏功しにくくなるため、早期に治療介入し慢性化を防ぐ必要がある。当科で開設している教育入院では早期に食行動異常を改善させることで、慢性化を防ぐための一助となっていると考える。

物忘れ外来では、MRI や SPECT などによる画像診断に加え、認知機能検査にて認知機能の評価を行っている。認知症の診断および認知機能の評価を行うことを目的とした外来であり、診断が確定し治療が決まれば、かかりつけ医を紹介しており、継続診療は行っていない。

近年総合病院での精神科の役割は多岐にわたっており、コンサルテーション・リエゾン、専門外来をさらに充実させ、地域医療に貢献できるよう努めていきたいと考えている。

【2022 年度 研究発表業績】

B-3

田宮裕子：摂食障害の理解と支援。第 25 回日本臨床救急医学会、大阪、2022 年 5 月 25 日

B-5

田宮裕子：コミュニケーション。大阪医療センター緩和ケア研修会、大阪、2022 年 10 月 15 日

B-8

田宮裕子：精神医学総論。大阪医療センター附属看護学校講演、大阪、2022 年 10 月 6 日

田宮裕子：統合失調症の症状・疫学・成因。大阪医療センター附属看護学校講演、大阪、2022 年 10 月 13 日

田宮裕子：生理的障害、身体的要因に関連した行動症候群、パーソナリティ障害。大阪医療センター附属看護学校講演、大阪、2022 年 10 月 20 日

梅田寿美代：気分障害。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2022 年 10 月 27 日

梅田寿美代：神経症状障害、ストレス関連障害、身体表現性障害、心身症。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2022 年 11 月 10 日

南 泰成：器質性精神障害。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2023 年 1 月 25 日

南 泰成：てんかん、神経発達障害群。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2023 年 1 月 26 日

消化器内科

阪森亮太郎

消化器内科は、①肝疾患、②内視鏡治療、③消化器癌に対する薬物治療、④炎症性腸疾患、⑤胆膵疾患を中心に診療しており、論文発表や学会発表などもこれらの領域の Clinical Question を元にしたテーマを扱っています。

- ① 肝疾患：B 型肝炎や C 型肝炎などのウイルス性肝炎について、当科では長年蓄積された経験を踏まえ、積極的に新規薬剤を導入し、その成果を国内のみならず海外の学会・学術誌に情報発信しています。また国立病院機構ネットワーク共同研究の主任研究者として B 型肝炎に対する抗ウイルス薬（核酸アナログ製剤）の治療成績や脂肪性肝疾患の臨床データをとりまとめています。肝癌に対する穿刺治療の困難症例にも対応し、若手医師の技術指導にも熱心に取り組んでいます。
- ② 内視鏡治療：早期胃癌、早期大腸癌、表在食道癌の内視鏡治療に力を入れ、診療レベルの向上を図ってきました。治療では ESD、Bipolar EMR などの技術を駆使し低侵襲でより安全な治療を探究し、診断では酢酸を用いた大腸腫瘍診断を開発し、国内外に発信しています。企業とも連携しハンズオンなど駆使し、若手医師の技術指導にも取り組んでいます。
- ③ 消化器癌に対する薬物治療：癌薬物療法は日々進歩しており、新規薬剤を積極的に取り入れています。また遺伝子解析を用いた個別化治療を目指し、エビデンスに基づいた診療を行うとともに、その成績の発信に取り組んでいます。
- ④ 炎症性腸疾患：潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患に対して生物学的製剤を含む新規薬剤の導入や臨床試験に参加し、適切な治療選択を追求し、その成果を報告しています。
- ⑤ 胆膵疾患：胆道癌や膵癌に対して薬物治療とともに内視鏡処置や超音波処置にも対応しており、実施件数は増加傾向です。また悪性疾患に限らず、緊急処置を積極的に受け入れています。

上記の他にも、臨床的に稀な症例や貴重な経験症例の報告をしています。特に症例報告は専修医/専攻医・研修医の初めての学会発表の場として、消化器内科をあげて指導に力を入れています。今後も、診療・教育とともに臨床研究の成果を国内外に発信していきたいと思えます。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Myojin Y, Hikita H, Tahata Y, Doi A, Kato S, Sasaki Y, Shirai K, Sakane S, Yamada R, Kodama T, Hagiwara H, Imai Y, Hiramatsu N, Tamura S, Yamamoto K, Ohkawa K, Hijioka T, Fukui H, Doi Y, Yamada Y, Yakushijin T, Mita E, Sakamori R, Tatsumi T, Takehara T. Serum growth differentiation factor 15 predicts hepatocellular carcinoma occurrence after hepatitis C virus elimination. *Aliment Pharmacol Ther.* 2022 Feb;55(4):422-433. 2022 年 2 月

Yamada T, Kuwai T, Sasaki Y, Sakakibara Y, Uraoka T, Kato M, Watanabe N, Kimura T, Kada A, Saito AM, Harada N. Potential for replacing warfarin with a direct oral anticoagulant for endoscopic mucosal resection in the colorectum: A multicenter, open-label, randomized controlled trial. *DEN open*. 2022 Feb 21;2(1):e102. 2022 年 2 月

Tanabe G, Yamamoto S, Takeuchi Y, Mita E. Salvage underwater endoscopic mucosal resection for recurrent gastric cancer after endoscopic submucosal dissection. *Endoscopy*. 2022 Apr 25. 2022 年 4 月

Murai H, Kodama T, Maesaka K, Tange S, Motooka D, Suzuki Y, Shigematsu Y, Inamura K, Mise Y, Saiura A, Ono Y, Takahashi Y, Kawasaki Y, Iino S, Kobayashi S, Idogawa M, Tokino T, Hashidate-Yoshida T, Shindou H, Miyazaki M, Imai Y, Tanaka S, Mita E, Ohkawa K, Hikita H, Sakamori R, Tatsumi T, Eguchi H, Morii E, Takehara T. Multiomics identifies the link between intratumor steatosis and the exhausted tumor immune microenvironment in hepatocellular carcinoma. *Hepatology*. 2022 May 14. 2022 年 5 月

Shinkai K, Sakamori R, Yamada R, Tahata Y, Nozaki Y, Matsumoto K, Tawara S, Fukuda K, Yoshida Y, Tanaka S, Ito T, Doi Y, Iio S, Sakakibara M, Nakanishi F, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Prognostic impact of worsening of esophageal varices after balloon-occluded retrograde transvenous obliteration. *J Gastroenterol Hepatol*. 2022 Jun;37(6):1148-1155. 2022 年 6 月

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Miyazaki M, Mita E, Yamamoto K, Ohkawa K, Kaneko A, Ito T, Doi Y, Yakushijin T, Hijioka T, Fukui H, Imanaka K, Yoshida Y, Yamada Y, Tatsumi T, Takehara T. Risk of hepatocellular carcinoma after sustained virologic response in hepatitis C virus patients without advanced liver fibrosis. *Hepatol Res*. 2022 Jun 24. 2022 年 6 月

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Doi A, Tahata Y, Miyazaki M, Ohkawa K, Mita E, Iio S, Nozaki Y, Yakushijin T, Imai Y, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Comparison of atezolizumab plus bevacizumab and lenvatinib in terms of efficacy and safety as primary systemic chemotherapy for hepatocellular carcinoma. *Hepatol Res*. 2022 Jul;52(7):630-640. 2022 年 7 月

Shirai K, Hikita H, Sakane S, Narumi R, Adachi J, Doi A, Tanaka S, Tahata Y, Yamada R, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Mita E, Tomonaga T, Takehara T. Serum amyloid P component and pro-platelet basic protein in extracellular vesicles or serum are novel markers of liver fibrosis in chronic hepatitis C patients. *PLoS One*. 2022 Jul 7;17(7):e0271020. 2022 年 7 月

Matsumae T, Kodama T, Myojin Y, Maesaka K, Sakamori R, Takuwa A, Oku K, Motooka D, Sawai Y, Oshita M, Nakabori T, Ohkawa K, Miyazaki M, Tanaka S, Mita E, Tawara S,

Yakushijin T, Nozaki Y, Hagiwara H, Tahata Y, Yamada R, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Circulating Cell-Free DNA Profiling Predicts the Therapeutic Outcome in Advanced Hepatocellular Carcinoma Patients Treated with Combination Immunotherapy. *Cancers (Basel)*. 2022 Jul 11;14(14):3367. 2022 年 7 月

Yamamoto S, Takeuchi Y, Uedo N, Kawakami Y, Hayata N, Mita E. Underwater endoscopic mucosal resection for gastric neoplasms. *Endosc Int Open*. 2022 Aug 15;10(8):E1155-E1158. 2022 年 8 月

Mita E, Liu LJ, Shing D, Force L, Aoki K, Nakamoto D, Ishizaki A, Konishi H, Mizutani H, Ng LJ. Real-world Safety and Effectiveness of 24-week Sofosbuvir and Ribavirin Treatment in Patients Infected with Rare Chronic Hepatitis C Virus Genotypes 3, 4, 5, or 6 in Japan. *Intern Med*. 2022 Aug 30. 2022 年 8 月

Hino K, Nishina T, Kajiwara T, Bando H, Nakamura M, Kadowaki S, Minashi K, Yuki S, Ohta T, Hara H, Mizukami T, Moriwaki T, Ohtsubo K, Komoda M, Mitani S, Nagashima F, Kato K, Yamada T, Hasegawa H, Yamazaki K, Yoshino T, Hyodo I. Association of ERBB2 Copy Number and Gene Coalterations With Trastuzumab Efficacy and Resistance in Human Epidermal Growth Factor Receptor 2-Positive Esophagogastric and Gastric Cancer. *JCO Precis Oncol*. 2022 Aug;6:e2200135. 2022 年 8 月

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Miyazaki M, Mita E, Yamamoto K, Ohkawa K, Kaneko A, Ito T, Doi Y, Yakushijin T, Hijioka T, Fukui H, Imanaka K, Yoshida Y, Yamada Y, Tatsumi T, Takehara T. Risk of hepatocellular carcinoma after sustained virologic response in hepatitis C virus patients without advanced liver fibrosis. *Hepatol Res*. 2022 Oct;52(10):824-832. 2022 年 10 月

Iwamoto H, Niizeki T, Nagamatsu H, Ueshima K, Tani J, Kuzuya T, Kasai K, Kooka Y, Hiraoka A, Sugimoto R, Yonezawa T, Tanaka S, Deguchi A, Shimose S, Shirono T, Sakai M, Suzuki H, Moriyama E, Koga H, Torimura T, Kawaguchi T, New Fp Study Group, Kurume Liver Cancer Study Group Of Japan. The Clinical Impact of Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy New-FP for Hepatocellular Carcinoma with Preserved Liver Function. *Cancers (Basel)*. 2022 Oct 5;14(19):4873. 2022 年 10 月

Kawakami T, Mizusawa J, Hasegawa H, Imazeki H, Kano K, Sato Y, Iwasa S, Takiguchi S, Kurokawa Y, Doki Y, Boku N, Yoshikawa T, Terashima M. Usefulness of an S-1 dosage formula: an exploratory analysis of randomized clinical trial (JCOG1001). *Gastric Cancer*. 2022 Nov;25(6):1073-1081. 2022 年 11 月

Takigawa A, Sakamori R, Tahata Y, Yoshioka T, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Yakushijin T, Ohkawa K, Hiramatsu N, Mita E, Hagiwara H, Ito T, Imai Y, Tatsumi T, Takehara T. Prediction Model for Intrahepatic Distant Recurrence After Radiofrequency Ablation for Primary Hepatocellular Carcinoma 2 cm or Smaller. *Dig Dis Sci*. 2022

Dec;67(12):5704-5711. 2022 年 12 月

Shirai K, Hikita H, Sakamori R, Doi A, Tahata Y, Sakane S, Kamada Y, Murai K, Nishio A, Yamada R, Kodama T, Nozaki Y, Kakita N, Ishida H, Nakanishi F, Morishita N, Imanaka K, Sakakibara M, Tatsumi T, Miyoshi E, Takehara T. Fucosylated haptoglobin is a novel predictive marker of hepatocellular carcinoma after hepatitis C virus elimination in patients with advanced liver fibrosis. *PLoS One*. 2022 Dec 21;17(12):e0279416. 2022 年 12 月

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Tahata Y, Imai Y, Ohkawa K, Miyazaki M, Mita E, Ito T, Hagiwara H, Yakushijin T, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Hyperprogressive disease in patients with unresectable hepatocellular carcinoma receiving atezolizumab plus bevacizumab therapy. *Hepatol Res*. 2022 Mar;52(3):298-307. doi: 10.1111/hepr.13741. Epub 2021 Dec 28. 2022 年 12 月

Yamamoto S, Parra-Blanco A. Underwater endoloop-assisted endoscopic resection for colorectal pedunculated polyps. *Endoscopy*. 2022 Dec;54(S 02):E835-E836. doi: 10.1055/a-1824-5056. Epub 2022 May 13. 2022 年 12 月

Tahata Y, Sakamori R, Maesaka K, Doi A, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Miyazaki M, Nozaki Y, Kaneko A, Oshita M, Tanaka S, Imanaka K, Hiramatsu N, Morishita N, Ohkawa K, Yakushijin T, Sakakibara M, Iio S, Doi Y, Tatsumi T, And, Takehara T. Effect of sofosbuvir and velpatasvir therapy on clinical outcome in hepatitis C virus patients with decompensated cirrhosis. *Hepatol Res*. 2022 Dec 12. 2022 年 12 月

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Hagiwara H, Oshita M, Imai Y, Hiramatsu N, Mita E, Kaneko A, Miyazaki M, Ohkawa K, Hijioka T, Fukui H, Ito T, Yamamoto K, Doi Y, Yoshida Y, Yamada Y, Yakushijin T, Tatsumi T, Takehara T; Osaka Liver Forum. Improved Liver Function After Sustained Virologic Response Enhanced Prognosis in Hepatitis C with Compensated Advanced Liver Fibrosis. *Dig Dis Sci*. 2022 Dec 16. 2022 年 12 月

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Suzuki Y, Matsumoto T, Terazawa T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Naito A, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y. TRESBIEN (OGSG 2101): encorafenib, binimetinib and cetuximab for early recurrent stage II/III BRAF V600E-mutated colorectal cancer. *Future Oncol*. 2022 Dec 8. 2022 年 12 月

Harada S, Sakakibara Y, Ishida H, Mori K, Mita E. Early Gastric Cancer Arising From Hyperplastic Polyps After Argon Plasma Coagulation for Gastric Vascular Ectasia. *ACG Case Rep J*. 2023 Jan 13;10(1):e00953. 2023 年 1 月

Yamamoto S, Ishida H, Mita E. Purple haze: a useful sign for detecting gastric intestinal metaplasia. *Gastrointest Endosc*. 2023 Jan 12. S0016-5107(23)00022-6. 2023 年 1 月

Matsumae T, Kodama T, Tahata Y, Myojin Y, Doi A, Nishio A, Yamada R, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Morishita N, Ohkawa K, Hijioka T, Sakakibara M, Doi Y, Kakita N, Yakushijin T, Sakamori R, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Thrombospondin-2 as a Predictive Biomarker for Hepatocellular Carcinoma after Hepatitis C Virus Elimination by Direct-Acting Antiviral. *Cancers (Basel)*. 2023 Jan 11;15(2):463. 2023 年 1 月

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Doi A, Tahata Y, Ohkawa K, Oshita M, Miyazaki M, Yakushijin T, Nozaki Y, Matsumoto K, Tanaka S, Kaneko A, Iio S, Nawa T, Yamada Y, Morishita N, Usui T, Hiramatsu N, Doi Y, Sakakibara M, Imanaka K, Yoshida Y, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Pretreatment with antibiotics is associated with reduced therapeutic response to atezolizumab plus bevacizumab in patients with hepatocellular carcinoma. *PLoS One*. 2023 Feb 7;18(2):e0281459. 2023 年 2 月

Umemoto K, Sunakawa Y, Ueno M, Furukawa M, Mizuno N, Sudo K, Kawamoto Y, Kajiwara T, Ohtsubo K, Okano N, Matsushashi N, Itoh S, Matsumoto T, Shimizu S, Otsuru T, Hasegawa H, Okuyama H, Ohama H, Moriwaki T, Ohta T, Odegaard JI, Nakamura Y, Bando H, Yoshino T, Ikeda M, Morizane C. Clinical significance of circulating-tumour DNA analysis by metastatic sites in pancreatic cancer. *Br J Cancer*. 2023 Feb 13. 2023 年 2 月

Yamamoto S, Parra-Blanco A. Underwater clipping in the colon. *Endoscopy*. 2023 Feb;55 (S 01):E422-E423. 2023 年 2 月

A-3

藤井英樹、田中聡司、山田涼子、野村貴子、恵荘裕嗣、石井隆道、飯島尋子：日本肝臓学会キャリア支援・ダイバーシティ推進委員西部会ワーキンググループ：学会・家事・SNSに関するアンケート調査結果 -肝臓学会会員 285 名の回答-。「肝臓」63 (6) P.259-267、2022 年 3 月

高橋実佑、田中聡司、笠倉至言、渡邊和具、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、川端将生、津室悠、西村佑子、松島健祐、阿部友太朗、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、山本司郎、石田永、山上宏、三田英治：肝細胞癌の多発肺転移に対してアテゾリズマブ・ベバシズマブ併用療法を導入し、ギラン・バレー症候群を来した一例。「肝臓」 2022 年 12 月

A-6

阿部友太朗：肝左葉ドーム下心臓近傍の肝細胞癌に対して arfa RF ABLATION SYSTEM を使用し RFA を行った症例。Arfa Case Report. 1-4. 2023 年 2 月

B-1

Yamamoto S : BLI, LCI, and CADEYE. New technology into your daily practice. GIHep Singapore 2022 Tea Break Symposium. 2022 年 7 月 15 日

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Miyazaki M, Mita E, Ohkawa K, Kaneko A, Doi Y, Yakushijin T, Hijioka T, Imanaka K, Yoshida Y, Yamada Y, Tatsumi T and Takehara T : RISK FACTOR OF HEPATOCELLULAR CARCINOMA OCCURRENCE AFTER SUSTAINED VIROLOGIC RESPONSE IN HEPATITIS C VIRUS PATIENTS WITHOUT ADVANCED LIVER FIBROSIS. AASLD The Liver Meeting, Oral 42, Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

B-2

Yamamoto S, Ishida H, Mita E. Acetic acid with NBI/BLI for pit pattern diagnosis of the colorectal polyps. ESGE Days2022, Poster, Prague, 2022 年 4 月 28 日-30 日

Kawakami Y, Yamamoto S, Takeuchi Y, Hayata N, Uedo N. Underwater endoscopic mucosal resection for treating gastric neoplasms. ESGE Days2022, Poster, Prague, 2022 年 4 月 28 日-30 日

Maesaka K, Sakamori R, Tahata Y, Doi A, Miyazaki M, Ohkawa K, Tanaka S, Iio S, Nozaki Y, Yakushijin T, Oshita M, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T : Comparison of Atezolizumab Plus Bevacizumab and Lenvatinib in Terms of Efficacy and Safety as Primary Systemic Chemotherapy for Hepatocellular Carcinoma、APASL Oncology 2022、Poster Free Papers、Kagawa, 2022 年 9 月 2 日

Sakamori R : Mechanism of HCC, Chair、APASL Oncology 2022、Poster Free Papers、Kagawa, 2022 年 9 月 2 日

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Matsumoto T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, T. Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y. TRESBIEN (OGSG 2101): Encorafenib, binimetinib and cetuximab for early relapse stage II/III BRAF V600E-mutated CRC. Paris ESMO Congress 2022, poster, Paris, France, 2022 年 9 月 10 日

Hamada T, Sakakibara Y, Kuwai T, Kusunoki R, Mannami T, Wakatsuki T, Toyokawa T, Katsushima S, Esaka N, Kanda A, Shimada M, Kuramochi M, Hamada S, Fujii H, Kagaya T, Watanabe N, Sasaki Y, Uraoka T, Mabe K, Kubo K, Kato M, Mita E, Harada N : Efficacy and Safety of Continuous Intravenous Midazolam Infusion and Pethidine Hydrochloride in Double-Balloon Small Intestine Endoscopy: A Multicentre Randomised Controlled Trial、UEGW2022, Poster, Wien, 2022 年 10 月 8-11 日

Toyokawa T, Sakakibara Y, Mita E, Takahashi Y, Kubo K, Mabe K, Watanabe N, Hamada H, Kusunoki R, Kuwai T, Wakatsuki T, Mannami T, Fujimoto A, Uraoka T, Hayashi T,

Esaka N, Katsushima S, Kanda A, Takazoe A, Saito H, Shimada M, Kagaya T, Sasaki Y, Fujii H, Uehara S, Ara M, Bunpitsu T, Masuda E, Kato M, Nakazuru S, Harada N : Usefulness of enzymatic cleaning in a thermostatic chamber for endoscope cleaning: A multicenter prospective study. UEGW2022、Poster、Wien, 2022 年 10 月 8-11 日

Shirai K, Hikita H, Sakane S, Narumi R, Adachi J, Doi A, Tanaka S, Tahata Y, Yamada R, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Mita E, Tomonaga T and Takehara T : SERUM AMYLOID P COMPONENT AND PRO-PLATELET BASIC PROTEIN IN EXTRACELLULAR VESICLES OR SERUM ARE NOVEL MARKERS OF LIVER FIBROSIS. AASLD The Liver Meeting, Poster 1263, Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

Shinkai K, Sakamori R, Yamada R, Tahata Y, Nozaki Y, Matsumoto K, Tawara S, Yoshida Y, Tanaka S, Doi Y, Iio S, Sakakibara M, Nakanishi F, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T and Takehara T : IMPROVEMENT OF HEPATIC RESERVE AFTER BALLOON-OCCLUDED RETROGRADE TRANSVENOUS OBLITERATION. AASLD The Liver Meeting, Poster 3605 Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

Maesaka K Sakamori R, Tahata Y, Doi A, Miyazaki M, Ohkawa K, Mita E, Iio S, Nozaki Y, Yakushijin T, Oshita M, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T and Takehara T : COMPARISON OF ATEZOLIZUMAB PLUS BEVACIZUMAB AND LENVATINIB IN TERMS OF EFFICACY AND SAFETY AS PRIMARY SYSTEMIC CHEMOTHERAPY FOR HEPATOCELLULAR CARCINOMA. AASLD The Liver Meeting, Poster 4430, Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

Mitani S, Kito Y, Kawakami H, Nishina S, Matsumoto T, Tsuzuki T, Shinohara Y, Shimokawa H, Kumanishi R, Ohta T, Kimura S, Kawakami T, Nishina T, Hasegawa H, Akiyoshi K, Chiba Y, Yamazaki K, Hironaka S, Muro K. Multicenter retrospective study of trifluridine/tipiracil (FTD/TPI) plus bevacizumab (BEV) for vulnerable patients with pretreated metastatic colorectal cancer (mCRC): WJOG14520G (TWILIGHT). 2023 ASCO Gastrointestinal Cancers Symposium, poster, San Francisco, USA, 2023 年 1 月 24 日

Kotani D, Kagawa K, Matsubara Y, Bando H, Harada K, Takahashi N, Mihara Y, Nakayama I, Izawa N, Kawakami T, Masuishi T, Hasegawa H, Ohta T, Wakabayashi M, Yoshino T. TRIDENTE trial: A phase II study of rechallenge with encorafenib, binimetinib, and cetuximab in patients with RAS wild-type/BRAF V600E-mutant metastatic colorectal cancer. 2023 ASCO Gastrointestinal Cancers Symposium, poster, San Francisco, USA, 2023 年 1 月 24 日

Yamamoto S. Acetic acid chromoendoscopy for colorectal JNET 2B lesions. The 16th International Gastrointestinal Consensus Symposium (IGICS), Tokyo, 2023 年 2 月 4 日

B-3

前阪和城、阪森亮太郎、山田涼子、土居 哲、田畑優貴、小玉尚宏、疋田隼人、宮崎昌典、大川和良、三田英治、飯尾禎元、野崎泰俊、薬師神崇行、今井康陽、巽智秀、竹原徹郎：切除不能肝細胞癌に対する初回薬物療法としてのアテゾリズマブ+ベバシズマブとレンバチニブの比較検討。第 58 回日本肝癌研究会、パネルディスカッション 5、虎ノ門、2022 年 5 月 12 日

田畑優貴、阪森亮太郎、小玉尚宏、疋田隼人、野崎泰俊、尾下正秀、平松直樹、三田英治、宮崎昌典、巽智秀、竹原徹郎：肝線維化非進展 C 型慢性肝炎症例における SVR 後肝発癌予測モデルの検討。第 58 回日本肝癌研究会、ワークショップ 7、虎ノ門、2022 年 5 月 13 日

田中聡司：第 1 部：建石道場 臨床研究ことはじめ。第 58 回日本肝臓学会総会、特別企画 9 キャリア支援・ダイバーシティ推進委員会、横浜、2022 年 6 月 2 日、座長

松前高幸、小玉尚宏、前阪和城、田畑優貴、澤井良之、尾下正秀、中堀 輔、大川和良、宮崎昌典、田中聡司、阪森亮太郎、三田英治、俵 誠一、薬師神崇行、野崎泰俊、萩原秀紀、疋田隼人、巽 智秀、竹原徹郎：リキッドバイオプシーを用いた肝細胞癌における複合免疫療法治療効果予測。第 27 回日本肝がん分子標的治療研究会 PL2-5、大阪、2023 年 1 月 14 日

山本俊祐、万波智彦、榊原祐子、原田直彦：小腸バルーン内視鏡時の鎮静において、ミダゾラム持続静注法はミダゾラム間歇静注法に比べて優れているか？。JDDW 2022、シンポジウム 8(消化器内視鏡学会・消化器病学会・消化器外科学会)、福岡、2022 年 10 月 28 日

山本俊祐：Japan NBI Expert Team (JNET) 2B 病変に対する酢酸 pit pattern 診断を用いた治療前診断。第 19 回日本消化管学会総会学術集会 コアシンポジウム 1、東京、2023 年 2 月 3 日

山本俊祐：海外留学から得たもの。第 95 回日本胃癌学会総会 第 8 回 ESD 研究会、札幌、2023 年 2 月 24 日

B-4

山本俊祐、竹内洋司、川上裕史、早田菜保子、上堂文也、三田英治：胃の病変に対する Underwater EMR の有用性-2 施設での遡及的検討-。第 103 回日本消化器内視鏡学会総会、京都、2022 年 5 月 13 日

山本俊祐、石田 永、三田英治：酢酸併用画像強調内視鏡観察による大腸 pit pattern 診断の可能性。第 103 回日本消化器内視鏡学会総会、京都、2022 年 5 月 13 日

榊原祐子、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、宮崎哲郎、早田菜保子、清木祐介、石原朗雄、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田 永、三田英治：小腸内視鏡におけるミダゾラム持続静注と塩酸ペチジン併用の有用性と安全性。第 103 回日本消化器内視鏡学会総会、京都、2022 年 5 月 15 日

田中聡司、瀬崎ひとみ、波多野悦朗：キャリア支援・ダイバーシティ推進委員会企画第 1 部：建石道場 臨床研究ことはじめ。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

田畑優貴、阪森亮太郎、前阪和城、宮崎昌典、萩原秀紀、伊藤敏文、尾下正秀、今井康陽、三田英治、今中和穂、平松直樹、金子 晃、大川和良、小玉尚宏、疋田隼人、巽 智秀、竹原徹郎：Sofosbuvir/velpatasvir 治療が C 型非代償性肝硬変症例の予後に与えるインパクト—多施設共同研究—。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2 日

高橋実佑、田中聡司、清木祐介、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、西村佑子、早田菜保子、宮崎哲郎、石原朗雄、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：肝細胞癌の多発肺転移に対してアテゾリズマブ・ベバシズマブ併用療法を導入し、ギラン・バレー症候群を来した一例。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

原田理史、石原朗雄、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：高度脈管浸潤を伴う肝細胞癌に対して New FP 療法が奏功し Conversion Surgery を施行しえた一例。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

田邊元太郎、石原朗雄、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：高度腎機能障害を伴う肝硬変患者の門脈血栓症の診断に EUS が有用であった一例。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

中江陽彦、松島健祐、榊原祐子、宮崎愛理、原田理史、上月美穂、高橋実佑、伊藤典明、川端将生、津室 悠、西本菜穂、阿部友太郎、福武伸康、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎、塚本美輝、木村良紀、岩谷博嗣、三田英治：クローン病に合併した IgA 腎症の 1 例。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

上月美穂、榊原祐子、宮崎愛理、原田理史、高橋実佑、伊藤典明、川端将生、津室悠、西本菜穂、松島健祐、阿部友太郎、福武伸康、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎、石田 永、三田英治：繰り返す腹膜炎が契機となり診断に至

った家族性地中海熱の一例。第 13 回日本炎症性腸疾患学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 26 日

前阪和城、疋田隼人、田畑優貴、小玉尚宏、大川和良、宮崎昌典、尾下正秀、薬師神崇行、野崎泰俊、松本健吾、阪森亮太郎、巽智秀、竹原徹郎：切除不能肝細胞癌に対するアテゾリズマブ+ ベバシズマブ併用療法における抗生剤使用の影響。第 27 回日本肝がん分子標的治療研究会 OS1-7
大阪、2023 年 1 月 14 日

前阪和城、疋田隼人、田畑優貴、小玉尚宏、大川和良、宮崎昌典、尾下正秀、薬師神崇行、野崎泰俊、松本健吾、阪森亮太郎、巽智秀、竹原徹郎：切除不能肝細胞癌に対するアテゾリズマブ+ ベバシズマブ併用療法後の Conversion 治療症例。第 27 回日本肝がん分子標的治療研究会 OS6-3
大阪、2023 年 1 月 14 日

川端将生、阿部友太郎、原田理史、宮崎愛理、伊藤典明、上月美穂、高橋実佑、津室悠、西本菜穂、松島健祐、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、俊山礼志、酒井健司、後藤邦仁、阪森亮太郎、三田英治：多発肝細胞癌の破裂後に分子標的薬を含む集学的治療により腫瘍フリーを達成できた 1 例。第 27 回日本肝がん分子標的治療研究会 OS10-6、大阪、2023 年 1 月 14 日

宮崎愛理、山本俊祐、榊原祐子：当院における閉塞性大腸癌に対する Bridge to Surgery を目的とした大腸ステント留置症例の検討。第 19 回日本消化管学会総会学術集会、一般演題 14 下部消化管（大腸癌、手術）、新宿、2023 年 2 月 4 日

B-5

田中聡司、石田永、三田英治：ラミブジン耐性 B 型慢性肝炎に対するテノホビル・アラフェナミド単剤投与への切替のウイルス学的効果および安全性について。第 116 回日本消化器病学会近畿支部例会、ワークショップ 1 肝炎ウイルスコントロール下における課題へのアプローチ、大阪、2022 年 2 月 5 日

田中聡司：ここがヘンだよ消化器病医キャリア・プランニング。第 116 回日本消化器病学会近畿支部例会、女性医師・若手医師キャリア支援委員会企画、大阪、2022 年 2 月 5 日、座長

山本俊祐：酢酸を使用した大腸内視鏡検査。第 481 回大阪胃研究会、Web、2022 年 11 月 9 日

B-6

東浦玲意、榊原祐子、石原朗雄、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田永、三田英治：クローン病に合併した直腸癌の術後 5 年で多発転移を認めた 1 例。第 235 回日本内科学会近畿地方会、Web、2022 年 3 月 12 日

原田理史、榊原祐子、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、宮崎哲郎、早田菜保子、清木祐介、石原朗雄、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田 永、三田英治：GAVE に対する APC 後の過形成ポリープに発生した早期胃癌の 1 例。第 108 回日本内視鏡学会近畿支部例会、京都、2022 年 6 月 11 日

川端将生、榊原祐子、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、高橋実佑、津室 悠、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、石田 永、三田英治：当院での炎症性腸疾患患者の中心静脈カテーテル留置による血栓症の発症とそのリスク因子の検討。第 117 回日本消化器病学会近畿支部例会 Y14-3、大阪、2022 年 10 月 8 日

高橋実佑、長谷川裕子、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、川端将生、津室 悠、西村佑子、西本奈穂、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、山本俊祐、榊原祐子、石田 永、三田英治：高度狭窄により内視鏡的拡張術を要した好酸球性食道炎の 1 例。第 117 回日本消化器病学会近畿支部例会 Y1-2、大阪、2022 年 10 月 8 日

上月美穂、長谷川裕子、宮崎愛理、原田理史、伊藤典明、高橋実佑、津室 悠、川端将生、西本菜穂、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、山本俊祐、榊原祐子、阪森亮太郎、三田英治：経口摂取不良な胃原発 GIST に対してイマチニブが著効した一例。第 118 回日本消化器病学会近畿支部例会 Y1-2、京都、2023 年 1 月 21 日

伊藤典明、山本俊祐、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、高橋実佑、津室 悠、川端将生、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、榊原祐子、阪森亮太郎、森 清、加藤健志、三田英治：ESD による治癒切除 1 年後に短期間で進行大腸癌として再発を来した大腸粘膜癌の一例。第 118 回日本消化器病学会近畿支部例会 Y7-1、京都、2023 年 1 月 21 日

児玉裕三、庄雅之、竹原徹郎、吉治仁志、甲斐優吾、貝田佐知子、鷹尾まど佳、田中聡司：次世代育成のために～指導層アンケートをふまえて～。第 118 回日本消化器病学会近畿支部例会、女性医師・若手医師キャリア支援委員会企画 パネリスト、京都、2023 年 1 月 21 日

吉田 翼、西本菜穂、長谷川裕子、田中聡司、福武伸康、榊原祐子、阪森亮太郎、渡邊 大、三田英治：腹痛を主訴に来院し、大腸内視鏡検査を契機にランブル鞭毛虫が確認された 1 例。第 239 回日本内科学会近畿地方会、大阪、2023 年 3 月 4 日

B-7

田中聡司：ラミブジン耐性 B 型慢性肝炎に対するテノホビル・アラフェナミド単剤投与への切替に関する検討。第 33 回 Osaka Liver Forum、大阪、2022 年 5 月 20 日

B-8

榊原祐子：肝硬変の消化管病変。第 55 回法円坂地域医療フォーラム、大阪、2022 年 6 月 11 日

田中聡司：内科専門医取得に向けて。兵庫医科大学ダイバーシティ推進事業講演会、Web、2022 年 7 月 13 日

長谷川裕子：大腸癌薬物治療：最新データから考える治療選択。CRC Oncology Interactive Seminar、大阪、2022 年 7 月 20 日

長谷川裕子：がん遺伝子パネル検査の現状と課題。がん診療 UP Date、大阪、2022 年 8 月 1 日

長谷川裕子：消化管癌化学療法の Topics ～当院における取り組み～。第 7 回法円坂消化器疾患医療フォーラム、大阪、2022 年 8 月 6 日

阪森亮太郎：切除不能進行肝細胞癌に対する薬物療法の使い分け。第 29 回日本門脈圧亢進症学会総会共催イブニングセミナー、大阪+ Web、2022 年 9 月 8 日

榊原祐子：Special Situation Seminar 座長、Web、2022 年 11 月 4 日

田中聡司：効率的な時間の使い方。兵庫医科大学ダイバーシティ推進事業講演会、Web、2022 年 11 月 9 日

阿部友太郎：レンバチニブの有害事象マネジメントと局所療法追加タイミングと工夫。肝癌診療の集学的治療を考える会、大阪、2022 年 11 月 10 日

榊原祐子：若手で Jaki を考える会 in 関西 座長、大阪+ Web、2022 年 11 月 11 日

阪森亮太郎：核酸アナログ投与によるウイルス抑制後に持続した肝障害の一例 B 型慢性肝炎に対する核酸アナログ治療の実際。2 回 HBV クリニカルカンファレンス、大阪+ Web、2022 年 11 月 17 日

阪森亮太郎：第 34 回 OLF (Osaka Liver Forum) 研究発表会 座長、大阪、2022 年 11 月 18 日

阪森亮太郎：肝細胞癌に対するアテゾリズマブ+ベバシズマブ併用療法の使用経験。HCC Expert Meeting、Web、2022 年 11 月 28 日

阪森亮太郎：第 1 回 OLF Ablation Conference 座長、大阪、2022 年 12 月 15 日

阿部友太郎：当院における肝穿刺局所の取り組み。第 1 回 OLF Ablation Conference、大阪、2022 年 12 月 15 日

榎原祐子：SDM と IBD の治療選択。IBD 治療を語る会 Web Seminar、Web、2023 年 1 月 27 日

長谷川裕子：“胃がん化学療法 治療継続のための取組み” 悪心嘔吐（倦怠感）の観点より。消化管癌の薬物療法の進歩と副作用マネジメント。Area Gastric Cancer Web Meeting ～胃がん化学療法の継続を考える、Web、2023 年 2 月 2 日

榎原祐子：潰瘍性大腸炎に対する新規治療薬ジセレカ錠 ～当院での治療成績も含めて。IBD update conference in OSAKA、大阪、2023 年 2 月 17 日

長谷川裕子：消化管癌の薬物療法の進歩と副作用マネジメント。がん診療 副作用マネジメント Web セミナー、Web、2023 年 2 月 22 日

阪森亮太郎：おさえておきたい肝疾患診療の注意点。かかりつけ医のための肝疾患オンラインセミナー、Web、2023 年 3 月 14 日

榎原祐子：IBD・SBS Sminar 座長、Web、2023 年 3 月 22 日

三田英治：法円坂 GI カンファレンス 座長、大阪、2023 年 3 月 23 日

榎原祐子：当院における IBD 診療の現状について。法円坂 GI カンファレンス、大阪、2023 年 3 月 23 日

阪森亮太郎：第 69 回おおさか健康セミナー 座長、大阪、2023 年 3 月 25 日

阿部友太郎：侮るなかれ！肝臓がん。第 69 回おおさか健康セミナー、大阪、2023 年 3 月 25 日

福武伸康：どうする？膵臓がん。第 69 回おおさか健康セミナー、大阪、2023 年 3 月 25 日

B-9

阪森亮太郎：LOVE FLAP THURSDAY...大阪の医療アベンジャーズが集結！『DOCTOR's FLAP』、FM DOCTOR'S FLAP、2023 年 1 月 5 日

エビデンスに基づいて治療方針が決まる現在において、よりよい治療方針を考えるためには臨床研究が非常に重要である。まずは後ろ向き研究によって日々の臨床経験の中から仮説を導きだし、前向き試験によって検証することになる。後ろ向き研究をおこなうためには、日常診療において研究標的とする疾患を多く治療して、解析に耐えるデータベースをもつことが不可欠である。まずは、急性心不全、急性冠症候群、院外心停止、心房細動についての良質なデータベースを作ることを目標としている。そのためには一貫した治療方針に従って日々の診療をおこない、十分な検査結果や診察結果、問診結果などをカルテに残すことが重要である。その一環として、心臓カテーテル検査においては、各種血管内画像診断 (IVUS, OCT, 血管内視鏡, spectroscopy など) による病変評価を積極的におこない、新しく登場する診断技術は積極的に取り入れている。さらに、従来から存在する心エコーや冠動脈 CT、心筋シンチも積極的に活用することで、現時点で可能な最先端の診断・治療の実践を目指している。日々のカンファレンスにおける徹底的な病態・治療方針の検討、データベースとして利用可能なカルテの改良などに取り組んでいる。

現在、急性心不全および急性冠症候群について、病態解明、発症機序解明と新しい診断法・治療法・予防法の開発を第一の目標としている。急性心不全については心エコーを中心とした研究を、急性冠症候群については血管内視鏡および T-TAS による血液血栓形成能を中心とした研究を進めている。また、大動脈における動脈硬化が大動脈疾患や脳梗塞のみならず、腎障害や ASO さらには認知症の原因となる可能性が示唆されており、大動脈内視鏡を用いた研究も始めている。

さらに、より大きな臨床試験によるエビデンスの確立や、発見した内容の臨床応用を目指して、大阪大学循環器内科関連病院を中心とした共同研究や、日本循環器学会を中心とした活動への展開も進めている。具体的には、大阪大学循環器内科関連病院による HFpEF の共同研究や、日本循環器学会による STOP MI キャンペーンを進めている。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Ishihara T, Okada K, Kida H, Tsujimura T, Iida O, Okuno S, Hata Y, Toyoshima T, Higashino N, Kikuchi A, Watanabe T, Norita T, Tanaka A, Shutta R, Nishino M, Kosugi S, Ueda Y, Ichibori Y, Higuchi Y, Sotomi Y, Nakamura D, Kumada M, Hikoso S, Nakatani D, Mano T, Sakata Y : Long-Term Outcomes and Clinical Predictors of Mortality Following Occurrence of Stent Thrombosis. 「Journal of the American Heart Association」 11 (7) :e023276, 2022 年 4 月 4 日

Okada M, Tanaka K, Tanaka N, Hirao Y, Harada S, Inoue K : Idiopathic left ventricular tachycardia continuously entrained by atypical atrioventricular nodal reentrant tachycardia. 「HeartRhythm Case Reports」 8 (8) : P572-576, 2022 年 5 月 20 日

Tanaka N, Inoue K, Okada M, Sakata Y, Akao M, Yamashita T, Suzuki S, Okumura K: Impact of anemia

on the clinical outcomes in elderly patients with atrial fibrillation receiving apixaban: J-ELD AF registry subanalysis. 「International Journal of Cardiology Heart & vasculature」 40:100994. doi: 10.1016/j.ijcha.2022.100994, 2022 年 5 月 21 日

Sotomi Y, Ueda Y, Hikoso S, Okada K, Dohi T, Kida H, Ouen B, Sunaga A, Sato T, Kitamura T, Mizuno H, Nakatani D, Sakata Y, Sato H, Hori M, Komuro I, Sakata Y : Pre-infarction Angina: Time Interval to Onset of Myocardial Infarction and Comorbidity Predictors. 「Frontiers in Cardiovascular Medicine」 9:867723.doi:10.3389/fcvm.2022.867723, 2022 年 5 月 6 日

Horiuchi K, Kosugi S, Abe H, Ueda Y : Fulminant myocarditis after the first dose of mRNA-1273 vaccination in a patient with previous COVID-19: a case report. 「European Heart Journal Case Reports」 6(7):ytac290. doi: 10.1093/ehjcr/ytac290. eCollection , 2022 年 7 月 8 日

Sato T, Sotomi Y, Nakatani D, Mizuno H, Okada K, Dohi T, Kitamura T, Sunaga A, Kida H, Ouen B, Furukawa Y, Hirata A, Egami Y, Watanabe T, Minamiguchi H, Tanaka N, Oka T, Okada M, Kanda T, Matsuda Y, Kawasaki M, Masuda M, Inoue k, Sakata Y : Sex Differences in the Efficacy of Pulmonary Vein Isolation Alone vs. Extensive Catheter Ablation in Patients With Persistent Atrial Fibrillation. 「Circulation Journal」 86(8):P1207-1216, 2022 年 7 月 25 日

Sato T, Hisako S, Nakatani D, Mizuno H, Okada K, Dohi T, Kitamura T, Sunaga A, Kida H, Ouen B, Egami Y, Watanabe T, Minamiguchi H, Miyoshi M, Tanaka N, Oka T, Okada M, Kanada T, Matsuda Y, Kawasaki M, Masuda M, Inoue K, Sakata Y : DR-FLASH Score Is Useful for Identifying Patients With Persistent Atrial Fibrillation Who Require Extensive Catheter Ablation Procedures. 「Journal of the American Heart Association」 11(16):e024916, 2022 年 8 月 16 日

Kusano K, Yamane T, Inoue K, Takegami M, Nakao Y, Nakai M, Kanaoka K, Kuji-Tonegawa R, Miyamoto K, Iwasaki Y, Takatsuki S, Nakamura K, Iwanaga Y, Shimizu W : The Japanese Catheter Ablation Registry (J-AB): Annual report in 2020. 「Journal of Arrhythmia」 38(5) : P675-681, 2022 年 8 月 27 日

Yamane H, Ueda Y, Ikeoka K, Kosugi S : Case report of a peripheral artery disease patient with its aetiology clarified by retrograde angiography. 「European Heart Journal Case Reports」 (2022) 6(10): P 1–5, 2022 年 9 月 23 日

Morishima I, Kanzaki Y, Morita Y, Inoue K, Kobori A, Kaitani K, Kurotobi T, Yamaji H, Matsui Y, Nakazawa Y, Kusano K, Tomomatsu T, Ikai Y, Furui K, Yamauchi R, Miyazawa H, Tanaka N, Morimoto T, Kimura T, Shizuta S : Catheter Ablation for Paroxysmal Atrial Fibrillation With Sick Sinus Syndrome: Insights From the Kansai Plus Atrial Fibrillation Registry. 「Heart & Lung Circulation」 S1443-9506(22)011003.doi:10.1016/j.hlc.2022.09.007, 2022 年 10 月 20 日

Goya M Hirao K, Aonuma K, Nogami A, Yamane T, Yamauchi Y, Okishige K, Yotsukura A, Kimura M, Naito S, Kato R, Nitta J, Inaba O, Satomi K, Morita N, Kobayashi Y, Inden Y, Yoshida Y, Kakita K, Kobori A, Kusano K, Inoue K, Masuda M, Hiroshima K, Koyama J, Kumagai K : Initial multicenter

clinical experience with the first-generation endoscopic guided laser balloon in Japan. 「Journal of Cardiovascular Electrophysiology」 doi: 10.1007/s10840-023-01493-0, 2023 年 2 月 11 日

Tanaka N, Inoue K, Kobori A, Kaitani K, Morimoto T, Kurotobi T, Morishita I, Yamaji H, Matsui Y, Nakazawa Y, Kusano K, Tanaka K, Hirao Y, Okada M, Koyama Y, Okamura A, Iwakura K, Fujii K, Kimura T, Shizuta S : Atrial Fibrillation Ablation Outcomes and Heart Failure (from the Kansai Plus Atrial Fibrillation Registry). 「American Journal of Cardiology」 189(15): P108-118, 2023 年 2 月 15 日

Okada M, Tanaka N, Onishi T, Tanaka K, Hirao Y, Harada S, Koyama Y, Watanabe H, Okamura A, Iwakura K, Fujii K, Sakata Y, Inoue K : Impact of Residual Functional Mitral Regurgitation After Atrial Fibrillation Ablation on Clinical Outcomes in Patients With Left Ventricular Systolic Dysfunction. 「American Journal of Cardiology」 191:66-75. doi: 10.1016/j.amjcard.2022.12.024, 2023 年 3 月 15 日

A-3

相木佐代、安部晴彦、吉村麻美、柿本由美子、交久瀬綾香、田中奈桜、西菌博章、河瀬安紗美、安井博規：心不全患者に対する退院前段階における 多職種 Web カンファレンスの実施報告「Palliative Care Research」 17(3) : P.105-106、日本緩和医療学会、2022 年 9 月 26 日

A-4

上田恭敬：第 1 章 重症心不全管理 急性心筋梗塞の合併症の適切な診断・治療法「入門 ケースから学ぶ循環器集中治療ドリル 明日の診療に役立つキホンと実践」 P.26-P30、日本集中治療医学会、2022 年 4 月 1 日

上田恭敬：8.冠動脈のどんな病変が、血管内視鏡でわかりますか？ほかの血管内イメージングにない特徴は何ですか？「血流維持型汎用血管内視鏡(NOGA) ガイドブック」 P21、中山書店、2022 年 4 月 9 日

上田恭敬：I 総論 B 冠動脈 8.冠動脈のどんな病変が、血管内視鏡でわかりますか？ほかの血管内イメージングにない特徴は何ですか？「血流維持型汎用血管内視鏡(NOGA) ガイドブック」 P21、中山書店、2022 年 4 月 9 日

上田恭敬：II 画像 B 冠動脈 3. 血管内視鏡の冠動脈所見はどう表現したらいいですか？「血流維持型汎用血管内視鏡(NOGA) ガイドブック」 P94、中山書店、2022 年 4 月 9 日

上田恭敬：II 画像 B 冠動脈 5. 病変以外の冠動脈を評価する意義はありますか？「血流維持型汎用血管内視鏡(NOGA) ガイドブック」 P98、中山書店、2022 年 4 月 9 日

上田恭敬：II 画像 B 冠動脈 6. 冠動脈プラークの変化は血管内視鏡でどう評価しますか？ほかのモダリティで評価できないことはあるのですか？「血流維持型汎用血管内視鏡(NOGA) ガイドブック」 P100、中山書店、2022 年 4 月 9 日

池岡邦泰、山根治野：ALI に対する EVT 治療戦略「Coronary Intervention」 18 (4) : P.70-76、

メディアアルファ、2022年7月19日

高安幸太郎、井上耕一：QRS波の増高と減高「心電図」42(4)：P.237-240、日本不整脈心電学会、2022年12月23日

上田恭敬：特集 循環器集中治療の最前線 院外心停止患者における緊急冠動脈インターベンション「循環器内科」93(1)：P.9-11、科学評論社、2023年1月28日

B-1

Inoue K：Acute and long-term outcomes of ablation for atrial fibrillation with Visitag Surpoint. APHRS2022, シンガポール、2022年11月19日

井上耕一：QDOT MICRO™の初期使用経験. 第87回日本循環器学会学術集会, 福岡市, 2023年3月10日

B-2

Yamane H：An extreme case of ablating the in-stent occlusion by various methods using excimer laser atherectomy catheter. TECC、WEB、2022年9月22日

B-3

柳善樹、安部晴彦、小元真生、鳥飼真依、赤嶺和昭、中川紗希、谷久美、水松千香子、末武貢、眞能正幸：心エコー機器の基本機能を使い倒す -知るべき基礎編-。日本心エコー学会第33回学術集会、鳥取市、2022年4月8日

安部晴彦、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、玉置俊介、矢野正道、中川彰人、中川雄介、山田貴久、安村良男、土肥智晴、砂真一郎、彦惣俊吾、中谷大作、是恒之宏、坂田泰史：心不全チーム医療における Echocardiographic Congestion Grade の役割。日本心エコー学会第33回学術集会、鳥取市、2022年4月8日

井上耕一：RFアブレーションの焼灼巣ってどうなっているの？～水槽実験を井上先生が解説～。心電関連春季大会2022、WEB、2022年4月9日

池岡邦泰：High Risk PCIにおけるOCTの役割。KCJL2022、京都市、2022年4月15日

井上耕一：アブレーション治療において医師が臨床工学技士に求めたいこと。第32回日本臨床工学会、WEB、2022年5月15日

井上耕一：心不全、脳梗塞予防におけるリズムコントロールの有用性：アブレーションも含めたリズムコントロールの適応はどこまで拡大すべきか？。第68回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022年6月9日

井上耕一：Editor-in chief に聞く：Journal of Arrhythmia の Accept って難しすぎくないですか？もっと学会員に Publish の機会を！！。第68回日本不整脈心電学会学術大会、

横浜市、2022年6月9日

Inoue K, Takegami M, Yamane T, Kusano K, Takatsuki S, Nakao Y, Iwanaga Y, Miyamoto Y, Nogami A, Shimizu W : Safety of Catheter Ablation for Atrial Fibrillation in Elderly Patients in Japan; Feedback from J-AB Registry. 第68回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022年6月9日

Okada M, Tanaka N, Tanaka K, Hirao Y, Harada S, Masuda M, Watanabe T, Egami Y, Makino N, Oka T, Miyoshi M, Minamisaka T, Minamiguchi H, Kanda T, Matsuda Y, Kawasaki M, Sunaga A, Hikoso S, Inoue K, Sakata Y : Impact of Female Sex on Very Late Recurrence After Catheter Ablation of Persistent Atrial Fibrillation: Insight from the EARNEST-PVI Trial. 第68回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022年6月9日

Inoue K, Takegami M, Yamane T, Kusano K, Takatsuki S, Nakao Y, Iwanaga Y, Miyamoto Y, Nogami A, Shimizu W : Safety of Catheter Ablation for Atrial Fibrillation in Elderly Patients in Japan; Feedback from J-AB Registry. 第68回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022年6月9日

井上耕一 : 直接作用型第 Xa 因子阻害剤中和剤の臨床的意義。第68回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022年6月10日

井上耕一 : J-AB および J-AB2022 に関する報告③リサーチプロポーザルの運用開始について。第68回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022年6月10日

上田恭敬 : 当院における急性心筋梗塞の救急診療。第28回日本血管内治療学会学術総会、WEB、2022年6月24日

上田恭敬 : 血管内視鏡の更なる可能性を考える。第35回日本心臓血管内視鏡学会、松山市、2022年10月1日

井上耕一 : 心房細動治療のこれまでとこれから。日本不整脈心電学会、WEB、2022年10月18日

井上耕一 : 第 Xa 因子阻害剤中和薬オンデキサの 特徴とその臨床的意義。カテーテルアブレーション関連秋季大会2022、新潟市、2022年11月25日

井上耕一 : 高周波アブレーション。アブレーション関連秋季大会2022、新潟市、2022年11月26日

上田恭敬 : ACS のリスク評価 血管内視鏡から NIRS へ。第34回日本冠疾患学会学術集会、東京都、2022年12月3日

池岡邦泰 : NIRS-IVUS からの考察。第33回日本心血管画像動態学会、岡山市、2023年1月13日

井上耕一：心不全，脳梗塞予防におけるリズムコントロールの有用性：アブレーションも含めたリズムコントロールの適応はどこまで拡大すべきか？。第 68 回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2023 年 3 月 9 日

井上耕一、山根禎一、草野研吾、中井陸運、利根川玲奈、竹上未紗、岩永善高、高月誠司、清水 渉：Safety and Efficacy of Catheter Ablation for Atrial Fibrillation in Elderly Patients: Real-world Evidence from the J-AB Registry.第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 10 日

Yamane T、Moriwaki K、Miyamoto Y、Kusano K、Inoue K、Tada H、Nogami A、Takegami M、Nakao Y、Hashimoto H：Cost-Effectiveness Analysis of Catheter Ablation for Atrial Fibrillation in Japan. 第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 10 日

井上耕一：心房細動：アブレーション。第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 11 日

Ueda Y：Personalized Decision Making for Each Patient by Heart Team is Essential. 第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 11 日

上田恭敬：ACS 診療の現状と梗塞前狭心症に注目した STOP-MI キャンペーンの意義、展望と課題。第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 12 日

B-4

近藤信吾、中村雅之、安部晴彦、柳 善樹、大崎 慧、大里和樹、家原卓史、福島貴嗣、堀内恒平、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、松村泰志、上田恭敬：経胸壁心エコー図検査で診断が困難であった縦隔奇形種の一例。日本心エコー図学会第 33 回学術集会、米子市、2022 年 4 月 9 日

大崎 慧、家原卓史、上田恭敬、安部晴彦、井上耕一、池岡邦泰、三嶋 剛、尾崎立尚、小杉隼平、山根治野、高安幸太郎、中村雅之、大橋拓也：去勢抵抗性前立腺癌のホルモン治療中に発症したアピラテロン関連心不全の一例。第 8 回日本心筋症研究会、高知市、2022 年 5 月 14 日

Kanda T、Masuda M、Inoue K、Watanabe T、Egami Y、Makino N、Tanaka N、Oka T、Miyoshi M、Minamisaka T、Minamiguchi H、Okada M、Matsuda Y、Kawasaki M、Hikoso S、Sakata Y：Physical Component Summary Score at 1 Year After Ablation Can Predict a Very Late Recurrence of Atrial Fibrillation: Insights from the EARNEST-PVI Trial. 第 68 回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022 年 6 月 9 日

Okada M、Tanaka N、Tanaka K、Hirao Y、Harada S、Masuda M、Watanabe T、Egami Y、Makino N、Oka T、Miyoshi M、Minamisaka T、Minamiguchi H、Kanda T、Matsuda Y、Kawasaki M、Sunaga A、Hikoso S、Inoue K、Sakata Y：Impact of Female Sex on Very Late Recurrence After Catheter Ablation of Persistent Atrial Fibrillation: Insight from the EARNEST-PVI Trial. 第 68 回日本不整脈心電学会、横浜市、2022 年 6 月 9 日

Kanda T, Masuda M, Inoue K, Watanabe T, Egami Y, Makino N, Tanaka N, Oka T, Miyoshi M, Minamisaka T, Minamiguchi H, Okada M, Matsuda Y, Kawasaki M, Hisoko S, Sakata Y : Physical Component Summary Score at 1 Year After Ablation Can Predict a Very Late Recurrence of Atrial Fibrillation: Insights from the EARNEST-PVI Trial. 第 68 回日本不整脈心電学会学術大会、横浜市、2022 年 6 月 9 日

Yamane H, Ozaki T, Kosugi S, Mishima T, Ikeoka K, Abe H, Inoue K, Ueda Y, Matsumura Y, Koretsune Y : The predictors of early occlusion after DCB treatment in femoropopliteal lesion. Japan Endovascular Treatment Conference 2022、大阪市、2022 年 6 月 11 日

山根治野、大里和樹、大崎 慧、家原卓史、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏、松村泰志 : 大腿膝窩動脈領域における薬剤塗布バルーンでの治療後に生じる早期閉塞の予測因子の検討。第 30 回日本心血管インターベンション治療学会、WEB、2022 年 7 月 21 日

池岡邦泰、リジュン、シシボメディ、山根治野、小杉隼平、上田恭敬 : 重症虚血肢患者における下肢切断回避のための栄養状態の重要性。第 30 回日本心血管インターベンション治療学会、WEB、2022 年 7 月 21 日

池岡邦泰、リジュン、シシボメディ、山根治野、小杉隼平、上田恭敬 : 肺塞栓症に対するフローリーパー血栓吸引システムの安全性と有効性。第 30 回日本心血管インターベンション治療学会、WEB、2022 年 7 月 22 日

小杉隼平、上田恭敬、安部晴彦、池岡邦泰、三嶋 剛、尾崎立尚、高安幸太郎、大橋拓也、山根治野、中村雅之、福島貴嗣、堀内恒平、家原卓史、大崎 慧、大里和樹、井上耕一、是恒之宏、松村泰志 : 体外循環式心肺蘇生を施行した心筋梗塞患者における予後の検討。第 30 回日本心血管インターベンション治療学会、WEB、2022 年 7 月 23 日

松岡勇樹、外海洋平、上田恭敬、彦惣俊吾、岡田佳築、土肥智晴、木田博太、Oeun Bolrathanak、須永晃弘、佐藤泰貴、北村哲久、中谷大作、坂田泰史 : 梗塞前狭心症:心筋梗塞発症までの時間とその予測因子についての検討。第 70 回日本心臓病学会学術集会、京都市、2022 年 9 月 24 日

山根治野 : 浅大腿動脈に留置後、半年で閉塞した薬剤溶出性ステントを血流維持型血管内視鏡で観察した一例。第 35 回日本心臓血管内視鏡学会、松山市、2022 年 10 月 1 日

安部晴彦、中村雅之、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、瀬尾昌裕、矢野正道、林 隆治、山田貴久、安村良男、外海洋平、彦惣俊吾、坂田泰史 : 左室駆出率の保たれた心不全における機能性僧帽弁および三尖弁閉鎖不全症の有病率と予後への影響。第 26 回日本心不全学会学術集会、奈良市、2022 年 10 月 23 日

Ozaki T : Experience with pulmonary vein isolation using left atrial 3D images created with CARTOSOUND® FAM. APHRS , Singapore, 2022 年 11 月 18 日

大橋拓也、井上耕一、池岡邦泰、三嶋 剛、尾崎立尚：上大静脈-右房間で2：1伝導ブロックを呈していた上大静脈起源心房頻拍の症例。カテーテルアブレーション関連秋季大会 2022、新潟市、2022年11月24日

尾崎立尚、井上耕一、三嶋 剛、池岡邦泰、大橋拓也：CARTOSOUND® FAMで作成した左房3次元画像を用いて肺静脈隔離を行った経験。カテーテルアブレーション関連秋季大会 2022、新潟市、2022年11月24日

三嶋 剛、井上耕一、池岡邦泰、尾崎立尚、大橋拓也：接合部期外収縮に対してカテーテルアブレーションを施行した1例。カテーテルアブレーション関連秋季大会 2022、新潟市、2022年11月25日

中村雅之、安部晴彦、大橋拓也、高安幸太郎、福島貴嗣、堀内恒平、家原卓史、水森祐樹、村岡直哉、南 慎哉、鵜飼一穂、坂本麻衣、山根治野、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏、松村泰志：Effects of Sodium-Glucose Cotransporter 2 Inhibitors on Exercise Intensity in Outpatient Cardiac Rehabilitation. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

堀内恒平、高安幸太郎、安部晴彦、家原卓史、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：A Case of Suspected COVID-19 Vaccine Associated Chronic Myocarditis. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

鵜飼一穂、家原卓史、安部晴彦、中村雅之、福島貴嗣、堀内恒平、水森祐樹、村岡直哉、南 慎哉、坂本麻衣、大橋拓也、山根治野、高安幸太郎、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：Left Ventricular Thrombus in a Patient with Nephrotic Syndrome Associated with Hepatitis C. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2022年3月10日

Murasato Y, Nakashima H, Sugino H, Arikawa M, Mori F, Ueda Y, Matumura K, Abe M, Koizumi T, Shimomura M, Fujitomo K, Saeki T, Imagawa S, Takanaka T, Morita Y, Kashima K, Takami A, Ono Y, Fukae A, Imai T：Clinical Outcome of Imaging-guided Left Main Coronary Intervention in Japanese National Hospital Organization (LM-JANHO). 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Yamane H, Mizumori Y, Muraoka N, Minami S, Ukai K, Sakamoto M, Iehara T, Fukushima T, Horiuchi K, Nakamura M, Ohashi T, Takayasu K, Ozaki T, Kosugi S, Mishima T, Ikeoka K, Abe H, Inoue K, Ueda Y, Koretsune Y, Matsumura Y：Impact of Minimum Lumen Area as a Predictor for Restenosis after Endovascular Treatment with Drug-Coated Balloon in Femoropopliteal Lesion. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Okada M, Tanaka N, Tanaka K, Hirao Y, Oka T, Masuda M, Watanabe T, Sunaga A, Hikoso S, Inoue K, Sakata Y：Pulmonary Vein Reconnections Predict Good Clinical Outcomes after Second Catheter Ablation of Persistent Atrial Fibrillation: Insight from the EARNEST-PVI Trial. 第87回日本循環器

学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Okada M, Inoue K, Tanaka N, Tanaka K, Onishi T, Iwakura K, Egami Y, Masuda M, Watanabe T, Makino N, Oka T, Sunaga A, Hikoso S, Sakata Y : Low Left Atrial Appendage Flow Velocity Predicts Treatment Failure in Patients with Left Atrial Thrombi: Insight from the LAT Trial. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Hayashi H, Shimizu W, Iwasaki Y, Ando K, Kusano K, Asai T, Inoue K, Inamura Y, Ikeda T, Mitsuhashi T, Murohara T, Nishii N, Nogami A, Simon T, Torsten K, Sakata Y, Aonuma K : Association of Risk Factors and Cardiac Outcomes in Patients with Primary Prevention of Sudden Cardiac Death HINODE Study Sub Analysis. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Yamada S, Maeda K, Shimamura K, Mikami T, Kawamura A, Yamashita K, Inoue K, Miyagawa S : Long-Term Outcome after Aortic Valve Replacement in Hemodialysis Patients with Aortic Stenosis, 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Mastunaga Y, Egami Y, Nohara H, Sugae H, Kawanami S, Kawamura A, Ukita K, Nakamura H, Yasumoto K, Tsuda M, Okamoto N, Yano M, Tanaka N, Masuda M, Watanabe T, Inoue K, Sunaga A, Hikoso S, Sakata Y, Nishino M, Tanouchi J : Simple Approach to Determine Additional Substrate Ablation in Patients with Persistent Atrial Fibrillation: Insight from EARNEST-PVI Trial. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

Oka T, Koyama Y, Tanaka N, Masuda M, Watanabe T, Inoue K, Sunaga A, Hikoso S, Sakata Y : Extensive Ablation Strategy for Persistent Atrial Fibrillation might Trade Off Left Atrial Function for Success: Insight from the EARNEST-PVI Trial. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月10日

南 慎哉、池岡邦泰、水森祐樹、村岡直哉、鵜飼一穂、坂本麻衣、家原卓史、福島貴嗣、堀内恒平、中村雅之、大橋拓也、山根治野、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬 : Utility of Hemodynamic Support during Aggressive Plaque Modification Associated with Stent Under expansion. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月11日

須永晃弘、彦惣俊吾、田中宣暁、江神康之、増田正晴、井上耕一、松岡勇樹、佐藤泰貴、木田博太、外海洋平、土肥智晴、岡田佳築、中谷大作、坂田泰史 : Improvement of Left Ventricular Ejection Fraction after Catheter Ablation for Atrial Fibrillation: Sub Analysis of a Randomized Controlled EARNEST- PVI Trial. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月11日

Iehara T, Abe H, Nakamura M, Fukushima T, Horiuchi K, Mizumori Y, Muraoka N, Minami S, Ukai K, Yamane H, Ohashi T, Takayasu K, Kosugi S, Ozaki T, Mishima T, Ikeoka K, Inoue K, Ueda Y, Matsumura Y : Impact of Advanced Chronic Kidney Disease on 5-Year Outcomes in Patients with Heart Failure. 第87回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023年3月11日

Ikeoka K, Ueda Y, Mizumori Y, Muraoka N, Minami S, Ukai K, Sakamoto M, Iehara T, Horiuchi K, Fukushima T, Nakamura M, Yamane H, Ohashi T, Takayasu K, Ozaki T, Kosugi S, Mishima T, Abe H, Inoue K, Matsumura Y : Quantitative Measurement of Dyssynchrony Using ECG-Gated Myocardial Perfusion SPECT Predicts Ventricular Pacing-induced Cardiomyopathy. 第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 11 日

小杉隼平、上田恭敬、池岡邦泰、山根治野、高安幸太郎、大橋拓也、福島貴嗣、堀内恒平、家原卓史、鵜飼一穂、坂本麻衣、南 慎哉、水森祐樹、村岡直哉、中村雅之、尾崎立尚、三嶋 剛、安部晴彦、井上耕一、松村泰志 : The Long-term Impact of Chronic Total Occlusion in a Non-infarct-related Artery on Acute Myocardial Infarction Patients Complicated by Cardiac Arrest. 第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 12 日

B-5

井上耕一 : ANAFIE Registry を日常診療にどう生かすか。高齢者心房細動と併存疾患を考える会、WEB、2022 年 8 月 30 日

尾崎立尚 : カテーテルアブレーション後の新しい術後管理。第 2 回 CV.com、WEB、2022 年 10 月 15 日

井上耕一 : Durable PVI 時代の心房細動アブレーション —これまでと、これから—。第 65 回神奈川不整脈研究会、WEB、2023 年 2 月 4 日

B-6

山根治野 : 浅大腿動脈に留置後、半年で閉塞した薬剤溶出性ステントを血流維持型血管内視鏡で観察した一例。TCIF2022、WEB、2022 年 5 月 25 日

山根治野、大里和樹、大崎 慧、家原卓史、福島貴嗣、堀内恒平、中村雅之、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏、松村泰志 : 血行再建を工夫することで再灌流障害を回避し創治癒を得た急性下肢動脈閉塞症の一例。第 133 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2022 年 6 月 18 日

中村雅之、高安幸太郎、大里和樹、大崎 慧、家原卓史、堀内恒平、福島貴嗣、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志 : 保存的加療で軽快を得た腹部臓器虚血合併 Stanford B 型大動脈解離の一例。第 133 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2022 年 6 月 18 日

堀内恒平、小杉隼平、大里和樹、大崎 慧、家原卓史、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、高安幸太郎、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志 : COVID-19 ワクチン接種後に劇症型心筋炎 を発症した一例。第 133 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2022 年 6 月 18 日

山根治野 : 末梢動脈疾患患者における逆行性内視鏡の有用性について。第 18 回近畿血管内視鏡研究会、WEB、2022 年 9 月 30 日

村岡直哉：実臨床での心臓核医学検査。第 32 回 21 世紀心臓核医学カンファレンス、WEB、2022 年 9 月 30 日

安部晴彦：最新のガイドラインに沿った心不全治療 ～SGLT2 阻害薬への期待～。大阪城循環器連携の会、WEB、2022 年 10 月 6 日

小杉隼平：血管内治療における地域連携。大阪城循環器連携の会、WEB、2022 年 10 月 6 日

三嶋 剛：不整脈治療における地域連携。大阪城循環器連携の会、WEB、2022 年 10 月 6 日

尾崎立尚：CARTOSOUND® FAM で作成した左房 3 次元画像を用いて肺静脈隔離を行った経験。第 2 回日本不整脈心電学会近畿支部地方会、大阪市、2022 年 10 月 29 日

南 慎哉：繰り返し左上肺静脈が心房細動基質となっていた発作性心房細動の 1 例。第 2 回日本不整脈心電学会近畿支部地方会、大阪市、2022 年 10 月 29 日

水森祐樹：術前にアデノシン三リン酸投与により Coumel 現象が誘発されて治療方針の決定に有用となった房室回帰性頻拍の 1 例。第 2 回日本不整脈心電学会近畿支部地方会、大阪市、2022 年 10 月 29 日

尾崎立尚：AF アブレーション手技中に Swartz™ シース先端部の断裂が疑われた 1 例。第 2 回日本不整脈心電学会近畿支部地方会、大阪市、2022 年 10 月 29 日

尾崎立尚：血友病 A に対するエミシズマブ投与中に心房細動と脳梗塞を発症し抗凝固療法導入を要した 1 例。第 2 回日本不整脈心電学会近畿支部地方会、大阪市、2022 年 10 月 29 日

竹内太郎、小杉隼平、水森祐樹、村岡直哉、南 慎哉、坂本麻衣、鶴飼一穂、家原卓史、堀内恒平、福島貴嗣、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、中村雅之、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：血行再建を受けた急性心筋梗塞患者における心血管イベント発生に対する癌既往の影響。第 134 回日本循環器学会近畿地方会、大阪市、2022 年 12 月 10 日

南慎哉、池岡邦泰、井上耕一、中村雅之、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、安部晴彦、上田恭敬：カテーテルアブレーション時のパークローズ™ での止血部位に高度静脈狭窄を来たし血管内治療を施行した一例。第 134 回日本循環器学会近畿地方会、大阪市、2022 年 12 月 10 日

余田拓海、中村雅之、家原卓史、水森祐樹、村岡直哉、南 慎哉、鶴飼一穂、坂本麻衣、福島貴嗣、堀内恒平、大橋拓也、山根治野、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：運動負荷心エコー図検査にて虚血による拡張障害の改善を観察しえた左室駆出率が保たれた心不全の 1 例。第 134 回日本循環器学会近畿地方会、大阪市、2022 年 12 月 10 日

村岡直哉、家原卓史、安部晴彦、中村雅之、水森祐樹、南 慎哉、鶴飼一穂、坂本麻衣、堀内恒平、福島貴嗣、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：サクビトリル・バルサルタンを用いて速やかに急性期を離脱した高度肥満の若年心不全の一例。第 134 回日本循環器学会近畿地方会、大阪市、2022 年 12 月 10 日

兵庫隆司、山根治野、水森祐樹、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏、松村泰志：アンジオシールを用いた止血後に大腿動脈仮性瘤を来した 1 例。第 239 回日本内科学会近畿地方会、大阪市、2023 年 2 月 4 日

井上耕一：Durable PVI 時代の持続性心房細動に対するカテーテルアブレーションの治療戦略。第 62 回湯島不整脈カンファレンス、東京都、2023 年 2 月 10 日

兵庫隆司、山根治野、水森祐樹、三嶋 剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏、松村泰志：アンジオシールを用いた止血後に大腿動脈仮性瘤を来した 1 例。第 239 回日本内科学会近畿地方会、大阪市、2023 年 3 月 4 日

B-8

上田恭敬：前兆を知って心筋梗塞を予防する。日本冠疾患学会第 35 回日本冠疾患学会学術集会 市民公開講座、WEB、2022 年 4 月 4 日

井上耕一：Durable PVI 時代の持続性心房細胞に対するカテーテルアブレーション治療戦略。不整脈 Web Conference in Kyushu、WEB、2022 年 4 月 22 日

小杉隼平：冠動脈形成術とは？わかりやすく解説します！。第 9 回 WEB 公開講座、WEB、2022 年 4 月 22 日

上田恭敬：急性冠症候群について。国立病院機構大阪医療センター上田恭敬先生 WEB 講演会、WEB、2022 年 4 月 26 日

上田恭敬：CCS のガイドラインの変更について。国立病院機構大阪医療センター上田恭敬先生 WEB 講演会、WEB、2022 年 4 月 26 日

井上耕一：周術期抗血栓治療 UPDATE;JACRE がもたらした知見。イグザレルト WEB カンファレンス、WEB、2022 年 4 月 27 日

井上耕一：周術期抗血栓療法 UPDATE JACRE がもたらした知見。心房細動・治療と抗血栓療法の進歩、大阪市、2022 年 5 月 14 日

山根治野：同世代と共有したい、この一例。僕らの時代、WEB、2022 年 5 月 24 日

大橋拓也：私の拘る治療方針について。カテーテルアブレーションについて考える：心房細胞 Vol.2、WEB、2022 年 5 月 26 日

尾崎立尚：Perclose ProStyle の使用経験。Vessel Closure for EP Procedures、WEB、2022 年 6 月 1 日

中村雅之：息切れを訴える患者をどう診断するか。運動負荷心エコーの有効性について。第 43 回循環器病談話会、大阪市、2022 年 6 月 4 日

池岡邦泰：カテーテル治療の進歩と抗血栓療法の変遷。第 43 回循環器病談話会、大阪市、2022 年 6 月 4 日

尾崎立尚：新機器続々導入！大阪医療センターの不整脈診療の今。第 43 回循環器病談話会、大阪市、2022 年 6 月 4 日

井上耕一：Durable PVI 時代の心房細動アブレーションの戦略。第 3 回東北不整脈治療懇話会 WEB カンファレンス、WEB、2022 年 6 月 14 日

小杉隼平：ACS 治療戦略～積極的脂質低下療法を中心に～。PCI Special Lecture、WEB、2022 年 6 月 15 日

井上耕一：Durable PVI 時代の持続性心房細動に対するカテーテルアブレーション治療戦略。The 13th Young Investigator Meeting、WEB、2022 年 6 月 24 日

井上耕一：プライマリケア医に知ってほしい心房細動治療の新しい考え方。保土ヶ谷循環器セミナー、WEB、2022 年 6 月 27 日

井上耕一：Durable PVI 時代の心房細動アブレーションの戦略。Meet the Heart Rhythm Expert、WEB、2022 年 6 月 29 日

安部晴彦：心不全患者教育・地域連携への取り組みと ハートクラブネットワーク事業紹介。大阪ハートクラブ、WEB、2022 年 6 月 30 日

中村雅之：その息切れは大丈夫？心不全と息切れについてわかりやすく解説します。大阪医療センター第 10 回 WEB 公開講座、WEB、2022 年 6 月 30 日

中村雅之：心疾患合併患者での高血圧管理。Osaka 高血圧治療セミナー、WEB、2022 年 7 月 8 日

井上耕一：Durable PVI 時代の心房細動アブレーションの戦略。第 19 回播磨不整脈カンファレンス、WEB、2022 年 7 月 16 日

井上耕一：効くの？効かないの？AF アブレーションによる Atrial FMR に対する治療。心房細動患者の治療選択肢、WEB、2022 年 7 月 28 日

安部晴彦：心不全治療の新展開。脳卒中・心不全予防を考える会、WEB、2022 年 8 月 18 日

井上耕一：進行する超高齢化社会において心房細動患者における抗凝固療法はどうあるべきか。エリキュースインターネット講演会、WEB、2022年9月1日

池岡邦泰：OFDI guide debulking 症例②。阪神 OASIS、WEB、2022年9月6日

井上耕一：心房細動とは、どんな病気ですか？。第346回市民健康講座、大阪市、2022年9月21日

三嶋 剛：徐脈性不整脈とペースメーカーのお話。大阪医療センター第11回WEB公開講座、WEB、2022年10月18日

池岡邦泰：変則的 Leriche 症候群に EVT やって良かった一例。Soga Zoom@京阪、WEB、2022年10月15日

上田恭敬：心筋梗塞で命を落とさないために～心筋梗塞の前兆とは～。香川脳卒中・心臓病市民公開講座、高松市、2022年10月30日

山根治野：CLTI 症例にオセアナスを使ってみた。CLTI Treatment Seminar、WEB、2022年10月31日

井上耕一：日本からまだまだやれるぞ RCT！。EP 大学大学院、WEB、2022年11月16日

池岡邦泰：当院における IMPELLA×NO の導入プロトコル。iNO Heart Seminar、WEB、2022年12月1日

家原卓史：PCI of microcatheter/balloon-uncrossable RCA calcified lesion in a patient with pseudoxanthoma elasticum。Complex PCI Conference、WEB、2022年12月1日

家原卓史：循環器内科外来で行うさまざまな検査について。大阪医療センター第12回WEB公開講座、WEB、2022年12月14日

上田恭敬：心血管イベントの予防と脂質低下療法。Kowa Web Conference、WEB、2022年12月15日

山根治野：Join を活用した足病診療の実際。よろず相談説明会、WEB、2022年12月20日

山根治野：バルーンスタックのベイルアウトに苦慮した一例。LEADers 9th、WEB、2022年12月21日

中村雅之：心不全合併患者での高血圧管理。高血圧×心不全 Up to date。WEB、2023年2月1日

山根治野：A Case of Balloon Stuck in BTK artery with Severe Calcification。僕らの時代、WEB、

2023年2月27日

安部晴彦：心不全患者さんをいかに外来でフォローするか？ エビデンスとコツ。法円坂循環器フォーラム、大阪市、2023年3月2日

井上耕一：プライマリケア医に知ってほしい 心房細動治療の新しい考え方。「心房細動週間」に向け検脈の重要性を再考する、WEB、2023年3月6日

家原卓史：PCI of microcatheter/balloon-uncrossable RCA calcified lesion in a patient with pseudoxanthoma elasticum。吉川道場 in 大阪・奈良・和歌山～PCI 症例検討会～、WEB、2023年3月27日

山根治野：当院のレーザーカテーテル活用法とその成績。Peripheral Laser Catheter Turbo update、WEB、2023年3月13日

池岡邦泰：エキシマレーザー Turbo-Power カテーテルへの期待と注意点。Peripheral Laser Catheter Turbo update、WEB、2023年3月13日

上田恭敬：CCT 患者の治療方針はどうすればよいか。第29回 New Horizon for Cardiology、WEB、2023年3月18日

池岡邦泰：心不全合併の重症冠動脈疾患に対する血行再建（内科的アプローチ）。Interventional Heart Failure Therapy Provider Course2023、WEB、2023年3月18日

山根治野：バルーンスタックを生じた高度石灰化 BK 病変の一例。石の会、WEB、2023年3月20日

山根治野：こうして取り組んでいます！法円坂の下肢血管内治療。循環器病談話会、大阪市、2023年3月25日

安部晴彦：症例から学ぶ心不全の最近の診断と治療。循環器病談話会、大阪市、2023年3月25日

三嶋 剛：患者にとってのベストを目指す不整脈診療。循環器病談話会、大阪市、2023年3月25日

小児科

寺田志津子

小児科では、以下の疾患に重点的に取り組んでいる。

新生児医療：合併症をもつ母親から出生した新生児、健康新生児ならびに病的新生児、後期早産児、HIV 母子感染予防。

高度小児専門医療：骨系統疾患、発育・発達障害、内分泌、アレルギー、循環器、川崎病、神経、発達障害、児童虐待、感染症（HIV 感染症を含む）。

臨床研究として、日本小児白血病リンパ腫研究グループ（JPLSG）の参加施設として白血病・悪性リンパ腫の、主に長期フォローアップの研究に参加している。また、HIV 感染妊婦の全国疫学調査研究事業に参加している。

【2022 年度研究発表業績】

A-3

前川加奈美、小杉 恵、山本悦代、位田 忍、川井正信、恵谷ゆり、松井 太、松本富美、樋口伊佐子、伊藤衣里、菅田純子、宇田川直子：先天性副腎過形成女児における QOL についての検討「大阪母子医療センター雑誌」38(1):P.31-37、2022 年 11 月 30 日

B-4

田中瑞恵、外川正生、兼重昌夫、細川真一、寺田志津子、前田尚子、中河秀憲、七野浩之、吉野直人、杉浦 敦、喜多恒和：ヒト免疫不全ウイルス陽性女性と出生した児の長期予後に関する多施設コホート研究（JWCICS II）からみた出生時の予後 第一報第。第 36 回日本エイズ学会学術集会、浜松、2022 年 11 月 20 日

【班研究の報告書】

令和 4 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業 「HIV 感染者の妊娠・出産・予後に関するコホート調査を含む疫学研究と 情報の普及啓発方法の開発ならびに診療体制の整備と均てん化のための研究」班

外科
(肝胆膵外科・上部消化管外科・下部消化管外科・呼吸器外科・乳腺外科)

平尾素宏

外科は、外科治療およびがん治療における標準治療の確立と先進医療の開発をめざして、以下の方針に基づいて臨床および研究を行ってきました。

- 1) 専門性および先進性の高い医療
- 2) 医療の質の向上とチーム医療の推進
- 3) 標準治療の確立と臨床共同研究の推進
- 4) 各種がんに対する集学的治療の推進
- 5) 外科手術の改善と向上
- 6) 周術期管理の改善と向上

毎年、多くの学会発表、論文発表、司会および講演を行っています。若手医師も積極的に研究発表と論文発表を行ってくれました。熱心に若手指導を行ってくれたスタッフ各位の努力のおかげです。今後もより一層皆で精進していこうと思います。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Udagawa H, Takahashi S, Hirao M, Tahara M, Iwasa S, Sato Y, Hamakawa T, Shitara K, Horinouchi H, Chin K, Masuda N, Suzuki T, Okumura S, Takase T, Nagai R, Yonemori K : Liposomal eribulin for advanced adenoid cystic carcinoma, gastric cancer, esophageal cancer, and small cell lung cancer. 「Cancer Medicine」 12 (2) :P1269-1278、2022年7月

Makino T, Yamasaki M, Tanaka K, Yamashita K, Urakawa S, Ishida T, Shiraishi O, Sugimura K, Miyata H, Motoori M, Fujitani K, Takeno A, Hirao M, Kimura Y, Satoh T, Yano M, Eguchi H, Doki Y, Yasuda T: Multicenter randomised trial of two versus three courses of preoperative cisplatin and fluorouracil plus docetaxel for locally advanced oesophageal squamous cell carcinoma. 「Br J Cancer」 126(11):P1555-1562、2022年6月

Motoori M, Kurokawa Y, Takeuchi H, Sano T, Terashima M, Seiji Ito S, Komatsu S, Hosoya Y, Hirao M, Yamashita K, Kitagawa Y, Doki Y: Risk Factors for Para-Aortic Lymph Node Metastasis in Esophagogastric Junction Cancer: Results from

a Prospective Nationwide Multicenter Study. 「Ann Surg Oncol」29(9):P5649-5654、2022年9月

Kurokawa Y, Doki Y, Mizusawa J, Yoshikawa T, Yamada T, Kimura Y, Takiguchi S, Nishida Y, Fukushima N, Cho H, Kaji M, Hirao M, Sasako M, Terashima M: Five-year follow-up of a randomized clinical trial comparing bursectomy and omentectomy alone for resectable gastric cancer (JCOG1001). 「Br J Surg」110(1):P50-56、2022年12月

Aoyama S, Motoori M, Yamasaki M, Shiraishi O, Miyata H, Hirao M, Takeo A, Sugimura K, Makino T, Tanaka K, Hamakawa T, Yamashita K, Kimura Y, Fujitani K, Yasuda T, Yano M, Doki Y: The impact of weight loss during neoadjuvant chemotherapy on postoperative infectious complications and prognosis in patients with esophageal cancer: exploratory analysis of OGS1003. 「Esophagus.(E-Pub)」、2022年

Sakai D, Omori T, Fumita S, Fujita J, Kawabata R, Matsuyama J, Yasui H, Hirao M, Kawase T, Kishi K, Taniguchi Y, Miyazaki Y, Kawada J, Satake H, Miura T, Miyake A, Kurokawa Y, Yamasaki M, Yamada T, Satoh T, Eguchi H, Doki Y: Real-world effectiveness of third- or later-line treatment in Japanese patients with HER2-positive, unresectable, recurrent or metastatic gastric cancer: a retrospective observational study. 「International Journal of Clinical Oncology」27 : P1154-1163、2022年

Kajiwara T, Nishina T, Nakaya A, Yamashita N, Yamashita R, Nakamura Y, Shiozawa M, Yuki S, Taniguchi H, Hara H, Ohta T, Esaki T, Shinozaki E, Takashima A, Moriwaki T, Denda T, Ohtsubo K, Sunakawa Y, Horita Y, Kawakami H, Kato T, Satoh T, Ando K, Mizutani T, Yasui H, Goto M, Okuyama H, Yamazaki K, Yoshino T, Hyodo I: NOTCH gene alterations in metastatic colorectal cancer in the Nationwide Cancer Genome Screening Project in Japan (SCRUM-Japan GI-SCREEN). 「Journal of Cancer Research and Clinical Oncology」148(10):P2841-2854、2022年10月

Kanai M, Kawaguchi T, Kotaka M, Manaka D, Hasegawa J, Takagane A, Munemoto Y, Kato T, Eto T, Touyama T, Matsui T, Shinozaki K, Matsumoto S, Mizushima T, Mori M, Sakamoto J, Ohtsu A, Yoshino T, Saji S, Matsuda F: Poor association between dihydropyrimidine dehydrogenase (DPYD) genotype and fluoropyrimidine-induced toxicity in an Asian population. 「Cancer Medicine(On-line)」、2022年12月

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Suzuki Y, Matsumoto T, Terazawa T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Naito A, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y: TRESBIEN (OGSG 2101): encorafenib, binimetinib and cetuximab for early recurrent stage II/III BRAF V600E-mutated colorectal cancer. 「Future Oncol(E-Pub)」、2022年

Kotani D, Oki E, Nakamura Y, Yukami H, Mishima S, Bando H, Shirasu H, Yamazaki K, Watanabe J, Kotaka M, Hirata K, Akazawa N, Kataoka K, Shrutti Sharma, Vasily N. Aushev, Alexey Aleshin, Misumi T, Taniguchi H, Takemasa I, Kato T, Mori M, Yoshino T: Molecular residual disease and efficacy of adjuvant chemotherapy in patients with colorectal cancer. 「nature medicine」、2023年1月

Kato T, Kudo T, Kagawa Y, Murata K, Ota H, Noura S, Hasegawa J, Tamagawa H, Ohta K, Ikenaga M, Miyazaki S, Komori T, Uemura M, Nishimura J, Hata T, Matsuda C, Satoh T, Mizushima T, Ohno Y, Yamamoto H, Doki Y, Eguchi H: Phase II dose titration study of regorafenib in progressive unresectable metastatic colorectal cancer. 「nature portfolio」13:P2331、2023年

Fang W, Gotoh K, Kobayashi S, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Noda T, Takahashi H, Doki Y, Eguchi H, Umeshita K: Short- and Long-Term Impacts of Overweight Status on Outcomes Among Living Liver Donors. 「Transplant Proc.」54(3):P690-695、2022年4月

Yano K, Onishi H, Tsuboyama T, Nakamoto A, Ota T, Fukui H, Tatsumi M, Tanigaki T, Gotoh K, Kobayashi S, Honma K, Eguchi H, Tomiyama N: Noninvasive Liver Fibrosis Staging: Comparison of MR Elastography with Extracellular Volume Fraction Analysis Using Contrast-Enhanced CT. 「J Clin Med.」11(19):P5653、2022年9月25日

Nakachi K, Ikeda M, Konishi M, Nomura S, Katayama H, Kataoka T, Todaka A, Yanagimoto H, Morinaga S, Kobayashi S, Shimada K, Takahashi Y, Nakagohri T, Gotoh K, Kamata K, Shimizu Y, Ueno M, Ishii H, Okusaka T, Furuse J: Adjuvant S-1 compared with observation in resected biliary tract cancer (JCOG1202, ASCOT): a multicentre, open-label, randomised, controlled, phase 3 trial. 「Lancet」401(10372):P195-203、2023年1月21日

Matsusita K, Kobayashi S, Akita H, Konno M, Asai A, Noda T, Iwagami Y, Asaoka T, Gotoh K, Mori M, Doki Y, Eguchi H, Ishii H: Clinicopathological significance of MYL9 expression in pancreatic ductal adenocarcinoma. 「Cancer Rep」5(10):Pe1582、2022年10月

Ueno G, Iwagami Y, Kobayashi S, Mitsufuji S, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Asaoka T, Noda T, Gotoh K, Mori M, Doki Y, Eguchi H: ACAT-1-Regulated Cholesteryl Ester Accumulation Modulates Gemcitabine Resistance in Biliary Tract Cancer. 「Ann Surg Oncol」29(5):P2899-2909、2022年5月
Tumor endothelial cell-induced CD8⁺ T-cell exhaustion via GPNMB in hepatocellular carcinoma.

Takayama H, Kobayashi S, Gotoh K, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Asaoka T, Noda T, Wada H, Takahashi H, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: Prognostic value of functional SMAD4 localization in extrahepatic bile duct cancer. 「World J Surg Oncol」 20(1):P291、2022 年 9 月

Sakano Y, Noda T, Kobayashi S, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Gotoh K, Takahashi H, Asaoka T, Tanemura M, Wada H, Doki Y, Eguchi H: Tumor endothelial cell-induced CD8⁺ T-cell exhaustion via GPNMB in hepatocellular carcinoma. 「Cancer Sci」 113(5):P1625-1638、2022 年 5 月

Mitsufuji S, Iwagami Y, Kobayashi S, Sasaki K, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Asaoka T, Noda T, Gotoh K, Takahashi H, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: Inhibition of Clusterin Represses Proliferation by Inducing Cellular Senescence in Pancreatic Cancer. 「Ann Surg Oncol」 29(8):P4937-4946、2022 年 8 月

Sakano Y, Noda T, Kobayashi S, Kitagawa A, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Gotoh K, Asaoka T, Tanemura M, Umeshita K, Mimori K, Doki Y, Eguchi H: Clinical Significance of Acylphosphatase 1 Expression in Combined HCC-iCCA, HCC, and iCCA. 「Dig Dis Sci」 67(8):P3817-3830、2022 年 8 月

Toya K, Tomimaru Y, Kobayashi S, Hongyo H, Higashihara H, Ito T, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Akita H, Noda T, Gotoh K, Takahashi H, Asaoka T, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: A Case of Successfully Treated Varices at the Anastomosis Between the Native Jejunum and the Duodenal Graft After Pancreas Transplantation. 「Pancreas」 51(3):Pe60-e61、2022 年 3 月

Yamada D, Kobayashi S, Takahashi H, Yoshioka T, Iwagami Y, Tomimaru Y, Shigekawa M, Akita H, Noda T, Asaoka T, Gotoh K, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: Pancreatic CT density is an optimal imaging biomarker for earlier detection of malignancy in the pancreas with intraductal papillary mucinous neoplasm. 「Pancreatology」 22(4):P488-496、2022 年 5 月

Yasui H, Takeo A, Hara H, Imamura H, Akamatsu H, Fujitani K, Nakane M, Kondoh Nakayama C, Yukisawa S, Nasu J, Miyata Y, Makiyama A, Ishida H, Yoshida N, Matsumura E, Ishigami M, Sugihara M, Ochiai A, Doi T: Prospective analysis of the expression status of FGFR2 and HER2 in colorectal and gastric cancer populations: DS-Screen Study. 「Int J Colorectal Dis.」 37(6):P1393-1402、2022 年 6 月

Sakaue M, Sugimura K, Masuzawa T, Takeo A, Katsuyama S, Shinke G, Ikeshima R, Kawai K, Hiraki M, Katsura Y, Ohmura Y, Hata T, Takeda Y, Murata K: Long-term survival of HER2 positive gastric cancer patient with multiple liver metastases who obtained pathological complete response after systemic chemotherapy: A case report. 「Int J Surg Rep.」 94(107097):2022 年 5 月

Takahashi T, Saito Y, Nakatsuka R, Imamura H, Motoori M, Makari Y, Takeo A, Kishi K, Adachi S, Miyagaki H, Kurokawa Y, Yamasaki M, Eguchi H, Doki Y: Analysis of the risk factors for osteoporosis and its prevalence after gastrectomy for gastric cancer in older patients: a prospective study. 「Surg Today(OnLine)」、2022年9月

Kurokawa Y, Kawase T, Takeo A, Furukawa H, Yoshioka R, Saito T, Takahashi T, Shimokawa T, Eguchi H, Doki Y: Phase 2 trial of neoadjuvant docetaxel, oxaliplatin, and S-1 for clinical stage III gastric or esophagogastric junction adenocarcinoma. 「Ann Gastroenterol Surg.」、2022年10月

Ikeda M, Takiguchi N, Morita T, Matsubara H, Takeo A, Takagane A, Obama K, Oshio A, Nakada K: Quality of life comparison between esophagogastric and double tract reconstruction for proximal gastrectomy assessed by Postgastrectomy Syndrome Assessment Scale (PGSAS)-45. 「Ann Gastroenterol Surg」 1(11):、2022年11月

Tomihara H, Tomimaru Y, Hashimoto K, Fukuchi N, Yokoyama S, Mori T, Tanemura M, Sakai K, Takeda Y, Tsujie M, Yamada T, Miyamoto A, Hashimoto Y, Hatano H, Shimizu J, Sugimoto K, Kashiwazaki M, Matsumoto K, Kobayashi S, Doki Y, Euchi H: Preoperative risk score to predict subtotal cholecystectomy after gallbladder drainage for acute cholecystitis: Secondary analysis of data from a multi-institutional retrospective study (CSGO-HBP-017B). 「Asian J Endosc Surg」 15(3):P555-562、2022年7月

Masuda N, Ono M, Mukohara T, Yasojima H, Shimoi T, Kobayashi K, Harano K, Mizutani M, Tanioka M, Takahashi S, Kogawa T, Suzuki T, Okumura S, Takase T, Nagai R, Semba T, Zi-Ming Zhao, Min Ren, Yonemori K: Phase 1 study of the liposomal formulation of eribulin (E7389-LF): Results from the breast cancer expansion cohort. 「European Journal of Cancer」 168:P108-118、2022年

Sato H, Nishikawa K, Hamakawa T, Kusunoki C, Miyake M, Miyamoto A, Kato T, Mano M, Takami K, Hirao M: Evaluating Neoadjuvant Chemotherapy for Lower Esophageal Squamous Cell Carcinoma by Measuring Esophageal Wall Thickness. 「Anticancer Research」 42(11):P5655-5662、2022年11月

Hayashi C, Takahashi Y, Mori K, Kawai K, Miyo M, Toshiyama R, Sakai K, Hamakawa T, Doi T, Takeo A, Gotoh K, Miyazaki M, Takami K, Hirao M, Kato T: A case of infectious heterotopic ossification in the appendectomy scar, which formed an inflammatory granuloma. 「Journal of Surgical Case Reports」 8:P1-4、2022年8月

A-2

八十島宏行: 特殊な病態－潜在性乳癌「乳腺腫瘍学第4版」: P.401-402、2022年6月30日

水谷麻紀子：癌のマッピングの有用性「臨床医病理医のための乳腺病理の見かた
考え方」：P.47-48、2022年10月25日

A-3

今村沙弓、林千恵、水谷麻紀子、森清、眞能正幸、八十島宏行：血球減少・DIC
を契機に診断され、抗HER2療法が奏効した乳癌骨髄癌腫症の1例「乳癌の臨床」
37(6)：P.513-519、2022年

坂野悠、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本
敦史、加藤健志、森清、平尾素宏：根治切除後に急速な転移再発を認 Trousseau
症候群を合併した食道 mixed neuroendocrine-non-neuroendocrine neoplasms の1例
「日本消化器外科学会雑誌」55(6)：P.351-359、2022年6月

宮原智、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本
敦史、加藤健志、平尾素宏：術前 docetaxel + oxaliplatin + S-1 療法により組織学的
完全奏効を得た進行胃癌の1例「日外科系連合学会誌」47(4)：P.525-533、2022年
4月

宮原智、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本
敦史、加藤健志、平尾素宏：fluorouracil + folinate + oxaliplatin 療法が奏効し経口
摂取可能となった切除不能進行胃癌の2例「日外科系連合学会誌」47(4) P.534-
544、2022年4月

林千恵、酒井健司、俊山礼志、森清、後藤邦仁：腎細胞癌異時性胆嚢転移の1
切除例「胆道」36(4)：P.537-543、2022年10月

梅津匡宏、竹野淳、浜川卓也、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、土井
貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：COVID-19 肺炎罹患後に根治
手術を施行した胸部食道癌の一例「癌と化学療法」49(13)、2022年12月

本持知子、高見康二、加藤健志、後藤邦仁、竹野淳、土井貴司、酒井健司、浜川
卓也、高橋佑典、河合賢二、俊山礼志、平尾素宏：外科領域で診療看護（NP）が
行う特定行為と有用性「日外会誌」123(5)：P.474-476、2022年4月

B-1

Hirao M, Kimura Y, Yamamoto K, Imamura H, Omori T, Kurokawa Y, Eguchi H, Doki
Y: Preferred anastomosis method after distal gastrectomy in Japan. -From the results of
a multi-institutional randomized controlled trial-. KINGCA WEEK 2022, Suwon,
Korea, 2022年9月1日

B-2

Kagawa Y, Kotani D, Hideaki B, Takahashi N, Hamaguchi T, Kanazawa A,
Kato T, Ando K, Satake H, Shinozaki E, Sunakawa Y, Takashima A,
Yamazaki K, Yuki S, Nakajima H, Nakamura Y, Wakabayashi M, Taniguchi

H, Ohta T, Yoshino T : Plasma RAS dynamics and anti-EGFR rechallenge efficacy in patients with RAS/BRAF wild-type metastatic colorectal cancer: REMARRY and PURSUIT trials. ASCO2022, Chicago,USA,2022年6月3日

Yoshino T, Watanabe J, Shitara K, Yasui H, Ohori H, Shiozawa M, Yamazaki K, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Hihara M, Soeda J, Yamamoto K, Akagi K, Ochiai A, Uetake H, Tsuchihara K, Muro K : Panitumumab (PAN) plus mFOLFOX6 versus bevacizumab (BEV) plus mFOLFOX6 as first-line treatment in patients with RAS wild-type (WT) metastatic colorectal cancer (mCRC): Results from the phase 3 PARADIGM trial. ASCO2022, Chicago,USA,2022年6月3日

Kotaka M, Shirasu H, Watanabe J, Yamazaki K, Hirata K, Akazawa N, Matsuhashi N, Yokota M, Ikeda M, Kato K, Alexey Aleshin, Shruti Sharma, Kotani D, Oki E, Takemasa I, Kato T, Nakamura Y, Taniguchi H, Mori M, Yoshino T: Association of circulating tumor DNA dynamics with clinical outcomes in the adjuvant setting for patients with colorectal cancer from an observational GALAXY study in CIRCULATE Japan. ASCO2022, Chicago,USA,2022年6月3日

Shirasu H, Taniguchi H, Matsuhashi N, Kotaka M, Nakamura Y, Oki E, Miyamoto Y, Masuishi T, Komatsu Y, Teraishi F, Yamazaki K, Goto M, Shiozawa M, Kanazawa A, Takemasa I, Yi-Hsin Liang, Kun-Huei Yeh, Yoshino T, Sato A, Kato T: A randomized, double-blind, phase III study comparing ipfluridine/tipiracil hydrochloride therapy versus placebo in resected colorectal cancer patients who are positive for blood circulating tumor DNA after standard adjuvant therapy (EPOC 1905): ALTAIR trial in CIRCULATE-Japan (trial in progress). ASCO2022, Chicago,USA, 2022年6月3日

Kagawa Y, Kotani D, Bando H, Takahashi N, Horita Y, Kanazawa A, Kato T, Ando K, Satake H, Shinozaki E, Sunakawa Y, Takashima A, Yamazaki K, Yuki S, Nakajima H, Nakamura Y, Wakabayashi M, Taniguchi H, Ohta T, Yoshino T: Plasma RAS dynamics and efficacy of anti-EGFR rechallenge in patients with RAS/BRAF wild-type metastatic colorectal cancer: REMARRY and PURSUIT trials. ESMO GI 2022, Barcelona, Spain, 2022年6月29日

Masuishi T, Bando H, Satake H, Kotani D, Hamaguchi T, Shiozawa M, Ikumoto T, Kagawa Y, Yasui H, Moriwaki T, Kawakami H, Boku S, Oki E, Komatsu Y, Taniguchi H, Muro K, Kotaka M, Yamazaki K, Misumi T, Yoshino T, Kato T, Tsuji A: A multicenter randomized phase II study comparing CAPOXIRI plus bevacizumab and FOLFOXIRI plus bevacizumab as the first-line treatment for metastatic colorectal cancer: A safety analysis of the QUATTRO-II study. ESMO GI 2022, Barcelona, Spain, 2022年6月29日

Sawada K, Nitta H, Nakamura Y, Okamoto W, Taniguchi H, Komatsu Y, Hara H, Kato T, Nishida T, Ohta T, Esaki T, Yoshino T, Fujii S: HER2 intratumoral genetic and non-genetic heterogeneity in metastatic colorectal cancer. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Kobayashi S, Bando H, Taketomi A, Takamoto T, Shinozaki E, Shiozawa M, Hara H, Yamazaki K, Komori K, Matsuhashi N, Kato T, Kagawa Y, Yokota M, Oki E, Takahashi S, Yoshino T: A multicenter phase II clinical study evaluating the efficacy and safety of perioperative encorafenib, binimetinib plus cetuximab combination treatment in patients with surgically resectable BRAF V600E-mutant colorectal oligometastases (NEXUS). ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Suzuki Y, Matsumoto T, Terazawa T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Naito A, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y: TRESBIEN (OGSG 2101): Encorafenib, binimetinib and cetuximab for early relapse stage II/III BRAF V600E-mutated CRC. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Muro K, Watanabe J, Shitara K, Yamazaki K, Ohori H, Shiozawa M, Yasui H, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Hihara M, Soeda J, Yamamoto K, Akagi K, Ochiai A, Uetaka H, Tsuchihara K, Yoshino T: Early tumor shrinkage (ETS) and depth of response (DpR) analyses in metastatic colorectal cancer (mCRC) treated with first-line mFOLFOX6 plus panitumumab (PAN) or bevacizumab (BEV): Results from the phase III PARADIGM trial. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Yuki S, Yamazaki K, Sunagawa Y, Taniguchi H, Matsuishi T, Shiozawa M, Bando H, Nishina T, Yasui H, Ohta T, Takahashi N, Denda T, Yoshida K, Kato T, Oki E, Okugawa Y, Ebi H, Abe Y, Nomura S, Yoshino T: Analysis of plasma angiogenesis factors on the efficacy of 2nd-line (2L) chemotherapy (chemo) combined with angiogenesis inhibitors (AIs) in metastatic colorectal cancer (mCRC): Results from GI-SCREEN CRC Ukit study. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月9日

Shitara K, Muro K, Watanabe J, Yamazaki K, Ohori H, Shiozawa M, Yasui H, Oki E, Sato T, Naito T, Komatsu Y, Kato T, Soeda J, Yamamoto K, Yamashita R, Akagi K, Ochiai A, Uetake H, Tsuchihara K, Yoshino T: Negative hyperselection of patients with RAS wild-type metastatic colorectal cancer for panitumumab: A biomarker study of the phase III PARADIGM trial. ASCO-GI2023, San Francisco, 2023年1月19日

Watanabe J, Kagawa Y, Kotani D, Ando K, Chida K, Oba K, Bando H, Hoji H, Shimamoto S, Sakashita S, Kuwata T, Tsuboyama T, Uemura M, Uehara K, Ito M, Oki E, Takemasa I, Misugi E, Kato T, Yoshino T: Ensemble study: A multicenter, randomized, phase III trial to test the superiority of consolidation irinotecan,

capecitabine and oxaliplatin vs capecitabine and oxaliplatin following short course radiotherapy as total neoadjuvant therapy in patients with locally advanced rectal cancer. ASCO-GI2023, San Francisco,2023年1月19日

Tsukada Y, Bando H, Inamori K, Wakabayashi M, Togashi Y, Koyama S, Kotani D, Yuki S, Komatsu Y, Homma S, Taketomi A, Uemura M, Kato T, Fukui M, Kojima M, Sato A, Nishikawa H, Ito M, Yoshino T: Survival outcomes and functional results of VOLTAGE-A: Preoperative chemoradiotherapy (CRT) and consolidation nivolumab (nivo) in patients (pts) with both microsatellite stable (MSS) and microsatellite instability-high (MSI-H) locally advanced rectal cancer (LARC). ASCO-GI2023, San Francisco,2023年1月19日

Sakamoto Y, Morizane C, Okusaka T, Mizusawa J, Hiraoka N, Shirota T, Ueno M, Ikeda M, Ozaka M, Yamaguchi H, Mizuno N, Nishina T, Katanuma A, Kojima Y, Gotoh K, Okamura K, Kawamoto Y, Sugimori K, Terashima T, Furuse J: Impact of ERCC1 on the outcomes of chemotherapy against advanced biliary tract cancer: an ancillary study of the Japan Clinical Oncology Group randomized phase III trial (JCOG1113). APASL oncology 2022, Takamatsu,2022年9月1日

Mitsunaga S, Ikeda M, Nomura S, Morizane C, Todaka A, Kamei K, Yanagibashi H, Mizuno N, Gotoh K, Kawamoto Y, Shirakawa H, Okano N, Nomura T, Takahashi A, Makino I, Anbo Y, Ohta K, Katayama H, Konishi M, Ueno M: Effects of gene expression in 5-FU metabolic pathways in a phase III trial evaluating adjuvant S-1 therapy compared to surgery alone following curative resection for biliary tract cancer (JCOG1202A1). ASCO-GI2023, San Francisco,2023年1月19日

Yasojima H, Imoto S, Nagashima T, Onishi T, Takashima T, Kitada M, Kawada M, Hayashida T, Naoi Y, Aihara T, Wada N, Kawabata H, Yoshida M, Uhi Toh, Yoneyama K, Yamada A, Tsuda H, Masuda N, Saito M, Oba, Sakamoto J: Observational study of axilla treatment for breast cancer patients with 1 to 3 positive micrometastases or macrometastases in sentinel lymph nodes. ASCO2022, Chicago,USA,2022年6月3日

Hattori M, Naito Y, Yamanaka T, Yasojima H, Nakamura R, Watanabe J, Yoshinami T, Ozaki Y, Fujisawa T, Nakamura Y, Bando H, Yoshino T, Yamaguchi R, Imoto I, Iwata H: Detection of presumed germline pathogenic variants of hereditary breast cancer predisposition genes in circulating tumor DNA: SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN. ASCO2022, Chicago,USA,2022年6月3日

Futamura M, Nakayama T, Yoshinami T, Oshiro C, Ishihara M, Morita M, Watanabe A, Taniguchi A, Tsukabe M, Shimoda M, Mitta K, Chihara Y, Yasojima H, Ouchi Y, Tokumaru Y, Ishihara T, Masuda N: Detection of high-risk patients resistant to CDK4/6 inhibitors with hormone receptorpositive HER2-negative breast cancer in Japan. SABCs 2022, San Antonio,USA,2022年12月6日

B-3

Oki E, Ando K, Takemasa I, Kato T, Kotaka M, Watanabe J, Nakamura Y, Kotani D, Yoshino T, Mori M : The first 1365 patients results of CIRCULATE Japan: The ctDNA Dynamics after Surgery ctDNA の術後ダイナミクス:CIRCULATE Japan の中間結果報告。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜、2022 年 7 月 21 日

植村 守、瀧口暢生、中上勝一郎、楠 誓子、関戸悠紀、紀波多 豪、浜部敦史、荻野崇之、三吉範克、高橋秀和、加藤健志、池田正孝、関本貢嗣、土岐祐一郎、江口英利：直腸癌局所再発に対する外科治療の現状。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

植村 守、瀧口暢生、中上勝一郎、楠誓子、関戸悠、紀波多 豪、浜部敦史、荻野崇之、三吉範克、高橋秀和、加藤健志、池田正孝、土岐祐一郎、江口英利：進行再発直腸癌に対する腹腔鏡下手術の要点。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 9 日

山下公太郎、田中晃司、牧野知紀、金村剛志、百瀬洸太、浜川卓也、竹野 淳、白石治、西塔拓郎、山本和義、高橋 剛、黒川幸典、中島清一、宮田博志、平尾素宏、安田卓司、江口英利、土岐祐一郎：高齢者食道癌に対する術前補助療法を含めた手術治療の短期長期成績。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 16 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：腺癌肺転移に対する外科的切除の有用性に関する検討。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜、2022 年 7 月 20 日

後藤邦仁：肝臓切除におけるエネルギーソースとそれに伴う視野の確保。JDDW2022 第 20 回日本消化器外科学会大会共催セミナー、福岡、2022 年 10 月 28 日

竹野 淳、本告正明、岸漣太郎、文 正浩、中原裕次郎、大森 健、原 尚志、新野直樹、平尾素宏、浜川口也、西川和宏、杉村啓二郎、益澤 徹、宮崎安弘、藤谷和正、山本和義、黒川幸典、土岐祐一郎：StageIV胃癌に対する Conversion Surgery の予後因子解析～他施設共同後方視研究の結果から～。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

本告正明、黒川幸典、西川和宏、宮垣博道、大森 健、古川陽菜、木村 豊、今村博司、竹野 淳、益澤 徹、松山 仁、土岐祐一郎：胃癌術後補助化学療法中の支持療法の有用性についての多施設共同ランダム化比較試験。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

服部正也、内藤陽一、山中隆司、八十島宏行、中村力也、渡邊純一郎、吉波哲大、尾崎由記範、中村能章、坂東英明、吉野孝之、山口 類、井本逸勢、岩田広治：ctDNA

による遺伝性乳癌原因遺伝子の生殖細胞系列病的バリエーションの推定：SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 7 月 1 日

Yasojima H, Sakai S, Yamashita R, Sawada K, Yoshikawa A, Horasawa S, Fujisawa T, Nakamura Y, Yamashita T, Yamanaka T, Hattori M, Mukohara T, Yoshino T, Naito Y, Iwata H: Gut microbiome comparison between metastatic breast cancer and other cancers, and its association with subtype and efficacy of immune checkpoint inhibitors。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 21 日

高橋佑典、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：ロボット支援側方リンパ節郭清における安全性に留意したエネルギーデバイスを選択。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

本持知子、高見康二、加藤健志、後藤邦仁、竹野淳、平尾素宏：外科領域で診療看護師 (NP) が行う特定行為と有用性。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

B-4

高見康二、土井貴司、安藤性實、宮本智、小河原光正、井上敦夫、森清：3 回手術後に切除不能となり EGFR-TKI 耐性となった多発肺癌に、コンバージョン手術と放射線治療を行った 1 例。第 63 回日本肺癌学会学術集会、福岡、2022 年 12 月

本告正明、青山修宇、山崎誠、平尾素宏、宮田博志、白石治、牧野知紀、安田卓司、矢野雅彦、土岐祐一郎：食道癌術前化学療法中の体重減少が術後感染性合併症におよぼす影響について。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜、2022 年 7 月 20 日

畑裕基、山下大輔、村津圭治、竹野淳、平尾素宏、吉野宗宏：病院薬剤師による Web ミーティングツールを用いた内服抗がん剤患者に対する薬学的介入。第 30 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日

太田高志、山崎健太郎、賀川義規、小谷大輔、坂東英明、加藤健志、沖英次、篠崎英司、砂川優、結城敏志、中島裕理、中村能章、若林将史、谷口浩也、吉野孝之：RAS/BRAF 野生型進行再発大腸癌患者における血中バイオマーカーのダイナミクスと抗 EGFR 抗体リチャレンジの有効性。REMARRY 試験/PURSUIT 試験。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 20 日

澤田憲太郎、Hiroaki Nitta、中村能章、岡本渉、谷口浩也、小松嘉人、原浩樹、加藤健志、仁科智裕、太田高志、薦田正人、吉野孝之、藤井誠志：切除不能大腸がんにおける腫瘍内 HER2 不均一性の検討。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 20 日

森脇俊和、坂東英明、佐竹悠良、小谷大輔、濱口哲弥、沖 英次、小松嘉人、谷口浩也、室 圭、小高雅人、山崎健太郎、三角俊裕、吉野孝之、辻 晃仁、加藤健志：切除不能大腸癌に対する CAPOXIRI+BEV vs FOLFOXIRI+BEV:QUATTRO-II 試験の安全性解析。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 22 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：高齢者膵癌に対する外科的治療の安全性に関する検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月

Gotoh K, Sakai K, Toshiyama R, Yanagisawa K, Miyo M, Takahashi Y, Hamakawa T, Takeo A, Kato T, Hirao M：Long-term outcomes for pT1 pancreatic ductal adenocarcinoma。第 34 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、松山、2022 年 6 月 10 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、柳澤公紀、河合賢二、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：多発リンパ節転移を疑われ化学療法施行後に根治切除を施行した肝内胆管癌の 2 症例。第 58 回日本胆道学会学術集会、横浜、2022 年 10 月 14 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：高齢者膵癌に対する術後補助化学療法の有用性に関する検討。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 26 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：肝静脈に接する肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除術。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

竹野 淳、平尾素宏、浜川卓也、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、岡田公美子、高橋佑典、酒井健司、水谷麻紀子、八十島宏行、土井貴司、後藤邦仁、増田慎三、加藤健志、高見康二：食道浸潤長に基づく食道胃接合部癌に対する治療戦略の検証。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

竹野 淳、平尾素宏、浜川卓也、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志：80 才以上の高齢者に対する食道癌手術の治療成績の検討。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 20 日

竹野 淳、平尾素宏、浜川卓也、柳澤公紀、俊山礼志、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志：ロボット支援下食道切除導入期の治療成績。第 76 回日本食道学会学術集会、東京・WEB、2022 年 9 月

広田将司、高橋 剛、齋瀬百合奈、川端良平、中塚梨絵、今村博司、本告正明、間狩洋一、竹野 淳、岸 健太郎、足立真一、宮垣博道、黒川幸典、山崎 誠、江口英

利、土岐祐一郎：胃癌切除術後骨障害に対するミノドロン酸治療の服薬継続における課題：多施設ランダム化比較試験の解析から。第95回日本胃癌学会総会、札幌、2023年2月24日

岸健太郎、文正浩、中原裕次郎、山本和義、大森健、原尚志、益澤徹、杉村啓二郎、本告正明、竹野淳、浜川卓也、黒川幸典、藤谷和正、土岐祐一郎：pCR胃癌の予後と術後補助療法に関する検討～多施設後向き研究～。第95回日本胃癌学会総会、札幌、2023年2月24日

杉村啓二郎、本告正明、山本和義、岸健太郎、益澤徹、大森健、原尚志、中原裕次郎、竹野淳、浜川卓也、黒川幸典、土岐祐一郎：術前化学療法を施行した進行胃癌に対する開腹vs腹腔鏡手術の治療成績の検討。第95回日本胃癌学会総会、札幌、2023年2月24日

土井貴司、高見康二、小河原光正、木村剛、宮本智、安藤性實：偽陽性の肺門縦隔リンパ節腫脹を伴った混合型小細胞癌の1切除例。第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会、WEB、2022年5月27日

土井貴司、高見康二、徳永拓也、森清、井上敦夫：限局性悪性中皮腫の1切除例。第3回日本石綿・中皮腫学会学術集会、西宮、2022年9月17日

土井貴司、徳永拓也、高見康二：縮小ののちに急速な際増大がみられた胸腺癌の1切除例。第42回日本胸腺研究会、WEB、2023年2月

八十島宏行、林千恵、今村沙弓、岡田公美子、清水幸生、水谷麻紀子：T4a-c乳癌の臨両病理学的因子と予後との検討。第30回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022年6月30日

多田寛、増田紘子、安立弥生、岩谷胤生、上本康明、大谷陽子、梶原友紀子、北川大、古川孝広、相良安昭、枝園忠彦、田辺裕子、谷岡真樹、服部正也、原文堅、八十島宏行、吉村健一、岩田広治、増田慎三：転移・再発乳癌における遺伝子パネル検査F1CDxとF1LCDxの治療方針決定に与える影響を検討する観察研究。第30回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022年7月1日

増田紘子、多田寛、安立弥生、岩谷胤生、上本康明、北川大、古川孝広、相良安昭、枝園忠彦、原文堅、八十島宏行、吉村健一、岩田広治、増田慎三：転移・再発乳癌における遺伝子パネル検査の観察研究REIWA studyの中間解析。第60回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022年10月20日

水谷麻紀子、林千恵、今村沙弓、岡田公美子、八十島宏行：転移・再発乳癌に対する一次治療としてのフルベストラント+CDK4/6阻害剤。第30回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022年6月30日

浜川卓也、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：噴門側胃切除術後の体重減少の影響とリスク因子に関する検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、 2022 年 4 月

浜川卓也、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：胃癌肝転移切除例の治療成績。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 20 日

浜川卓也、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：HALS 胃管作成の膈上縁郭清における術野展開の工夫。第 76 回日本食道学会学術集会、東京、2022 年 9 月 25 日

浜川卓也、竹野 淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：プロクター指導下のロボット支援腹腔鏡下胃切除術の導入と初期成績。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 9 日

浜川卓也、竹野 淳、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：Internal Organ Retractor をコンソール操作のみで体腔内装脱着する工夫。第 15 回日本ロボット外科学会学術集会、名古屋、2023 年 2 月 2 日 優秀演題

浜川卓也、竹野 淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：困難症例（進行胃癌、肥満症例）に対する腹腔鏡下胃切除術におけるガーゼテーピング法。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 25 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：胆嚢癌疑診例に対する Laennec 被膜を意識した腹腔鏡下全層胆嚢摘出術症例の検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、 2022 年 4 月

Sakai K, Gotoh K, Toshiyama R, Terakawa K：Radical resection of an initially unresectable intrahepatic cholangiocarcinoma after chemotherapy with gemcitabine plus S-1: a case report。第 34 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、松山、2022 年 6 月 10 日

酒井健司、俊山礼志、後藤邦仁、柳澤公紀、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：下大静脈腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対し肝動注療法後体外循環を用いて肝切除し得た一例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、 2022 年 7 月 1 日

酒井健司、後藤邦仁、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：Unresectable , Borderline resectable 膵癌に対する化

学(放射線)療法後 Conversion surgery の治療成績。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 21 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、福武伸康：臍頭十二指腸切除後に発症した魚骨による胆管内異物の一例。第 58 回日本胆道学会学術集会、横浜、2022 年 10 月 14 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、大崎真央、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：当院における抗血栓薬内服下の急性胆嚢炎に対する緊急胆嚢摘出術の検討。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：抗血栓薬内服下の急性胆嚢炎に対する緊急腹腔鏡下胆嚢摘出術の検討。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

高橋佑典、三代雅明、柳澤公紀、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：当院における直腸癌に対する TaTME、ロボット支援下手術の治療成績。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 15 日

高橋佑典、柳澤公紀、三代雅明、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：当院における直腸癌に対するロボット支援下手術。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 22 日

高橋佑典、杉本直俊、大原信福、吉岡憐一、賀川義規、内藤敦、玉川浩司、小森孝通、下川敏雄、三吉範克、高橋秀和、植村守、村田幸平、土岐祐一郎、江口英利：補助化学療法としてのフッ化ピリミジン+オキサリプラチン併用療法に不応となった再発結腸・直腸がんにおける FOLFIRI+Ramucirumab 併用療法の第 II 相試験。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 20 日

高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野淳、後藤邦仁、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：当院における若年者大腸癌症例の検討。第 98 回大腸癌研究会学術集会、東京、2023 年 1 月 27 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、宮崎道彦、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、土井貴司、竹野淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：sT4b 結腸癌に対する腹腔鏡下手術の工夫と治療成績。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、竹野淳、後藤邦仁、平尾素宏：閉塞性大腸癌に対する大腸ステントを用いた Bridge

to Laparoscopic Surgery。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 22 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、宮崎道彦：他臓器合併切除を伴う進行結腸癌に対する低侵襲手術。第 77 回日本大腸肛門病学会学術集会、幕張、2022 年 10 月 15 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、竹野淳、後藤邦仁、宮崎道彦、平尾素宏：COVID-19 パンデミックの大腸癌診療に対する影響。JDDW2022、福岡、2022 年 10 月 28 日

河合賢二、畑泰司、平木将之、池嶋遼、新毛豪、勝山晋亮、桂宜輝、大村仁昭、杉村啓二郎、益澤徹、武田裕、村田幸平：当院における cT4b 結腸癌に対する合併切除を伴う腹腔鏡下手術症例の検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

河合賢二、畑泰司、平木将之、池嶋遼、福本結子、草深弘志、阪上将基、仲田佳津明、木原悠花梨、春名健伍、長谷川誠、勝山晋亮、新毛豪、桂宜輝、大村仁昭、杉村啓二郎、益澤徹、武田裕、村田幸平：化学療法後に liver-first approach で切除した巨大な肝転移を伴う閉塞性直腸癌の 1 例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典：急性胆嚢炎の緊急手術症例の検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月

Toshiyama R, Sakai K, Gotoh K : Two cases of lymphoepithelial cyst of the pancreas。第 34 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、松山、2022 年 6 月 10 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏、原修一郎：切除不能肝内胆管癌に対して GCS 療法を施行し、Conversion surgery を施行した 1 例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：当院における急性胆嚢炎に対する緊急手術例の治療成績。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 21 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、梅津匡宏、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、河合賢二、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：胆嚢癌との鑑別が困難であった黄色肉芽腫性胆嚢炎の 1 例。第 58 回日本胆道学会学術集会、横浜、2022 年 10 月 14 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、寺川航基、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：TAPP 法で修復した Plug 法術後の再発鼠径部膀胱ヘルニアの 1 例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、豊後雅史、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：腹腔鏡下 IPOM 修復術後の腹壁癒痕ヘルニア再発に対して再度腹腔鏡下 IPOM 修復術を行った 1 例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

柳澤公紀、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏：超高齢患者における閉塞性大腸癌に対する bridge to surgery。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

大崎真央、波多 豪、関戸悠紀、荻野崇之、三吉範克、高橋秀和、植村 守、土岐祐一郎、江口英利：下部直腸に発生した扁平上皮癌の 1 例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

大崎真央、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏：閉塞性膵炎を合併した膵管内乳頭粘液性腺癌に対して根治切除を施行した 1 例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

今村紗弓、森 清、水谷麻紀子、林千恵、岡田公美子、眞能正幸、八十島宏行、増田慎三：HER2 陽性乳癌に対する術前薬物療法の効果予測に関する臨床病理学的研究。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 7 月 1 日

林千恵、増田慎三、今村紗弓、岡田公美子、水谷麻紀子、八十島宏行：再発乳癌の発見契機と再発診断における NCC-ST-439 の有用性の検討。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 6 月 30 日

林 千恵、赤澤 香、岡田公美子、八十島宏行：術後 13 年目再発治療中に、確定診断に難渋した HER2 陽転化胃転移の一例。第 20 回日本乳癌学会近畿地方会、和歌山、2022 年 12 月 3 日

梅津匡宏、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：COVID-19 肺炎罹患後に根治手術を施行した胸部食道癌の一例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

梅津匡宏、三代雅明、加藤健志：手術治療が奏功した急性偽性結腸閉塞症(Ogilvie 症候群) の 2 例。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 22 日

梅津匡宏、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：腓神経鞘腫に対して外科的切除を行った一例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

梅津匡宏、浜川卓也、竹野 淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：骨肉腫術後肺転移に対し Pazopanib 投与中に消化管穿孔をきたした一例。第 59 回日本腹部救急医学会総会、沖縄、2023 年 3 月 10 日

阿部優、俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：放射線治療後に膈転移を来した子宮頸癌の 1 例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

阿部 優、浜川卓也、竹野 淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：喉摘後咽頭狭窄を有する患者の早期残胃癌に対し経口細径内視鏡補助下胃内手術を施行した 1 例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 9 日

阿部 優、浜川卓也、竹野 淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：幽門側胃切除術後の単独脾転移に対し腹腔鏡下残胃温存脾臓摘出術を施行した一例。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 25 日

今西涼華、高橋佑典、加藤健志、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野淳、後藤邦仁、平尾素宏：骨盤内に進展した臀部 epidermal cyst に対して外科的切除を行った一例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

萩原佳菜、俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：血友病患者に発症した出血性胆嚢炎に対して緊急腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した 1 例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

萩原佳菜、河合賢二、加藤健志、徳山信嗣、高橋佑典、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏：下行結腸穿孔を来した血管型 Ehlers-Danlos 症候群の一例。第 59 回日本腹部救急医学会総会、沖縄、2023 年 3 月 10 日

徳永拓也、土井貴司、高見康二：FDG-PET で集積を示し、胸腺腫と鑑別が困難であったコレステリン肉芽腫の一切除例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

豊後雅史、俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：重症筋無力症（myasthenia gravis：MG）患者に発症

した臍ヘルニアに対して外科手術を行った 1 例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 10 日

豊後雅史、酒井健司、後藤邦仁、萩原佳菜、梅津匡宏、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：広範囲の腸管嚢胞様気腫症に対して保存的治療で軽快した 3 例。第 59 回日本腹部救急医学会総会、沖縄、2023 年 3 月 9 日

豊後雅史、高橋佑典、加藤健志、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：非代償性肝硬変を合併する大腸癌症例に対して腹腔鏡手術を行った 2 例。第 206 回近畿外科学会、大阪、2023 年 3 月 18 日

松井雅貴、櫻井克宣、黒田顕慈、田嶋哲三、井関康仁、長谷川 毅、村田哲洋、高台真太郎、西居孝文、日月亜紀子、久保尚士、清水貞利、金沢景繁、井上 透、西口幸雄：NAC-SOX 療法で組織学的治療効果判定 Grade3 が得られた StageIII 食道胃接合部癌の一例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

竹内太郎、東山智彦、土井貴司、高見康二：新型コロナウイルス感染後に手術を施行した若年者の自然気胸の 1 例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

B-5

加藤健志：大腸癌の遺伝子変異と治療戦略。第 36 回兵庫大腸癌治療研究会、神戸、2022 年 4 月 22 日

加藤健志：進行・再発大腸癌グレードに見合った治療戦略とガイドライン 2022。第 9 回平成大腸癌カンファレンス、神戸・WEB、2022 年 5 月 11 日

加藤健志：大腸がんとは。日本人が一番かかる大腸がん～実は身近にある「がん」、まずは知ることから～WEB シンポジウム、大阪・WEB、2022 年 5 月 22 日

加藤健志：進行再発大腸癌 up date。第 2 回川崎北部大腸セミナー、横浜・WEB、2022 年 5 月 26 日

加藤健志：進行再発大腸癌治療 update。第 12 回城北大腸癌治療セミナー、東京・WEB、2022 年 6 月 24 日

加藤健志：若手外科医への提言。OSAKA U18C-STAR-Colorectal Surgeon's Chemotherapy Seminar-、大阪、2022 年 7 月 29 日

加藤健志：進行・再発大腸がん薬物療法 Update。Chugai Colorectal Cancer web Symposium in 新潟、大阪、2022 年 8 月 6 日

加藤健志：大腸がん個別化医療の新たな展開。Chugai Colorectal Cancer web Symposium in HOKKAIDO、札幌、2022年8月26日

加藤健志：進行・再発大腸がん薬物療法 Update。第47回日本大腸肛門病学会九州地方大会/第38回九州ストーリーマリハビリテーション研究会アフタヌーンセミナー、長崎、2022年10月1日

加藤健志：大腸がん個別化医療～国内外ガイドラインを踏まえて～。Chugai Colorectal Cancer web Symposium in KYUSHU、福岡、2022年10月7日

加藤健志：進行・再発大腸がん薬物療法 Update。高知大腸癌薬物療法セミナー、高知・WEB、2022年10月12日

加藤健志：BESTな大腸癌治療を目指して～進行・再発大腸癌化学療法戦略をUPDATE～。消化器癌カンファレンス in 香川、高松、2022年12月23日

加藤健志：大腸癌の治療戦略について。CRC Seminar in Hokuriku、金沢、2023年2月25日

竹野 淳：肥満2型糖尿病患者に対する減量・代謝改善手術について。法円坂地域医療フォーラム、大阪、2022年5月21日

竹野 淳：胃癌治療ガイドラインと薬物療法について。Gastric Cancer Web Seminar、大阪、2022年7月7日

八十島宏行：HER2陽性乳癌でTCbHPを選ぶ意義とマネジメント。乳がんWebセミナー、大阪、2022年7月13日

八十島宏行：企業が実施する従業員向け乳がん検診に対する助言。アドバイザリー会議、大阪、2022年7月28日

八十島宏行：TNBCの治療戦略。Chugai Nakanoshima Breast Cancer Seminar、大阪、2022年11月26日

安井翔之介、浜川卓也、河部彩香、関 舞、宮城正和、梅津匡宏、竹 野淳、藪みなみ、荒川和子、和田紋佳、石田みどり、大土彩子、山本真弓、内川厳志、内藤裕子、石田 永、平尾素宏：がん患者に対するNST早期介入の意義に関する検討。第30回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022年9月17日 **優秀演題**

浜川卓也：進行・再発胃癌に対するあきらめない集学的治療アプローチ。Gastric Cancer Web Seminar、大阪、2022年12月5日

浜川卓也：腹腔鏡下胃切除術。第 15 回大阪内視鏡外科手術セミナー、川崎、2022 年 12 月 17 日

B-6

八十島宏行：HER2 陽性乳がん周術期における治療戦略。Breast Cancer Professional Conference、大阪、2022 年 5 月 24 日

八十島宏行：HER2 陽性乳癌で TcbHP を選ぶ理由とマネジメント。はりま乳癌治療を考える会 2022、兵庫、2022 年 7 月 21 日

八十島宏行：患者目線で考える乳がん治療～あなたが乳がん治療を受ける立場なら～。乳がん診療サポートセミナー～本当に知りたい乳がん治療～、大阪、2022 年 8 月 24 日

八十島宏行：病院・薬局連携体制のために知っておくべき乳癌治療のこと。薬薬連携 Web セミナー、大阪・WEB、2023 年 3 月 8 日

八十島宏行：複雑化する乳癌診療において各施設が果たすべき役割について。がん診療セミナー、八尾・WEB、2023 年 3 月 24 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：切除不能肝内胆管癌に対して化学療法後二期的肝切除(ALPPS)を施行した一例。第 50 回近畿肝臓外科学研究会、大阪、2023 年 1 月 28 日

高橋佑典：大腸がん診療におけるロボット支援下手術の現状。日本人が一番かかる大腸がん～実は身近にある「がん」、まずは知ることから～WEB シンポジウム、大阪・WEB、2022 年 5 月 22 日

俊山礼志：鼠経ヘルニア・腹壁ヘルニアについて。大阪市中央区南医師会・法円坂フォーラム、大阪、2022 年 7 月 30 日

今西涼華、高橋佑典、加藤健志、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：骨盤内に進展した臀部 epidermal cyst に対して外科的切除を行った一例。第 642 回大阪外科集談会、大阪、2022 年 5 月 14 日

今西涼華、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏：十二指腸乳頭部原発 mixed adenoneuroendocrine carcinoma(MANEC) の 1 切除例。第 114 回大阪胆道疾患研究会、web、2023 年 3 月 17 日

萩原佳菜、河合賢二、加藤健志、高橋佑典、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：下行結腸穿孔を来した血管型 Ehlers-Danlos 症候群の一例。第 644 回大阪外科集談会、大阪、2022 年 9 月 10 日

徳永拓也、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：成人回腸重複腸管穿孔の一例。第 647 回大阪外科集談会、大阪、2023 年 3 月 4 日

豊後雅史、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：広範囲の腸管嚢胞様気腫症に対して保存的加療で軽快した 3 例。第 645 回大阪外科集談会、大阪、2022 年 11 月 19 日 最優秀演題 2022 年度優秀演題

B-8

酒井健司：第 51 回専門医を目指す消化器外科セミナー、大阪、2022 年 12 月 23 日

B-9

竹野淳：DOCTOR's FRAP。FM 大阪 LOVE FLAP、大阪、2022 年 11 月 21 日

酒井健司：DOCTOR's FRAP。FM 大阪 LOVE FLAP、大阪、2023 年 1 月 11 日

高橋佑典：DOCTOR's FRAP。FM 大阪 LOVE FLAP、大阪、2022 年 10 月 27 日

形成外科

吉龍澄子

1999年7月に形成外科の常勤医1名が赴任してスタートし、2000年4月1日より診療科として形成外科を標榜しました。2007年4月より外科の中で診療を行ってききましたが、2009年7月より形成外科は外科から独立した診療科となりました。

当院は形成外科学会の教育認定施設に認定され、形成外科専門医取得のための卒後教育にも当たっています。新専門医制度では、大阪大学形成外科の中でのカリキュラムとなっています。現在形成外科医が3人の体制で診療を行っています。

当科は、自科で行う診療および複数の科とのチーム医療における再建外科を2本の柱として行ってきました。

自科としての診療では、主に顔面の皮膚悪性腫瘍、眼瞼悪性腫瘍、眼瞼形成術、皮膚皮下腫瘍、ケロイド、瘢痕拘縮などの皮膚外科手術を扱っています。

顔面の皮膚癌について、当科ではできるだけ整容的にそして侵襲を少なく治療するために、植皮方法や皮弁の切開線の工夫を行ってきました。顔面の腫瘍の中でも特に眼瞼の腫瘍は、腫瘍の治療という点からだけでなく、眼瞼の機能、および整容的にも満足いく治療を行うのが重要と考えて治療方針を決め、再建術式も眼輪筋双茎皮弁やminimal cheek皮弁、二期再建での眼輪筋皮弁redraping法などの術式を考案して、機能や外観をできるだけ左右対称に元通りになるように努めています。腫瘍の完全切除と可能な限り正常組織を温存するために、腫瘍切除後人工真皮で一時被覆し、病理学的に完全切除を確認後に再建する二期再建の症例が増加しています。

腫瘍以外では、眼瞼下垂や睫毛内反症、眼瞼外反などのご紹介が近隣クリニック様より多くあり、こうした手術をほぼ毎週数例以上行っています。特に眼瞼下垂の手術では整容面にも配慮し、眼瞼の陥凹を改善するために眼窩脂肪の固定術の追加などいくつか工夫を行い、整容的な結果を心がけています。また眼科のご協力のもと、ドライアイなど機能にも注意して手術をするようにしています。

その他、治療困難な真性のケロイドに対して、切除後の放射線照射療法を含む治療に取り組んでいます。当科は、全国で唯一ケロイドに対して組織内照射を行っていますので、症例や部位に応じて、切除後放射線外照射（電子線照射）あるいは組織内照射を使い分けて治療しています。ケロイドの他にも術後の創部の瘢痕拘縮の修正術も行っています。

もう1つの診療の柱として当科では、院内の外科系各科の癌の切除後の再建に取りくんできました。頭頸部再建、乳癌再建が主なものですが、その他、四肢、体幹の再建も増加しています。頭頸部再建症例は形成外科開設以来300例を超え、大部分がマイクロサージェリーによる遊離皮弁の症例です。外科、耳鼻科、口腔外科、形成外科、放射線科、脳外科などによるチーム医療体制が良好なため、安定した再建成績を維持できております。特に下顎再建では、顔面神経下顎縁枝麻痺による術後の口唇の変形予防のための手術（筋膜移植）も行っています。

乳房再建は、主に自家組織の皮弁による再建を行ってきました。2013年4月よりシリコンインプラントによる乳房再建も保険適応が認められたため、人工乳房による再建をスタートしました。2019年7月よりアラガン社のシリコンインプラントの使用が中止になりましたが、その後ほかのメーカーのインプラントが保険適応になり、インプラントによる乳房再建を再開しています。現在は自家組織の皮弁による乳房再建とインプラントによる再建のどちらも行っています。また他院で以前切除された乳癌術後の二次的な乳房再建も行っております。

今後も顔面や眼瞼の悪性腫瘍、頭頸部や乳房の再建外科、眼瞼の形成外科、皮膚外科を中心に診療する方針です。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Yoshitatsu S, Shiraishi M, Arika T : A fascia bow traction method for the treatment of unilateral marginal mandibular nerve paralysis after mandibulectomy for head and neck cancer. JPRAS Open 34:51-59.2022年11月

Akama T, Tsuda T, Terada R, Tanaka S, Tanaka H, Yoshitatsu S, Nishimura H, Inohara H: A Case of Traumatic Nasal Valve Stenosis Successfully Treated with Open Rhinoplasty and Z-Plasty. Ear Nose Throat J. 12;1455613221115100. 2022年7月
doi: 10.1177/01455613221115100

Hanada Y, Tsuda T, Wada K, Ogawa K, Tanaka H, Yoshitatsu S, Nishimura H : A Case of Cochlear Implant Replacement Requiring Full-Thickness Skin Grafting. Ear Nose Throat J. 2021 Mar 23;145561321996837. doi: 10.1177/0145561321996837.

Sakano Y, Takahashi Y, Yoshitatsu S, Miyo M, Miyake M, Kusunoki C, Miyazaki H, Ueda R, Toshiyama R, Sakai K, Hamakawa T, Nishikawa K, Miyamoto A, Kato T, Hirao M : [A Case of Palliative Abdominoperineal Resection and Perineal Reconstruction by Gluteus Maximus Flap following Regrowth of Primary Anal Canal Cancer with the Perianal Skin Infiltration after CRT]. Gan To Kagaku Ryoho.;49(3):339-341. PMID: 35299199、2022年5月

A-3

名和沙織、服部亮、南都賢宣：帝王切開後癒痕に漿液性腺癌を認め、術中に付着した子宮内膜の悪性転化と診断した一例。日形会誌(JJpn.P.R.S.),42 : 585～590" 2022年

B-3

吉龍澄子、田中宏之、名和沙織：顔面皮膚悪性腫瘍の AESTHIC MIND-皮膚腫瘍性状を踏まえた拡大切除・再建術の留意点。第40回日本頭蓋顎顔面外科学会学術集会、名古屋市、2022年11月17-18日

B-4

吉龍澄子、田中宏之、名和沙織：眼瞼腫瘍切除後の二期的再建法—Minimal invasion を目指した再建—。第 65 回日本形成外科学会総会・学術集会、大阪市、2022 年 4 月 20-22 日

吉龍澄子、田中宏之、名和沙織：眼輪筋 redraping 皮弁（仮題）と瞼板結膜 graft による眼瞼脂腺癌の二期的再建。眼窩疾患シンポジウム、豊中市、2022 年 11 月 5 日

B-6

田中弘之、吉龍澄子、名和沙織：ベバシズマブ投与開始後に増悪した下腿潰瘍の一例。第 132 回関西形成外科学会学術集会、枚方市、2022 年 11 月 26 日

吉龍澄子：VS-K5-7「整容的な植皮術の工夫」。第 27 回形成外科手術手技学会、優秀演題賞受賞、2022 年 2 月（受賞通知 2022 年 4 月）

当科では、股・膝関節に対する人工関節手術、脊椎疾患に対する脊椎外科手術、手の外科手術に関する高度な専門診療と上下肢の外傷手術をメインにしており、骨粗鬆症治療のセカンドオピニオン外来を行っております。

1. 末期変形性関節症に対する人工関節置換術

- 術前 3D-CT 画像データを用いた術中ナビゲーション支援及びロボットアーム支援手術による再現性の高い正確な人工関節手術や最小侵襲手術法 (MIS; Minimally Invasive Surgery) を施行しています。
- 人工股関節手術においては、前方系アプローチと後方系アプローチを病状に応じて使い分け、上記の技術と併用することにより、術後下肢機能のさらなる向上および術後人工股関節脱臼の発生頻度減少を実現しています。
- 人工膝関節においては、全人工膝関節置換術(TKA)、片側置換型の人工膝関節手術(UKA)も施行しており、ロボット手術による安心安全な手術、入院期間の短縮とともに早期社会復帰を目指し良好な治療成績を挙げている。

2. 各種脊椎疾患に対する脊椎外科手術

- 腰部脊柱管狭窄症や頸椎症性脊髄症に代表される各種脊椎変性疾患に対する外科的治療（脊椎除圧・固定術）を中心に治療を行っている。85歳を超えるような超高齢者であっても、外科的治療の対象となる病態を有する症例に対しては、その合併症を管理しながら積極的に外科治療を行い、QOLを維持・改善できるよう努めている。
- さらに上記の脊椎変性疾患以外に脊椎外傷や転移性脊椎腫瘍、化膿性脊椎炎など種々の難治性脊椎疾患に対しても、外科的治療の適応があれば積極的に治療を行っている。

3. 手外科および上肢外傷手術

- 絞扼性神経障害、母指 CM 関節症をはじめとする変形性関節症、良性腫瘍、拘縮指や変形矯正、デュピュイトラン拘縮、TFCC 損傷といった専門的加療が必要な疾患に対応している。
- 上肢外傷全般（鎖骨骨折、前腕骨骨折、肘関節周囲骨折、上腕骨骨折、指節骨骨折のほか、腱断裂や神経断裂など）の外傷についても積極的に手術加療を行い、懇切丁寧な診療を心掛けている。

4. 骨粗鬆症外来

- 近年、骨粗鬆症の治療は健康寿命延伸のため必須な医療となっておりますが、一般クリニックでも治療に難渋するような場合に遭遇することもあるかと思えます。そのような際に骨粗鬆症専門の医師が精査のうえ治療方針を提案する専門外来を設けております。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Aono H, Takenaka S, Okuda A, Kikuchi T, Takeshita H, Nagata K, Ito Y: Risk factors for insufficient reduction after short-segment posterior fixation for thoracolumbar burst fractures: Does the interval from injury onset to surgery affect reduction of fractured vertebrae? J Orthop Surg Res. 17(1): P507, 2022 年 11 月 24 日

Kudawara I, Aono H: Intraosseous shwannoma of the thracic spine: A case report. Journal of Bone and Soft Tissue Tumors. 7(3): P2-4、2021 年 12 月 31 日

Iwasa M, Ando W, Uemura K, Hamada H, Takao M, Sugano N: Association between magnitude of femoral head collapse and quality of life in patients with osteonecrosis of the femoral head. Mod Rheumatol. 33(2): P416-421、2023 年 3 月 2 日

Iwasa M, Takao M, Sofue M, Uemura K, Otake Y, Hamada H, Sato Y, Sugano N, Okada S: Artificial Intelligence-based Volumetric Analysis of Muscle Atrophy and Fatty Degeneration in Patients with Hip Osteoarthritis and its Correlation with Health-related Quality of Life. Int J Comput Assist Radiol Surg. 18(1): P71-78、2023 年 1 月 1 日

Iwasa M, Ando W, Uemura K, Hamada H, Takao M, Sugano N: Is There an Association Between Femoral Head Collapse and Acetabular Coverage in Patients With Osteonecrosis? Orthop Relat Res. 481(1): P51-59、2023 年 1 月 1 日

A-1

北野元裕：骨形成不全症と骨密度低下を示すグループ 1) 骨形成不全症「骨系統疾患マニュアル 改訂第3版」日本整形外科学会小児整形外科委員会 骨系統疾患マニュアル改訂ワーキンググループ編集、P134-137、南江堂、東京、2022 年 12 月 15 日

A-3

有光小百合：早期関節炎に対する早期診断と治療介入「Loco Cure」8(3): P.26-34、先端医学社、2022 年 8 月 10 日

A-4

有光小百合：手関節尺側部痛の理学的所見「日本手外科学会雑誌」39(4): P.392-398、2023 年 1 月 30 日

A-5

岩佐 諒、安藤 渉、上村圭亮、濱田英敏、高尾正樹、菅野伸彦：大腿骨頭壊死症における大腿骨骨頭被覆と圧潰進行との関連。令和 3 年度厚生労働省難治性疾患研究班報告書、2022 年 8 月 20 日

B-2

Iwasa M, Takao M, Otake Y, Sofune M, Uemura K, Hamada H, Ando W, Sato Y, Sugano N: Correlation of gluteal muscle atrophy and fatty degeneration with health-related quality of life measures in patients with unilateral hip osteoarthritis – AI-based volumetric analysis. Computer Assisted Radiology and Surgery 2022, Tokyo, 2022 年 6 月 7 日

Iwasa M, Ando W, Uemura K, Hamada H, Takao M, Sugano N: Association between magnitude of femoral head collapse and quality of life in patients with osteonecrosis of the femoral head. The 21th International Meeting of Association Research Circulation Osseous, Seoul, 2022 年 8 月 27 日

B-3

北野元裕: 整形外科医が知っておくべき骨形成不全症の診断と治療。第 95 回日本整形外科学会学術集会、神戸、2022 年 5 月 20 日

北野元裕: 乳幼児の骨折 ～事故？虐待？骨疾患？～。第 5 回北河内整形外科セミナー、大阪、2022 年 6 月 11 日

青野博之: 俺の PLIF -骨癒合率 100%への挑戦とこだわり-。第 30 回日本腰痛学会、岩手、2022 年 10 月 21 日

青野博之: 脊椎・骨盤外傷に対する急性期治療戦略 - 症例から学ぶ - 。第 12 回最小侵襲脊椎治療学会、富山、2022 年 6 月 23 日

青野博之: Conventional PLIF の長所・短所。第 31 回脊椎インストゥルメンテーション学会、大阪、2022 年 11 月 25 日

青野博之: 胸腰椎破裂骨折に対する temporary short-segment fixation。第 31 回脊椎インストゥルメンテーション学会、大阪、2022 年 11 月 25 日

有光小百合、森友寿夫、信貴厚生: 関節造影及び造影後 CT を用いた手関節尺側部痛の診断法。第 14 回日本手関節外科ワークショップ、大阪、2022 年 8 月 27 日

B-4

三木秀宣: ダウン症患者の変形性股関節症に CT ベースナビゲーション使用人工股関節全置換術を施行した一例。第 6 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会、岡山、2022 年 11 月 4 日

久田原郁夫、植松 稔: 切除不能な高悪性度軟部肉腫の多発肺転移に対して体幹部定位照射をおこなった 2 例。第 55 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2022 年 7 月 14 日

青野博之: L3/4 PLIF 後の隣接椎間障害 (L4/5 と同様に頭側に起こるか?)。第 31

回脊椎インストゥルメンテーション学会、大阪、2022年11月25日

青野博之、奥田哲教、菊地 剛、竹下博志、長田圭司、武中章太、伊藤康夫：胸腰椎破裂骨折に対する short-segment fixation における骨折椎体矯正不良因子の検討—近畿5府県での多施設研究—。第51回日本脊椎脊髄病学会、2022年4月21日

有光小百合、森友寿夫、信貴厚生、正富 隆、行岡正雄：尺骨突き上げ症状を有するキーンベック病の5例。第65回日本手外科学会学術集会、小倉、2022年4月14日

石黒裕之、大西厚範、青野博之：PLIFでのケージのチタンコートの有無による骨癒合の比較。第29回日本脊椎・脊髄神経手術手技学会、別府、2022年9月2日

大西厚範、石黒裕之、青野博之：頚椎症性脊髄症に対する選択的椎弓形成術の手術成績—C3-6椎弓形成術との比較—。第29回日本脊椎・脊髄神経手術手技学会、別府、2022年9月2日

安田直弘、角永茂樹、久田原郁夫：当院における下肢腫瘍用人工関節の治療成績。第55回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2022年7月14日

岩佐 諒、安藤 渉、上村圭亮、濱田英敏、高尾正樹、菅野伸彦：大腿骨頭壊死症における大腿骨骨頭被覆と圧潰進行との関連。第37回日本整形外科学会基礎学術集会、宮崎、2022年10月13日

岩佐 諒、安藤 渉、上村圭亮、濱田英敏、高尾正樹、菅野伸彦：大腿骨頸部骨折に対するセメントレスシステム固定における予防的大腿骨 wiring の有用性。第48回日本股関節学会学術集会、山形、2022年10月22日

岩佐 諒、安藤 渉、上村圭亮、濱田英敏、高尾正樹、菅野伸彦：大腿骨頭壊死症における大腿骨骨頭被覆と圧潰進行との関連。令和3年度厚生労働省難治性疾患研究班会議、大阪、2022年8月20日

西川智也、岩本圭史、宮本隆司、三木秀宣：恒久性膝蓋骨脱臼を合併した変形性膝関節症に対する人工膝関節置換術の治療経験。第53回日本人工関節学会、横浜、2023年2月20日

鬼頭宗久、生田国大、武内章彦、安田直弘、安田剛敏：本邦における低悪性度筋線維芽細胞肉腫の治療成績—骨・軟部肉腫治療研究会(JMOG)多施設共同研究—。第55回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、東京、2022年7月14日

B-5

相木佐代、前倉俊也、櫻井真知子、清水彩加、山本友佳子、吉金鮎美、久田原郁夫：医療用麻薬に関するインシデント防止に向けての取り組み。第30回日本がん

チーム医療研究会、大阪、2022年9月17日

B-9

岩本圭史：第41回 DOCTOR's FLAP、FM 大阪 LOVE FLAP、大阪、2022年8月18日

大腿骨頭壊死症における大腿骨頭被覆と圧潰進行との関連

岩佐 諱、安藤 渉、上村 圭亮、菅野 伸彦 (大阪大学大学院医学系研究科 運動器医工学治療学)

濱田 英敏、高尾 正樹
(大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学)

本研究の目的は、大腿骨頭壊死症における大腿骨頭圧潰進行と臼蓋被覆との関連を明らかにすることである。大腿骨頭圧潰のない 101 股関節を 12 カ月以内に大腿骨頭圧潰を認めた群(collapse 群)と、認めなかった群 (non-collapse 群) の 2 群に分けた。lateral center-edge angle (LCEA), anterior 及び posterior center-edge angle、anterior 及び posterior acetabular sector angle を測定した。lateral center-edge angle が大腿骨頭圧潰と有意な関連を認め、その cut off 値は 28 度であった。

1. 研究目的

大腿骨頭壊死症 (ONFH) は、初期には急性股関節痛を引き起こし、若年者ではしばしば大腿骨頭の圧壊と関節破壊に至ることがある^{1,2)}。大腿骨頭圧壊による疼痛は、しばしば関節温存手術や人工股関節置換術を含む治療につながる。先行研究では、ONFH 患者における大腿骨頭圧壊に関連する因子が調査され、壊死性病変のサイズ、体積、および位置が大腿骨頭圧壊の進行に関連していることが判明した³⁻⁵⁾。これに基づき、ONFH を分類・定量化するいくつかの分類体系が提案されており⁶⁻⁸⁾、ONFH のリスクに関連する予後因子として有用であることが報告されている⁹⁾。また、解剖学的パラメータは、ONFH の発症、予後、治療成績と関連することが判明している⁹⁾。ONFH に対して寛骨臼回転骨切り術が行われるのは、寛骨臼の被覆が不十分だと関節接触圧が上昇し、大腿骨頭の圧壊が進行するためである¹⁰⁾。しかし、寛骨臼の被覆率は 3 つの平面 (冠状面、矢状面、軸方向) で異なっており、寛骨臼の被覆率の低下がどの程度問題となるかは不明である。さらに、Pelvic Incidence (PI) が高い患者は大腿骨頭の前方被覆が不十分であると報告されており、ONFH 患者にお

ける大腿骨頭圧壊との関連がある可能性がある¹¹⁾。しかし、ある報告では、PI と寛骨臼カバー率との間に関連は認められず¹²⁾、ONFH における大腿骨頭圧壊と PI との関連は明らかではない。このように、ONFH 患者における臼蓋被覆と大腿骨頭圧壊の関連は明確にされていない。本研究の目的は、ONFH 患者における臼蓋被覆と大腿骨頭圧潰との関係を明らかにすることである。

2. 研究方法

対象は 2008 年 1 月から 2018 年 12 月に当院で ONFH と診断され、1 年以上のフォローが可能であった男性 51 関節、女性 50 股関節の 101 関節を対象とした。平均年齢は 44±15 歳、平均 BMI は 23±4 kg/m² であった。JIC 分類による病型は Type A が 9 関節、Type B が 14 関節、Type C1 が 47 関節、Type C2 が 41 関節であった。

大腿骨頭圧潰は正面像及びラウエン像における最大骨頭圧潰量を SYNAPSE orthopaedic measurement software OP-A を用いて評価した。大腿骨頭圧潰量が初診時に撮影した X 線画像と比較して、圧潰量が 1mm 以上増加した場合、大腿骨頭が圧壊したと判断した¹¹⁾。12 ヶ月以内に大腿骨頭圧潰を認めた患者を collapse 群、大腿

骨頭圧壊を認めなかった患者を non-collapse 群とし、2群に分けた。collapse 群は 35 関節、non-collapse 群では 66 関節であった。性別、年齢、BMI は両群で有意差を認めなかった ($p = 0.58$ 、 0.30 、 0.98)。

臼蓋被覆は大腿骨頭の中心を通る CT スライスで評価した (図 1)。冠状断面では lateral center-edge angle (LCEA)¹³⁾、矢状断面では anterior center-edge angle (ACEA)、posterior center-edge angle (PCEA)¹³⁾、軸断面では anterior acetabular sector angle (AASA) と posterior acetabular sector angle (PASA) を測定した¹⁴⁾。解剖学的パラメータの測定には、3D template; Kyocera を使用した。これらの点は 3 次元的に手動で選択した。矢状断面、冠状断面、軸断面において大腿骨頭に近似円を同定し、骨頭中心を定義した。PI は、仙骨上面の midpoint に垂直な線と、その点から大腿骨頭の中心までの線とのなす角として測定された¹²⁾。

統計解析として、Shapiro-Wilk の検定を用いて正規性を評価した後、Student's t-test、Wilcoxon Signed-rank Test を用いて群間に差があるかを評価した。receiver operating characteristic (ROC) 曲線分析を用いて、collapse と non-collapse の 2 群で有意差を認めたパラメータのカットオフ値を決定した。統計解析は JMP® 15 (SAS Institute Inc., Cary, NC, USA) にて行い、 $p < 0.05$ を統計的に有意であると定義した。

3. 研究結果

LCEA の平均値は non-collapse 群では collapse 群より有意に大きかった ($32^\circ \pm 6^\circ$ 、 $28^\circ \pm 7^\circ$ 、平均差 4° 、 $p < 0.01$)。PI とその他の臼蓋被覆の測定値 (ACEA、PCEA、AASA、PASA) には両群間に差はなかった (表 1)。ROC 曲線解析の結果、大腿骨頭圧壊との関連性を示す LCEA の閾値は 28° であった (感度 = 0.79、特異度 = 0.60、曲線下面積 = 0.73 ; 図 2)。LCEA 28° 未満である症例の割合は JIC type、Steinberg grade が sever になれば増悪していた (表 2)。

4. 考察

ONFH は、比較的若年層で大腿骨頭の圧壊を引き起こす可能性のある重篤な疾患である¹⁾。臼

蓋被覆を反映する解剖学的パラメータは、大腿骨頭圧壊と関連する可能性がある¹¹⁾。ONFH の分類システムを用いると、LCEA が 28° 未満の症例では、大腿骨頭圧壊の割合が高くなることがわかった。この知見は、ONFH に対する寛骨臼骨切り術を導くための新たな指標として利用できる可能性がある。

本研究において、臼蓋被覆を評価するために測定した 5 つの解剖学的パラメータのうち 1 つ (LCEA) だけが大腿骨頭圧壊と関連していたがその差は小さく、臨床的重要性には疑問が残るものであった。臼蓋被覆が不十分だと、ストレス集中¹⁵⁾、関節内圧の上昇^{16,17)}、股関節の不安定性¹⁸⁾につながる。ONFH に対する free vascularized fibular grafting 後の股関節の生存率に LCEA が影響するという報告¹⁹⁾や、ONFH 患者の大腿骨頭圧壊の進行防止に臼蓋回転骨切りが有用であるという報告¹⁰⁾がある。我々の研究でも、LCEA は圧壊と関連していたが、その差は小さく、その臨床的重要性には疑問が残る。また、我々の結果は、ACEA と PI は大腿骨頭圧壊と関連しないことを示していた。Kwon らは、PI が大きい患者は骨盤後傾があり、ACEA の低下と大腿骨頭圧壊につながる可能性があると報告した¹¹⁾。しかし、彼らは臼蓋被覆については調査していない。また、変形性関節症患者と健常者において、寛骨臼の被覆率と PI に相関がないことを示す報告もある¹²⁾。

JIC type 分類が A+B、C1、C2 の順に高くなるにつれて、LCEA が 28° 未満となる患者数が増加することが示された。大腿骨頭壊死の大きさや位置が同じでも、臼蓋被覆によって JIC 分類が変わるため、JIC タイプ C1、C2 では A、B に比べ LCEA 28° 以下の患者の割合が高くなるということが説明できる。ONFH 患者における JIC type 分類と大腿骨頭圧壊との関連性が報告されている²⁰⁾。JIC type A および B では大腿骨頭の荷重領域に対する壊死領域の割合が小さいが、type C1 および C2 では大腿骨頭の荷重領域に対する壊死領域の割合が大きい⁷⁾。大腿骨頭圧壊の type 別割合は、過去の報告と同程度であり、骨壊死の局在が大腿骨頭圧壊の重要な関連因子であることがわかった。また、LCEA が 28° 未満の割合は Steinberg Grade C で最も高く、Steinberg

Grade B は Steinberg Grade A よりも少なかった。これまでの研究で、大腿骨頭壊死性病変の体積が大きいほど、THA を受けるリスクや大腿骨頭圧壊のリスクと関連することが報告されている³⁾。我々は Steinberg 分類を用いて壊死の体積を評価したところ、LCEA が 28°未満である患者の割合は Grade C が最も高かった。

本研究の Limitation としては、第一に圧壊の程度を評価しなかったことである。JIC type B で圧壊が 2mm 以下の患者では、圧壊が止まり症状は軽快することがと報告されている³⁾。JIC の type 分類は、圧壊の発症に加えて、圧壊の程度と関連している。第二に、日本人のみを調査対象としている。一般的に、欧米人はアジア人に比べて体格や BMI が大きい。体格が非常に大きい場合、大腿骨頭圧壊への影響が見られる可能性がある。しかし、本研究では、大腿骨頭圧壊に対する体格の影響は観察されなかった。

5. 結論

大腿骨頭壊死症における大腿骨頭圧潰に関連する解剖学的指標として LCEA が同定されたが、その差は小さく、臨床的に重要でない可能性がある。大腿骨頭被覆以外の要因のさらなる調査が必要である。

6. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

7. 知的所有権の取得状況

1. 特許の取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

8. 参考文献

- 1) Ando W, Sakai T, Fukushima W, et al. Japanese Orthopaedic Association 2019 guidelines for

osteonecrosis of the femoral head. J Orthop Sci. 2021;26:46-68.

- 2) Ando W, Takao M, Tani T, et al. Geographical distribution of the associated factors of osteonecrosis of the femoral head, using the designated intractable disease database in Japan. Mod Rheumatol.
- 3) Nishii T, Sugano N, Ohzono K, et al. Significance of lesion size and location in the prediction of collapse of osteonecrosis of the femoral head: a new three-dimensional quantification using magnetic resonance imaging. J Orthop Res. 2002;20:130-136.
- 4) Sugano N, Ohzono K, Masuhara K, Takaoka K, Ono K. Prognostication of osteonecrosis of the femoral head in patients with systemic lupus erythematosus by magnetic resonance imaging. Clin Orthop Relat Res. 1994;305:190-199.
- 5) Takashima K, Sakai T, Hamada H, Takao M, Sugano N. Which classification system is most useful for classifying osteonecrosis of the femoral head? Clin Orthop Relat Res. 2018;476:1240-1249.
- 6) Steinberg ME, Hayken GD, Steinberg DR. A quantitative system for staging avascular necrosis. J Bone Joint Surg Br. 1995;77:34-41.
- 7) Sugano N, Atsumi T, Ohzono K, et al. The 2001 revised criteria for diagnosis, classification, and staging of idiopathic osteonecrosis of the femoral head. J Orthop Sci. 2002;7:601-605.
- 8) Yoon B-H, Mont MA, Koo K-H, et al. The 2019 revised version of association research circulation osseous staging system of osteonecrosis of the femoral head. J Arthroplasty. 2020;35: 933-940.
- 9) Zeng J, Zeng Y, Wu Y, et al. Acetabular anatomical parameters in patients with idiopathic osteonecrosis of the femoral head. J Arthroplasty. 2020;35:331-334.
- 10) Nozawa M, Enomoto F, Shitoto K, et al. Rotational acetabular osteotomy for osteonecrosis with collapse of the femoral head in young patients. J Bone Joint Surg Am. 2005;87:514-520.

- 11) Kwon HM, Yang I-H, Park KK, et al. High pelvic incidence is associated with disease progression in nontraumatic osteonecrosis of the femoral head. *Clin Orthop Relat Res.* 2020; 478:1870-1876.
- 12) Iwasa M, Ando W, Uemura K, et al. Pelvic incidence is not associated with the development of hip osteoarthritis. *Bone Joint J.* 2021;103:1656-1661.
- 13) Miyasaka D, Ito T, Imai N, et al. Three-dimensional assessment of femoral head coverage in normal and dysplastic hips: a novel method. *Acta Med Okayama.* 2014;68:277-284.
- 14) Nakahara I, Takao M, Sakai T, et al. Three-dimensional morphology and bony range of movement in hip joints in patients with hip dysplasia. *Bone Joint J.* 2014;96:580-589.
- 15) Pompe B, Daniel M, Sochor M, et al. Gradient of contact stress in normal and dysplastic human hips. *Med Eng Phys.* 2003;25:379-385.
- 16) Wingstrand H. Intracapsular pressure in congenital dislocation of the hip. *J Pediatr Orthop B.* 1997;6:245-247.
- 17) Xie J, Naito M, Maeyama A. Intracapsular pressure and interleukin-1beta cytokine in hips with acetabular dysplasia. *Acta Orthop.* 2010;81:189-192.
- 18) Pauwels F. *Biomechanics of the Normal and Diseased Hip: Theoretical Foundation, Technique and Results of Treatment An Atlas.* Springer-Verlag; 1976.
- 19) Roush TF, Olson SA, Pietrobon R, Braga L, Urbaniak JR. Influence of acetabular coverage on hip survival after free vascularized fibular grafting for femoral head osteonecrosis. *J Bone Joint Surg Am.* 2006;88:2152-2158.
- 20) Zhao F-C, Guo K-J, Li Z-R. Osteonecrosis of the femoral head in SARS patients: seven years later. *Eur J Orthop Surg Traumatol.* 2013;23:671-

表1 大腿骨頭被覆と大腿骨頭圧壊との関連

	Collapse (n = 56)	Non-collapse (n = 65)	p値
LCEA (°)	28	32	<0.01
ACEA (°)	58	59	0.42
PCEA (°)	99	101	0.46
AASA (°)	60	61	0.88
PASA (°)	95	96	0.40

LCEA = lateral center-edge angle; ACEA = anterior center-edge angle; PCEA = posterior center-edge angle; AASA = ante c ular sector angle; PASA = posterior acetabular sector angle

表2 大腿骨頭被覆と大腿骨頭圧壊との関連

		LCEA < 28° の割合(%)	Odds ratio (95% CI)	p値
JIC type	A+B	9		
	C1	38	6.52 (1.64 to 43.83)	<0.01
	C2	48	9.84 (2.34 to 68.38)	<0.01
Steinberg grade	A	14		
	B	13	0.89 (0.15 to 7.04)	0.90
	C	51	6.44 (1.57 to 43.90)	<0.01

JIC = Japanese Investigation Committee; LCEA = lateral center-edge angle

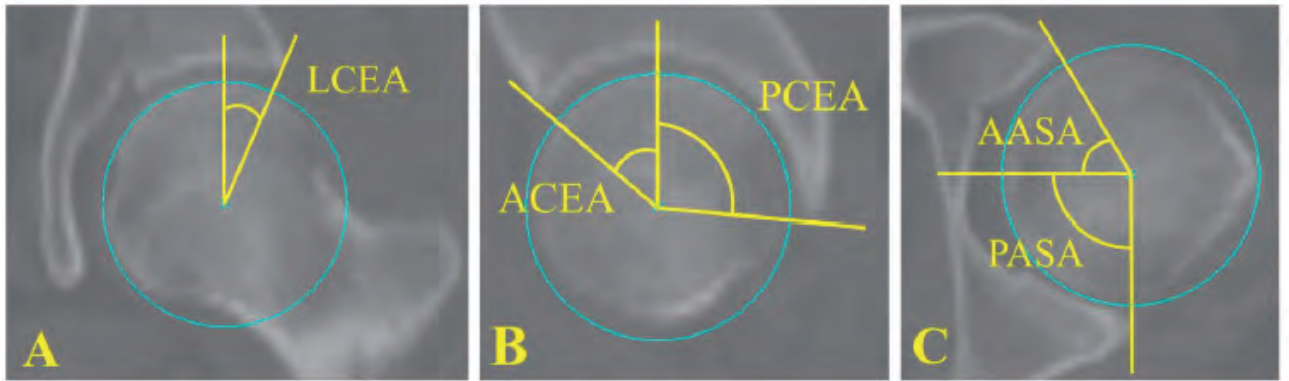


図1 臼蓋被覆のパラメータ評価方法

(A) 冠状断面において、lateral center-edge angleは大腿骨頭中心を通る垂直線と骨頭中心から寛骨臼外側縁を通る

線とのなす角度とした。(B) 矢状断面において、anterior center-edge angle と posterior center-edge angleは、骨頭中心を通る垂直線と骨頭中心と臼蓋前縁、臼蓋後縁を通る線とがなす角度とした。(C) 軸断面において、anterior acetabular sector angle と posterior acetabular sector angleは、骨頭中心を通る水平線と骨頭中心と臼蓋前縁、臼蓋後縁を通る線とがなす角度とした。

LCEA = lateral center-edge angle、ACEA = anterior center-edge angle、PCEA = posterior center-edge angle、AASA = anterior acetabular sector angle、PASA = posterior acetabular sector angle。

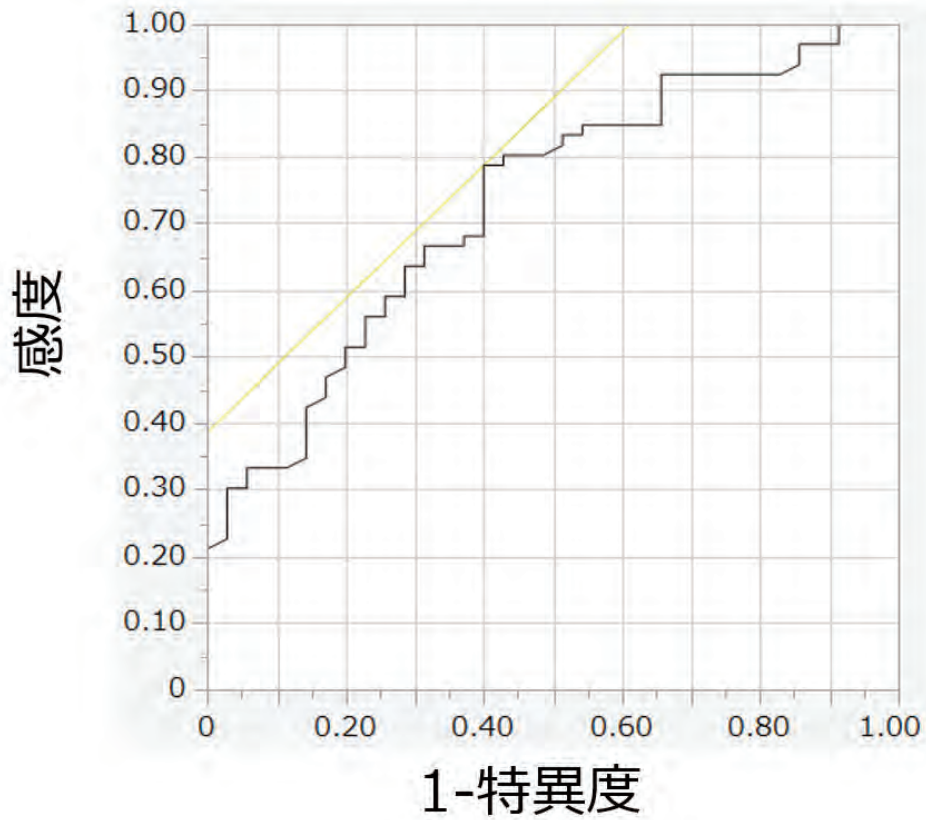


図2 lateral center-edge angle と大腿骨頭圧壊とのROC分析
 ROC分析を用いてlateral center-edge angleの圧潰に対するcut off値は28度と算出された。

脳神経外科

藤中俊之

脳神経外科は脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷、不随意運動などの機能的疾患、脊椎脊髄疾患や末梢神経疾患も担当する大変領域の広い診療科ですが、当科では脳神経外科の各領域のうち、脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷に特に注力し高度な診療を行っています。

脳血管障害に対しては、脳神経内科と協力して脳卒中センターとして 365 日 24 時間体制で対応しています。急性期脳卒中患者に対しては、病態に応じて、開頭手術や脳血管内治療などの適切な治療を速やかに行い、発症からできるだけ早期にリハビリテーションを開始するとともに、地域連携パスを利用して後方病院でのスムーズな治療の継続を図っています。また、未破裂脳動脈瘤や慢性期脳血管障害に対しても十分な検討とインフォームドコンセントを行ったうえで積極的に治療を行っています。脳血管内治療に関しては、日本脳神経血管内治療学会専門医・指導医が複数在籍しており、高度な治療、最新のデバイスを用いた治療が可能です。実施医や実施施設が限定されている脳動脈瘤に対するフローダイバーターステンントや脳動静脈奇形、硬膜動静脈瘻に対する液体塞栓物質（Onyx）を用いた治療も数多く行っています。他施設での技術指導や全国からの見学者の受け入れも多く行っており、脳血管内治療分野での指導的施設になっています。新規血管内治療機器の治験や市販後調査、多施設共同研究にも積極的に参加しています。

脳腫瘍については、術前に詳細な画像評価を行い、術中はナビゲーションシステムや脳波・筋電図等によるモニタリングを駆使し安全・確実な手術を行っています。なかでも、中枢神経原発腫瘍の代表である神経膠腫に対しては、術中ナビゲーションやモニタリングに加え、5-アミノレブリン酸による蛍光反応ガイド下に手術を行うことで、機能温存を図りながら最大限の摘出を行うように努めています。特に機能的に重要な部位に発生した腫瘍においては、言語や高次機能を損なうことなく安全に手術を行うため麻酔科、リハビリテーション科の協力のもと覚醒下手術も行っています。また、化学療法、分子標的薬、放射線治療の進歩により癌種ごとの治療方針が必要となっている転移性脳腫瘍や、希少がんである神経膠種や悪性リンパ腫などに対して、疾患ごとに遺伝子診断など先進的な手法も用いて最適な治療方法を検討し集学的な治療を行っています。

頭部外傷については救命救急センターと連携し重症頭部外傷にも対応しています。個々の外傷患者の背景や病態は様々ですが、それぞれに最善と考えられる治療方針をとるように検討を行っています。

研修医、レジデント教育にも力を入れています。毎週の症例検討会の他に脳神経内科医、救急医との合同症例検討会、抄読会などを行っています。また、顕微鏡手術については手術室外でもトレーニングが行えるよう、実体顕微鏡を購入し人工血管モデル等を用いた卓上での組織剥離・血管吻合の練習を奨励しています。当科は日本脳神経外科学会、日本脳神経血管内治療学会、日本脳卒中学会、日本脳卒中の外科学会の研修施設に認定されており各領域の専門医育成にも注力しています。学会発表についても活発に行っており、順次、論文化して国内外の医学雑誌に発表しています。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Okamoto N, Miya F, Tsunoda T, Kanemura Y, Saitoh S, Kato M, Yanagi K, Kaname T, Kosaki K: Four pedigrees with aminoacyl-tRNA synthetase abnormalities. 「Neurol Sci」 43(4):2765-2774、2022年4月

Yamamoto T, Sato Y, Yasuda S, Shikamura M, Tamura T, Takenaka C, Takasu N, Nomura M, Dohi H, Takahashi M, Mandai M, Kanemura Y, Nakamura M, Okano H, Kawamata S: Correlation Between Genetic Abnormalities in Induced Pluripotent Stem Cell-Derivatives and Abnormal Tissue Formation in Tumorigenicity Tests. 「Stem Cells Transl Med」 11(5):527-538、2022年5月

Ozaki T, Fujinaka T, Kidani T, Nishimoto K, Yamazaki H, Sawada H, Taki K, Kanemura Y, Nakajima S: Coil Embolization of Unruptured Cerebral Aneurysms Using Stents in Small Arteries Less Than 2 mm in Diameter. 「Neurosurgery」 90(5):538-546、2022年5月

Yamazaki H, Fujinaka T, Ozaki T, Kidani T, Nishimoto K, Taki K, Nishizawa N, Murakami K, Kanemura Y, Nakajima S: Staged treatment for ruptured wide-neck intracranial aneurysm with intentional partial coiling in the acute phase followed by definitive treatment. 「Surg Neurol Int」 13:322、2022年7月22日

Takeuchi H, Takahashi Y, Tanigawa S, Okamoto T, Kodama Y, Shishido-Hara Y, Yoshioka E, Shofuda T, Kanemura Y, Konishi E, Hashimoto N: Genetic Alteration May Proceed with a Histological Change in Glioblastoma: A Report from Initially Diagnosed as Nontumor Lesion Cases. 「NMC Case Rep J」 9:199-208、2022年7月

Okada M, Kawagoe Y, Takasugi T, Nozumi M, Ito Y, Fukusumi H, Kanemura Y, Fujii Y, Igarashi M: JNK1-Dependent Phosphorylation of GAP-43 Serine 142 is a Novel Molecular Marker for Axonal Growth. 「Neurochem Res」 47(9):2668-2682、2022年9月

Umehara T, Arita H, Miya F, Achiha T, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Nakagawa T, Kinoshita M, Kagawa N, Fujimoto Y, Hashimoto N, Kiyokawa H, Morii E, Tsunoda T, Kanemura Y, Kishima H: Revisiting the definition of glioma recurrence based on a phylogenetic investigation of primary and re-emerging tumor samples: a case report. 「Brain Tumor Pathol」 39(4):218-224、2022年10月

Sanada T, Yamamoto S, Sakai M, Umehara T, Sato H, Saito M, Mitsui N, Hiroshima S, Anei R, Kanemura Y, Tanino M, Nakanishi K, Kishima H, Kinoshita M: Correlation of T1- to T2-weighted signal intensity ratio with T1- and T2-relaxation time and IDH mutation status in glioma. 「Sci Rep」 12(1):18801、2022年11月

Nakagawa T, Kijima N, Hasegawa K, Ikeda S, Yaga M, Wibowo T, Tachi T, Kuroda H, Hirayama R, Okita Y, Kinoshita M, Kagawa N, Kanemura Y, Hoson N, Kishima H: Identification of glioblastoma-specific antigens expressed in patient-derived tumor cells as candidate targets for chimeric antigen receptor T cell therapy. 「Neurooncol Adv」 5(1):vdac177、2022年11月

Nakamura Y, Inoue A, Nishikawa M, Ohnishi T, Yano H, Kanemura Y, Ohtsuka Y, Ozaki S, Kusakabe K,

Suehiro S, Yamashita D, Shigekawa S, Watanabe H, Kitazawa R, Tanaka J, Kunieda T: Quantitative measurement of peritumoral concentrations of glutamate, N-acetyl aspartate, and lactate on magnetic resonance spectroscopy predicts glioblastoma-related refractory epilepsy. 『Acta Neurochir (Wien)』 164(12):3253-3266。 2022 年 12 月

Yamazaki H, Ozaki T, Kidani T, Fujimi Y, Nonaka M, Umegaki M, Yokota C, Fujinaka T
Coexisting filum terminale arteriovenous fistula and filum terminale lipoma treated with single-stage surgery: illustrative case. 『J Neurosurg Case Lessons』 5 (3) P322-326、 2023 年 1 月 16 日

Nguyen T, Qureshi M, Klein P, Yamagami H, Mikulik R, Czlonkowska A, Abdalkader M, Sedova P, Sathya A, Lo H, Mansour O, Vanguru H, Lesaine E, Tsivgoulis G, Loochtan I, Demeestere J, Uchino K, Inoa V, Goyal N, Charidimou A, Siegler J, Yaghi S, Sousa D, Mohammaden M, Haussen D, Kristoffersen E, Lereis V, Scollo S, Campbell B, Ma A, Thomas J, Parsons M, Singhal S, Slater L, Martins R, Enzinger C, Gattringer T, Rahman A, Bonnet T, Ligoit N, Raedt S, Lemmens R, Vanacker P, Vandervorst F, Conforto A, Hidalgo R, Neves L, Martins R, Cuervo D, Rebello L, Santiago I, Silva I, Sakelarova T, Kalpachki R, Alexiev F, Catanese L, Cora E, Goyal M, Hill M, Kelly M, Khosravani H, Lavoie P, Peeling L, Pikula A, Rivera R, Chen H, Chen Y, Huo X, Miao Z, Yang S, Bedekovic M, Bralic M, Budincevic H, Corredor-Quintero A, Lara-Sarabia O, Cabal M, Tenora D, Fibrich P, Herzig R, Hlaváčová H, Hrabanovska E, Hlinovsky C, Jurak L, Kadlickova J, Karpowicz I, Klecka L, Kovar M, Lauer D, Neumann J, Palouskova H, Reiser M, Reikova P, Rohan V, Skoda O, Škorňa M, Sobotková L, Sramek M, Zakova L, Christensen H, Drenck N, Iversen H, Truelsen T, Wienecke T, Sobh K, Ylikotila P, Alpay K, Strbian D, Bernady P, Casenave P, Dan M, Fauchoux J, Gentric J, Magro E, Sabben C, Reiner P, Rouanet F, Bohmann F, Boskamp S, Mbroh J, Nagel S, Nolte C, Ringleb P, Rosenkranz M, Poli S, Thomalla G, Karapanayiotides T, Koutroulou I, Kargiotis O, Palaiodimou L, Guerra J, Huded V, Menon B, Nagendra S, Prajapati C, Sylaja P, Pramana N, Sani A, Ghoreishi A, Farhoudi M, Hokmabadi E, Raya T, Kalmanovich S, Ronen L, Sabetay S, Acampa M, Adami A, Castellan L, Longoni M, Ornello R, Renieri L, Bigliani C, Romoli M, Sacco S, Salmaggi A, Sangalli D, Zini A, Doijiri R, Fukuda H, Fujinaka T, Fujita K, Imamura H, Sakai N, Kanamaru T, Kimura N, Kono R, Miyake K, Sakaguchi M, Sakai K, Sonoda K, Todo K, Miyashita F, Tokuda N, Matsumaru Y, Matsumoto S, Ohara N, Shindo S, Takenobu Y, Yoshimoto T, Toyoda K, Uwatoko T, Yagita Y, Yamada T, Yamamoto N, Yamamoto R, Yazawa Y, Sugiura Y, Waweru P, Baek J, Lee S, Seo K, Sohn S, Arsovska A, Chan Y, Zaidi W, Jaafar A, Gongora-Rivera F, Martinez-Marino M, Infante-Valenzuela A, Groppa S, Leahu P, Coutinho J, Rinkel L, Dippel D, Dam-Nolen D, Ranta A, Wu T, Adebayo T, Bello A, Nwazor E, Sunmonu T, Wahab K, Ronning O, Sandset E, Hashmi A, Ahmad S, Rashid U, Rodriguez-Kadota L, Vences M, Yalung P, Dy J, Pineda-Franks M, Co C, Brola W, Debiec A, Dorobek M, Karlinski M, Labuz-Roszak B, Lasek-Bal A, Sienkiewicz-Jarosz H, Staszewski J, Sobolewski P, Wiacek M, Zielinska-Turek J, Araujo A, Rocha M, Castro P, Cruz V, Ferreira P, Ferreira P, Nunes A, Fonseca L, Marto J, Melo T, Rodrigues M, Silva M, Dimitriade A, Falup-Pecurariu C, Hamid M, Venketasubramanian N, Krastev G, Mako M, Ayo-Martin O, Hernández-Fernández F, Blasco J, Rodríguez-Vázquez A, Cruz-Culebras A, Moniche F, Montaner J, Perez-Sanchez S, Sánchez M, Rodríguez M, Jood K, Nordanstig A, Mazya M, Moreira T, Bernava G, Beyeler M, Bolognese M, Carrera E, Dobrocky T, Karwacki G, Keller E, Hsieh C, Boonyakarnkul S, Churojana A, Aykac O, Ozdemir A, Bajrami A, Senadim S, Hussain S, John S, Banerjee S, Kwan J, Krishnan K, Lenthall R, Matthews A, Wong K, Zhang L, Altschul D, Asif K, Bahiru Z, Below K, Biller J, Ruland S, Chaudry S, Chen M, Chebl A, Cibulka J, Cistrunk L, Clark J, Colasurdo

M, Czap A, Havenon A, D'Amato S, Dharmadhikari S, Grimmett K, Dmytriw A, Etherton M, Ezepeue C, Farooqui M, Feske S, Fink L, Gasimova U, Guzik A, Hakemi M, Hovingh M, Khan M, Jillela D, Kan P, Khatri R, Khawaja A, Khoury N, Kiley N, Kim B, Kolikonda M, Kuhn A, Lara S, Linares G, Linfante I, Lukovits T, Lycan S, Male S, Maali L, Mancin J, Masoud H, Mohamed G, Monteiro A, Nahab F, Nalleballe K, Ortega-Gutierrez S, Puri A, Radaideh Y, Rahangdale R, Rai A, Ramakrishnan P, Reddy A, Rojas-Soto D, Romero J, Rost N, Rothstein A, Omran S, Sheth S, Siddiqui A, Starosciak A, Tarlov N, Taylor R, Wang M, Wolfe J, Wong K, Le H, Nguyen Q, Pham T, Nguyen T, Phan H, Ton M, Fischer U, Michel P, Strambo D, Martins S, Zaidat O, Nogueira R; and the SVIN COVID-19 Global Stroke Registry : Global Impact of the COVID-19 Pandemic on Stroke Volumes and Cerebrovascular Events: A 1-Year Follow-up. 「Neurology」 100(4):408-421、2023年1月24日

【2022年度研究発表業績】

A-2

藤中俊之：前交通動脈瘤（ステントなし）「未破裂脳動脈瘤コイル塞栓術 100 のテクニック」大石英則 編集、P.143-146、中外医学社、東京、2023年3月20日

藤中俊之：前交通動脈瘤（ステントあり）「未破裂脳動脈瘤コイル塞栓術 100 のテクニック」大石英則 編集、P. 166-169、中外医学社、東京、2023年3月20日

藤中俊之：脳底動脈本幹部動脈瘤「未破裂脳動脈瘤コイル塞栓術 100 のテクニック」大石英則 編集、P.268-271、中外医学社、東京、2023年3月20日

藤中俊之：中大脳動脈瘤（ステントなし）「未破裂脳動脈瘤コイル塞栓術 100 のテクニック」大石英則 編集、P. 333-337、中外医学社、東京、2023年3月20日

藤中俊之：中大脳動脈瘤（ステントあり）「未破裂脳動脈瘤コイル塞栓術 100 のテクニック」大石英則 編集、P. 352-354、中外医学社、東京、2023年3月20日

A-4

金村米博：小児脳腫瘍の分子診断「病理と臨床」41(2):170-176、2023年2月1日

A-6

中島伸：これが本当のテレメディシン？「レジデントノート」24(1):p.144-146、羊土社、2022年4月1日

中島伸：初期研修医の心得「レジデントノート」24(3):p.545-547、羊土社、2022年5月1日

中島伸：第5のバイタル「レジデントノート」24(4):p.701-703、羊土社、2022年6月1日

中島伸：決めつけは禁物「レジデントノート」24(6):p.1069-1071、羊土社、2022年7月1日

中島伸：ゴール設定を考える「レジデントノート」24(7):p.1241-1243、羊土社、2022年8月1日

日

中島 伸 : 3つの格言「レジデントノート」24(9):p.1617-1619、羊土社、2022年9月1日

中島 伸 : 車の修理は医師の仕事に似ている「レジデントノート」24(10):p.1765-1767、羊土社、2022年10月1日

中島 伸 : 嗅覚や聴覚のチェックをしていますか? 「レジデントノート」24(12):p.2165-2167、羊土社、2022年11月1日

中島 伸 : 知っておこう、高次脳機能障害「レジデントノート」24(13):p.2335-2337、羊土社、2022年12月1日

中島 伸 : 裸眼立体視ノススメ「レジデントノート」24(15):p.2725-2727、羊土社、2023年1月1日

中島 伸 : 緩まない糸結びの原則「レジデントノート」24(16):p.2881-2883、羊土社、2023年2月1日

中島 伸 : 医学用語の書き間違いに注意しよう「レジデントノート」24(18):p.3241-3243、羊土社、2023年3月1日

B-2

Kidani T, Ozaki T, Nakajima S, Kanemura Y, Izutsu N, Kawamoto S, Taki K, Murakami K, Nishizawa N, Kobayashi K, Fujimi Y, Fujinaka T : Predictors of the middle meningeal artery related vascular diseases associated with severe head trauma. 16th Congress of World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology (WFITN), Kyoto, 2022年8月21日

Ozaki T, Fujinaka T, Kidani T, Izutsu N, Kanemura Y, Kawamoto S, Taki K, Nishizawa N, Murakami K, Kobayashi K, Fujimi Y, Nakajima S : Coil Embolization of Unruptured Cerebral Aneurysms Using Stents in Small Arteries Less Than 2mm in Diameter. 16th Congress of World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology (WFITN), Kyoto, 2022年8月24日

Kawamoto S, Ozaki T, Kobayashi K, Fujimi Y, Nishizawa N, Murakami K, Taki K, Izutsu N, Kidani T, Kanemura Y, Nakajima S, Fujinaka T : Staged treatment for ruptured wide neck intracranial aneurysm with intentional partial coiling in the acute phase followed by definitive treatment, 16th Congress of World Federation of Interventional and Therapeutic Neuroradiology (WFITN), Kyoto, 2022年8月24日

B-3

金村米博 : 脳腫瘍の分子遺伝学 : 分子診断の現状と今後の課題。第111回日本病理学会総会、神戸市、2022年4月15日

藤中俊之 : Hybrid Neurosurgeon による脳動脈瘤治療～利点と課題～。第31回脳神経外科手術

と機器学会 (CNTT2022)、東京、2022年4月16日

金村米博、正札智子、吉岡絵麻、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：脳腫瘍の中央分子診断体制の構築。第40回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022年5月27日

藤中俊之：出血性頭頸部血管損傷に対する血管内治療。第28回日本血管内治療学会学術総会、名古屋、2022年6月24日

園田順彦、松田憲一郎、金村米博、菊地善彰：TERT プロモーター変異のある膠芽腫はFLAIRectomyの適応である。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、斉藤仁十、三井宣幸、広島 覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1強調画像/T2強調画像比 (rT1/T2) による神経膠腫のIDH 遺伝子変異予測。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

木嶋教行、中川智義、長谷川加奈、黒田秀樹、館 哲郎、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、保仙直毅、貴島晴彦：患者由来初代培養株を用いた膠芽腫の新規免疫治療の開発。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

岡田正康、金子奈穂子、玉田篤史、棗田 学、大石 誠、河崎洋志、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：リン酸化プロテオミクスを駆使したヒト神経成長マーカーの検討。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月23日

尾崎友彦、木谷知樹、中島 伸、金村米博、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：細径母血管をもつ未破裂脳動脈瘤に対するステントアシストコイル塞栓術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

藤中俊之：Flow Diverter 治療の現状と Technical Tips。日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜、2022年9月29日

藤中俊之：The Territory of Coil Embolization - Optimal Selection between FDs and Coils -。日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜、2022年9月29日

金村米博、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：小児脳腫瘍の中央分子診断の現状と展望。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月30日

木谷知樹、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：外傷性中硬膜動脈損傷のリスクファクターと経過に関する検討。日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜、2022年9月30日

館 哲郎、木嶋教行、中川智義、黒田秀樹、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、保仙直毅、貴島晴彦：膠芽腫に対する患者由来腫瘍細胞を用いた CAR-T 療法の開発。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

山崎夏維、前林勝也、副島俊典、加藤実穂、瀧本哲也、市村幸一、金村米博、信澤純人、平戸純子、義岡孝子、荒川芳輝、山本哲哉、坂本博昭、隈部俊宏、西川 亮、原 純一：JCCG 中央診断に基づいた小児脳腫瘍の前向き臨床研究。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

尾崎友彦、中村元、平松匡文、清末一路、新見康成、青木束絵、秋岡尚樹、細尾久幸、石橋良太、石井暁、TimoKring、松丸祐司、松本康史、水谷克洋、中原一郎、西田武夫、大川将和、坂田洋之、高橋悠、田上秀一、徳山耕平、鶴田和太郎、藤中俊之：DAVF at the foramen magnum with bridging venous drainage alone: A multicenter study。第 38 回日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 11 日

尾崎友彦、中村元、清末一路、新見康成、秋岡尚樹、平松匡文、細尾久幸、石井暁、TimoKring、松丸祐司、松本康史、水谷克洋、中原一郎、西田武夫、大川将和、坂田洋之、田上秀一、徳山耕平、鶴田和太郎、藤中俊之：Neurovascular complications in type-4 EDS: JSNET nationwide survey。第 38 回日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 12 日

金村米博：小児脳腫瘍における基礎・トランスレーショナル研究の現状と展望。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、オンラインライブ配信、2022 年 11 月 27 日

福岡講平、栗原 淳、正札智子、佐々木惇、西川 亮、伊達 勲、永根基雄、康勝好、市村幸一、金村米博：低線量全脳脊髄照射での治療歴のある髄芽腫における予後分子マーカーの探索。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

川内 豪、荒川芳輝、勝間亜沙子、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、竹内康英、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、宮本 享、金村米博：WHO2021 中枢神経系腫瘍分類に則った当院における膠芽腫の分子遺伝学的特徴。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

森 鑑二、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、隅田美穂、勝間亜沙子、眞能正幸、児玉良典、金村米博：グリオーマ分子診断の可能性と課題。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：正中部位とその近傍における H3 K27M 変異グリオーマの臨床学的特徴。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

中戸川裕一、川路博史、林 宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midlineglioma の臨床的特徴について。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月

5日

木谷知樹、尾崎友彦、中島伸、金村米博、井筒伸之、川本早希、村上慶次朗、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：外傷性中硬膜動脈関連血管病変の診断と治療に関する検討。第46回日本脳神経外傷学会、岡山、2023年2月25日

藤中俊之、尾崎友彦、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、金村米博、中島伸：コイル塞栓術後再発脳動脈瘤の特徴と治療成績。STROKE2023第52回日本脳卒中の外科学会学術集会、横浜、2023年3月17日

B-4

里見介史、藤本健二、有田英之、山崎夏維、松下裕子、中村大志、宮北康二、梅原徹、小林啓一、田村郁、田中將太、樋口英未、沖田典子、金村米博、深井順也、阪本大輔、宇田武弘、前原健寿、永根基雄、西川亮、鈴木博義、澁谷誠、小森隆司、成田善孝、市村幸一：IDH野生型びまん性星細胞腫は存在するか？第111回日本病理学会総会、神戸市、2022年4月15日

金村米博：小児脳腫瘍の分子分類。第42回日本脳神経外科コンgres総会、大阪市、2022年5月13日

福岡講平、中澤温子、市村香代子、金村米博、市村幸一、平戸純子、義岡孝子、大宅宗一、栗原淳、康勝好：特徴的な分子遺伝学的異常を認めた Large cell/Anaplastic Medulloblastoma の2症例。第40回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022年5月28日

石毛良実、水戸部祐太、松田憲一朗、浦野由佳、大江倫太郎、二口充、鈴木修平、吉岡孝志、金村米博、園田順彦：ミスマッチ修復遺伝子異常により発生した膠芽腫に対しペムブロリズマブの投与を行い奏功が得られた一例。第40回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022年5月28日

深井順也、三笠友理奈、岩元竜太、中井康雄、佐々木貴浩、横矢美穂、金村米博、村田晋一、中尾直之：てんかん発症した小児側頭葉腫瘍の一例。第40回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022年5月28日

岡田正康、河崎麻実、金子奈穂子、野住素広、山崎博幸、福角勇人、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：齧歯類とヒトの成長軸索における複数の JNK 依存的 GAP-43 リン酸化サイトの同定。NEURO2022、沖縄県宜野湾市、2022年7月1日

館哲郎、木嶋教行、阿知波孝宗、中川智義、黒田秀樹、香川尚己、沖田典子、平山龍一、金村米博、貴島晴彦：グリオブラストーマの浸潤における ALCAM の機能的役割についての検討。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

岡田正康、金子奈穂子、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：JNK 制御リン酸化 GAP-43 はヒトの神経成長を同定できる。第47回日本医用マスメクトル学会年会、オンライン、2022年9月10日

西澤尚起、尾崎友彦、井筒伸之、木谷知樹、中島伸、金村米博、川本早希、瀧毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：くも膜下出血後水頭症に対するシャント手術におけるシャント閉塞の危険因子の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜、2022年9月28日

山本祥太、真田隆広、酒井美緒、有澤亜津子、下瀬川恵久、中西克之、金村米博、香川尚己、貴島晴彦、木下学：T1/T2ratioを用いた膠芽腫におけるT2high非造影病変の推定。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

村上慶次朗、木谷知樹、尾崎友彦、井筒伸之、中島伸、金村米博、瀧毅伊、川本早希、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：脳膿瘍の手術術式と再発・転帰に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

松田憲一郎、大江倫太郎、二口充、鹿戸将史、金村米博、園田順彦：膠芽腫におけるFLAIR高信号域の変化と予後の関連。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

武内勇人、高橋義信、谷川成佑、岡本貴成、金村米博、橋本直哉：初回病理所見では診断が確定できなかったmolecularGBMの検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

川内豪、荒川芳輝、竹内康英、正札智子、吉岡絵麻、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、宮本享：BRAFV600E変異を有する神経膠腫の臨床・組織像の解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

中川智義、香川尚己、平山龍一、黒田秀樹、館哲郎、木嶋教行、沖田典子、金村米博、市村幸一、貴島晴彦：当院における小児期悪性神経膠腫の病理診断と発生母地、予後に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

五十嵐晃平、水戸部祐太、松田憲一郎、金村米博、園田順彦：膠芽腫患者の日常生活能力に関する因子についての解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

林宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森鑑二、金村米博：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークにおけるDiffusemidlinegliomaの臨床学的特徴。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

中戸川裕一、川路博史、林宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森鑑二、金村米博：H3F3A遺伝子の変異をもつnon-midlinegliomaの臨床的特徴について。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、齊藤仁十、三井宣幸、広島 覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像/T2 強調画像比 (rT1/T2) による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 29 日

木谷知樹、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、瀧 毅伊、川本早希、井筒伸之、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外傷性中硬膜動脈損傷のリスクファクターと経過に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

川野晴香、羽柴哲夫、内藤信晶、李 強、宮田真友子、小森裕美子、李 一、亀井孝昌、武田純一、吉村晋一、天神博志、金村米博、埜中正博、浅井昭雄：膠芽腫における重複癌の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

瀧 毅伊、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療による造影剤脳症のリスク因子および予防策についての検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

Fukuoka K, Kurihara J, Shofuda T, Sasaki A, Nishikawa R, Date I, Nagane M, Koh K, Ichimura K, Kanemura Y：低線量全脳脊髄照射にて治療を行った高リスク Group3/4 髄芽腫における予後バイオマーカーの探索。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022 年 11 月 27 日

Irikura T, Fukuoka K, Kanemura Y, Hirato J, Yoshioka T, Tanami Y, Kurihara J, Oysa S, Nakazawa A, Koh K：腫瘍内に不均一な MYC 増幅が認められ、不良な転帰をたどった Group3 髄芽腫の 1 例。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022 年 11 月 27 日

瀧 毅伊、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、川本早希、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療後の造影剤脳症発生リスク因子についての検討。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10 日

木谷知樹、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：Onyx を用いた外傷性中硬膜動脈偽性動脈瘤に対する塞栓術の有用性。第 38 回日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 10 日

井筒伸之、西澤尚起、中島 伸、金村米博、尾崎友彦、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：下位脳神経麻痺をきたした頸部内頸動脈解離性動脈瘤に対するフローダイバーター留置により症状が改善した 1 例。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 11 日

村上慶次朗、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、井筒伸之、藤中俊之：内頸動脈終末部大型動脈瘤に対し同側前大脳動脈起

始部閉塞を併用したフローダイバーターステント留置術を行った 1 例。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

藤見洋佑、尾崎友彦、中島伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤中俊之：フローダイバーターステントを用いて治療した真菌性症候性脳動脈瘤の一例。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10 日

小林弘治、尾崎友彦、中島伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、藤見洋佑、藤中俊之：フローダイバーターステント治療不応の内頸動脈瘤に対して後交通動脈経由のコイル塞栓術による追加治療を試みた 2 例の検討。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

館 哲郎、木嶋教行、宇津木玲奈、黒田秀樹、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、貴島晴彦：グリオブラストーマの浸潤における ALCAM の機能的役割についての検討。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、斉藤仁十、三井宣幸、広島 覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像/T2 強調画像比(rT1/T2) による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

松田憲一郎、大江倫太郎、二口 充、鹿戸将史、金村米博、園田順彦：膠芽腫における FLAIR 高信号域の変化と予後の関連。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

武内勇人、高橋義信、谷川成佑、岡本貴成、金村米博、橋本直哉：分子遺伝学的所見が組織学的な腫瘍性変化に先行して膠芽腫の特徴を呈した病態の解析。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

井筒伸之、木谷知樹、中島伸、金村米博、尾崎友彦、川本早希、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：DuraGen®とセプラフィルム®を使用した減圧開頭術後の頭蓋形成術に関する検討。第 46 回日本脳神経外傷学会、岡山、2023 年 2 月 25 日

勝間亜沙子、兼松大介、正札智子、稲垣直之、金村米博：Elucidation of the invasion mechanism of human-derived glioma cells via L1CAM。日本生理学会第 100 回記念大会、京都市、2023 年 3 月 16 日

B-5

藤中俊之：分岐部動脈瘤に対するバルーンアシストコイル塞栓術の有用性と限界。第 13 回 Hybrid Neurosurgery 研究会、横浜、2022 年 9 月 23 日

B-6

西澤尚起、尾崎友彦、木谷知樹、中島伸、金村米博、山崎弘輝、澤田遥奈、瀧毅伊、村上

慶次朗、藤中俊之：CAS 後ステント感染による頸部内頸動脈仮性動脈瘤に対する人工血管を用いた血行再建術。第 81 回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2022 年 4 月 2 日

村上慶次朗、木谷知樹、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、瀧 毅伊、川本早希、井筒伸之、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：内頸動脈終末部巨大動脈瘤に対し同側前大脳動脈起始部閉塞を併用したフローダイバーターステント留置術を行った 1 例。第 81 回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2022 年 4 月 2 日

川本早希、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、瀧 毅伊、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：終糸脂肪腫と Arteriovenous Fisutula を合併し、一期的外科的治療によって症状の改善を認めた 1 例。第 82 回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2022 年 9 月 3 日

小林弘治、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、藤見洋佑、藤中俊之：フローダイバーターステント治療不応の内頸動脈瘤に対して後交通動脈経路のコイル塞栓術による追加治療を試みた 2 例の検討。第 82 回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2022 年 9 月 3 日

藤見洋佑、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤中俊之：フローダイバーターステントを用いて治療した真菌性症候性脳動脈瘤の一例。第 8 回日本脳神経血管内治療学会近畿地方会、豊中、2022 年 9 月 3 日

西澤尚起、井筒伸之、中島 伸、金村米博、尾崎友彦、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：症候性頸部内頸動脈解離性動脈瘤に対してフローダイバーターステント留置術を行った 1 例。第 82 回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2022 年 9 月 3 日

村上慶次朗、木谷知樹、中島 伸、金村米博、尾崎友彦、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：前脈絡叢動脈温存のための LVIS bulging technique の有用性。第 82 回日本脳神経外科学会近畿支部学術集会、豊中、2022 年 9 月 3 日

小林弘治、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、藤見洋佑、藤中俊之：フローダイバーター留置後に脳幹症状が増悪した症候性部分血栓化巨大動脈瘤の 1 例。第 63 回近畿脳神経血管内手術法ワークショップ、大阪、2023 年 1 月 28 日

B-8

藤中俊之、木谷知樹、井筒伸之、尾崎友彦、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、金村米博、中島 伸：DuraGen®による硬膜再建の工夫と高周波 Bipolar Cutting の基本。Codman web Seminar、web、2022 年 8 月 26 日

藤中俊之：Flow Diverter 治療 ～テクニカルチップスと現時点での課題～。Web セミナー脳血

管内治療の最前線、Web、2022年9月8日

中島 伸：ポリファーマシー。令和4年度大阪府医師会「医療安全推進指導者講習会」、大阪、2022年11月26日

金村米博：遺伝子診断。小児神経外科教育セミナー2022、Web開催（オンデマンド配信）、2022年6月9日～7月3日

金村米博：WHO2021脳腫瘍分類の概要と分子診断実施におけるポイント。第36回多摩脳腫瘍研究会、オンライン、2022年10月29日

藤中俊之：i-ED Coilを用いた脳動脈瘤塞栓術。Kaneka Expert Meeting 2022、札幌、2022年11月18日

藤中俊之、木谷知樹：くも膜下出血術後管理ーピヴラツツ®点滴静注液の初期使用経験ー。泉州SPASMネットワークミーティング、大阪、2022年12月12日

藤中俊之：Flow Diverter治療～困難例に対するテクニカルチップスとトラブルシューティング～。e-casebook LIVE「達人がFlow diverterを語りつくす！技術伝承：中上級者への道」、東京、2023年1月6日

藤中俊之：Pipeline治療の実際～Technical TipsとPREMIRE適応について～。東北Pipeline User's Meeting～What are your options～、仙台、2023年1月27日

藤中俊之：脳動脈瘤に対する血管内治療の進歩と現時点での課題。第22回三重・大阪脳血管障害治療研究会、web、2023年2月3日

藤中俊之、尾崎友彦：大阪医療センターにおけるNeuroform Atlas + Target Coil。EBM Atlas Conference 2023、札幌、2023年2月11日

藤中俊之：Flow Diverter治療～テクニカルチップスと現時点での課題～。第8回岩手脳血管内治療ウィンターセミナー、盛岡、2023年2月18日

藤中俊之：Pipeline治療の実際～Technical TipsとPREMIRE適応について～。Asahikawa IVR Seminar、旭川、2023年2月24日

藤中俊之：Flow Diverter治療～テクニカルチップスと現時点での課題～。鹿児島脳血管内治療研究会、鹿児島、2023年3月10日

藤中俊之：脳動脈瘤に対する血管内治療の進歩と現時点での課題。Stroke手術手技セミナーin大阪、大阪、2023年3月24日

B-9

藤中俊之 : DOCTOR'S FLAP、FM 大阪「LOVE FLAP」、2022 年 8 月 4 日

心臓血管外科

西 宏之

当院では“低侵襲化と生活の質（QOL）向上を目指した心臓血管外科治療”を診療基本方針とし、エビデンスに基づきながら個々の症例の病態や背景に則した最善の治療を提供しています。低侵襲手術をはじめとした最先端の技術・手術手技を駆使し、一人一人の患者さんに適した治療を選択し、総合病院である強みを生かしたあらゆる状況に対応可能な心臓血管外科治療を心がけております。通常的心臓血管外科手術はもちろんのこと、MICS(低侵襲心臓手術・小切開心臓手術)やステントグラフト等の心・大血管治療に積極的に取り組み、通常の手術が困難と考えられる高齢の患者様や、様々な合併症を有するハイリスクの患者様に対し、出来るだけ負担が少なく、QOL(生活の質)を損なわない、安全かつ確実な治療を提供しています。また、循環器内科や救命救急センターとの緊密な連携下での緊急手術や迅速かつ開かれた病診連携、病々連携により、地域の循環器診療に貢献しています。

冠動脈疾患に対しては、低侵襲心拍動下冠動脈バイパス術（±人工心肺）を第一選択とし、症例に応じて左小開胸のMICS-CABGを施行しております。また、循環器内科によるPCI治療と組み合わせたhybrid手術も行っています。

弁膜症手術では、僧帽弁閉鎖不全症では弁形成術を積極的に行うことにより、術後の抗凝固療法の回避および心機能の回復を目指したQOLを考慮した術式選択をしています。また、当院の特徴として再弁手術症例が多く、臨床研究にて再手術術式の妥当性および安全性を確認しています。また更に、早期社会復帰が可能である、右小切開のMICS(低侵襲心臓手術・小切開心臓手術)を積極的に行っており、僧帽弁疾患だけでなく、大動脈弁手術、不整脈手術にも行っています。新しい三尖弁形成術に関する多施設共同研究にも参画しており、MICSの様々な局面への応用等の取り組みを行っております。

大動脈疾患では、胸部大動脈瘤および腹部大動脈瘤では積極的にステントグラフト治療を適応することにより、高齢者、脳梗塞、腎不全、慢性閉塞性肺疾患等のハイリスク症例や破裂等の緊急症例に対しても飛躍的な低侵襲化が得られています。更に腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療に関しては、国立病院機構のネットワーク研究に参加することにより長期成績を検討しています。また、積極的な緊急症例の受け入れのもと、急性大動脈解離治療を積極的に行っており、術後の残存解離に対しては大動脈内視鏡を用いた病態解明や必要に応じて2期的ステントグラフト治療を行っています。慢性B型大動脈解離に関しては、大動脈内視鏡を用いたステントグラフトを積極的に行っており、この世界でも類をみない術式の症例を重ねて新しい知見の蓄積を行っております。

多施設のデータベース事業にも参画し、心臓血管外科領域からの様々なエビデンスの発信にも勤めております。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Nishi H, Yokoyama H, Yaku H, Doi K, Nishimura Y, Abe K, Tsukui H, Tabata M, Okamoto K, Park YK, Matsuda H. Efficacy of simulation training for beating heart coronary anastomosis using BEAT + YOUCAN simulator. Asian Cardiovasc Thorac Ann. 2022;30:661-668

A-3

村上貴志、吉龍正雄、齋藤哲也、榊 雅之：義歯誤飲後の消化管損傷が原因と考えられた感染性胸腹部大動脈瘤の1例。日本血管外科学会雑誌、2022 in press

B-3

西 宏之、北原睦識、田口卓良、吉龍正雄：MICS 三尖弁手術における直視下 MICS の利点と鏡視下 MICS に向けての展開。第 49 回日本胸部外科学会定期学術集会、横浜、2022 年 10 月 6 日

西 宏之、北原睦識、白崎幸枝、吉龍正雄：市中病院における僧帽弁 MICS は標準術式となり得るか？。第 53 回日本心臓血管外科学会学術総会、旭川、2023 年 3 月 25 日

西 宏之：ハイリスク症例に対する心臓血管外科手術とその工夫～心臓血管外科術後心不全にサムタスをどう使うか～。第 53 回日本心臓血管外科学会学術総会、旭川、2023 年 3 月 23 日

西 宏之：大動脈内視鏡を用いた慢性大動脈解離への治療戦略。第 53 回日本心臓血管外科学会学術総会、旭川、2023 年 3 月 24 日

B-4

田口卓良、西 宏之、北原睦識、吉龍正雄：Total arch replacement 術後 severe TR に対する MICS アプローチによる三尖弁形成術。第 6 回 Japan MICS Summit 2022 (日本低侵襲心臓手術学会)、福島、2022 年 7 月 9 日

田口卓良、西 宏之、北原睦識、吉龍正雄：IgG4 関連疾患による巨大多発冠動脈瘤に対する手術治療。第 25 回日本冠動脈外科学会学術大会、東京、2022 年 12 月 1 日

西 宏之、北原睦識、白崎幸枝、田口卓良、吉龍正雄：開心術後体液管理におけるトルバプタンリン酸エステルナトリウムの使用経験。第 50 回日本集中治療医学会学術集会、京都、2023 年 3 月 4 日

西 宏之、三隅祐輔、柿澤佑実、吉龍正雄：Najuta による 2-debranching TEVAR 術後の腹部大動脈瘤を合併した重症大動脈弁閉鎖不全症に対する MICS-AVR。第 53 回日本心臓血管外科学会学術総会、旭川、2023 年 3 月 24 日

B-5

西 宏之：血管内視鏡(大動脈内視鏡)ガイドによる大動脈解離治療。第 9 回 T C I F (トランスカテーテル イメージングフォーラム)、Web、2022 年 5 月 27 日

西 宏之：ハイリスク症例に対する挑戦～低侵襲心臓手術から重症患者管理まで～。Cardiovascular surgery web seminar(柏)、Web、2022 年 7 月 5 日

西 宏之：大動脈内視鏡ガイドによる慢性大動脈解離に対する TEVAR。Medtronic Masters 2022、Web (東京)、2022 年 7 月 17 日

西 宏之、三隅祐輔、柿澤佑実、吉龍正雄：右肋間開胸アプローチと正中切開アプローチを併用した両肺が胸骨と縦隔内に強固に癒着した症例に対する 3 回目の再開胸僧帽弁再置換術。WEP2022、大阪、2022 年 7 月 30 日

西 宏之：心臓血管外科術後心不全に対してサムタスをどう使うか。サムタス全国 e 講演会、Web(大阪)、2022 年 9 月 1 日

西 宏之：Aortic Angioscopy assisted Thoracic Endovascular Repair for Chronic type B aortic dissection。Z conference in Tokyo 2022、Web(東京)、2022 年 10 月 15 日

西 宏之：ハイリスク症例に対する挑戦～低侵襲心臓手術から重症患者管理まで～。学術講演会一体液貯留を考える一、Web、2022 年 10 月 20 日

西 宏之：MICS における NO の役割を考える。Web Seminar iNO HEART SEMINAR、Web(名古屋)、2022 年 12 月 7 日

西 宏之：ハイリスク症例に対する挑戦～低侵襲心臓手術から重症患者管理まで～。心臓血管外科領域オンライン講演会、Web(鳥取)、2022 年 12 月 13 日

西宏之：B 型大動脈解離に対する TEVAR～大動脈内視鏡から得た知見をもとに～。Medtronic Aortic Webinar 大動脈解離に対する治療戦略の現状、Web(大阪)、2023 年 1 月 13 日

B-6

柿澤佑実、三隅祐輔、吉龍正雄、西 宏之：内臓逆位を伴った虚血性心筋症に対する冠動脈バイパス術の 1 例。第 65 回関西胸部外科学会学術集会、浜松、2022 年 6 月 18 日

三隅祐輔、柿澤佑実、吉龍正雄、西 宏之：術後 MR 増悪にて再手術に至った乾酪様僧帽弁輪石灰化の一例。第 65 回関西胸部外科学会学術集会、浜松、2022 年 6 月 18 日

田口卓良、北原睦識、吉龍正雄、西 宏之：偽腔内の観察が可能であった、オープンステント術後 SINE の 1 例。第 18 回近畿血管内視鏡研究会、Web(大阪)、2022

年 9 月 3 日

皮膚科

小澤健太郎

当科では、国立病院機構が担うべき医療のなかでも皮膚がんを含めた皮膚腫瘍に重点を置いており、その他にも下肢静脈瘤や難治性炎症性皮膚疾患など幅広い領域の皮膚疾患の診断と治療に取り組んでいます。

皮膚腫瘍に関しては良性、悪性を問わずに診療しています。当院は皮膚がんに対する手術療法ならびに化学療法、放射線療法などの集学的な治療を行うことが可能な施設であり、複数の日本皮膚科学会認定皮膚科専門医をはじめ優れたスタッフと恵まれた医療設備のもと、正確な診断と十分な説明、事実に基づいた治療を実践し、皮膚がん患者の社会的な生活の質を第一とした診療を行っています。皮膚良性腫瘍に対しては主に手術療法を行いますが、適応があれば凍結療法など侵襲性の低い治療を積極的に行っています。皮膚腫瘍の診断は容易ではないものも多いため、ダーモスコピーによる非侵襲的検査や皮膚生検を積極的に行い、臨床検査科病理部門との合同カンファレンスを行うことで診断精度を高めています。

また、金属アレルギーや接触皮膚炎、薬疹、自己免疫性水疱症などのアレルギー性疾患、帯状疱疹や蜂窩織炎などの皮膚感染症、皮膚潰瘍など専門性の高い疾患の診療にも対応し、難治性皮膚疾患に関しても、地域の医療施設や近隣の総合病院から患者を積極的に受け入れています。

下肢表在静脈の弁不全によって発生する下肢静脈瘤に対する専門外来を継続し、保存的治療で症状制御が困難な症例に対して、短期入院の血管内レーザー治療を含めた外科的手術を数多く経験し、良好な治療成績を残しています。今年度から血管内レーザー治療の日帰りの手術も導入しています。

臨床研究としてはメルケル細胞癌の疫学調査についての多施設共同研究に参加しています。教育面では当院は大学病院以外では数少ない日本皮膚科学会認定専門医主研修施設で、新専門医制度においても研修基幹施設に認定されており、多様な皮膚疾患の診療を経験できる体制を整えて、皮膚科専門医育成のための医師教育にも取り組んでいます。

【2022年度 研究発表業績】

A-3

益田知可子、吉田裕梨、池田 彩、原田 潤、小澤健太郎：肛囲に発生した顆粒細胞腫の1例。「臨床皮膚科」76(7)：P.533-537、医学書院、2022年6月

池田 彩、小林祐佳、益田千可子、出野りか子、文 省太、小澤健太郎、山本司郎、家原卓史、小杉準平、上田恭敬：悪性黒色腫に対するペンブロリズマブ導入後に抗横紋筋抗体陽性の重症筋無力症とギラン・バレー症候群を発症した1例。「Skin Cancer」37(1)：P.40-45、日本皮膚悪性腫瘍学会、2022年6月

来田英伸、菊澤千秋、文 省太、出野りか子、池田 彩、小澤健太郎、北村三和：左第1趾腹に生じた symplastic glomus tumor の1例。「皮膚の科学」21(2)P.114-118、日本皮膚科学会大阪

地方会・京滋地方会、2022年6月

益田知可子、小林佑佳、吉田裕梨、池田 彩、原田 潤、小澤健太郎：治療経過中に抗BP180NC16a抗体が陽性化したDPP-4阻害薬関連水疱性類天疱瘡の1例。「皮膚の科学」21(2): P.170-174、日本皮膚科学会大阪地方会・京滋地方会、2022年9月

B-4

文 省太、来田英伸、菊澤千秋、池田 彩、小澤健太郎、柴山浩彦：線状IgA水疱性皮膚症、腫瘍随伴性血管炎および手指壊疽を伴った末梢性T細胞リンパ腫の1例。第121回日本皮膚科学会総会、京都/Web、2022年6月2-5日

菊澤千秋、来田英伸、文 省太、池田 彩、小澤健太郎、後藤啓介、柴山浩彦：表皮突起中心の表皮向性を示した慢性型ATLLの1例。第38回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会、弘前/Web、2022年6月25日

B-6

藤本 雷、来田英伸、文 省太、菊澤千秋、池田 彩、小澤健太郎、日野上はるな：多発する脂腺系腫瘍を契機に診断したMuir-Torre syndromeの1例。第115回近畿皮膚科集談会、大阪/Web、2022年7月10日

藤森なぎさ、武田 学、藤本 雷、小澤健太郎、後藤啓介：Non-episodic angioedema with eosinophiliaの1例。第73回日本皮膚科学会中部支部学術大会、富山/Web、2022年10月30日

武田 学、藤森なぎさ、藤本 雷、小林佑佳、小澤健太郎、柴山浩彦、長手泰宏、倉知貴志郎：多発性皮下腫瘍を呈したTリンパ芽球性リンパ腫の1例。第494回日本皮膚科学会大阪地方会、Web、2022年12月10日

B-8

小澤健太郎：ご紹介患者さんの経過報告。大阪中央皮膚疾患フォーラム、大阪、2022年4月21日

小澤健太郎：皮膚科研修のTips。第5回OSAKADermatologySeminar、大阪、2022年5月27日

藤森なぎさ：ご紹介患者さんの経過報告。大阪中央皮膚JointMeeting、大阪、2022年9月22日

小澤健太郎：内臓悪性腫瘍の皮膚状態。第97回成人病公開講座、大阪、2022年11月30日

泌尿器科

西村健作

泌尿器科では悪性腫瘍・尿路結石症や前立腺肥大症など良性疾患までによる多岐にわたる疾患に対する診療を行っています。

2021年1月ダヴィンチ Xi システムが導入され、前立腺癌に対するロボット支援下前立腺全摘除術や腎癌に対するロボット支援下腎部分切除術を標準治療として開始しています。保険適応は副腎腫瘍・腎癌・腎盂尿管癌・膀胱癌などに拡大され、2022年からロボット支援下腎摘除術も行なっています。従来行ってきた3Dモニターを用いた腹腔鏡手術も継続し、泌尿器科疾患の低侵襲手術を全て行える体制となっています。

ロボット支援下前立腺全摘除術は2020年度12例から2021年度40例、2022年度41例、ロボット支援下腎部分切除術は2020年度3例から2021年度8例、2022年度14例と飛躍的に増加しています。今後は症例を集積し、より高い水準の治療成績を目指しています。

また良性疾患において尿路結石症ではレーザーを用いた経尿道的腎尿管碎石術 (f-TUL) や経皮的腎碎石術を併用したTAPを積極的に行っています。前立腺肥大症では出血を最小限とした経尿道的前立腺核出術 (TUEB) など短期入院でより有効性の高い手術療法も行っています。

密接に地域連携を行いながら、正確な診断と高い水準の治療を提供できることを基本方針としています。これらの診療内容や治療成績を学会や地域連携フォーラムなどで発表を行い、臨床研究や治験などは悪性腫瘍を中心に積極的に取り組んでいます。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Kato T, Yumiba S, Nakata W, Nakano K, Nagahara A, Matsuzaki K, Hayashi Y, Hatano K, Kawashima A, Takao T, Nishimura K, Nakai Y, Nakayama M, Nishimura K, Takada S, Tsujihata M, Uemura M, Nonomura N, Imamura R. A comparative study on nivolumab and axitinib as secondary treatment in patients with metastatic renal cell carcinoma: A multi-institutional retrospective study in Japan. *Int J Urol*. 2022 Dec 28. doi: 10. 1111

Kato T, Fujita K, Minami T, Nagahara A, Hyashi Y, Nakata W, Matsuzaki K, Nakano K, Hatano K, Kawashima A, Imamura R, Takada S, Nishimura K, Tsujihata M, Takao T, Nakai Y, Nakayama M, Nishimura K, Uemura M, Uemura H, Nonomura N.

Real-world efficacy and safety of nivolumab plus ipilimumab in untreated metastatic renal cell carcinoma, and the impact of previous nephrectomy on clinical outcome: Japanese multi-institutional retrospective study. *Int J Clin Oncol*. 2022 Oct; 27(10) : 1596-1604.

Tomiya E, Fujita K, Matsuzaki K, Narumi R, Yamamoto A, Uemura T, Yamamichi G, Koh Y, Matsushita M, Hayashi Y, Hashimoto M, Banno E, Kato T, Hatano K, Kawashima A, Uemura M, Ukekawa R, Takao T, Takada S, Uemura H, Adachi J, Tomonaga T, Nonomura N. EphA2 on urinary

extracellular vesicles as a novel biomarker for bladder cancer diagnosis and its effect on the invasiveness of bladder cancer. Br J Cancer. 2022 Oct;127(7):1312-1323.

A-3

富山栄輔、藤田和利、松崎恭介、白水 崇、鳴海良平、神宮司健太郎、加藤大悟、波多野浩士、河嶋厚成、氏家 剛、植村元秀、高尾徹也、足立 淳、朝長 毅、野々村祝夫：尿中および組織分泌細胞外小胞のプロテオミクス解析による新規膀胱癌バイオマーカーの探索「日本分子腫瘍マーカー研究会」37(0): p16-17、2022 年

岡 利樹、泉 はるか、野々村大地、松崎恭介、西村健作：悪性腫瘍による尿管閉塞に対する金属型尿管ステントの治療成績「Japanese Journal of Endourology and Robotics」35(2): p319-322、2022 年

泉 はるか、野々村大地、岡 利樹、松崎恭介、西村健作：13 年間外科的治療を繰り返し施行したパラガングリオーマの 1 例「泌尿器科紀要」68(12):p 385-390、2022 年

B-4

富山栄輔、藤田和利、松崎恭介、白水 崇、鳴海良平、神宮司健太郎、加藤大悟、波多野浩士、河嶋厚成、氏家 剛、植村元秀、高尾徹也、足立 淳、朝長 毅、野々村祝夫：尿中エクソソームタンパクに着目した膀胱癌バイオマーカー探索と新規診断技術の開発 (Discovery of urinary exosomal protein-based bladder cancer biomarker and development of a novel diagnostic technique)。第 81 回日本癌学会学術総会、横浜、2022 年 9 月 30 日

假屋真帆、野々村大地、松崎恭介、隠岐雄太、吉岡史江、西村健作、大西淳子、北山典子、高柿奈緒子、豊山美由紀、窪田圭佑：当院での排尿ケアチーム介入患者のリハビリテーションと尿道カテーテル抜去の関連について。第 29 回日本排尿機能学会、札幌、2022 年 9 月 1 日

富山栄輔、藤田和利、松崎恭介、白水 崇、鳴海良平、神宮司健太郎、加藤大悟、波多野浩士、河嶋厚成、氏家 剛、植村元秀、高尾徹也、足立 淳、朝長 毅、野々村祝夫：尿中エクソソームタンパクに着目した膀胱癌バイオマーカー探索と新規診断技術の開発 (Discovery of urinary exosomal protein-based bladder cancer biomarker and development of a novel diagnostic technique)。第 81 回日本癌学会学術総会、横浜、2022 年 9 月 30 日

吉岡史江、隠岐雄太、野々村大地、松崎恭介、西村健作：外科的治療を要した下大静脈血栓を伴う気腫性腎盂腎炎の 1 例。第 252 回日本泌尿器科学会関西地方会、神戸、2022 年 10 月 29 日

隠岐雄太、吉岡史江、野々村大地、松崎恭介、西村健作：急速な再発増大を繰り返した膀胱 Post-Operative spindle cell nodule (PSCN) の 1 例。第 252 回日本泌尿器科学会関西地方会、神戸、2022 年 10 月 29 日

野々村大地、吉岡史江、隠岐雄太、松崎恭介、西村健作：異所性腎に発生した腎腫瘍に対して、ロボット補助腹腔鏡下腎部分切除術を施行した 1 例。第 36 回日本泌尿器内視鏡・ロボテ

イクス学会、神戸、2022年11月11日

B-8

松崎恭介：当院におけるカバジタキセルの使用経験。CRPC 化学療法講演会、大阪、2022年5月13日

産科・婦人科

異 啓司

当院は大阪府の産婦人科診療相互援助システム（OGCS）加盟施設として、産婦人科救急受け入れ施設となっています。

産科では、NICUの併設がないため早産や胎児疾患には対応できませんが、母体疾患を中心に積極的に受け入れています。近年ハイリスク妊娠の割合は増加の一途をたどっており、当院でもこの傾向は顕著ですが、院内各診療科と緊密に連携して管理し、できるだけ自然な分娩を目指しています。最新の知識や技術を駆使して、一人一人の妊婦に応じた個別で適切なリスク管理を行うことが当科の基本目標であります。またAIDS診療拠点病院としてHIV/AIDS合併妊娠の管理にも積極的に取り組んでいます。

婦人科は大阪における子宮癌治療の草分けとして出発・発展し、全国でも屈指の婦人科がん治療施設です。手術療法をはじめ、化学療法、放射線治療等の高度ながん治療が診療の中心ですが、子宮筋腫や卵巣嚢腫等の良性疾患も多数取り扱っており、可能な限り婦人科救急にも対応しています。腹腔鏡下手術や子宮鏡下手術を積極的に取り入れ、術後後遺症の最少化、機能の温存を考慮しながら、年齢や生活環境なども含めた個々の症例に応じた適切な治療法を提案し実施しています。腹腔鏡下手術では、良性腫瘍だけでなく悪性腫瘍手術の認定施設であり、ロボット補助下手術も実施しNCD登録を行っています。またがん遺伝子パネル検査の実施施設であり、遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）の未発症者に対する予防的手術も実施しています。

新専門医制度において、京都大学、近畿大学と連携した産婦人科専門医指導施設です。また日本婦人科腫瘍学会、日本周産期新生児医学会、日本女性医学会等のサブスペシャリティ専門医研修施設として、若手医師の指導・育成を行っており、全国の医療施設で中心となって活躍している多数の専門医を輩出してきました。

臨床研究として、日本産科婦人科学会の周産期登録、婦人科腫瘍登録、を行うとともに、学会や婦人科悪性腫瘍研究機構(JGOG)と連携した臨床試験にも積極的に参加しており、わが国における周産期、婦人科腫瘍診療の発展に貢献しています。また治験を実施して新たな治療法の創出に貢献しています。さらに、京都大学婦人科学産科学教室及び関係病院と連携した多施設協働の臨床研究（KAMOGAWA study）に参加し、新たな知見を得てその成果は公表されています。

【2022年度 研究業績発表】

A-3

川道彩夏、伴 建二、藤上友輔、小椋恵利、赤木佳奈、松本久宣、飛梅孝子、岡垣篤彦、異 啓司：子宮頸癌との鑑別を要した子宮頸部悪性リンパ腫の1例「産婦人科の進歩」74(2)：P286、2022年5月1日

田中弘之、吉龍澄子、上月志乃、岡垣篤彦：帝王切開後に発生した腹壁子宮内膜症の2例「日本

形成外科学会誌」42(9) : P572-573、2022年9月20日

岡垣篤彦、藤谷茂樹、草深裕光、山本康仁、白鳥義宗 : RRS への臨床現場への対応—病院情報システムを用いた診療補助の可能性「医療情報学」42(Suppl.)2022 : P475-477、2022年11月17日

岡垣篤彦 : ブルーコール用診療録の作成と運用の評価「医療情報学」42(Suppl.)2022 : P479、2022年11月17日

山田章子、下城康史、立堀善久、岡垣篤彦 : 電子カルテシステムに必要な性同一性障害に対応する機能「医療情報学」42(Suppl.)2022 : P1027-1032、2022年11月17日

小椋恵利、飛梅孝子、川道彩夏、藤上友輔、赤木佳奈、伴 建二、松本久宣、岡垣篤彦、巽 啓司 : 一卵性双生児に発症した処女膜閉鎖症「日本女性医学学会雑誌」30(2) : P266-270、2023年1月30日

B-3

小椋恵利、松本久宣、川道彩夏、藤上友輔、赤木佳奈、伴 建二、飛梅孝子、岡垣篤彦、巽 啓司 : 保存的治療で軽快せず、腹腔鏡下ドレナージ術を実施した海外渡航歴のある ESBL 産生大腸菌による卵管卵巣膿瘍患者の一例。第 62 回日本産科婦人科内視鏡学会学術講演会、横浜、2022年9月8日～9月10日

岡垣篤彦 : 大阪医療センターの電子カルテ。第 13 回 J-SUMMITS 全国集会、第 21 回日本クリニカルパス学術集会共同企画、岐阜、2022年11月12日

岡垣篤彦、藤谷茂樹、草深裕光、山本康仁、白鳥義宗 : RRS への臨床現場への対応—病院情報システムを用いた診療補助の可能性—。第 41 回医療情報連合大会シンポジウム、札幌、2022年11月17日

岡垣篤彦 : ブルーコール用診療録の作成と運用の評価。第 41 回医療情報連合大会シンポジウム、札幌、2022年11月17日

山田章子、下城康史、立堀善久、岡垣篤彦 : 電子カルテシステムに必要な性同一性障害に対応する機能。第 39 回医療情報連合大会、札幌、2022年11月20日

飛梅孝子 : 術者が操作する子宮マニピュレーターシステムの開発。第 35 回日本内視鏡外科学会、名古屋、2022年12月7日～9日

B-5

藤上友輔、松本久宣、矢崎基紘、三木麻紗与、川道彩夏、小椋恵利、赤木佳奈、伴 建二、飛梅孝子、岡垣篤彦、巽 啓司 : 当科におけるがん遺伝子パネル検査の現状。第 147 回近畿産婦人科学

会、京都、2022年10月29日～10月30日

眼科

大鳥 安正

大阪の中心に位置していることから、近畿圏における主要な基幹病院として病診連携・病病連携の重要性を認識し、紹介元と緊密に連絡を取るようにより、特に緑内障・網膜硝子体疾患においては多くの難治性疾患を受け入れ、最終病院として機能しています。各医員は白内障以外に専門分野を標榜しており、情報収集も怠らず、最新で質の高い医療を提供することを心がけています。また、厚生労働省の政策医療感覚器ネットワーク機関としても全国の多施設共同研究に参加しています。

2022年4月から2023年3月の眼科における総手術件数は総計2,469件でした。**白内障**：白内障手術件数は最も多く、2022年の白内障関連手術件数は1,787件でした。入院は両眼3～4泊4～5日、片眼1泊2日、日帰りなどから選択可能です。白内障手術の待ち期間は平均1か月程度です。**緑内障**：原発開放隅角緑内障は薬物療法で眼圧下降が十分でない場合には外科的治療（2022年の緑内障手術件数は340件）を行っています。低侵襲緑内障手術（Minimally Invasive Glaucoma Surgery, MIGS）も採用しております。また、複数回の緑内障手術でも眼圧下降が得られないような難治な緑内障に対してはチューブシャント手術を行っています。**網膜・硝子体手術**：増殖糖尿病網膜症、増殖硝子体網膜症、網膜剥離、黄斑部手術などを中心に積極的に行っています。2022年には硝子体手術280件が行われ、網膜剥離症例では症例に応じて初診当日入院・当日手術も行っていきます。硝子体手術は25ゲージシステムによる低侵襲硝子体手術を実施し良好な成績を得ています。手術加療だけでなく、加齢黄斑変性、網膜静脈分枝閉塞症や糖尿病黄斑浮腫などに対する抗Vascular Endothelial Growth Factor (VEGF)抗体の硝子体内注射も積極的に行っています。**その他（眼形成・翼状片など）**：翼状片手術、眼瞼内反症手術など61件の手術が行われました。眼部悪性腫瘍は当院の形成外科と連携しております。当院はHIV/AIDS先端医療開発センターであるため、免疫・感染症内科との連携によりサイトメガロウイルス網膜炎などのHIV眼合併症の治療も多数行っています。

【2022年度 研究発表業績】

A-1

大鳥安正：隅角鏡検査：緑内障における異常所見、新編眼科プラクティス、1 スッキリわかる緑内障の検査と診断、文光堂、p96-100、2022年4月3日

大鳥安正：高眼圧症、絶対緑内障、今日の眼疾患治療指針第4版、医学書院、p780-782、2022年9月15日

大鳥安正：濾過手術後の濾過胞感染の危険性や、それを予防するための工夫につ

いて教えてください、最新臨床研究から探る 眼科臨床のギモン Q&A: 医学書院、p239-p246、2022 年 10 月 30 日

A-3

中村詠士、前田秀高、松岡孝典、松田 理、大鳥安正：無散瞳下における皮膚電極を用いた多局所網膜電図の刺激輝度についての検討「日本眼科学会雑誌」127(1)：p19-25、2023 年 1 月 10 日

松岡孝典、佐藤大樹、西垣誠士、部坂優子、雲井美帆、辻野知栄子、松田 理、大鳥安正：Amsler チャートによる緑内障性傍中心視野障害検出の検討「あたらしい眼科」40 (1)：p118-121、2023 年 1 月 25 日

B-3

大鳥安正：シンポジウム 3 早期緑内障への手術介入～現状と未来～ 濾過手術の現状と将来。第 46 回日本眼科手術学会、東京、2023 年 1 月 27 日

B-4

松岡孝典、佐藤大樹、部坂優子、雲井美帆、辻野知栄子、松田 理、大鳥安正：ヒト免疫不全ウイルス治療拠点病院における HIV 眼合併症の変化。第 126 回日本眼科学会、大阪、ハイブリット開催、2022 年 4 月 15 日

松岡孝典：高齢正常眼圧緑内障後期例 治療下眼圧 10mmHg 前後 ～レクトミー派として～。第 8 回東西対抗緑内障研究会、大阪、ハイブリット開催、2022 年 4 月 16 日

B-5

福田達也、西垣誠士、部坂優子、松岡孝典、雲井美帆、辻野知栄子、松田 理、大鳥安正：緑内障の診断で紹介となり頭蓋内病変が見つかった症例の検討。第 251 回 OCC、大阪、2022 年 11 月 5 日

大鳥安正：OCT を用いた緑内障鑑別診断。大阪医科薬科大学オープンカンファレンス特別講演、大阪、Web 開催、2023 年 1 月 12 日

大鳥安正：OCT を用いた緑内障の鑑別診断。第 66 回栃木県眼科医会研究会特別講演、栃木、Web 開催、2023 年 1 月 13 日

大鳥安正：OCT を用いた緑内障鑑別診断。第 111 回鳥取大学眼科研究会特別講演、鳥取、ハイブリット開催、2023 年 2 月 18 日

B-8

大鳥安正：緑内障手術。大阪大学医学部眼科拡大医局会、Web 開催、大阪、2022 年 5 月 25 日

大鳥安正：緑内障手術の術後管理～濾過手術を中心に～。第 33 回日本緑内障学会、研修医・コメディカルスタッフ講習会 2、緑内障診療における重要課題とエビデンス、ハイブリッド開催、横浜、2022 年 9 月 17 日

大鳥安正：インストラクションコース 37、徹底討論～症例から学ぶ緑内障診療～。第 76 回日本臨床眼科学会、東京、ハイブリッド開催、2022 年 10 月 14 日

大鳥安正：OCT を併用する眼底読影の実際（進化編）。北摂地区緑内障読影勉強会、Web 開催、2022 年 11 月 8 日

大鳥安正：Introduction～Coffee と緑内障について～。Keep the Visual Field 2022、Web 開催、大阪、2022 年 11 月 12 日

大鳥安正：インストラクションコース 18、関西・中四国緑内障道場：実践！緑内障手術 術中・術後の合併症リカバリー。第 46 回日本眼科手術学会、東京、2022 年 1 月 28 日

大鳥安正：教育セミナー17、緑内障レーザー治療の基本手技、総論。第 46 回日本学会手術学会、東京、2023 年 1 月 29 日

大鳥安正：視神経乳頭の診かた。第 21 回眼科診療アップデートセミナー2023 in Kyoto、京都、ハイブリッド開催、2023 年 3 月 18 日

B-9

松田 理：DOCTOR'S FLAP。LOVE FLAP、FM 大阪、2023 年 3 月 16 日

耳鼻咽喉科

西村 洋

2015年4月1日より、前任科長の堀井の新潟大学教授就任に伴い、交代で私（西村）が大阪府立母子保健総合医療センターより着任しました。北村が大阪府立急性期・総合医療センターへ異動になり、森鼻が大阪大学より李医師が堺市立病院より着任しました。専修医の2名（山村・秋田）は留任しました。一昨年は科長が西村洋（平成5年大阪大学卒）、森鼻哲生（平成11年大阪大学卒業）、李杏菜（平成22年川崎医科大学卒）、山村裕真（平成24年大阪大学卒）、秋田佳名子（平成25年近畿大学卒）です。一昨年度の4名より1名増えて5人体制となりました。2017年4月より山村が大学に戻り当院の研修医であった福田雅俊（平成27年阪大卒）が新たに耳鼻咽喉科の専修医となりました。2017年12月に秋田が退職となりました。2018年3月末で森鼻と李が退職となり、代わりに2018年4月より花田、秋田、中（藤原）が採用になりました。2018年4月末で秋田が退職になり、2018年5月より笹井が採用になりました。2019年3月末で笹井が退職となり、4月より大西恵子医師が採用となりました。2019年6月に大西医師が退職し、7月より武田和也医師が着任しました。2020年3月に武田が退職し、2020年4月より、阪大の鼻・副鼻腔グループから津田医師が着任しました。2020年度末の時点で西村、津田、花田、藤原、和田となっています。2021年4月より、西村、津田、花田、和田となっています。

私の専門分野は中内耳手術や難聴などの耳科学で、博士課程（大阪大学大学院耳鼻咽喉科）での研究内容は人工内耳装用者の聴覚の中枢機構を脳血流PETを用いて解明することでした。この研究の内容は英文科学雑誌 Nature に発表させていただきました。

今年度より当医療センターで診療をし、またその臨床内容に則した形で、患者さんの治療に繋がる研究をやっていけたらと考えています。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Akama T, Tsuda T, Terada R, Tanaka S, Tanaka H, Yoshitatsu S, Nishumura H, Inohara H: A Case of Traumatic Nasal Valve Stenosis Successfully Treated with Open Rhinoplasty and Z-Plasty. 「Ear, Nose & Throat Journal」 Online ahead of print, 2022年7月12日

B-4

赤間俊之、津田 武、寺田理沙、西村 洋：外傷性鼻弁狭窄に対しZ形成術を併用した外鼻形成術が有効であった一例。第61回日本鼻科学会総会・学術講演会、金沢、2022年10月14日

B-4

高田恭輔、西村 洋：中枢性のめまいの3症例。第81回日本めまい平衡医学会総会・学術講演会、2022年11月17日

放射線診断科・放射線治療科

東 将浩 田中英一

放射線診断科では全ての領域の臨床画像診断と、緊急止血や CT ガイド下ドレナージ・生検および肝細胞癌の肝動脈化学塞栓療法（TACE）などを行う IVR(Interventional Radiology)の 2 つの部門があり、これらを中心に臨床研究をおこなっている。

2022 年度は常勤医師 5 名、非常勤医師 2 名、および診療放射線技師で連携して臨床研究をおこなった。

CT 領域では、胸部 X 線診断能向上を目的とした肺癌手術症例の胸部画像の検討、COVID-19 重症肺炎の陰影定量化と臨床データとの対比、dual energy を用いた水強調画像や単色 X 線画像の有用性を検討した。MRI 領域では、撮影時に用いるマーカーの有用性、新たな撮影法における造影剤濃度と信号強度の関係、血管造影領域では、新たに導入した装置を用いた画質の評価や運用についての検討、核医学領域では心筋シンチでのアーチファクト改善に関して、それぞれ学会・研究会での報告、論文発表を行った。

循環器領域では、中性脂肪蓄積心血管症（triglyceride deposit cardiomyovasculopathy、TGCV）と糖尿病患者の心筋への脂肪沈着について、大阪大学と共同研究を行っている。今年度は、冠動脈 CT を解析し、ワークステーションを用いた血管壁評価などについて研究会での報告や論文発表を行った。

放射線治療科では外部放射線治療装置（リニアック）を 1 台、高線量率小線源治療装置（remote after loading system : RALS）を 1 台保有しており、これらを用いた臨床研究をおこなっている。

特に、小線源治療の研究に関しては、国内のみならず世界をリードできるよう積極的に学会報告や論文発表をおこなっている。近年、特に画像誘導小線源治療（image-guided brachytherapy）の婦人科腫瘍、前立腺癌、頭頸部腫瘍等への臨床応用拡大の研究をすすめている。2022 年度は、常勤医師 2 名、非常勤医師 3 名、研究医員（歯科医師）1 名で研究をおこなった。小線源治療の対象疾患としては、新鮮子宮頸癌、再発婦人科腫瘍、前立腺癌、口腔癌などである。

2022 年度に継続中の研究として、「子宮頸部癌新鮮例における画像誘導を用いた小線源治療の最適化」がある。また、2021 年度末までに終了した研究「乳癌における乳房温存術後の組織内照射の治療成績の遡及的研究」、「局所限局口唇癌に対する 3 次元画像誘導高線量率組織内照射単独療法の治療成績および線量一体積評価」、「局所限局可動部舌癌に対する高線量率組織内照射単独療法（54Gy/9 回、1 日 2 回照射）の妥当性に関する急性期粘膜反応の観点からの研究」、「舌癌高線量率組織内照射における病期別治療成績と線量-体積評価：TNM 悪性腫瘍の分類第 7 版と第 8 版の比較」については論文投稿中ないし作成中である。また、特定

臨床研究「前立腺がんに対する高線量率組織内照射単独放射線療法的安全性と有効性を評価する多施設共同検証試験」も研究継続中であるが、残念ながら該当患者がなく患者登録ができていない。

外部照射は IMRT などの高精度放射線治療の適応拡大に関する研究をすすめており、前立腺癌根治照射以外に、転移性脳腫瘍、脊椎転移、頭頸部癌術後照射、婦人科腫瘍、オリゴ転移などの臨床例に順次適応拡大をおこなっている。

2022 年 9 月より新リニアックシステムが稼働しており、小線源治療のみならず、外部照射でも、医師・診療放射線技師・医学物理士で臨床研究・物理研究を進める予定である。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Yoshida K, Kotsuma T, Takaoka Y, Tamenaga S, Yamazaki H, Nose T, Murakami N, Inaba K, Akiyama H, Masui K, Takenaka T, Kubota H, Tselis N, Masuda N, Yasojima H, Takeda M, Mano M, Nakamura S, Utsunomiya K, Tanigawa N, Tanaka, E: HDR-brachytherapy for accelerated partial breast irradiation: Long-term experience from a Japanese institution. 「Journal of Contemporary Brachytherapy」15(1):P1-8、2023 年 2 月 28 日

Nishihara T, Okamoto Y, Ishikawa H, Omachi N, Yoshikawa Y, Ishida K, Toratani M, Ohnishi M. Successful bronchial artery embolization using hydrogel coils for hemoptysis during extracorporeal membrane oxygenation. Radiology Case Reports. 2022 Oct; 17(10): 3686–3689、2022 年 8 月 1 日

Toratani M, Karasuyama K, Kuriyama K, Inoue A, Hamaguchi K, Fujiwara T, Kishimoto K, Ohnishi M, Higashi M. Semi-quantitative evaluation of chest computed tomography for coronavirus disease 2019 in a critical care unit: A case-control study. Medicine. 2022 Sep; 101(37): e30655、2022 年 9 月 16 日

Hirano K, Higashi M, Nakajima K : Remarkable regression of diffuse coronary atherosclerosis in patients with triglyceride deposit cardiomyovasculopathy. Eur Heart J. 2022 Dec 30;ehac762.doi: 10.1093/eurheartj/ehac762、2022 年 12 月 30 日

Kashiwagi - Takayama R, Kozawa J, Hosokawa Y, Kato S, Kawata S, Ozawa H, Mineo R, Ishibashi C, Baden MY, Iwamoto R, Saisho K, Fujita Y, Tamba S, Sugiyama T, Nishizawa H, Maeda N, Yamamoto K, Higashi M, Yamada Y, Sakata Y, Matsuzawa Y, Shimomura I : Myocardial fat accumulation is associated with cardiac dysfunction in patients with type 2 diabetes, especially in elderly or female patients: a retrospective observational study、Cardiovascular Diabetology 22:48、2023 年 3 月 7 日

A-4

濱口恭子、坪山尚寛、森 清、井上敦夫、岸本健太郎、藤原拓也、虎谷昌保、中山

明子、東 将浩：乳癌の子宮筋腫内転移の 1 例、J Jpn Coll Radiol 2023; 3: 57-62

坪山尚寛、本田 亨、東 将浩、富山憲幸：診断に直結！ルーチン MRI に加えるべき鋭い撮像、産婦人科 MRI、画像診断 42(14) 1377-1387、2022 年 11 月 25 日

A-6

近藤智美、上田道夫、中尾 弘、寺川祐介、村川圭三：^{99mTc} 心筋血流 SPECT における新たな画像処理フローによる心外集積除去の有用性の検討、全国国立病院療養所 放射線技師会誌 vol.66/No.1 2023 p82-p86

土井祥平：ARTIS icono D-Spin の複数診療科における運用、Future of Healthcare Vol、8（シーメンスヘルスケア）、2022 年 9 月

B-3

土井祥平：当院における新型血管撮影装置を使用した脳血管内治療画像支援、技師シンポジウム、第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 11 日

B-4

中山明子、虎谷昌保、東 将浩、平野賢一：CT を用いた中性脂肪蓄積心筋血管症の冠動脈壁の性状評価、第 96 回日本心臓血管放射線研究会、2023 年 1 月 21 日

菅原詩織、岡田敦彦、熊給 淳、中尾 弘：乾燥剤(CaCl₂)が市販 MRI 用マーカの代用になりうるかの検討、第 50 回日本磁気共鳴医学会大会、2022 年 9 月 9 日

中野淳史、岡田敦彦、菅原詩織、熊給 淳、中尾 弘：Concentration-Signal curve of Ultra-short Echo Time MRI、第 50 回日本磁気共鳴医学会大会、2022 年 9 月 9 日

岡田敦彦、菅原詩織、中野淳史、熊給 淳、中尾 弘：Covid-19 まん延による検査件数の減少に対する経営改善の取り組み、第 50 回日本磁気共鳴医学会大会、2022 年 9 月 10 日

吉田佳弘、山田麻由、西川峰生、吉本篤史、北川智彦、中尾 弘：虚血性病変におけるヨード「水」密度画像の有効活用 第 76 回国立病院総合医学会（熊本）、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

山田麻由、吉田佳弘、西川峰生、吉本篤史、北川智彦、中尾 弘：Dual Energy CT における仮想単色 X 線画像の運用方法の検討 第 76 回国立病院総合医学会（熊本）、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

三好未唯、吉田佳弘、西川峰生、吉本篤史、北川智彦、中尾 弘：救急 CT 撮影における高精細画像の有用性検討 第 76 回国立病院総合医学会（熊本）、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

伴 春奈、濱田啓祐、小林正佳、中尾 弘：リニアック装置更新における放射線取扱主任者の関わり、第 76 回国立病院総合医学会（熊本）、2022 年 10 月 7 日～2022 年 10 月 8 日

名取晃大、狭間 竜、小林正佳、中尾 弘：CsI-flat panel detector を用いた胸部撮影の線量低減に関する検討、第 76 回国立病院総合医学会（熊本）、2022 年 10 月 7 日～2022 年 10 月 8 日

木村 裕、上田沙希、土井祥平、吉田武尊、青山伸彦、中尾 弘：高分解能 3D-DSA における空間分解能についての基礎的検討、第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

上田沙希、木村 裕、土井祥平、吉田武尊、青山伸彦、中尾 弘：装置更新に伴う頭蓋内ステント描出 CBCT における至適造影剤希釈率の検討、第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

狭間 竜、土井祥平、西川峰生、中尾 弘 High-resolution scan CT を使用した頸動脈ステント内腔評価の画質改善の検討、第 38 回日本脳血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 18 日～20 日

近藤智美、上田道夫、中尾 弘、寺川祐介、村川圭三：^{99m}Tc 心筋血流 SPECT における新たな画像処理フローによる心外集積除去の有用性の検討、第 76 回国立病院総合医学会（熊本）、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

上田沙希、木村 裕、土井祥平、吉田武尊、青山伸彦、中尾 弘：装置更新に伴う頭蓋内ステント描出 CBCT における至適造影剤希釈率の検討、第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 10 日～11 月 12 日

青山伸彦、土井祥平、木村 裕、吉田武尊、上田沙希、中尾 弘：頭蓋内ステント描出 CBCT における金属アーチファクト低減機能の有用性に関する基礎的検討、第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 10 日～11 月 12 日

吉田武尊、土井祥平、青山伸彦、木村 裕、上田沙希、中尾 弘、山上 宏：外科用イメージを使用した脳血管撮影の体制構築、第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 10 日～11 月 12 日

伴 春奈、辻本 豊、東野谷光弘、北川智彦、中尾 弘、田中英一、八木雅史：COVID-19 陽性患者に対する継続的な放射線治療実施方法の確立、第 78 回日本放射線技術学会学術大会、横浜、2022 年 4 月 14 日～2022 年 4 月 17 日

伴 春奈、辻本 豊、東野谷光弘、北川智彦、中尾 弘、田中英一、八木雅史：COVID-

19 陽性患者に対する継続的な放射線治療実施方法の確立、第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日～2022 年 10 月 8 日

東野谷光弘、辻本 豊、吉本篤史、中尾 弘：個別最適化画像を用いた超高精度放射線治療の基礎的検討、日本放射線腫瘍学会 第 35 回学術大会、広島、2022 年 11 月 10 日～2022 年 11 月 12 日

辻本 豊、東野谷光弘、谷端英典、進藤雅之、水野雄貴、吉本篤史、中尾 弘：小照射野 VMAT におけるビームモデリングの最適化、日本放射線腫瘍学会 第 35 回学術大会、広島、2022 年 11 月 10 日～2022 年 11 月 12 日

B-5

木村 裕：高分解能 3D-DSA における空間分解能についての基礎的検討、関西 IVR 撮影技術研究会 第 134 回定例会、Web 開催（大阪）、2023 年 1 月 26 日

B-6

近藤智美、上田道夫、中尾 弘、寺川祐介、村川圭三：99mTc 心筋血流 SPECT における新たな画像処理フローによる心外集積除去の有用性の検討、第 2 回 cardio MUSk 講演会、2022 年 9 月 29 日

近藤智美、上田道夫、中尾 弘、寺川祐介、村川圭三：99mTc 心筋血流 SPECT における新たな画像処理フローによる心外集積除去の有用性の検討、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大、2022 年 10 月 1 日

菅原詩織、岡田敦彦、熊給 淳、中尾 弘：乾燥剤(CaCl₂)が市販 MRI 用マーカの代用になりうるかの検討、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大会、2022 年 10 月 1 日

西牧晃二、熊給 淳、中尾 弘：アーチファクトを考慮した Reduction factor を用いた DWIBS プロトコルの検討、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大会、2022 年 10 月 1 日

中野淳史、熊給 淳、中尾 弘：超短エコー時間 MRI の造影剤濃度-信号曲線、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大会 2022 年 10 月 1 日

吉田佳弘、山田麻由、西川峰生、吉本篤史、北川智彦、中尾 弘：虚血性病変におけるヨード「水」密度画像の有効活用 第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大、2022 年 10 月 1 日

山田麻由、吉田佳弘、西川峰生、吉本篤史、北川智彦、中尾 弘：Dual Energy CT における仮想単色 X 線画像の運用方法の検討 第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大、2022 年 10 月 1 日

三好未唯、吉田佳弘、西川峰生、吉本篤史、北川智彦、中尾 弘：救急 CT 撮影における高精細画像の有用性検討 第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大、2022 年 10 月 1 日

濱田啓祐、伴 春奈、小林正佳、中尾 弘：リニアック装置更新における放射線取扱主任者の関わり、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大会、2022 年 10 月 1 日

名取晃大、狭間 竜、小林正佳、中尾 弘：CsI-flat panel detector を用いた胸部撮影の線量低減に関する検討、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大会、2022 年 10 月 1 日

上田沙希、木村 裕、土井祥平、吉田武尊、青山伸彦、中尾 弘：装置更新に伴う頭蓋内ステント描出 CBCT における至適造影剤希釈率の検討、第 30 回国立病院近畿放射線技師会学術大会、大阪、2022 年 10 月 1 日

東野谷光弘、辻本 豊、吉本篤史、中尾 弘：個別最適化画像を用いた超高精度放射線治療に関する研究、国立病院近畿放射線技師会 第 30 回学術大会、大阪、2022 年 10 月 1 日

辻本 豊、東野谷光弘、谷端英典、進藤雅之、水野雄貴、吉本篤史、中尾 弘：小照射野 VMAT における DLG 値の検討、国立病院近畿放射線技師会 第 30 回学術大会、大阪、2022 年 10 月 1 日

伴 春奈、辻本 豊、東野谷光弘、北川智彦、中尾 弘：COVID-19 陽性患者に対する継続的な放射線治療実施方法の確立、国立病院近畿放射線技師会第 30 回学術大会、大阪、2022 年 10 月 1 日

B-7

東 将浩：CT を用いた冠動脈の定量評価 TGCV 群と非 TGCV 群の比較
中性脂肪蓄積心筋血管症（TGCV）班会議、2022 年 12 月 3 日

B-08

土井祥平：「放射線業務に必要な医療情報システムとセキュリティ」、国立病院機構近畿グループ令和 4 年度新採用職員（コメディカル等・事務）研修、Web 開催、2022 年 4 月 26 日

中尾 弘：「国立病院機構に働く 診療放射線技師の業務」、国立病院機構近畿グループ令和 4 年度新採用職員（コメディカル等・事務）研修、Web 開催、2022 年 4 月 26 日

菅原詩織：「将来の技師像を目指して働く」、国立病院機構近畿グループ令和 4 年度新採用職員（コメディカル等・事務）研修、Web 開催、2022 年 4 月 26 日

木村 裕：「造影剤と医療安全」、国立病院機構近畿グループ令和 4 年度 CT 研修、Web 開催、2022 年 9 月 28 日

山田賢磨：「救急 CT」、国立病院機構近畿グループ令和 4 年度 CT 研修、Web 開催、2022 年 9 月 28 日

熊給 淳：k 空間と画像構成・パルスシーケンス・静磁場・磁性。国立病院機構 近畿グループ MRI 研修、2022 年 8 月 5 日

田中英一：リニアック装置を更新しました。第 56 回法円坂地域医療フォーラム、2022 年 11 月 19 日

藤原 慧：子宮頸癌に対する放射線治療。第 56 回法円坂地域医療フォーラム、2022 年 11 月 19 日

吉田 謙：大阪医療センターでの小線源治療。第 56 回法円坂地域医療フォーラム、2022 年 11 月 19 日

中野淳史：頭部 MRI 読影の基礎。国立病院近畿放射線技師会 教育研修部 MR 専門部会 MRI 基礎講座 2023 年 3 月 11 日

菅原詩織：MRI のアーチファクト。国立病院近畿放射線技師会 教育研修部 MR 専門部会 MRI 基礎講座 2023 年 3 月 11 日

吉本篤史：「品質管理（治療装置・計画装置）放射線計測学①」、国立病院機構近畿グループ放射線治療研修、Web、2022 年 7 月 7 日

吉本篤史：「品質管理（治療装置・計画装置）放射線計測学②」、国立病院機構近畿グループ放射線治療研修、Web、2022 年 7 月 7 日

吉本篤史：「計算問題①（直線補間・電子線相互校正等）」、国立病院機構 近畿グループ放射線治療研修、Web、2022 年 7 月 7 日

東野谷光弘：「放射線安全管理」、国立病院機構 近畿グループ放射線治療研修、Web、2022 年 7 月 7 日

東野谷光弘：新リニアック装置の紹介、第 56 回法円坂地域医療フォーラム、2022 年 11 月 19 日

口腔外科

吉本 仁

当科では口腔、顎、顔面領域に生じる疾患を治療対象としています。すなわち 1) 歯および歯周組織疾患 2) 口腔粘膜疾患 3) 顎骨疾患 4) 唾液腺疾患 5) 顎関節疾患 6) 神経疾患 7) 血液疾患（診断と口腔粘膜出血の処置）8) リンパ系疾患などの口腔外科疾患を扱っています。特に悪性腫瘍の治療においては頭頸部カンファレンスと病理カンファレンスを行い、関連科の協力を得て集学的な治療を積極的に行っています。一方総合病院の口腔外科として、一般開業歯科医院では治療困難な全身管理（全身麻酔下治療および周術期管理を含む）を要する患者の歯科治療や、入院患者の口腔管理も行っています。なかでも口腔環境は、放射線治療、化学療法、骨髄移植、全身麻酔の術前（上部消化管疾患、肺がん等）、人工呼吸器装着および各種感染症などの患者における治療の遂行および入院期間に影響を与える大きな要因として認識され、十分な対応が求められています。

教育面では当科は歯学部学生の早期臨床体験を受け入れ、歯科医師卒後研修の研修指定病院としてマッチングに参加し、1名の歯科医師臨床研修医を教育しています。また日本口腔外科学会および日本顎関節学会の研修指定機関に指定され、専門医取得のための卒後教育も積極的に行っています。

臨床研究としては口腔顎顔面悪性腫瘍術後における顎骨再建と口腔機能再建、非関節性開口障害の診断と治療をそのテーマとしています。

【2022年度 研究発表業績】

A-3

田中克弥、吉本 仁、関 理泓、窪田亮介、窪 寛仁、大西祐一：超高齢者の薬剤関連顎骨壊死（MRONJ）に対して外科的療法を行った4例「歯科医学」86(1)：21-29、2023年3月25日

B-4

白尾浩太郎、吉本 仁、鹿野 学、金山宏幸、矢谷実英：当科における上顎悪性腫瘍に対する上顎全摘術の臨床的検討。第67回日本口腔外科学会総会・学術大会、大阪市、2022年11月4日

B-6

北村有理子、矢谷実英、白尾浩太郎、金山宏幸、鹿野 学、吉本 仁：COVID-19陽性顔面骨折症例に対し観血的固定術を行った一例。第53回口腔外科学会近畿支部学術集会、大阪市、2022年7月2日

B-8

吉本 仁：口腔外科疾患の新たな治療法について－MRONJを含め、領域別の基本と新たな治療法－。大阪市東歯科医師会学術講演会、大阪市、2023年2月2日

救命救急センター

大西光雄

救命救急センターでは臨床医学的、社会医学的、基礎医学的な視点、それぞれを活かしリサーチマインドを常に互いに刺激し続けることを意識している。昨年度に続き本年度も COVID-19 への対応が診療の中心となったが、診療における工夫や病態の解析、事業継続（BCP）を念頭においた診療体制、日本外傷データバンクの解析、多職種連携に関する学会発表を行なった。

専攻医や研修医の教育に関しては、ディープラーニング・アクティブラーニングとなるよう心がけている。症例発表が中心となるが、“根拠”や“理論”を常に確認しながら、多角的な視点で深く事象を分析できるように指導している。

臨床研究に関しては、侵襲時、とくに敗血症の便中エンドトキシンや腸内細菌叢の変化（腸管免疫）、急性呼吸促迫症候群といった急性呼吸不全での白血球機能に関する研究を行ない、病態解明を目指している。

病院前の研究に関して、大阪大学や京都大学、大阪府下の救急医療に携わる研究者らによる心停止患者搬送時の救急隊の蘇生記録や搬送後の病院での診療を対象とした心肺蘇生研究に参加している。また、2013年から大阪市消防と大阪大学が臨床研究を開始した、当センター直近の中央消防から開始し他の救急隊へ拡大させ研究を続けてきた。2021年度は当センターが競争的研究資金を獲得したため、当センターも加わり傷病発生現場から病院到着までの病態を解明していく予定であったが、救急隊も当センターも COVID-19 への対応のため研究開始に至っていないが研究期間を延長し、蘇生のガイドラインに影響を与える研究を目標としている。

日本外傷データバンクのデータを用いた研究に参加し、外傷診療の重症度や治療内容と予後に関する疫学的解析を行なっている。当センター医師が筆頭研究者の英文論文も前年に引き続き掲載された。

社会医学に関する研究も行なっている。救急搬送患者は、様々な社会的問題を抱えていることが多い。大阪医療センターでは3名の救急認定ソーシャルワーカーを有し、救急医療における社会的側面へのアプローチに関し全国的なリーダーシップを発揮している。当センターの取り組みを元にした“社会的救命”が認知されてきたため、ソーシャルワーカーに対する講演が複数回開催された。次年度はさらに発展させる予定である。

災害医療に関して、高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（文部省科研 19K10532）を行なっている。感染増大に伴い危機的状況を経験した沖縄の高齢者施設における COVID-19 への対応、沖縄県庁の取り組みを調査した。また、大阪市消防の各職員への抱える不安の調査をもとにした感染制御講演を行った。

基礎医学の研究では、爆発外傷の研究を行なっている。研究に必要な装置が大阪大学にあるため研究の場は大阪大学となるが、臨床的に未解明な部分の多い爆発外傷、特に衝撃波に伴う脳損傷の研究を行なっている。文部科学省科研

(21K09019)では衝撃波によって長期的に問題となる軽微な脳損傷による行動変容を分析し、病態解明、治療・予防法の開発へとさらに研究が進むことを期待している。

今後とも、救急・災害医療研究を通して地域医療をはじめとして医療に貢献しつつ、リサーチマインドを涵養すべく人材育成に注力していきたい。

災害医療における研究

今年度も昨年度に引き続き、COVID-19への対応をもとにした災害医療の研究を行った。感染症への対応における人的・物的・空間的な不足（需要と供給のアンバランス）がもたらす事態という意味においては“災害”と捉えることができる。しかし、一般的な自然災害とは違い、いつから災害と認識できるのか？、ライフラインは全く影響を受けていない、といった災害をイメージしにくい状況があることから、当院では事業継続計画（BCP）を軸にした対応をおこなってきた。この取り組みは当初よりユニークであり、学会発表では注目されたと言える。

また、他の災害医療における研究としては、高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（文部省科研 19K10532）があるが、今年度はあまり進展させることができなかった。さまざまな高齢者施設、あるいは在宅医療を行う医療機関と連携し災害時に“災害時要配慮者”に分類される、これらの医療・介護の利用者をいかにしてアセスメントし、医療への負荷を軽減させ、生命を守るかといった課題に取り組んでいく。

また、「CBRNEテロリズム等の健康危機事態における対応能力の向上及び人材強化に関わる研究：厚生労働科研 健康安全・危機管理対策総合研究事業 研究代表者：近藤久禎」および「オールハザード・アプローチによる公衆衛生リスクアセスメント及びインテリジェンス機能の確立に資する研究：厚生労働行政推進調査事業 健康安全・危機管理対策総合研究事業 研究代表者 富尾淳」の分担研究（ともに主として化学災害への対応を分担）を開始した。大西が世界安全保障イニシアティブ（Global Health Security Initiative：GHSI）における化学イベントワーキンググループ（Chemical Event Working Group：CEWG）に所属していることもあり、このWGで得た知見を活かしながら日本における災害対応に取り組んでいきたい。

大阪医療センターは以前より大阪市消防の有志とともに運営されている大阪EMS（Emergency Medical Service）研究会を通じて消防との連携のあり方など、15年以上にわたり取り組んできた。COVID-19の影響もあり、WEB開催が主体となったことが幸いし、非常に広域、かつさまざまな職種からの参加者が得られるようになった。今年度は米国で救命士として活躍している人物や、米国の戦傷救護を学んだ自衛隊員を講師に招き、警察官、刑務官など救護を行う可能性のある多職種での研究会を多数開催できた。また、これら取り組みを研究発表している。当院の院内救命士も参加しており、医療の質の向上、各組織の視点を理解した上での連携を図るべく活動していきたい。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Ishida K, Seno S, Maruhashi T, Matsumura Y : Indication of Resuscitative Endovascular Balloon Occlusion of the Aorta in Trauma Patients. 「The Journal of Endovascular Resuscitation and Trauma Management」 6, P8–13 . 2022 年 5 月 20 日

Nagashima F, Kon Y, Sugiyama T, Ishida K, Maruhashi T, Matsumura Y : A Guide to Femoral Arterial Access for Resuscitative Endovascular Balloon Occlusion of the Aorta. 「The Journal of Endovascular Resuscitation and Trauma Management」 6, P27–40 . 2022 年 5 月 20 日

Shinozuka K, Aoki M, Ishida K, Maruhashi T, Matsumura Y : Indication of Resuscitative Endovascular Balloon Occlusion of the Aorta in Non-Traumatic Hemorrhage. 「The Journal of Endovascular Resuscitation and Trauma Management」 6, P14–18 . 2022 年 5 月 20 日

Sugiyama T, Tomita K, Ishida K, Maruhashi T, Matsumura Y : Resuscitative Endovascular Balloon Occlusion of the Aorta Complications and its Management. 「The Journal of Endovascular Resuscitation and Trauma Management」 6, P61–66 . 2022 年 5 月 20 日

Nagashima F, Irahara T, Ishida K, Maruhashi T, Matsumura Y : Resuscitative Thoracotomy and Aortic Cross-Clamp and Resuscitative Endovascular Balloon Occlusion of the Aorta. 「The Journal of Endovascular Resuscitation and Trauma Management」 6, P19–26 . 2022 年 5 月 20 日

Katayama Y, Tanaka K, Ishida K, Hirose T, Tachino J, Nakao S, Umemura Y, Kiyohara K, Ojima M, Kiguchi T, Kitamura T, Oda J : Factors Associated with Traumatic Diaphragmatic Rupture among Patients with Chest or Abdominal Injury: A Nationwide Study from Japan. 「Journal of Clinical Medicine」 ;11(15):P4462. doi: 10.3390/jcm11154462. 2022 年 7 月 30 日

Nishihara T, Okamoto Y, Ishikawa H, Omachi N, Yoshikawa Y, Ishida K, Toratani M, Ohnishi M: Successful bronchial artery embolization using hydrogel coils for hemoptysis during extracorporeal membrane oxygenation. 「Radiology Case Report」 ;17(10):P3686-3689. doi: 10.1016/j.radcr.2022.07.025. eCollection 2022 Oct. 2022 年 8 月 1 日

Ishida K, Katayama Y, Kitamura T, Hirose T, Ojima M, Nakao S, Tachino J, Umemura Y, Kiguchi T, Matsuyama T, Noda T, Kiyohara K, Oda J, Ohnishi M : Factors Associated with Cardiac/Pericardial Injury among Blunt Injury Patients: A Nationwide Study in Japan. 「Journal of Clinical Medicine」 2022 Aug 3;11(15):4534. doi: 10.3390/jcm11154534. 2022 年 8 月 3 日

Hirose T, Kitamura T, Katayama Y, Tanaka K, Tachino J, Nakao S, Ishida K, Ojima M,

Kiguchi T, Umemura Y, Kiyohara K, Oda J : Incidence and Characteristics of Cranial Nerve Injuries: A Nationwide Observational Study in Japan. 「Journal of Clinical Medicine」 ;11(16):P4852. doi: 10.3390/jcm11164852. 2022 年 8 月 18 日

Nakao S, Katayama Y, Hirayama A, Hirose T, Ishida K, Umemura Y, Tachino J, Kiguchi T, Matsuyama T, Kiyohara K, Kitamura T, Nakagawa Y, Shimazu T : Characteristics and outcomes of pediatric blunt renal trauma: a nationwide cohort study in Japan. 「European Journal of Trauma and Emergency Surgery」 ;48(3):P2047-2057. doi: 10.1007/s00068-021-01795-w. 2022 年 6 月 Epub 2022 年 9 月 25 日

Nakao S, Katayama Y, Kitamura T, Tanaka K, Hirose T, Tachino J, Ishida K, Ojima M, Kiguchi T, Umemura Y, Kiyohara K, Oda J : Characteristics and outcomes of severe sports-related injury in children and adults: a nationwide cohort study in Japan. 「European Journal of Trauma and Emergency Surgery」 doi: 10.1007/s00068-022-02144-1. 2022 年 10 月 20 日

Sogabe T, Ishida K, Ogawa H, Ohnishi M : Tongue-biting ataxia that appeared to be a psychiatric disorder: a case of neuroacanthocytosis. 「Acute Medicine & Surgery」 ;10(1):e815. doi: 10.1002/ams2.815. eCollection 2023 Jan-Dec. 2023 年 1 月 16 日

Ojima M, Ishida K, Katayama Y, Hirose T, Nakao S, Tachino J, Noda T, Umemura Y, Kiguchi T, Kiyohara K, Matsuyama T, Kitamura T, Oda J, Ohnishi M : Impact of the COVID-19 pandemic on epidemiology, treatment, and outcome of major trauma in Japan in 2020: a retrospective observational nationwide registry-based study. 「Acute Medicine & Surgery」 ;10(1):e817. doi: 10.1002/ams2.817. eCollection 2023 Jan-Dec. 2023 年 1 月 18 日

Okada Y, Komukai S, Kitamura T, Kiguchi T, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kishimoto M, Inoue T, Hayashi Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Matsuyama T, Nishioka N, Kobayashi D, Matsui S, Hirayama A, Yoshimura S, Kimata S, Shimazu T, Ohtsuru S, Iwami T; CRITICAL Research Group : Investigators. Clustering out-of-hospital cardiac arrest patients with non-shockable rhythm by machine learning latent class analysis. Acute Med Surg. ;9(1):e760. doi: 10.1002/ams2.760. eCollection 2022 Jan-Dec. PMID: 35664809、2022 年 5 月 27 日

Okada Y, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Kobata H, Kiguchi T, Kishimoto M, Kim SH, Ito Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Onoe A, Matsuyama T, Kobayashi D, Nishioka N, Matsui S, Yoshimura S, Kimata S, Kawai S, Makino Y, Kiyohara K, Zha L, Kitamura T, Iwami T. : Clinical outcomes among out-of-hospital cardiac arrest patients treated by extracorporeal cardiopulmonary resuscitation: The CRITICAL study in Osaka. Resuscitation. ;178:P116-123. doi:

10.1016/j.resuscitation.2022.06.007. PMID: 35714720 2022年9月 Epub 2022年6月14日

Yoshimura S, Kiguchi T, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kishimoto M, Kim SH, Hayashi Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Matsuyama T, Okada Y, Nishioka N, Matsui S, Kimata S, Kawai S, Makino Y, Kitamura T, Iwami T; the CRITICAL Study Group Investigators : Association between initial body temperature on hospital arrival and neurological outcome among patients with out-of-hospital cardiac arrest: a multicenter cohort study (the CRITICAL study in Osaka, Japan). *BMC Emerg Med.* ;22(1):84. doi: 10.1186/s12873-022-00641-5. PMID: 35568800

2022年5月14日

Shida H, Matsuyama T, Komukai S, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kiguchi T, Kishimoto M, Kim SH, Hayashi Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Nishioka N, Okada Y, Matsui S, Yoshimura S, Kimata S, Kawai S, Makino Y, Iwami T, Kitamura T; CRITICAL Study Group : Investigators. Early prognostic impact of serum sodium level among out-of-hospital cardiac arrest patients: a nationwide multicentre observational study in Japan (the JAAM-OHCA registry). *Heart Vessels.* ;37(7):P1255-1264. doi: 10.1007/s00380-022-02020-3. PMID: 35044522 2022年7月 Epub 2022年1月19日

Sogabe T, Ishida K, Ogawa H, Ohnishi M. : Tongue-biting ataxia that appeared to be a psychiatric disorder: a case of neuroacanthocytosis. : *Acute Med Surg.* ;10(1):e815. doi: 10.1002/ams2.815. eCollection 2023 Jan-Dec. PMID: 36687503 2023年1月16日

Makino Y, Okada Y, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Kobata H, Kiguchi T, Kishimoto M, Kim SH, Ito Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Onoe A, Matsuyama T, Matsui S, Nishioka N, Yoshimura S, Kimata S, Kawai S, Zha L, Kiyohara K, Kitamura T, Iwami T. : External validation of the TiPS65 score for predicting good neurological outcomes in patients with out-of-hospital cardiac arrest treated with extracorporeal cardiopulmonary resuscitation. *Resuscitation.* ;182:109652. doi: 10.1016/j.resuscitation.2022.11.018. PMID: 36442597 2023年1月 Epub 2022年11月25日

Yoshimura S, Kiguchi T, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Kobata H, Kishimoto M, Kim SH, Ito Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Onoe A, Matsuyama T, Matsui S, Nishioka N, Okada Y, Makino Y, Kimata S, Kawai S, Zha L, Kiyohara K, Kitamura T, Iwami T : Diagnostic test accuracy of life-threatening electrocardiographic findings (ST-elevation myocardial infarction equivalents) for acute coronary syndrome after out-of-hospital cardiac arrest without ST-segment elevation. *Resuscitation.* ;184:109700. doi: 10.1016/j.resuscitation.2023.109700. PMID: 36702338 2023年3月 Epub 2023年1月23日

Katayama Y, Tanaka K, Ishida K, Hirose T, Tachino J, Nakao S, Umemura Y, Kiyohara K, Ojima M, Kiguchi T, Kitamura T, Oda J: Factors Associated with Traumatic Diaphragmatic Rupture among Patients with Chest or Abdominal Injury: A Nationwide Study from Japan, J Clin Med. ;11(15):P4462. 2022年7月30日

Ishida K, Katayama Y, Kitamura T, Hirose T, Ojima M, Nakao S, Tachino J, Umemura Y, Kiguchi T, Matsuyama T, Noda T, Kiyohara k, Oda J, Ohnishi M: Factors Associated with Cardiac/Pericardial Injury among Blunt Injury Patients: A Nationwide Study in Japan. J Clin Med. ;11(15):P4534. 2022年8月3日

Hirose T, Kitamura T, Katayama Y, Tanaka K, Tachino J, Nakao S, Ishida K, Ojima M, Kiguchi T Umemura Y Kiyohara K, Oda J: Incidence and Characteristics of Cranial Nerve Injuries: A Nationwide Observational Study in Japan. J Clin Med. ;11(16):P4852.2022年8月18日

Nakao S, Katayama Y, Kitamura T, Tanaka K, Hirose T, Tachino J, Ishida K, Ojima M, Kiguchi T, Umemura Y, Kiyohara K, Oda J: Characteristics and outcomes of severe sports-related injury in children and adults: a nationwide cohort study in Japan. Eur J Trauma Emerg Surg. 2022年10月20日

Ojima M, Ishida K, Katayama Y, Hirose T, Nakao S, Tachino J, Noda T, Umemura Y, Kiguchi T, Kiyohara K Matsuyama T, Kitamura T, Oda J, Ohnishi M: Impact of the COVID-19 pandemic on epidemiology, treatment, and outcome of major trauma in Japan in 2020: a retrospective observational nationwide registry- based study. Acute Med Surg. ;10:e817. 2023年

Toratani M, Karasuyama K, Kuriyama K, Inoue A, Hamaguchi K, Fujiwara T, Kishimoto K, Ohnishi M, Higashi M : Semi-quantitative evaluation of chest computed tomography for coronavirus disease 2019 in a critical care unit: A case-control study. Medicine(Baltimore); 101(37):e30655.2022年9月16日

A-2

石田健一郎、松村洋輔：【で、どうなの?あの戦略,あの治療】ショックに対する治療 REBOA「救急医学」46（12） P.1409-1418、2022年12月10日

A-3

藤原綾子、高見康二、安藤性賓、木村剛、宮本智、小笠原光正、小島将裕、島川宣子、井上敦夫、栗山啓子：気管孔上部に気道狭窄を伴った金属製気管カニューレの気管内脱落に対し、多科合同で異物除去を行った1例、気管支学 44巻2号、P165-170、2022年4月2日

B-4

石田健一郎、飯沼公英、坂本麻衣、平島園子、太田裕子、上尾光弘、大西光雄：

コロナ禍における医療機関 BCP の改定と訓練の工夫 BCP 部門と感染攻御部門を柱とした当院の COVID-19 対策と災害訓練。第 25 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、大阪、2022 年 5 月 26 日

石田健一郎、片山祐介、北村哲久、廣瀬智也、小島将裕、中尾俊一郎、舘野丈太郎、木口雄之、野田智宏、清原康介、織田 順、大西光雄：JTDB データを用いた鈍的心損傷発生と関連する因子の検討。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 6 月 30 日

小島将裕、吉川吉暁、石田健一郎、上尾光弘、大西光雄：鈍的外傷で肝損傷を伴わない固有肝動脈損傷を受傷しコイル塞栓術を行った稀な一例。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 6 月 30 日

小島将裕、石田健一郎、片山祐介、廣瀬智也、中尾俊一郎、舘野丈太郎、野田智宏、梅村讓、木口雄之、織田順、大西光雄：JTDB データを用いた COVID-19 のエピソードが重症外傷患者の救急に与えた影響の解析。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 6 月 30 日

松村洋輔、船越 拓、石田健一郎、船曳知弘、DIRECT 研究会：DIRECT-REBOA コース活動の変遷「実践」の習得可能な教育を目指して。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 6 月 30 日

小島将裕、吉川吉暁、石田健一郎、上尾光弘、大西光雄：鈍的外傷で肝損傷を伴わない固有肝動脈損傷を受傷しコイル塞栓術を行った稀な一例。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 7 月 1 日

石田健一郎、小島将裕、吉川吉暁、上尾光弘、大西光雄：当院における鈍的外傷性胸部大動脈損傷 9 例の症例検討。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 7 月 1 日

小島将裕、石田健一郎、片山祐介、廣瀬智也、中尾俊一郎、舘野丈太郎、野田智宏、梅村 穰、木口雄之、織田 順、大西光雄：JTDB データを用いた COVID-19 のエピソードが重症外傷患者の救急に与えた影響の解析。第 36 回日本外傷学会総会・学術集会、大阪、2022 年 7 月 1 日

上野由貴、石田健一郎、飯沼公英、岡本雄太郎、小島将裕、曾我部 拓、竹川良介、坂本麻衣、吉野宗宏、大西光雄：バルプロ酸中毒患者に対するカルバペネム系抗菌薬が中毒治療に寄与したと考えられた一例。第 44 回日本中毒学会総会・学術集会、オンライン、2022 年 7 月 16 日

石田健一郎、吉川吉暁、飯沼公英、平島園子、太田裕子、寺尾紀昭、馬場和美、上尾光弘、大西光雄：当院における BCP 策定後の取り組みと改定の工夫 COVID-19 対応を包含した BCP と災害訓練。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年

10月7日

吉川吉暁、和田広大、浦井健、大里幸暉、大西光雄：院内救急救命士活用のための整備とシステム構築 -大阪医療センターの場合-、第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

田中太助、石田健一郎、岡本雄太郎、野邊亮丞、小川晴香、小島将裕、下野圭一郎、吉川吉暁、曾我部 拓、上尾光弘、大西光雄：美容形成としての脂肪吸引・注入後に脂肪塞栓症候群を来した一例。第50回日本救急医学会総会・学術集会、東京、2022年10月19日

下野圭一郎、石田健一郎、田中太助、岡本雄太郎、曾我部 拓、吉川吉暁、小島将裕、小川晴香、上尾光弘、大西光雄：頭部外傷を契機に救命救急センターへ搬送され、脊髄小脳変性症の診断に繋がった1症例、第50回日本救急医学会総会・学術集会、東京、2022年10月19日

岡本雄太郎、石田健一郎、吉川吉暁、曾我部 拓、藤上友輔、伴 健二、大西光雄：心停止に至った子宮破裂による産科危機的出血に対し、緊急子宮摘出術時にREBOAを併用した一例。第50回日本救急医学会総会・学術集会、東京、2022年10月19日

小川晴香、石田健一、田中太助、岡本雄太郎、小島将裕、吉川吉暁、下野圭一郎、曾我部 拓、上尾光弘、大西光雄：転倒による頭部打撲後に意識障害を呈し、入院後に両側視床梗塞が判明したCOVID-19の一例。第50回日本救急医学会総会・学術集会、東京、2022年10月19日

大西光雄、吉川吉暁、曾我部 拓、野邊亮丞、岡本雄太郎、小川晴香、田中太助、小島将裕、下野圭一郎、石田健一郎、上尾光弘：現場で心肺停止であったが意識回復をみた火災による一酸化炭素中毒の一例。第50回日本救急医学会総会・学術集会、東京、2022年10月19日

松村洋輔、石田健一郎、船越 拓、丸橋孝昭、船曳知弘：REBOA教育のオンライン化の進歩 これからの50年に持続可能な教育をめざして。第50回日本救急医学会総会・学術集会、東京、2022年10月19日

野邊亮丞、石田健一郎、小川晴香、田中太助、小島将裕、岡本雄太郎、吉川吉暁、曾我部 拓、大西光雄：体温管理療法時に使用した血管内冷却カテーテル抜去後に肺動脈血栓塞栓症を呈した一例。第50回日本集中治療医学会学術集会、京都、2023年3月2日

曾我部 拓、大西光雄：異なる神経学的予後を呈したアモキサピン中毒の2症例。第50回日本集中治療医学会学術集会、京都、2023年3月3日

小島将裕、下野圭一郎、野邊亮丞、吉川吉暁、小川晴香、上尾光弘、大西光雄：
発熱と咽頭痛と嘔声を主訴に救急受診し、脾腫と白血球減少を認めた節外性NK/T
細胞リンパ腫・鼻型の1例。第50回日本集中治療医学会学術集会、京都、2023年
3月3日

和田広大、吉川吉暁、浦井 健、大里幸輝、大西光雄：院内救急救命士の活用—米
国 Emergency Medical Service Communication Specialist を参考に—、第25回日本
臨床救急医学会総会・学術集会、大阪、2022年5月25日

浦井 健、大西光雄、吉川吉暁、和田広大、大里幸輝：当院における救急救命士に
よる転院搬送業務の現状報告 多職種におけるタスクシフトの効果、第76回国
立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

森寛泰、山口寿美枝、竹本雪子、福田寿代、本持知子、近藤信吾、中村泉美、勝
田充重、大西光雄、中島伸：診療看護師（JNP）導入による働き方改革への効果
NHOにおける医師の働き方改革推進に向けたJNPの活用方法の考察、第76回国
立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

B-8

石田健一郎：第11回DIRECT-REBOA オンラインセミナー、DIRECT研究会主催
当番世話人、2022年4月9日

石田健一郎：第12回DIRECT-REBOA オンラインセミナー、DIRECT研究会主催
当番世話人、2022年7月3日

石田健一郎：第3回周産期救急REBOA & IVR ワークショップ、DIRECT研究会
主催、当番世話人、2022年11月23日

大西光雄：大阪市消防症例検討会、講演“爆傷への対応 身近な脅威”、大阪、2022
年7月29日

大西光雄：大阪市消防集中講義、講演“爆傷などテロへの対応—過去の事例から学
ぶ”、大阪、2023年3月6日

大西光雄：海上保安庁（第五管区海上保安本部）、講演“爆傷などテロへの対応—過
去の事例から学ぶ”、大阪、2023年3月30日

大西光雄：AMAT 隊員要請研修“災害時用配慮者”“災害時に考慮すべき疾病”“感染
制御”WEB研修（講師）、東京 2023年1月6日
主催：公益社団法人 全日本病院協会、一般社団法人 日本医療法人協会

大西光雄：AMAT 隊員要請研修“実習研修”WEB研修（講師）、東京 2023年1月7
日および1月8日

主催：公益社団法人 全日本病院協会、一般社団法人 日本医療法人協会

麻酔科

渋谷博美

麻酔科は、多くの診療科の多岐にわたる手術に対応し、新生児を除く幅広い年齢層の手術麻酔を年間およそ 3300 件以上施行しました。今年度は、耳鼻咽喉科と整形外科、泌尿器科の協力のもと手術枠の調整が行われ、ロボット支援下手術が月曜日から金曜日まで可能となりました。腹腔鏡や胸腔鏡下手術、心臓外科の低侵襲心臓手術（MICS）など、小切開で施行される手術が年々増えています。それらの低侵襲小切開手術の体位に対応するために、全身麻酔中の気道内圧など換気調整や循環動態変動を最小限に抑える麻酔を術前から計画しています。新しい術式や複雑な手術に対しては、術前に多職種カンファレンスを開催し、術中体位のシミュレーションを行うなど多職種と情報共有することで良質な麻酔が施行できるように努めています。

手術室外での全身麻酔の件数も昨年よりも増加しました。アンギオ室での脳動脈瘤血管内治療のほか、今年度は全身麻酔下の循環器内科の左心耳閉鎖術（WATCHMAN）も始まりました。

麻酔方法も、吸入麻酔や静脈麻酔による全身麻酔に加え、硬膜外麻酔や経静脈的な鎮痛薬投与、抹消神経ブロックによる鎮痛などを併用し、Patient Controlled Analgesia（自己調節鎮痛法）による痛みのない術後を心がけています。今年度から術後疼痛管理チームを立ち上げ、麻酔科と看護部、薬剤部からなるチームで術後鎮痛の評価を行っています。教育面では、医学部の学生のクリニカルクラークシップを受け入れ、実践現場での知識を得てもらい、初期研修医には、手技だけでなく術前評価や麻酔法の選択、合併症に対する対策のほか、手術中の循環管理、術後鎮痛などの周術期管理の研修も行なっています。専攻医に対しては、日本麻酔科学会の認定施設として、深い知識と技術を習得できるように教育しています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-6

中西裕貴子、春原真理、桐山有紀、山路寛人、天野栄三、渋谷博美：大動脈弁置換術の人工心肺離脱時に術前には認めなかった左房内血栓を経食道エコー検査により同定した 1 症例。「麻酔」71(12):P1314-1317、2022 年

B-4

原恵理子、中西裕貴子、天野栄三、渋谷博美：全身麻酔下気管挿管時の開口量に影響を及ぼす因子についての検討。第 69 回日本麻酔科学会学術集会、神戸、2022 年 6 月 17 日

桐山有紀、島原由美子：心臓バイパス術後に以前の気管切開部の破綻による両側気胸・膿胸を来した一例。第 50 回日本集中治療医学会学術集会、京都、2023 年 3 月 3 日

B-6

桐山有紀、島原由美子：感染性心内膜炎に伴う肝動脈瘤の胆嚢内穿破 1 例。日本集中治療医学会第 6 回関西支部学術集会、大阪、2022 年 7 月 16 日

島川宜子、野田純希、天野栄三、渋谷博美：未破裂脳動脈瘤に対する脳血管内手術において、術中の血圧上昇は動脈瘤破裂を予測し得る科の検討。第 68 回日本麻酔科学会関西支部学術集会 WEB、2022 年 9 月 2 日～10 月 3 日

B-8

渋谷博美：医学生・初期臨床研修医招待企画 女性麻酔科医のキャリアパス～これからの姿～。第 69 回日本麻酔科学会学術集会 WEB、神戸、2022 年 6 月 16 日～18 日

臨床検査科

眞能正幸



【概況】

臨床検査診断部は以下の3部門で構成されており、それぞれの管理責任医師の指導のもと業務を遂行している。

臨床検査診断部（臨床検査診断部長：眞能 正幸）

（1）臨床検査科（臨床検査科科長：眞能 正幸）

（2）病理診断科（臨床検査科医長：森 清）

（3）エコーセンター（臨床検査科科長：眞能 正幸）

臨床検査診断部としては、ISO15189 認定（RML00860）の他、日本臨床細胞学会（No.466）、日本病理学会研修認定施設（No.5011）などの施設認定を取得している。スタッフは医師4名と臨床検査技師44名、検査助手4名で運営している。また、認定病理検査技師（1名）、細胞検査士（9名）、超音波検査士（7名）、認定輸血検査技師（2名）、糖尿病療養指導士（2名）、認定血液検査技師（1名）、認定臨床微生物検査技師（2名）、認定一般検査技師（1名）の認定技師が在籍している。

（1）臨床検査科

病院基本方針の1つである「質の高い医療を維持・発展」の一旦を担うため『精度保証されたデータを迅速に提供すること』を使命としている。当科はいち早く臨床検査室の国際規格であるISO15189認定を平成26年11月13日国内第86番目の施設として取得した。令和2年度1月には生理検査部門を含む第4回のサーベイランスを受審した。また、二交替勤務、輸血管理当直を早期より導入し休日・夜間を含む24時間体制で緊急検査、輸血管理・検査に対応している。近年はSARS-CoV-2の感染拡大を受けて、24時間体制で迅速かつ効果的にPCR検査を実施し病院機能の維持に尽力している。

（2）病理診断科

当科は、日本病理学会認定施設（認定番号：第5011号）、日本臨床細胞学会認定施設（第0466号）、同教育研修認定施設（第0220号）であり、日本専門医機構・日本病理学会の認定する病理専門医の教育と、日本臨床細胞学会の認定する細胞診専門医並びに細胞診検査士の教育と研修の場として機能し、これまで多数の病理専門医、細胞診専門医と細胞診検査士を輩出してきた。令和4年度は、病理診断医は、専任医師は3名（森 清、廣瀬 由美子、藤原理恵子）と併任医師は1名（眞能 正幸）が常勤として在籍している（いずれも病理専門医および細胞診専門医である事に加え、3名が日本病理学会認定の分子病理専門医を取得済）。また非常勤医師は6名、研修生として招聘の医師1名を擁し、骨軟部、脳腫瘍といった希少がん領域や、循環器、肝胆膵、婦人科、皮膚、顎口腔の各領域の診断病理専門家の指導を仰ぎ、診断精度の向上に努めている。また血液疾患・リンパ腫、腎生検の難解症例については専門家へのコンサルトを

定期的に行う体制も整えている。当科業務に携わる臨床検査技師は 11 名で、この内で認定病理検査技師 1 名、細胞検査士 7 名（専任 4 名）が従事している。令和 4 年度の当科における診断実績は、組織診 6031 件、術中迅速組織診 231 件、細胞診 6079 件、病理解剖 6 件であった。

近年、急激に臨床応用が進む分子病理学的検査の拡大が著しいが、我が国のがんゲノム医療体制において、当院の「がん診療連携拠点病院」としての機能の一翼を担うべく、当科は病理標本を用いた種々のがん遺伝子パネル検査や多数のコンパニオン診断などで貢献している。また、分子病理専門医が、当院がん病理診断業務の質の担保に貢献している。

また ISO 15189 認定（RML00860）の他、特定非営利活動法人日本病理精度保証機構の外部精度評価（施設番号 5009）に定期的に参加し、病理検査の質の向上、精度管理に努め、臨床各科と協力の上で、質の保たれた検体の提供を通して多数の国内外の治験・臨床試験に大きく貢献している。

(3) エコーセンター

エコー委員会は平成 19 年 7 月、超音波検査装置の購入・管理・整備に関することをはじめとして、装置の配置や利用時間帯に関して弾力的かつ効率的な運用を図る目的で設置された。それ以来、エコーセンターでは計画的に高機能装置の充実を図るとともに、各科協議のもと、装置を有効に活用して順調に検査件数を伸ばしている。

・エコー委員会構成員

委員長 眞能 正幸

副委員長 河合 健

委員 エコーセンターおよびエコー機器を利用する関係診療科医師

【各部門について】

外来検査部門：7つのブース中に車椅子用ブース 2 つを設け、また安静後採血のためのベッドを 2 台配置し外来患者の採血を実施している。患者待ち時間短縮と外来結果報告を早く行うために採血開始時間を 15 分早めて 8 時 15 分とし、待ち時間短縮等効果を継続している。採血は検査業務の入口であり、その 8 割以上を臨床検査技師が実施している。また、入院患者の翌日採血予定分の採血管を前日に準備している。併設の一般検査室では検尿、便潜血、穿刺液（髄液、胸腹水等）の検査、原虫や虫卵検出等を中心に検査している。

総合検査部門：血液を中心とした体液中の成分を様々な分析機で検査している。緊急検査は 30～40 分以内、至急検査や診察前検査は約 60 分以内を目途に診療科に報告している。更に多くの治験にも協力しており、検体の処理や保管を実施している。この他、輸血用血液製剤の管理を行い、安全かつ効率的な血液製剤の利用に努めている。

微生物検査部門：臨床検体からの細菌分離、同定検査、薬剤感受性検査の他にインフルエンザウイルスなどの迅速抗原検査や結核菌などの微生物を対象とし

た検査を行っている。HCV、HBV および HIV のリアルタイム PCR 法による高感度測定や、MRSA の遺伝子型（POT 法）の検出も行っている。これらの情報は耐性菌週報として院内に発信するとともに、ICT 会議や ICT ラウンド資料、院内抗菌薬適正使用（AST）として院内感染管理に貢献している。

病理検査部門：術中の迅速病理診断や迅速細胞診、100 種以上の抗体を備えた免疫染色により症例に応じた治療法の選択に貢献している。高度な専門的病理診断に対応するため 3 大学より病理専門医を招聘している。

生理検査部門：心電図、脳波、呼吸機能、超音波など実際の患者を対象とした部門である。循環器系、呼吸器系、消化器系、神経系や聴覚系等の分野の検査を実施し、特に超音波検査についてはエコーセンターとして、各診療科の超音波検査の受付を一括して行っている。

【活動報告】

各種の外部精度管理調査（日本医師会、日本臨床衛生検査技師会、大阪府臨床衛生検査技師会）に参加している。一例として日本医師会主催の臨床検査精度管理調査の成績（過去 6 年間）を示す。

	H29 年度	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度	R4 年度
評価項目修正点	98.3	98.8	98.0	98.9	98.6	98.1

【今後の課題と目標】

当科でも世代交代の波は急激に押し寄せている。特に当院は、近畿グループの中においても人材育成を担う中心的な施設の 1 つであり、臨床検査技師の人材育成に力を入れている。特に入職後 3 年目までの技師を対象に、複数部門(総合検査は必須)を積極的に経験させてジェネラリストとしての基礎を育てると共に、自身の適性或今後の方向性を自覚することにより将来認定資格取得を含めた専門性を高める起点となるよう努めている。

チーム医療の推進にも積極的に関わり、糖尿病教室、NST（栄養サポートチーム）、肝臓病教室、ICT（感染対策チーム）での患者指導・情報提供・ラウンド等に参加、さらに ISO15189 認定施設としてスタッフへの教育を行ない、診療機能や治験業務の質向上に貢献していく。

現在実施している各種臨床病理カンファレンス（乳腺腫瘍、呼吸器腫瘍、皮膚科疾患、肝生検、肝胆膵腫瘍、骨軟部腫瘍等）を継続し、病理診断や臨床診断・治療の質の向上に今後も努めていく。また、職員研修部との共催で月 1 回の CPC を充実させ、若手臨床医の教育にも貢献していく。

エコーセンターにおいては装置の稼働率をより高めるために、各科と連携しさらに効率のよい運用形態を探っていく。それと同時に、超音波検査を実施できる人材の育成が急務である。このため、当センターでは臨床研修医や臨床検査技師を対象に実地研修を実施している。また、部内では判読勉強会を開催して、

検査技能の向上と超音波検査担当技師の育成を図っている。

(文責：河合 健、眞能 正幸)

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Inoue T, Ishihara R, Shibata T, Suzuki K, Kitagawa Y, Miyazaki T, Yamaji T, Nemoto K, Oyama T, Muto M, Takeuchi H, Toh Y, Matsubara H, Mano M, Kono K, Kato K, Yoshida M, Kawakubo H, Booka E, Yamatsuji T, Kato H, Ito Y, Ishikawa H, Tsushima T, Kawachi H, Oyama T, Kojima T, Kuribayashi S, Makino T, Matsuda S, Doki Y : Endoscopic imaging modalities for diagnosing the invasion depth of superficial esophageal squamous cell carcinoma. 「Esophagus」 19(3): P375-383、2022 年 4 月 9 日

Hori Y, Hirose K, Ozeki M, Hata K, Motooka D, Tahara S, Matsui T, Kohara M, Higashihara H, Ono Y, Tanaka K, Toyosawa S, Morii E : Correction: *PIK3CA* mutation correlates with mTOR pathway expression but not clinical and pathological features in Fibro-adipose vascular anomaly (FAVA). 「Diagnostic Pathology」 17(1) : 43. doi: 10.1186/s13000-022-01224-5.、2022 年 5 月 2 日

Ono M, Yamaguchi O, Ohtani T, Kinugawa K, Saiki Y, Sawa Y, Shiose A, Tsutsui H, Fukushima N, Matsumiya G, Yanase M, Yamazaki K, Yamamoto K, Akiyama M, Imamura T, Iwasaki K, Endo M, Ohnishi Y, Okumura T, Kashiwa K, Kinoshita O, Kubota K, Seguchi O, Toda K, Nishioka H, Nishinaka T, Nishimura T, Hashimoto T, Hatano M, Higashi H, Higo T, Fujino T, Hori Y, Miyoshi T, Yamanaka M, Ohno T, Kimura T, Kyo S, Sakata Y, Nakatani T; JCS/JSCVS/JATS/JSVS Joint Working Group : JCS/JSCVS/JATS/JSVS 2021 Guideline on Implantable Left Ventricular Assist Device for Patients With Advanced Heart Failure. 「Circulation Journal」 86(6) : P1024-1058、2022 年 5 月 25 日

Hayashi C, Takahashi Y, Mori K, Kawai K, Miyo M, Toshiyama R, Sakai K, Hamakawa T, Doi T, Takeno A, Gotoh K, Miyazaki M, Takami K, Hirao M, Kato T : A case of infectious heterotopic ossification in the appendectomy scar, which formed an inflammatory granuloma. 「Journal of Surgical Case Reports」 2022(8) : rjac370. doi: 10.1093/jscr/rjac370.、2022 年 8 月 17 日

Sato H, Nishikawa K, Hamakawa T, Kusunoki C, Miyake M, Miyamoto A, Kato T, Mano M, Takami K, Hirao M : Evaluating Neoadjuvant Chemotherapy for Lower Esophageal Squamous Cell Carcinoma by Measuring Esophageal Wall Thickness. 「Anticancer Research」 42(11) : P 5655-5662、2022 年 9 月 27 日

Ono S, Hirose K, Sukegawa S, Nakamura S, Motooka D, Iwamoto Y, Hori Y, Oya K, Fukuda Y, Toyosawa S : Multiple orthokeratinized odontogenic cysts: clinical, pathological, and genetic characteristics. 「Diagnostic Pathology」 17(1) : 82. doi: 10.1186/s13000-022-01261-0.、2022年10月14日

Nagao D, Ozeki M, Nozawa A, Yasue S, Sasai H, Endo S, Kato T, Hori Y, Ohnishi H : A Case of Multifocal Lymphangioendotheliomatosis With Thrombocytopenia and Changes in Coagulopathy. 「Journal of Pediatric Hematology/ Oncology」 doi: 10.1097/MPH.0000000000002597. Online ahead of print.、2022年11月21日

Kuruma A, Kodama M, Hori Y, Sato K, Fujii M, Isohashi F, Miyoshi A, Mabuchi S, Setoguchi A, Shimura H, Goto T, Toda A, Nakagawa S, Kinose Y, Takiuchi T, Kobayashi E, Hashimoto K, Ueda Y, Sawada K, Morii E, Kimura T : Gastric-Type Adenocarcinoma of the Uterine Cervix Associated with Poor Response to Definitive Radiotherapy. 「Cancers」 15(1):170. doi: 10.3390/cancers15010170.、2022年12月28日

Komamizu S, Ozeki M, Hayashi D, Endo S, Hori-Hirose Y, Sasaki S, Ohnishi H : Pediatric case of acquired progressive lymphatic anomaly treated with sirolimus. 「Pediatrics International」 e15497. doi: 10.1111/ped.15497. Online ahead of print.、2023年2月7日

Amano M, Nakagawa S, Moriuchi K, Nishimura H, Tamai Y, Mizumoto A, Yanagi Y, Yonezawa R, Demura Y, Jo Y, Irie Y, Okada A, Kitai T, Amaki M, Kanzaki H, Kusano K, Noguchi T, Nishimura K, Izumi C : Substitute parameters of exercise-induced pulmonary hypertension and usefulness of low workload exercise stress echocardiography in mitral regurgitation. 「Scientific Reports」 12(1): 15977、2022 Sep 25

Demura Y, Amano M, Yanagi Y, Mizumoto A, Jo Y, Izumi C : Case series of mobile structures detected vividly by using superb microvascular imaging. 「Eur Heart J Case Rep」 6(10) : ytac411.2022 Oct 14

Nakagawa S, Takahama H, Hoshino K, Yanagi Y, Irie Y, Moriuchi K, Amano M, Okada A, Amaki M, Kanzaki H, Kusano K, Noguchi T, Yasuda S, Izumi C : Prevalence and predictive factors for clinical outcomes of isolated functional tricuspid regurgitation. 「J Cardiology」 5087(22).2022 Dec 21

A-1

森 清 : 術前薬物療法の組織学的効果判定「治療腺略に役立つ 臨床医・病理医のための乳腺病理の見かた・考え方」増田慎三、堀井理絵 編集、P165-168、メジカルビュー社、東京、2022年10月28日

柳 善樹 : 計測する項目と記録断面がわかる！病態別・類似疾患別心エコー検査の

ルーティン 三尖弁の異常「臨床検査」小谷敦志 編集、66(4) : P.393-401、医学書院、東京、2022年4月15日

柳 善樹：計測する項目と記録断面がわかる！病態別・類似疾患別心エコー検査のルーティン ファロー四徴症術後「臨床検査」小谷敦志 編集、66(4) : P.402-412、医学書院、東京、2022年4月15日

柳 善樹：計測する項目と記録断面がわかる！病態別・類似疾患別心エコー検査のルーティン 人工弁の異常「臨床検査」小谷敦志 編集、66(4) : P.553-559、医学書院、東京、2022年4月15日

柳 善樹：計測する項目と記録断面がわかる！病態別・類似疾患別心エコー検査のルーティン 高心拍出性心不全「臨床検査」小谷敦志 編集、66(4) : P.471-475、医学書院、東京、2022年4月15日

A-2

坂谷貴司、山口 倫、大森昌子、森 清：第1章 乳癌の基礎知識 3. 病理 A-F, H, I「乳腺腫瘍学 第4版」日本乳癌学会 編集、P23-46、49-54、金原出版、東京、2022年6月30日

A-3

坂野 悠、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、森 清、平尾素宏：根治切除後に急速な転移再発を認め Trousseau 症候群を合併した食道 mixed neuroendocrine-non-neuroendocrine neoplasm の1例「日本消化器外科学会雑誌」55(6) : P.351-359、日本消化器外科学会、2022年6月1日

林 千恵、酒井健司、俊山礼志、森 清、後藤邦仁：腎細胞癌異時性胆嚢転移の1切除例「胆道」36(4) : P.537-543、日本胆道学会、2022年10月31日

今村沙弓、林 千恵、水谷麻紀子、森 清、眞能正幸、八十島宏行：血球減少・DICを契機に受診され、抗 HER2 療法が奏功した乳癌骨髄癌腫症の1例「乳癌の臨床」37(6) : P.513-519、篠原出版新社、2022年12月28日

泉 はるか、野々村大地、岡 利樹、松崎恭介、西村健作、森 清：13年間外科的治療を繰り返し施行したパラ眼グリオーマの1例「泌尿器科紀要」68(12) : P.385-390、泌尿器科紀要刊行会、2022年12月31日

A-4

堀 由美子、森井英一、廣瀬勝俊：これからの脈管異常診療において求められる病理診断「診断病理」39(4) : P.247-254、日本病理学会、2022年10月15日

B-3

堀 由美子：乳幼児期における非腫瘍性疾患の病理～先天性疾患を中心として～
脈管奇形の分類 静脈奇形・リンパ管奇形を中心に。第 111 回日本病理学会総会、
神戸、2022 年 4 月 14 日

森 清：乳癌の術前薬物療法と画像の最前線 消えた細胞を意識する乳癌の組織
学的治療効果判定。第 48 回日本乳腺甲状腺超音波医学会学術集会、名古屋、2022
年 4 月 23 日

柳 善樹、天野雅史、安部晴彦、中川紗希、赤嶺和昭、水松千香子、末武 貢、泉
知里、眞能正幸：SHD-2/ 弁膜症治療 TriClip を見据えた TR の重症度診断。日本
超音波医学会第 95 回学術集会、名古屋、2022 年 5 月 21 日

堀 由美子、廣瀬勝俊、森井英一：血管腫血管奇形診療の最新の知見 血管腫・血
管奇形の病理。第 63 回日本脈管学会総会、横浜、2022 年 10 月 28 日

柳 善樹、安部晴彦、小元 真生、鳥飼 真衣、赤嶺 和昭、中川 紗希、谷口 久美、
水松千香子、末武 貢、眞能 正幸：心エコー機器の基本性能を使い倒す 形態・
動きを正確にとらえる(B モード・M モードを中心に) 知るべき基礎編。第 33 回
心エコー図学会、鳥取、2022 年 4 月 8 日

柳 善樹、天野 雅史、安部 晴彦、中川 紗希、赤嶺 和昭、水松 千香子、末武 貢、
泉 知里、眞能 正幸：TriClip を見据えた TR の重症度診断 -手術 or Clip?-。第 95
回 日本超音波医学会、愛知、2022 年 5 月 21 日

B-4

今村沙弓、水谷麻紀子、八十島宏行、森 清、眞能正幸、増田慎三：HER2 陽性乳
癌に対する術前薬物療法の効果予測因子に関する臨床病理学的検討。第 122 回日
本外科学会定期学術集会、熊本、2022 年 4 月 14 日

今村沙弓、森 清、水谷麻紀子、林 千恵、岡田公美子、眞能正幸、八十島宏行、
増田慎三：HER2 陽性乳癌に対する術前薬物療法の効果予測に関する臨床病理学
的研究。第 30 回日本乳癌学会、横浜、2022 年 7 月 1 日

高見康二、土井貴司、安藤性實、宮本 智、小河原光正、井上敦夫、森 清：3 回手
術後に切除不能となり EGFR-TKI 耐性となった多発肺癌に、コンバージョン手術
と放射線治療を行った 1 例。第 63 回日本肺癌学会学術集会、福岡、2022 年 12 月
1 日-3 日

木原実香、田井静、小野美菜子、大西浩代、福田 修：GENECUBE で検出し得た
結核菌群症例。第 34 回日本臨床微生物学会総会・学術集会、横浜、2023 年 2 月
5 日

柳 善樹：「TAVI 術前のエコー評価」。ストラクチャークラブジャパン ライブデ

モンストレーション 2022、岡山、2022 年 9 月 10 日

B-6

田中大地、安藤性實、木村 剛、宮本 智、小河原光正、土井貴司、高見康二、井上敦夫、森 清、眞能正幸：EGFR 遺伝子変異陽性肺癌の治療中に増大を認め、MET 遺伝子経に陽性肺癌と診断した同時多発肺癌の 1 例。第 116 回日本肺癌学会関西支部会、吹田、2022 年 6 月 25 日

中川紗希、柳善樹、安部晴彦、中村雅之、西宏之、上田恭敬、河合 健、眞能正幸：「IgG4 関連疾患に伴う左右冠動脈瘤の一例」。第 49 回 超音波医学会 関西地方会、大阪、2022 年 10 月 8 日

田井 静、木原実香、中野つづり、小野美菜子、大西浩代、福田 修、末武 貢、眞能正幸：当院における POT 法の検査状況について、令和 4 年度 第 49 回国臨協近畿支部定期総会・学会、大阪、2022 年 6 月 4 日

小野美菜子、中野つづり、木原実香、田井 静、中野理美、福田 修、村上麻里子、河合 健、末武 貢、眞能正幸：GENECUBE®で検出し得た *Mycobacterium tuberculosis* complex 症例を経験して、令和 4 年度 第 49 回国臨協近畿支部定期総会・学会、2022 年 6 月 4 日

④【班研究・研究助成実績の報告書】

国立病院機構共同臨床研究 平成 31 年度 NHO ネットワーク共同研究（西村班研究）

研究課題名「乳房温存と放射線非照射を両立する高精度断端検索システム」

研究責任者： 森 清

緒言：乳癌に対する乳房温存切除術標本の断端検索は、乳頭と癌を結ぶ線に直角に約 5mm 幅で平行に割を入れ評価する方法(連続スライス法)が一般的であるが、側方断端面に垂直方向の割となるため、断端検索高率が悪く、スライス面の間に含まれる断端用製造があってもこれを検出できないことも想定される。また円柱状に切除された乳房温存切除術標本は、重力の影響で、固定中に平坦化する(パンケーキ現象)ため、正確な側方断端面が不明瞭化する。これらの問題を克服するため、名古屋医療センター 乳腺診療チームは、特殊なポリゴン型枠を用いた乳房温存切除術検体の固定と、型枠により平坦化した側方断端面に沿ったスライスを作製することで、高効率的に側方断端を精度高く検索する検索法(ポリゴンメソッド、以下「ポ法」)を開発し、日常の診療に使用している。今回の研究では、名古屋医療センター以外の多施設でも、本検索法を行い、適切に運用できる稼働かを検証する介入研究を実施する。

方法：目標症例数は 150 例で、当院では、業務量、人員の実情を踏まえ 10 例の登録とする。研究対象者登録期間は 2 年間とし、観察期間は最終研究対象者登録から 3 年とする(総研究期間：5 年)。検討内容は、①ポ法を用いた際の断端評価が、中央(名古屋医療センター)と他施設診断で一致するかどうかの再現性の評価、②ポ法運用上の問題点の収集、③ポ法で断端陰性とハンド難された患者における研究期間内の左右乳房の癌発生率の差の比較を行う予定である。④更に将来的に計画している、ポ法による断端検索で断端陰性であれば術後放射線照射の省略を行う他施設共同研究の基礎データを得るために、名古屋医療センターを含めた全施設症例を対象に、ポ法で断端陰性と判断した患者における研究期間内の左右乳房の癌発生率の差の比較、患者の背景やポ法に関して取得するデータ(断端ブロック数など)を探索的に検討する。

結果：当該研究手法による臨床・病理の業務負荷と、見積もられる効果を比較し、当院では、担当臨床科と協議の上で症例登録を見送ることとした。

意義：ポ法は、手術検体のホルマリン固定の際に起こるパンケーキ現象を回避し、側方断端を明確にするという病理検索上の意義は大きく、モールド固定の導入は考慮されても良いと思われた。一方で、側方断端面を全周性に面の接線方向の標

本で検索するため、検索手技の煩雑さや標本数が増えること、そして真の断端と近接する病変との距離が実測できなくなるという複数の欠点があると思われた。当院では、従来型検索法での側方断端から 5mm 以内の病変を断端陽性としてきたが、ポ法ではこの 5mm 前後の繊細な距離の評価しにくくなるため、ポ法を積極的に支持できないと判断した。

【班研究・研究助成実績】

日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究

研究課題名：リンパ管奇形に対するシロリムス薬事承認を見据えた病理診断基準の確立

研究代表者：廣瀬（堀） 由美子

【目的】

リンパ管奇形は、機能面および整容面において患者の QOL を著しく低下させ、しばしば難治性である。近年、新たな治療方法として mTOR 阻害薬であるシロリムスが著効することが報告され、世界に先駆けて、本邦での薬事承認を目指した第Ⅲ相試験が 2019 年に終了している（現在、薬事承認済み）。リンパ管奇形は病理診断により確定されるが、静脈奇形や他の脈管系疾患との鑑別がしばしば困難である。承認薬を使用するためには、脈管系疾患の正確な分類方法を確立することが急務である。本研究では、ヒト病理検体を用いて、治療薬に即したリンパ管奇形の病理診断基準を確立することを目的とする。

【方法】

病理組織学的に、リンパ管奇形 (LM)、リンパ管静脈奇形 (LVM)、静脈奇形 (VM) と診断された症例の FFPE（ホルマリン固定パラフィン包埋）病理検体を用いる。免疫組織化学染色により、リンパ管マーカー (Prox1, D2-40)、血管マーカー (CD31, CD34) などの発現強度を数値化し比較する。次に、FFPE より gDNA を抽出し、脈管奇形パネルを用いた次世代シーケンス (NGS) 解析により、各症例の変異遺伝子を検出する。病理所見・臨床所見・免疫組織化学染色の発現強度・変異遺伝子との関連性を明らかとすることで、簡便な診断方法を確立する。

【結果】

LM 17 症例、LVM 9 症例、VM 34 症例を用いた免疫組織化学染色の結果、Prox1 は LM および LVM の全症例で高発現しており、VM と比較して有意に発現が高かった。VM では症例ごとに発現にばらつきが認められた。D2-40 は LM で他と比較して有意に発現が高く、LVM が次いだ。VM ではほとんど発現は認められなかった。一方で、CD34 はリンパ管マーカーと逆の結果であり、VM で最も発現が高く、LVM、LM の順で発現が低下した。CD31 は全例で高発現していた。

次に、LM 15 症例、VM 28 症例を用いて、遺伝子変異解析を施行した。LM では *PIK3CA* 変異が 9/15 例で同定され、VM では *PIK3CA* 変異が 4/28 例、*TEK* 変異が 16/28 例で同定された。

次年度は、変異遺伝子と免疫組織化学染色結果、臨床病理所見との関連性を明

らかとするとともに、解析症例数を増やす予定である。

【意義】

現在は、mTOR 阻害薬であるシロリムスのリンパ管奇形に対する効能が薬事承認され、保険集載されている（2020年）。がん（腫瘍）において遺伝子異常に対応する分子標的薬治療が標準治療となりつつあることと同様、リンパ管奇形などの脈管病変においても分子標的薬治療が応用され始めている。本研究により、遺伝子背景を考慮した新たな病理学的診断基準を確立し、正しい治療方法を選択することが可能となることが期待される。

リハビリテーション科

三木秀宣

三次救急医療を担う高度急性期大規模病院におけるリハビリテーション科として、急性発症後の早期機能回復を目的にリハビリテーション科専従医師による障害診断及び処方に従って理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が超早期から積極的に介入している。また、機能回復に経過を要する疾患については最善の状態の後継病院へ引き継げるように、外科術後では早期の自宅退院を目指して最大の機能回復を図るために質の高いリハビリテーションを提供することを目標としている。

1. 施設基準

- ①心大血管疾患リハビリテーション料 I
- ②脳血管疾患等リハビリテーション料 I
- ③廃用症候群リハビリテーション料 I
- ④運動器リハビリテーション料 I
- ⑤呼吸器リハビリテーション料 I
- ⑥がん患者リハビリテーション料

2. 依頼診療科

リハビリテーション科へ依頼される診療科は整形外科、循環器内科、脳神経外科、脳卒中内科、救命救急科、消化器内科、外科、心臓血管外科、泌尿器科など多岐に渡っている。また、令和4年度の処方件数は、理学療法 3,163 件、作業療法 1,204 件、言語聴覚療法 585 件で、それぞれ前年度比 110.7%、123.4%、152.7%となり大幅に増加傾向にある。

①整形外科

人工関節（股・膝関節）や脊椎術後患者においてクリティカルパスに基づいて術後 3 週間で退院できるように良質で均質なリハビリテーションを実施し、在院日数短縮と QOL 向上を両立している。

②循環器内科、心臓血管外科

心疾患の急性期に対して離床から 200m 歩行までのプロトコルによる個別療法と、集団療法による心臓リハビリテーションを実施している。

③脳卒中内科、脳神経外科

脳梗塞、脳内出血、脳腫瘍、頭部外傷術後など幅広い脳疾患に対応している。両科とも脳卒中ケアユニット（SCU）から一般病棟まで超早期から関わり、最良な状態で後継病院に円滑に連携できるようリハビリテーションを実施している。

3. 休日診療体制

理学療法士および作業療法士による年間を通して連休の無い連続性を担保

した診療体制を導入することで、急性発症および手術から間もない患者の早期の ADL 自立を図っている。

4. チーム医療

①呼吸ケアチーム

医師、看護師、理学療法士、臨床工学技士が対象患者の呼吸状態を評価し、早期の人工呼吸器離脱および二次的合併症予防のための離床プログラムを検討している。また、呼吸努力を軽減する体位および排痰を援助する体位の提案を行っている。ラウンド終了後は、多職種から得られた情報を担当理学療法士へ提供し、安全な早期離床を行えるようにサポートをしている。

②排尿ケアチーム

医師、看護師、作業療法士がバルーンの抜去等に向けたトイレ動作等を評価している。また、前立腺がん術後の排泄機能障害に対して、骨盤底筋体操や自己導尿等の動作獲得に向けた評価、訓練を実施している。

③摂食嚥下支援チーム

医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士が、加齢や脳血管障害、各種神経疾患、廃用等により摂食・嚥下機能が低下した患者を対象として摂食・嚥下機能を評価し、嚥下訓練および指導を行っている。また、必要に応じて VF や VE を実施して安全かつ適切な食形態の提供を行っている。更に、栄養サポートチームと連携し、適切な栄養管理を実施している。

5. 血友病性関節症

血友病性関節症患者に対して、理学療法士による運動機能評価および継続的な運動指導を実施している。

6. 臨床実習受託施設

診療参加型実習 (Clinical clerkship) を導入し、診療業務を通じて医療従事者として必要な思考・判断力を養えるよう指導を行っている。また、複数人の実習生を同時に受け入れることで、実習生同士での協同学習や実技練習を行えるよう環境を整えており、指導体制についても複数人で指導にあたることで、指導者個人への負担を軽減すると共に業務効率の改善に努めている。

7. 業務実績

令和 4 年度の総実施単位数は 107,696 単位で前年比 105.7%、診療報酬では 29,375,605 点で前年度比 111.8%となった。また、急性発症および外科手術後の早期介入に重点を置いた結果、疾患別リハビリテーション料の初期加算は 48,388 単位で前年比 131.4%となり大幅に増加した。なお、令和 5 年度から 365 日診療体制を導入予定であり、急性期リハビリテーション領域における医療的貢献と更なる体制強化を計画している。

【2022 年度研究発表業績】

B-4

中田貴土、鈴木裕二、上野俊之、西田恭治、矢田弘史、三木秀宜：当院外来血友病患者における関節機能障害の現状。第 76 回 国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 8 日

B-4

岡崎将人、加賀谷将之、上野俊之、今中辰茂、岡田直秀：理学療法士及び作業療法士養成施設指導ガイドライン改正に伴う指導方法の変更。第 76 回 国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 8 日

B-4

上野俊之、岡田直秀、伊藤浩一、山田 茂：急性期病院におけるリハビリテーション科業務改善への取り組み。第 76 回 国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 8 日

臨床腫瘍科

久田原郁夫

臨床腫瘍科は、平成 11 年に設立され、腫瘍内科、腫瘍外科、緩和ケア内科の 3 科の総合科として始まりました。組織改変に伴い緩和ケア内科は、がん以外の疾患も対象とするため独立科となりました。

現在のところ腫瘍内科・腫瘍外科に所属する医師は、全て兼任で各々の専門領域（呼吸器、消化器、骨軟部）のがん診療をおこなっています。

毎週開催している臨床腫瘍科カンファレンスでは、新規症例や治療経過中の症例検討と外来化学療法室で発生したイベントや毒性の分析をおこなっています。また定期的行事として、全職員対象の Cancer Board を開催しております。がんの診断、治療に関して総合的かつ横断的に討論し知識を深めるよい機会となっています。

がんの種類は多彩でその臨床像も個人によって一様ではありません。したがって症例ごとにがんの特性を検討した上個別治療を行うのが理想と言えます。近年、広範囲に遺伝子解析を行う Foundation 1 が実臨床に導入されエキスパートパネルを経て治療薬を選択することが可能になりました。また肺がんでは、Oncomine DX Target Test マルチ CD システムや Amoy DX 肺癌マルチ遺伝子 PCR パネルが保険適用され早期からの個別治療薬の選択が可能となっています。新規の抗がん剤、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤が続々と開発され国内外で多くの臨床試験がおこなわれ治療方法の選択肢が広がってきています。放射線治療も粒子線の適応疾患の拡大、体幹部定位照射の普及、Ra223, BNCT など新規の治療法も出てきています。当科では 3 名のがん薬物療法専門医を中心に様々な症例に対して質の高い薬物療法を提供しています。各種の画像診断、病理診断および分子生物学的診断も日々進歩をとげています。このような環境で、診断、治療において主科のみならず個別のかつ総合的な判断が求められる機会が増えてきています。またがん治療に特化した看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーが積極的に介入することで患者さんは多くの恩恵を受けています。このように今や、がん治療はチーム医療が基本となっておりますが、臨床腫瘍科はその司令塔の役目を担っていきたいと考えています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Umemoto K, Sunakawa Y, Ueno M, Furukawa M, Mizuno N, Sudo K, Kawamoto Y, Kajiwara T, Ohtsubo K, Okano N, Matsuhashi N, Itoh S, Matsumoto T, Shimizu S, Otsuru T, Hasegawa H, Okuyama H, Ohama H, Moriwaki T, Ohta T, Odegaard JI, Nakamura Y, Bando H, Yoshino T, Ikeda M, Morizane C. : Clinical significance of circulating-tumour DNA analysis by metastatic sites in pancreatic cancer. Br J Cancer. doi: 10.1038/s41416-023-02189-y. Epub ahead of print. 2023 年 2 月 13 日

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Suzuki Y, Matsumoto T, Terazawa T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Naito A, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y.: TRESBIEN (OGSG 2101): encorafenib, binimetinib and cetuximab for early recurrent stage II/III *BRAF* V600E-mutated colorectal cancer. *Future Oncol.* doi: 10.2217/fon-2022-0949. Epub ahead of print. 2022 年 1 1 月 8 日

Kawakami T, Mizusawa J, Hasegawa H, Imazeki H, Kano K, Sato Y, Iwasa S, Takiguchi S, Kurokawa Y, Doki Y, Boku N, Yoshikawa T, Terashima M. : Usefulness of an S-1 dosage formula: an exploratory analysis of randomized clinical trial (JCOG1001). *Gastric Cancer.* doi: 10.1007/s10120-022-01315-8. Epub ahead of print. 2022 年 6 月 29 日

Hino K, Nishina T, Kajiwara T, Bando H, Nakamura M, Kadowaki S, Minashi K, Yuki S, Ohta T, Hara H, Mizukami T, Moriwaki T, Ohtsubo K, Komoda M, Mitani S, Nagashima F, Kato K, Yamada T, Hasegawa H, Yamazaki K, Yoshino T, Hyodo I. : Association of *ERBB2* Copy Number and Gene Coalterations With Trastuzumab Efficacy and Resistance in Human Epidermal Growth Factor Receptor 2-Positive Esophagogastric and Gastric Cancer. *JCO Precis Oncol.* 6:e2200135. doi: 10.1200/PO.22.00135. 2 0 2 2 年 8 月

Kudawara I, Yasuda N, Okagaki A. : Solitary fibrous tumor in the vulva. *J Clin Gynecol Obstet.* 12(1):19-23、 2 0 2 3 年

A-3

藤原綾子、高見康二、安藤性實、木村 剛、宮本 智、小河原光正、小島将裕、島川宜子、井上敦夫、栗山啓子 : 気管孔上部に気道狭窄を伴った金属製気管カニューレの気管内脱落に対し、多科合同で異物除去を行った 1 例。「気管支学」 44(2): P. 165-170, 2022.

B-2

Mitani S, Kito Y, Kawakami H, Nishina S, Matsumoto T, Tsuzuki T, Shinohara Y, Shimokawa H, Kumanishi R, Ohta T, Kimura S, Kawakami T, Nishina T, Hasegawa H, Akiyoshi K, Chiba Y, Yamazaki K, Hironaka S, Muro K: Multicenter retrospective study of trifluridine/tipiracil (FTD/TPI) plus bevacizumab (BEV) for vulnerable patients with pretreated metastatic colorectal cancer (mCRC): WJOG14520G (TWILIGHT).]2023 ASCO Gastrointestinal Cancers Symposium, poster , サンフランシスコ、USA, 2023 年 1 月 24 日

Kotani D, Kagawa K, Matsubara Y, Bando H, Harada K, Takahashi N, Mihara Y, Nakayama I, Izawa N, Kawakami T, Masuishi T, Hasegawa H, Ohta T, Wakabayashi M, Yoshino : TTRIDENTE trial: A phase II study of rechallenge with encorafenib, binimetinib, and cetuximab in patients with RAS wild-type/*BRAF* V600E-mutant metastatic colorectal cancer. 2023 ASCO Gastrointestinal Cancers Symposium, poster , サンフランシスコ、

USA, 2023 年 1 月 24 日

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Matsumoto T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, T. Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y TRESBIEN (OGSG 2101): Encorafenib, binimetinib and cetuximab for early relapse stage II/III BRAF V600E-mutated CRC Paris ESMO Congress 2022, poster, Paris, France, 2022 年 9 月 10 日

B-4

相木佐代、前倉俊也、櫻井真知子、清水彩加、山本友佳子、吉金鮎美、久田原郁夫：医療用麻薬に関するインシデント防止に向けての取り組み。第 30 回 日本チーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日

久田原郁夫、植松稔：切除不能な高悪性度軟部肉腫の多発肺転移に対して体幹部定位照射をおこなった 2 例。第 55 回 日本整形外科学会・骨軟部学術集会、東京、2022 年 7 月 14-15 日

安田直弘、角永茂樹、久田原郁夫：当院における下肢腫瘍用人工関節の治療成績。第 55 回 日本整形外科学会・骨軟部学術集会、東京、2022 年 7 月 14-15 日

高見康二、土井貴司、安藤性實、宮本 智、小河原光正、井上敦夫、森 清：3 回手術後に切除不能となり EGFR-TKI 耐性となった多発肺癌に、コンバージョン手術と放射線治療を行った 1 例。第 63 回日本肺癌学会学術集会、福岡、2022 年 12 月 3 日

B-6

久田原郁夫：UPS 歯突起転移に対する放射線治療中に骨折を起こした 1 例。第 155 回 関西骨軟部腫瘍研究会、Web、2022 年 3 月 5 日

久田原郁夫、安田直弘：上腕軟部肉腫再発に対する重粒子線治療後に再発を繰り返した症例。第 157 回 関西骨軟部腫瘍研究会、Web、2023 年 3 月 18 日

田中大地、安藤性實、木村 剛、宮本 智、小河原 光正、土井貴司、高見康二、井上敦夫、森 清、眞能正幸：EGFR 遺伝子変異陽性肺癌の治療中に増大を認め、MET 遺伝子変異陽性肺癌と診断した同時多発肺癌の 1 例。第 116 回日本肺癌学会関西支部会、豊中市、2022 年 6 月 25 日

前倉俊也、相木佐代、櫻井真知子、小河原光正：嗄声以外に転移性脳腫瘍がコミュニケーション障害に影響していたと考えられた肺癌の一例。第 4 回日本緩和医療学会関西支部学術大会、Web 開催、2022 年 9 月 18 日

B-8

小河原光正：肺がんの薬物療法について。東成区薬剤師会研修会、大阪市、2022 年 4 月 21 日

小河原光正：IV期非小細胞肺癌の免疫治療。保険薬局 Oncology 研修・第8回肺癌シリーズ研修、特定非営利活動法人 薬と医療の啓発塾、大阪市、2022年5月25日

小河原光正：小細胞がんの治療。保険薬局 Oncology 研修・第10回肺癌シリーズ研修、特定非営利活動法人 薬と医療の啓発塾、大阪市、2022年7月27日

長谷川裕子：CRC Oncology Interactive Seminar「大腸癌薬物治療：最新データから考える治療選択」、大阪、2022年7月20日

長谷川裕子：がん診療 UP Date「がん遺伝子パネル検査の現状と課題」 大阪、2022年8月1日

長谷川裕子：第7回法円坂消化器疾患医療フォーラム「消化管癌化学療法の Topics ～当院における取組み～」 大阪、2022年8月6日

長谷川裕子：“胃がん化学療法 治療継続のための取組み” 悪心嘔吐（倦怠感）の観点より。消化管癌の薬物療法の進歩と副作用マネジメント。Area Gastric Cancer Web Meeting ～胃がん化学療法の継続を考える、Web、2023年2月2日

長谷川裕子：消化管癌の薬物療法の進歩と副作用マネジメント。がん診療 副作用マネジメント Web セミナー、Web、2023年2月22日

B-9.

小河原光正：FM 大阪 DOCTOR's FLAP. 2022年6月16日放送

薬剤部

吉野宗宏

大阪医療センターの運営方針に基づき、医薬品の適正使用の推進、医薬品の安全管理、薬物療法の有効性・安全性の向上に資する業務、薬剤管理指導業務、チーム医療への主体的関与（HIV感染症患者への服薬支援、緩和ケアチーム、術後疼痛管理チーム、NST、ICT、AST、外来化学療法室でのがん薬物療法支援等）を実践し、良質かつ適正な医療の提供に貢献することを薬剤部の基本方針としている。

1. 病棟薬剤業務・薬剤管理指導業務

病棟担当薬剤師を専任化し、薬物療法の質の向上と医療安全の確保を主な目的として次の業務を行っている。

1) 無菌調製業務

注射処方投与量、投与速度、配合変化等の確認を行い、クリーンベンチ内で注射薬の無菌調製を行っている（40,473件/年）。

抗がん剤の調製はレジメンと処方内容を確認し、薬剤部無菌室の安全キャビネット内で調製している（16,785件/年）。

2) 入院センター業務

入院予定患者を対象に薬剤師による面談を行い、持参薬や副作用・アレルギーの確認を行っている。手術・侵襲的検査がある場合は、中止薬の確認を行い、患者へ服薬遵守させている（5,497件/年）。

3) 処方提案・支援

主治医に対する主な処方提案・支援として、持参薬の代替薬の提案、処方設計支援、支持療法薬の提案、薬物血中濃度に基づいた処方設計等を行っている。

4) 医薬品情報の提供・相談応需

採用医薬品情報の提供や医療スタッフからの照会や相談に対して情報提供に努めている。また、新型コロナウイルス感染症治療薬の特例承認に伴い、院内で滞りなく使用できるように体制整備や症例の登録を行った。

5) 薬剤管理指導業務

薬物療法に係る様々な情報を収集・分析し、その内容から効果の評価、副作用モニタリングを実施し、薬学的アプローチを積極的に実施している。また、病棟業務の延長として高齢者のポリファーマシー対策を実践している。薬剤管理指導算定件数は21,189件/年であった。

2. 外来服薬支援指導

HIV感染症専門薬剤師が「お薬の相談室」に常駐し長期的な支援体制を構築しており、外来における指導件数は2,605件/年であった。また外来化学療法室では治療計画、副作用等について指導を実施し、がん薬物療法の安全と質の向上に努めている。薬剤師による外来がん薬物療法患者の指導件数は

480 件/年であった。

3. 医薬品情報管理（収集・整理・評価・提供）

医薬品情報の適正な管理と供給を行うために専任スタッフを配置し、医療スタッフからの相談応需や医薬品情報の発信を行っている。厚生労働省への医薬品・医療機器副作用報告は 6 件/年の報告を、また、プレアボイド報告としては 350 件/年の報告を行っている。

4. 治験薬管理業務

治験薬管理者（薬剤部長）の管理責任の下、GCP を遵守した治験薬の適切な保管、管理、調剤を行い、被験者への治験薬投与が円滑かつ安全に行われるよう努めている。

5. 専門薬剤師の育成・研修受入体制の推進

日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師研修施設・がん薬物療法認定薬剤師研修施設、日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設・薬物療法専門薬剤師研修施設、日本薬剤師研修センター小児薬物療法認定薬剤師研修施設等の認定を受けており、今年度は、1 名の研修生を受け入れた。また、薬学部実務実習生は 29 名を受け入れ薬学教育にも寄与している。

6. 臨床研究業績

論文投稿、学会発表等は以下の通りである。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Hata H, Matsumura C, Chisaki Y, Nishioka K, Tokuda M, Miyagi K, Suizu T, Yano Y: A retrospective cohort study of multiple immune-related adverse events and clinical outcomes among patients with cancer receiving immune checkpoint inhibitors. Cancer Control. 29, doi: 10.1177/10732748221130576. 2022 年 9 月 15 日

Kushida H, Watanabe D, Yagura H, Nakauchi T, Hirota K, Ueji T, Nishida Y, Uehira T, Yoshino M, Shirasaka T : Evaluation of plasma doravirine concentrations in patients with HIV-1 undergoing hemodialysis. J Infect Chemother.;S1341-321X(23)00039-9.2023 年 2 月 9 日

A-3

石井聡一郎、阿部憲介、榎田崇志、大道淳二、近藤 旭、藤井健司、田中まりの、大東敏和、藤井輝久、畝井浩子、矢倉裕輝、松尾裕彰：学校薬剤師における HIV 感染症/AIDS をはじめとした性感染症予防啓発活動の実態調査、日本薬剤師会雑誌 74(10):P.1123-1128、2022 年 10 月 1 日

A-4

矢倉裕輝：Q&A 形式 Case Study、HIV 感染症と AIDS の治療 13(1): P.32-35、メディカルレビュー社、2022 年 11 月 30 日

矢倉裕輝：Evidence Update 2023 最新の薬物治療のエビデンスを付加的に利用する 抗ウイルス薬、P.111-115、南山堂、2023年1月1日

A-5

矢倉裕輝：適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成に関する研究－ 厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和4年度研究報告書、P.88-95、2023年3月31日

B-3

上野由貴、石田健一郎、飯沼公英、岡本雄太郎、小島将裕、曾我部 拓、竹川良介、坂本麻衣、吉野宗宏、大西光雄：バルプロ酸中毒患者に対するカルバペネム系抗菌薬が中毒治療に寄与したと考えられた一例。第44回中毒学会総会・学術集会、Web開催、2022年7月15日

矢倉裕輝：HIV 感染症に関わる研究活動について。第5回日本病院薬剤師会 Future Pharmacist Forum、WEB、2022年7月16日

矢倉裕輝：HIV 治療における「Patient Empowerment」を考える（共催シンポジウム）。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、静岡、2022年11月18日

矢倉裕輝：最新治療の導入と多職種連携の実践（共催シンポジウム）。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、静岡、2022年11月20日

B-4

吉村芙美、羽田かおる、瀬野千亜紀、千賀明日香、小林恭子、白阪琢磨：症例登録促進に向けたPDCAサイクルの実践。第22回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2022 in 新潟、2022年9月17日-9月18日

松尾友香、奥村葵美、吉村芙美、三井知子、名畑優保、仁谷めぐみ、小林恭子、羽田かおる、白阪琢磨：シミュレーション訓練を通じた災害対応マニュアルの評価。第22回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2022 in 新潟、2022年9月17日-9月18日

岸田啓太郎、青野由依、平井優実、堀由布子、中橋麻友、祝洗太朗、吉金鮎美、檜本佳代、川上智久、矢倉裕輝、村津圭治、山下大輔、吉野宗宏：大阪医療センターにおける継続した新入局薬剤師教育プログラムについて。第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

矢倉裕輝、阿部憲介、増田純一、長島浩二、廣永竜太、平野淳、山梨領太、野村直幸、河野泰宏、濱砂 恵理香、小山朋子、合原嘉寿、内藤義博、澤田大介、西村富啓、吉田知由、田村浩二、引地正人、橋本雅司、吉野宗宏、山下大輔：HIV 診療に対する薬剤師の関わりおよび介入状況に関するアンケート調査。第76回国

立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

矢倉裕輝、西田恭治、矢田弘史：大阪医療センターにおけるアルブトレペノナコグアルファの使用経験に基づく薬物動態に関する検討。第84回日本血液学会学術集会、福岡、2022年10月14日

矢倉裕輝、藤原綾乃、櫛田宏幸、吉野宗宏、渡邊大、白阪琢磨：HPLC法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピピリンの同時定量に関する検討。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、静岡、2022年11月18日

青野由依、山本友佳子、宮城和代、長谷川英利、畑裕基、村津圭治、山下大輔、吉野宗宏：フルコナゾール併用によりアルブミン懸濁型パクリタキセルによる骨髄抑制の増強をきたしたと考えられた一例。日本腫瘍薬学会学術大会2023、名古屋、2023年3月4日-3月5日

江原美里、畑裕基、山本友佳子、宮城和代、山下大輔、井上敦介、吉野宗宏：免疫チェックポイント阻害薬投与患者の検査オーダーへの薬剤師の介入について。日本腫瘍薬学会学術大会2023、名古屋、2023年3月4日-3月5日

畑裕基、松村千佳子、地寄悠吾、西岡香絵、徳田峰咲、宮城和代、水津智樹、矢野義孝：免疫チェックポイント阻害薬の有効性と免疫関連有害事象に関連する因子の後ろ向き調査研究。日本薬学会第143年会、北海道、2023年3月25日-3月28日

B-5

上野由貴：救急治療における薬剤師の関わりについて。第125回近畿救急医学研究会、奈良、2023年3月18日

B-6

平井優実、青野由依、岸田啓太郎、堀由布子、中橋麻友、祝洗太朗、吉金鮎美、檜本佳代、川上智久、矢倉裕輝、村津圭治、山下大輔、吉野宗宏：ピア・エデュケーションを用いた新入局薬剤師教育。2022年度近畿国立病院薬剤師会学術大会、WEB開催、2022年7月9日

堀由布子、岡崎晴夏、福岡利恵、藤井満里奈、平井優実、青野由依、岸田啓太郎、中橋麻友、祝洗太朗、吉金鮎美、檜本佳代、川上智久、矢倉裕輝、村津圭治、山下大輔、吉野宗宏：ピア・エデュケーションを用いた薬剤師教育。近畿薬剤師合同学術大会2023・第44回日本病院薬剤師会近畿学術大会、WEB開催、2023年2月4日-2月5日

藤井満里奈、岡崎晴夏、福岡利恵、平井優実、青野由依、岸田啓太郎、堀由布子、中橋麻友、祝洗太朗、吉金鮎美、檜本佳代、川上智久、矢倉裕輝、村津圭治、山下大輔、吉野宗宏：計数調剤支援システム導入による調剤過誤の変化。2023年度

近畿国立病院薬剤師会学術大会、WEB 開催、2023 年 3 月 11 日

B-7

畑裕基、山下大輔、村津圭治、竹野淳、平尾素宏、吉野宗宏：病院薬剤師による Web ミーティングツールを用いた内服抗がん剤患者に対する薬学的介入。第 30 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日

長谷部茂：免疫再構築症候群により ART 変更に難渋した症例。令和 4 年度関西 HIV 臨床カンファレンス薬剤師部会主催 症例検討会、大阪、2023 年 1 月 21 日

畑裕基、山下大輔、村津圭治、竹野淳、平尾素宏、吉野宗宏：第 2 報 病院薬剤師による Web ミーティングツールを用いた内服抗がん剤患者に対する薬学的介入。第 31 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2023 年 3 月 4 日

B-8

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。神戸薬科大学講義 先端医療論、神戸、2022 年 5 月 18 日

矢倉裕輝：大阪医療センターにおける血友病診療の実際。ヘモフィリア Web セミナー～薬剤師の立場から血友病診療を考える～、WEB 開催、2022 年 5 月 18 日

矢倉裕輝：HIV 感染症治療における薬剤師の関わり～日常診療から臨床研究まで～。令和 4 年度第 1 回愛知県病院薬剤師会 HIV 部会学術講演会、WEB 開催、2022 年 5 月 26 日

飯沼公英：災害対応の基礎知識・BCP の考え方（西宮市薬剤師会）。令和 4 年度 BCP 作成支援ワークショップ研修会、西宮、2022 年 6 月 5 日

矢倉裕輝：長期療養時代における薬剤師目線の服薬支援。Gilead Infectious Disease web seminar 2022、WEB 開催、2022 年 7 月 22 日

矢倉裕輝：これまでの臨床経験から考える 2 剤療法(DTG/3TC)の使い方。ViiV Pharmacist Forum、WEB 開催、2022 年 7 月 25 日

矢倉裕輝：最新治療の導入と多職種連携の実践。HIV Forum 2022-持効性注射剤による新しい HIV 感染症治療-、WEB 開催、2022 年 9 月 3 日

矢倉裕輝：抗 HIV 療法について～服薬支援の重要性～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 9 月 5 日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の特徴と薬剤師の役割。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

矢倉裕輝：チームで行う持効性注射剤の導入。HIV Team conference、WEB、2022 年 10 月 4 日

矢倉裕輝：血友病診療における薬剤師の役割と実際。Hemophilia Joint Check Seminar in 新宮 2022、WEB、2022 年 10 月 7 日

矢倉裕輝：薬剤師が知っておくべき「血友病」と治療の現状。第 1 回中外 e セミナー on Hemophilia for pharmacist、WEB、2022 年 10 月 31 日

小林恭子：実施計画書及び治験薬概要書の読み方。治験ネットおおさか 2022 年度 CRC 養成研修（初級者向け研修）、WEB 開催、2022 年 11 月 5 日

長谷部茂：抗 HIV 療法について～服薬支援の重要性～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

矢倉裕輝：血友病包括医療における薬剤師の役割の実際。第 36 回日本エイズ学会 学術集会・総会、静岡、2022 年 11 月 18 日

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。兵庫医科大学薬学部講義 感染制御学、神戸、2022 年 11 月 25 日

矢倉裕輝：最近の処方動向と長期療養を見据えた薬剤選択。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー 第 1 部、Web 開催、2022 年 12 月 1 日

矢倉裕輝：結核菌・非結核性抗酸菌について。兵庫医科大学薬学部講義 感染制御学、神戸、2022 年 12 月 2 日

矢倉裕輝：患者さんと一緒に目指す最適な薬剤選択。HIV セミナー in 京都滋賀、Web 開催、2022 年 12 月 12 日

矢倉裕輝：みんなで作る適切な緊急時対応～連絡カード所持の重要性～。Hemophilia×Emergency Expert Seminar、WEB、2022 年 12 月 20 日

飯沼公英：災害対応の基礎知識・BCP の考え方（堺市薬剤師会）。令和 4 年度 BCP 作成支援ワークショップ研修会、堺、2023 年 1 月 22 日

矢倉裕輝：服薬支援の実際～服薬スケジュールの組み方・服薬継続への関わり～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の処方トレンド、特徴と留意点～最適なレジメン提案を目指して～。第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス、WEB、2023 年 1 月 28 日

飯沼公英：災害対応の基礎知識 体験型企画 1。近畿薬剤師合同学会大会 2023・第 44 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、WEB 開催、2023 年 2 月 4 日

矢倉裕輝：多職種による患者さんとのコミュニケーション～大阪医療センターの現状～。医療行動経済学から血友病診療を考える Web セミナー、WEB、2023 年 2 月 14 日

矢倉裕輝：血友病診療における薬剤師の役割～多様化する治療薬と患者さんのニーズに応えるために～。血友病診療における多職種連携～薬剤師編～、WEB、2023 年 2 月 16 日

矢倉裕輝：長期療養患者さんに薬剤師ができること。HIV フォーラム～生活習慣病を考える～、WEB、2023 年 2 月 17 日

矢倉裕輝：継続服薬時の情報提供～レジメン変更も視野に入れた服薬相談～。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー 第 2 部、Web 開催、2023 年 3 月 9 日

看護部

西本京子

今年度、看護部は昨年の“笑顔”のある看護に「丁寧かつ効率的な看護」を加えたスローガンで活動してきました。今年もコロナに翻弄された1年でしたが、看護部一丸となって協力しあい、何とか乗り切ることができました。令和5年5月からは感染症法5類となりますが、これからも付き合っていく必要があります。

また、今年度は5回目の病院機能評価受審がありました。色々課題はありましたが、病院職員が職種を超え取り組めたと思います。残された課題にも、前向きに取り組むことで看護の質、病院の質の向上につながると思います。

学会や研修については、コロナ禍のメリットとしてオンラインが主流となり、各種研修もeラーニングを取り入れ、受講しやすくなりました。近畿地区国立病院看護学会においては、ハイブリッド形式も取り入れながら、3年ぶりに対面で開催されました。久しぶりに会った人たちと楽しそうに話す姿が印象的でした。他施設の人と直接交流したり、ポスターも実際に見ることで刺激を受けることができました。国立病院総合医学会も熊本で開催され、発表だけでなく直接意見交換したり、学会で遠方に行ける楽しみも思い出ことができました。

今年度の院外発表として、当院が担う看護「がん看護」「クリティカルケア」「HIV看護」「意思決定支援」「スタッフ教育」等の発表がありました。

院内では、今年度取り組んだ看護研究を音声吹き込み動画配信して発表しています。看護研究がもっと身近なものとなって広がることを期待したいです。これら院内発表分は次年度院外で発表できればと思います。

これからも様々な困難があると思いますが、与えられた環境に合わせた方法を考え実践していく人間の可能性を信じ、看護師も困難にめげず、看護の力を信じて、目の前の患者さんの支えとなっていける看護を実践していきたいと思えます。

【2022年度 研究業績発表】

B-6

坪倉美由紀：CREの感染対策に関する基本とビットフォール。第37回日本環境感染学会総会・学術集会、横浜、2022年6月27日

假屋真帆：当院での排尿ケアチーム介入患者のリハビリテーションと尿道カテーテル抜去の関連について。第29回日本排尿機能学会、札幌、2022年9月1日

埜 奈都子：婦人科がん術後患者ニーズを反映したリンパ浮腫予防に向けたケアについての考察。第64回近畿地区国立病院看護学会、大阪、2022年9月3日

林 加奈子：「SCU教育プログラム」導入についての研修。第64回近畿地区国立

病院看護学会、大阪、2022年9月3日

森 なつみ：母国への帰国にむけたストーマ管理の支援。第64回近畿地区国立病院看護学会、大阪、2022年9月3日

平 弥生：産褥2週目の褥婦が求める退院指導内容。第64回近畿地区国立病院看護学会、大阪、2022年9月3日

石橋広明：内視鏡室における看護師と医師との連携内容に関する検討～内視鏡室と病を兼任する当院の場合～。第64回近畿地区国立病院看護学会、大阪、2022年9月3日

大西淳子：ストーマ近接部難治性潰瘍により化学療法中断を余儀なくされた患者への心理的サポート。日本がんチーム医療研究会、大阪、2022年9月17日

糸田川美咲：よりよい意思決定支援にむけて。第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

森田美桜子：母乳育児希望の意識の強さとエジンバラ産後うつ病自己評価表の点数との関連性。第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

田口耕介：集中治療室に従事する看護師の脳死下臓器提供における選択肢提示についての現状調査。第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月8日

内山亜耶：ICUにおけるせん妄アセスメント（ICDSC）の状況調査と有用性についての検討。第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月8日

堀田亜州美：保存期CKD患者集団指導導入による患者教育の効果—血液データ・尿データなどの視点からの分析—。日本腎不全看護学会学術集会、WEB、2022年10月15日

米田奈津子：当院におけるHIV陽性者の大規模災害に対する備えの現状と課題の検討—災害への備えと避難行動について—。第36回日本エイズ学会学術集会、浜松、2022年11月19日

栄養管理部

内藤裕子

栄養管理室では、管理栄養士がチーム医療の一員として専門性を発揮すると共に、各科カンファレンスへの積極的な参加と管理栄養士の病棟担当制の推進によりメディカルスタッフとの連携強化を図り、入院患者の栄養状態維持改善、免疫力低下防止、治療効果及びQOL向上に向け継続的に努めている。

栄養食事指導では、個人指導と各種教室である集団指導を実施し、糖尿病や腎臓病、循環器疾患等の慢性疾患や術前術後等についても積極的に取り組み、臨床研究にも繋がっている。

食事提供では、術前術後の栄養管理、化学療法での食欲低下患者、摂食嚥下障害患者、食物アレルギー患者等への個々に対応した食事、摂食嚥下に配慮した食事の提供を行っている。

今年度の栄養管理室で行った主な取り組みについて下記に示す。

1. 栄養サポートチーム

平成 25 年 6 月より栄養サポートチームを嚥下障害・内科系疾患とがん・外科系疾患の 2 チーム体制により専門性に特化した細やかな対応を実施し、COVID-19 入院患者のすべてを NST 介入とし、栄養管理の観点から診療支援を継続して行った。管理栄養士の病棟担当制により、医師、看護師との連携やアセスメントの充実をはかると共に、スタッフ間の栄養管理についての理解も深まり、より重点的な活動を行うことができた。また、今年度より摂食嚥下チームが傘下に入り、週 1 回のカンファレンス及びラウンドにて摂食嚥下の評価を行った。年間依頼件数は 660 件(内、COVID-19 388 件)、年間算定件数は 974 件(内、COVID-19 36 件)であった。歯科医師連携加算は 251 件であった。また、摂食嚥下回復体制加算 2 は 89 件であった。

2. 栄養食事指導

術前術後患者、糖尿病教育入院、循環器疾患、腎臓病、摂食嚥下障害やサルコペニア等の栄養食事指導を積極的に実施している。平成 29 年 2 月からの栄養指導室増設により充実が図られた。指導病名別では、糖尿病、循環器疾患、腎臓病、がんが多くを占めている状況に大きな変化はなかった。COVID-19 感染対策を徹底し、外来の糖尿病教室・肝臓病教室・母親教室が再開となった。年間指導件数は、4,247 件であった。

3. 1 型糖尿病専門外来指導

1 型糖尿病患者を対象に、平成 25 年 7 月より食事や活動、インスリン量などについての外来栄養指導を開始、インスリンポンプ導入患者に対するカーボカウント、ポンプ機能等の説明、患者自身による食事に合わせたインスリン調整など内容的も充実したものとなっている。年間指導件数は、414 件であった。

4. 糖尿病透析予防指導管理料

平成 24 年度から新設され、現在糖尿病内科医師、専任看護師、専任管理栄養士のチームにより月 3 回実施、年間 25 件であった。

5. 特定集中治療室管理料 早期栄養介入管理加算

特定集中治療室において、早期離床・在宅復帰を推進する観点から、医師・看護師・薬剤師・理学療法士・専任管理栄養士等と共にチーム体制を整備し、令和 2 年 4 月より ICU・7 月より CCU の早期栄養介入管理を実施し、令和 3 年 7 月より救急救命センターICU、今年度 4 月より救急救命センターHCU・SCUへ拡大を行い、栄養管理の充実を図った。年間算定件数は 7,481 件となった。

6. 周術期栄養管理実施加算

今年度 7 月より、全身麻酔を実施した患者に対し周術期における術前・術後の適切な栄養管理を行い、周術期の栄養管理の充実を図った。年間算定件数は 1,556 件であった。

7. Nutrition Week

今年度もニュートリションウィークとして、栄養管理の最新・高度の知識・技術を修得させ、サービスの質と提供体制の均質化及び向上を図ることを目的に、日本病態栄養学会「NST 実習技能研修」を 8 月 29 日～9 月 2 日に開催した。当院と機構病院、民間病院より 20 名を受け入れた。

【2022 年度研究発表業績】

B-4

安井翔之介、浜川卓也、河部彩香、関舞、宮城正和、梅津匡宏、竹野淳、藪みなみ、荒川和子、和田紋佳、石田みどり、大土彩子、山本真弓、内川巖志、内藤裕子、石田永、平尾素宏：がん患者に対する NST 早期介入の意義に関する検討。第 30 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日

宮城正和、藪みなみ、荒川和子、和田紋佳、河部彩香、関舞、安井翔之介、石田みどり、大土彩子、山本真弓、内川巖志、内藤裕子、石田永、吉本仁：口腔がん術後経腸栄養における蛋白質投与量についての検討。第 30 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日

石田みどり、井上裕美子、藪みなみ、荒川和子、高松愛梨、山本純也、和田紋佳、河部彩香、山本真弓、宮城正和、内川巖志、内藤裕子、竹野淳、福山雅代、小椋紫芳、秦誠倫、加藤研：がん患者に対する先進糖尿病デバイスを用いた血糖コントロール支援～当院の多職種連携の取り組み～。第 31 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2023 年 3 月 4 日

ケアサポートチーム（緩和ケアチーム）

当院の緩和ケアチームは 2004 年に、院内のがん緩和ケアを目的として多業種からなる「がんサポートチーム」という名称で発足しました。当初はがん告知の補助やオピオイドの使用方法などの依頼がありましたが、がん医療従事者の緩和ケア研修会終了者の増加や疼痛緩和に対する認識が上昇してくるにつれ、チームが受けるコンサルテーションの内容も多岐で複雑になってきています。最近の緩和ケアはがんのみならず苦痛を伴う全ての患者を対象にするという趨勢になってきており、それに伴い当チームはがん以外の疾患も対応するため名称を「ケアサポートチーム」に改めました。また心不全など循環器疾患に対する緩和ケアが保険で認められるようになり、実際当院でも循環器疾患患者にも介入しています。チームでは他業種カンファレンスを毎週行い症例ごとの問題点を取り上げ、回診や診察を通じて改善策を検討し主治医や病棟看護師へと提案しています。病状の変化や新たな問題点に前線の実動メンバーは迅速に行動し対応策の構築に努めています。

月 1 回の運営会議では、介入件数や症例インシデントの解析、緩和に関連する学会、研究会、セミナーの開催計画について討論しています。

近年、がん患者における身体および精神の活動性低下を防止するための運動器管理の重要性が唱えられています。具体的には骨転移、臓器の障害など原疾患に由来するもの、治療に関連する諸症状、さらに老化に伴う非がん性変性疾患、これらを総合的に対応する必要性があります。当院ではすでに多くのがん入院患者において理学療法士を含むチームが介入し、適切な移動方法や機能維持と改善に努めています。これらは、維持的、緩和的がんリハビリテーションに該当するものですが、本年度よりがんの術前および回復期リハビリテーションを、各種臓器別にパスに組み入れより拡大したがんリハビリテーションシステムを構築していく予定にしています。

また当院はがん診療連携拠点病院として年 1 回、厚生労働省委託事業 PEACE プロジェクトの緩和ケア研修会を当チームが中心になって開催しています。昨年は一昨年と同様に新型コロナウイルス感染症の影響で院内の医師のみを対象として感染症対策のもとに無事終了することができました。ここ数年がん治療には従事していない診療科や若手の医師が多く受講し、緩和ケアの基本を習得できる良い機会となっています。

構成メンバー

医師：

田宮 裕子（室長、精神科科長）

相木 佐代（がん診療部副部長、緩和ケア内科）

前倉 俊也（緩和ケア内科）

久田原 郁夫（臨床腫瘍科特命科長）

看護師：

櫻井 真知子（外来副看護師長、がん看護専門看護師）

齊藤 明音（外来副看護師長、緩和ケア認定看護師）

薬剤師：

吉金 鮎美

田中 綾

MSW: 関根 知嘉子、長谷川 友美

栄養士： 宮城 正和 （副栄養管理室長）

心理士： 森田 眞子（公認心理士）、富田 朋子（公認心理士）

理学療法士： 山尾 なつみ

【実績】

2022年4月～2023年3月末日まで：

新規患者数 202 件（がん患者 188 名、非がん患者 14 名）

セミナー開催：法円坂緩和ケアセミナー、緩和ケアを取り入れた循環器疾患治療を考える会

研修会開催：厚生労働省委託事業 PEACE プロジェクト緩和ケア研修会

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Yamaguchi T, Matsunuma R, Matsuda Y, Tasaki J, Ikari T, Miwa S, Aiki S, Takagi Y, Kiuchi D, Suzuki K, Oyamada S, Ariyoshi K, Kihara K, Mori M : Systemic Opioids for Dyspnea in Cancer Patients: A Real-world Observational Study. 「J Pain Symptom Manage. 」、2023 年 1 月 11 日 Jan 11:S0885-3924(23)00004-0. doi: 10.1016/j.jpainsymman.2022.12.146. Online ahead of print.

Taniguchi Y, Matsuda Y, Mori M, Ito M, Ikari T, Tokoro A, Aiki S, Hoshino S, Kiuchi D, Suzuki K, Igarashi Y, Odagiri T, Oya K, Kubo E, Yamaguchi T. : Effectiveness and safety of opioids for dyspnea in patients with lung cancer: secondary analysis of multicenter prospective observational study. 「Transl Lung Cancer Res. 」11(12) : P2395-2402、2022 年 10 月

A-3

相木佐代、安部晴彦、吉村麻美、柿本由美子、交久瀬綾香、田中奈桜、西菌博章、河瀬安紗美、安井博規：心不全患者に対する退院前段階における多職種 Web カン

ファレンスの実施報告「Palliative Care Research」17(3) : P105-108、2022年

B-3

相木佐代：日本において、アドバンスケアプランニング(ACP)は、患者の利益になっているのか。第27回日本緩和医療学会学術大会、神戸、2022年7月2日

相木佐代、前倉俊也、櫻井真知子、清水彩加、山本友佳子、吉金鮎美、久田原郁夫：医療用麻薬に関するインシデント防止に向けての取り組み。第30回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022年9月17日

相木佐代、水谷緑：教育講演2 がん医療における心のケアに望むこと。第35回日本サイコオンコロジー学会総会、東京、2022年10月14日

B-4

Yoshinobu M, Hideaki H, Ryo M, Daisuke K, Tomoo I, Tetsuo H, Koya O, Kiyohiro S, Sayo A, Hiroko O, Hiromichi M, Shunsuke O, Keisuke A, Keiichi N, Akihiro T, Mikihiko F. : Factors correlated to dyspnea in patients with cancer. The 62st Annual Meeting of the Japanese Respiratory Society、京都、2022年4月22日

谷口善彦、松田能宣、森雅紀、伊藤まどか、猪狩智生、所昭宏、相木佐代、星野隼矢、木内大佑、山口崇：肺癌患者の呼吸困難に対するオピオイドの効果および副作用の検討。第63回日本肺癌学会学術集会、福岡、2022年12月2日

久田原郁夫、植松 稔:切除不能な高悪性度軟部肉腫の多発肺転移に対して体幹部定位照射をおこなった2例。第55回 日本整形外科学会・骨軟部学術集会、東京、2022年7月14-15日

B-6

前倉俊也、相木佐代、櫻井真知子、小河原光正：嘔声以外に転移性脳腫瘍がコミュニケーション障害に影響していたと考えられた肺癌の一例、第4回緩和医療学会関西支部会、大阪、2022年9月18日

久田原郁夫:UPS 歯突起転移に対する放射線治療中に骨折を起こした1例。第155回 関西骨軟部腫瘍研究会、Web、2022年3月5日

久田原郁夫、安田 直弘：上腕軟部肉腫再発に対する重粒子線治療後に再発を繰り返した症例。第157回 関西骨軟部腫瘍研究会、Web、2023年3月18日

B-8

相木佐代：心不全患者の終末期ケアと意思決定支援のポイント、東京、2022年11月5日

相木佐代：心不全患者の終末期ケアと意思決定支援のポイント、大阪、2022年11

月 12 日

相木佐代：がん患者の痛み・倦怠感・呼吸困難/鎮静の看護ケア、名古屋、2022 年 8 月 27 日

相木佐代：がん患者の痛み・倦怠感・呼吸困難/鎮静の看護ケア、大阪、2022 年 9 月 3 日

相木佐代：がん患者の痛み・倦怠感・呼吸困難/鎮静の看護ケア、東京、2022 年 9 月 11 日

相木佐代、岡本学：LGBTQ（セクシャルマイノリティー）のがん患者の ACP。大阪、2022 年 11 月 24 日

櫻井真知子：終末期看護の考え方。成人経過別看護、大阪医療センター附属看護学校、2022 年 11 月 18 日

櫻井真知子：終末期にある人の特徴と理解。成人経過別看護、大阪医療センター附属看護学校、2022 年 11 月 28 日

櫻井真知子：終末期にある人への看護援助。成人経過別看護、大阪医療センター附属看護学校、2022 年 12 月 26 日

櫻井真知子：看取りの看護。成人経過別看護、大阪医療センター附属看護学校、2023 年 1 月 16 日

櫻井真知子：緩和ケアにおける看護師の役割。特別講義、大阪医療センター附属看護学校、2023 年 3 月 10 日

B-9

相木佐代：FM 大阪『LOVE FLAP』、2022 年 11 月 17 日

臨床心理室

田宮裕子

平成 19 年 7 月より臨床心理室は、①病院の理念に基づく事業であること、②質の高い医療の提供に貢献すること、③疾患と心理状態の関連が研究されていること、④医療者 - 患者関係と保健行動との関連が医療の効果を左右すること、⑤診療科間のサービスの格差をなくすこと、以上 5 点の目的や理由により、全診療科の患者やその家族等に対応可能な臨床心理室として再編された。今年度は常勤心理療法士 6 名、非常勤心理療法士 1 名、エイズ予防財団リサーチレジデント 1 名、合計 8 名体制である。

現在臨床心理室は、臨床心理室運営委員会で審議した活動目標や計画をもとに、患者や家族等の心理相談、心理検査、各診療科・チームとのリエゾン・コンサルテーションといった心理臨床活動に加え、臨床心理室内のカンファレンス、臨床心理学専攻の大学院生の実習受け入れ、近畿グループ管内のメンタルヘルス相談、心理に関する研修の企画・運営・講義・講演、そして、研修を主に行っている。

当臨床心理室では従来日々の臨床に加えて、厚生労働行政推進調査事業費補助金による HIV 関連の研究班に分担研究者や協力者として参与し、HIV 陽性者の心理学的問題や、HIV 医療における心理臨床に関する研究を積み重ねている。また、各種セミナーや研修会において積極的に事例発表を行い、自己研鑽に務めている。調査研究や事例研究を心理臨床学会や日本エイズ学会などの学会において発表することにより、総合病院における臨床心理室の役割を他施設に伝え、医療の総合的な充実に資することも、当臨床心理室にとって重要な任務であると認識している。

【2022 年度 研究発表業績】

B-4

安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、冨田朋子、宮本哲雄、水木薫、牧寛子、渡邊大、白阪琢磨：コロナ禍における HIV 陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会総会、2022 年 11 月 18 日-20 日、静岡

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、冨田朋子、宮本哲雄、水木薫、牧寛子、渡邊大、白阪琢磨：AIDS 発症に影響する心理的要因に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会総会、2022 年 11 月 18 日-20 日、静岡

山田富秋、早坂典生、橋本謙、種田博之、入江恵子、小川良子、宮本哲雄：薬害 HIV 感染被害者のかかえる「生きづらさ」に折り合いをつける—当事者の語りから—。第 36 回日本エイズ学会学術集会総会、2022 年 11 月 18 日-20 日

B-8

冨田朋子：メンタルヘルス。新採用職員研修、大阪医療センター、大阪、2022年4月4日

森田眞子：メンタルヘルス～セルフケア・ストレスマネジメント～（講義・実習）。人事院近畿地区新採用職員研修、大阪、2022年4月7日

安尾利彦：HIV とカウンセリング。HIV 感染症研修会、大阪・Web、2022年10月4日

東政美、長谷部茂、岡本学、西川歩美：症例検討-多職種との連携-。HIV 感染症研修会、大阪・Web、2022年10月4日

森田眞子：HIV 陽性者の心理的支援、HIV 陽性者の看護③チーム医療：チーム診療の実際。HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月6日

森田眞子：HIV 感染症と心理支援。奈良県立医科大学4回生実習、大阪、2022年9月8日

森田眞子：新人看護師とメンタルヘルス。ラダー教育研修 ラダー I、大阪、2022年10月11日

冨田朋子：新人看護師とメンタルヘルス。ラダー教育研修 ラダー I、大阪、2022年10月11日

宮本哲雄：神経心理検査と事例検討。2022年度 HIV 感染症医師実地研修会1ヶ月コース、大阪、2022年10月19日

森田眞子：HIV 陽性者の心理的支援、HIV 陽性者の看護③チーム医療：チーム診療の実際。HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022年11月8日

安尾利彦：臨床心理士による HIV 陽性者とのかかわり。第6回関西 HIV・薬剤 Workshop、特定非営利法人薬と医療の啓発塾、大阪・Web、2022年11月26日

安尾利彦：HIV 陽性者に対する心理士の関わりの実際。医療従事者のための HIV 研修会、厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）、HIV 陽性者に対する精神・心理的支援のための身体科主治医と精神科専門職の連携体制構築に資する研究班、Web、2022年12月18日

宮本哲雄：HIV 感染症と物質依存、認知症。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2023年2月1日

森田眞子：服薬支援～カウンセラーの視点から。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2023年2月1日

森田真子:服薬支援ロールプレイ指導。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、
大阪、2023 年 2 月 1 日

安尾利彦:看護職に必要なレジリエンス。大阪医療センター附属看護学校特別講
義、大阪、2023 年 2 月 24 日

メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」

科長名または室長名（構成員）

三田英治副院長、田宮裕子精神科科長、松本弘美副看護部長、藤田貴子管理課長、井尻亜矢子職員研修部係長、岡本裕子保健師、富田朋子心理療法士

メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」は、当院の職員のメンタルヘルス、なかでも主に1次予防（メンタルヘルスに関する情報提供・教育研修・環境改善）と2次予防（メンタルヘルス不調の早期把握・早期対策）に関する企画、立案、評価、対策を行う組織横断的なチームである。

平成18年の厚生労働省からの「労働者の心の健康づくりのための指針」の改定に基づき、「事業者が自らの事業場におけるメンタルヘルスケアを積極的に推進すること」との指針に従い、平成23年4月からの院内での立ち上げの準備期間を経て、安全衛生委員会のもとで平成24年1月から本格的な活動を開始した。

チームの愛称である「なのはな」は、菜の花の花言葉「豊かな日々」「快活」に由来しており、「職員一人ひとりが心豊かに、生き活きと働くための職場づくりをサポートしたい」という願いが込められている。

「なのはな」がこれまでに取り組んできた主な活動は大きく分けて、1) 職員からの個別相談、2) チームの広報と情報提供、3) 教育研修、4) 危機介入、5) 健康診断時のセルフチェックの実施、6) 各部署訪問による労働環境改善の働きかけ、以上6つである。

- 1) 職員からの個別相談：相談窓口を設け、本人およびその上司や同僚からの相談について、精神科医1名と臨床心理士1名が対応している（精神科診療や心理療法の提供はせず、コンサルテーションのみとしている）。
- 2) チームの広報と情報提供：ネームプレートに入れることができる、相談窓口を記載したカードを作成した。また院内広報誌になのはな便りを掲載した。
- 3) 教育研修：新入職者オリエンテーション時の講義に加え、ラインケア研修、セルフケア研修を企画運営またはその協力をしている。
- 4) 危機介入：入院患者の自殺等の緊急事態が発生した際、現場に暴露された職員の個別面談、グループミーティングを行った。また発生部署の職員全員に対して、急性ストレス障害に関する情報提供を行った。
- 5) 健康診断時のセルフチェックの実施：平成27年度より義務化されたストレスチェック制度に先駆けて、問診票とともに仕事の疲労度セルフチェックを配布し、任意・匿名で回収し、希望者には書面で結果のフィードバックを行った。義務化によって導入された制度に移行した。
- 6) 各部署訪問による労働環境改善の働きかけ：了解が得られた部署に対して、職業性ストレス簡易調査票によるアンケートを実施し、その結果をもとにその職場の職員が主体的に改善点を検討・実施し、再度同じ調査票を用いて改善度を評価した。

3. 今年度の主な活動状況

- 1) 定例連絡会議：計 8 回（令和 4 年 4 月 18 日、5 月 16 日、6 月 20 日、7 月 11 日、10 月 17 日、11 月 21 日、2 月 20 日、3 月 20 日）
- 2) 研修会（企画運営および協力）：新規採用職員研修（令和 4 年 4 月 4 日）

【2022年度 研究発表業績】

B-8

富田朋子：メンタルヘルス。新採用職員研修、大阪医療センター、大阪、2022 年 4 月 4 日

富田朋子：新人看護師とメンタルヘルス。ラダー教育研修、大阪医療センター、大阪、2022 年 10 月 11 日

臨床工学室

1. 臨床工学室スタッフ紹介

吉龍 正雄

(医師、医療技術部部長、臨床工学室室長)

中村 貴行 (臨床工学技士長)

- ・体外循環技術認定士
- ・国立病院機構近畿ブロック専門職

四井田 英樹 (副臨床工学技士長)

- ・体外循環技術認定士
- ・呼吸療法認定士

宮川 幸恵 (主任臨床工学技士)

- ・体外循環技術認定士
- ・透析技術認定士
- ・日本体外循環技術医学会 総務・安全委員・情報委員
- ・大阪府臨床工学技士会 循環器部門委員

樋口 栄二 (院内主任臨床工学技士)

- ・呼吸療法認定士
- ・救急救命士

中崎 宏則 (院内主任臨床工学技士)

藤井 順也 (臨床工学技士)

- ・体外循環技術認定士
- ・不整脈治療専門臨床工学技士
- ・呼吸療法認定士
- ・ITE (Intervention Technical Expert)
- ・日本 DMAT 隊員
- ・大阪 DMAT 隊員
- ・臨床検査技師

守田 佳保留

- ・体外循環技術認定士

町屋敷 薫 (臨床工学技士)

- ・呼吸療法認定士

高橋 俊平 (臨床工学技士)

丸宮 和也 (臨床工学技士)

- ・腎代替療法専門指導士
- ・認定血液浄化関連臨床工学技士

伊藤 彩乃 (臨床工学技士)

皆川 文杜 (臨床工学技士)

2. 概要

臨床工学室は、生命維持管理装置の管理・操作を中心に業務を行うとともに、当直およびオンコール体制にて緊急業務に対しても 365 日 24 時間、柔軟に対応している。また、生命維持管理装置の動作点検を日々行い医療安全の向上に貢献している。

a. 手術室部門

心臓血管外科手術において人工心肺装置ならびに周辺機器の管理・操作業務を週 3 回の定期手術および緊急手術にて行っている。また循環器内科にて行われる CIEDs 植込み・交換術におけるプログラマー操作を担いその他の術中の医療機器トラブルにも対応している。ダヴィンチ Xi でのチームの一員として機器管理および操作・デバイス管理などを行っている。その他、手術室の ME 機器の選定や定数見直しなどに携わっている。

b. 循環部門

心臓カテーテル室におけるカテーテルインターベンションおよび心臓アブレーション業務に加え今年度より新たに始めた WATCHMAN、BAV 業務を行っている。CIEDs 領域においては循環器外来での外来患者、遠隔モニタリングでの CIEDs チェック、MRI や CT 対応を行っている。また、手術室・心臓カテーテル室・初療室・各種集中治療室における経皮的心肺補助装置 (PCPS) ・大動脈内バルーンポンピング (IABP) ・Impella の管理・操作業務を行っている。

c. 血液浄化部門

人工腎室では臨床工学技士 2-3 名を常駐し、入院患者を対象とした各種血液浄化装置の管理・操作業務および RO 装置 (逆浸透水製造装置) の水質管理を行っている。本年度よりタスクシフトにおける業務範囲追加に伴う厚生労働大臣認定研修を受け穿刺や抜針などこれまで医師が行っていた業務にも介入している。また、重症患者に対しては集中治療室にて、持続緩徐式血液透析濾過療法などの各種急性血液浄化療法の管理・操作を行っている。今年度より抹消血幹細胞移植を再開した。

d. ME 機器部門

中央管理室の医療機器における日常点検と物品管理、病棟での医療機器トラブル対応や医療機器の購入に関する助言と提言を行っている。また、一般病棟および集中治療室に貸し出された全ての人工呼吸器が正常に作動しているかを、毎日施行する巡回にて確認している。この巡回業務は機械的人工呼吸療法時の事故防止の観点から大きな成果を上げている。その他、RST の一員として人工呼吸器や呼吸ケアに関する支援、近年増加している人工呼吸器の医療事故を防ぐため人工呼吸器装着患者の搬送に立ち会うようにしている。

e. 教育・研修

生命維持管理装置 (人工呼吸器、補助循環など) の院内向け勉強会を定期的実施している。臨床工学室の教育体制としては、新人教育プログラムなどを設けるとともに、認定士資格取得に向けたスキルアップ教育も行っている。

3. 業務実績

手術室部門

人工心肺症例数：93 件

補助循環部門

PCPS 症例数：48 件

IABP 症例数：25 件

Impella 症例数：25 件

循環器部門

CIEDs 手術：125 件

CIEDs チェック：1438 件

CIEDs 遠隔モニタリング：1060 件

心臓アブレーション：270 件

心臓カテーテル検査：274 件

心臓カテーテル治療：297 件

血液浄化部門

血液透析（HD or HDF）：1950 件

持続的血液浄化（CHDF）：1501 件（延べ）

単純血漿交換（PE）：22 件

血漿吸着（PA）：2 件

腹水還元濾過療法（CART）：3 件

血液吸着（HA）：32 件

PBSCH：3

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Yoshida T, Matsuura K, Ahmed S.Mandour, Aboshi Y, Yamada S, Yotsuida H, Hasegawa M, Chieh-Jen Cheng, Yaginuma Y, Watanabe M: Surgical treatment for left atrial rupture due to myxomatous mitral valve disease in three dogs. 「veterinary Medicine and Science」2022,9,178、2022 年 8 月 28 日

B-3

四井田秀樹：A Nation-wide Questionnaire Survey on Myocardial Protection in Cardio-Aortic Surgery。第 75 回日本胸部外科学会定期学術集会、横浜、2022 年 10 月 8 日

四井田秀樹：心筋保護法の全国調査結果。第 47 回日本体外循環技術医学会大会、福岡、2022 年 11 月 20 日

森拓也、古越真耶、四井田秀樹、大橋美里、三木悠矢、三村貴大、田中翔、野尻麻衣、和田智樹、藤原彬、川元誠、武村亮祐：前尖 augmentation による僧帽弁形成術を行なった僧帽弁異形成の犬の 1 例。第 116 回日本獣医獣医循環器学会定例大会、東京、2022 年 6 月 26 日

古越真耶、川元誠、四井田秀樹、野尻麻衣、三村貴大、武村亮祐、池田正悟、福永恵太、福永めぐみ、森拓也：僧帽弁形成術後急性期に生じた心室中隔血腫の犬2例における術後経過と考察。第117回日本獣医獣医循環器学会定例大会、東京、2022年12月17日

森拓也、古越真耶、四井田秀樹、大橋美里、三木悠矢、田中翔、和田智樹、藤原彬、川元誠、三村貴大、野尻麻衣、武村亮祐、棚橋智彦、中村健介：小動物領域における不完全型房室中隔欠損症に対する外科的整復の術式の検討。第117回日本獣医獣医循環器学会定例大会、東京、2022年12月17日

B-5

藤井順也：後付け可能な医療ベッド用酸素ボンベホルダーの開発。第7回次世代医療システム産業化フォーラム、大阪、2022年12月15日

伊藤彩乃：心臓カテーテル検査中の急変時における ECPELLA 導入が奏功した症例。第2回全国国立病院機構臨床工学技士協議会近畿支部学術大会、大阪、2023年2月4日

四井田秀樹：心臓血管外科実施施設に対する心筋保護法の全国アンケート調査。第三回日本心筋保護研究会学術集会、東京、2022年9月11日

四井田秀樹：心筋保護を探求する。体外循環ステップアップセミナーThe final、北海道、2023年1月27日

高橋駿平：手術支援ロボット業務の立ち上げを経験して。第2回全国国立病院機構臨床工学技士協議会近畿支部学術大会、大阪、2023年2月4日

丸宮和也：膜分離式血漿交換と遠心分離式血漿交換を比較して。第76回国立病院総合医学会、熊本、2022年10月7日

院長室

松村泰志

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Nakatani, D; Dohi, T; Takeda, T; Okada, K; Sunaga, A; Oeun, Bolrathanak; Kida, H; Sotomi, Y; Sato, T; Kitamura, T; Suna, S; Mizuno, H; Hikoso, S; Matsumura, Y; Sakata, Y. : Relationships of Atrial Fibrillation at Diagnosis as well as Type of Atrial Fibrillation during Follow-up with Long-term Outcomes for Heart Failure with Preserved Ejection Fraction. Circ Rep. 2022 Apr 23;4(6):255-263.2022年6月10日

Nagoshi K, Watari T, Matsumura Y. : Prospects for Hospital Information Systems and Patient Safety in Japan. Healthc Inform Res. 2022 Apr;28(2):105-111. 2022年4月30日

Kikuchi M, Kobayashi K, Itoh S, Kasuga K, Miyashita A, Ikeuchi T, Yumoto E, Kosaka Y, Fushimi Y, Takeda T, Manabe S, Hattori S; Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative; Nakaya A, Kamijo K, Matsumura Y. : Identification of mild cognitive impairment subtypes predicting conversion to Alzheimer's disease using multimodal data. Comput Struct Biotechnol J. 22;20:5296-5308. 2022年8月

A-3

松村泰志 : 患者安全向上のための電子カルテへの期待とその実現のための道筋
「月刊新医療」50(2), P22-25、2023年2月

B-3

松村泰志 : 医療データの流通と利活用の時代に向けて～未来医療の姿と実現のための課題～。日本医療検査科学会第54回大会、神戸国際会議場、2022年10月8日

B-6

松村泰志 : 地域医療福祉情報連携における次なる課題とその実現のための青写真。地域医療福祉情報連携協議会総会・第15回シンポジウム、現地+Web配信、2022年12月9日

松村泰志 : 医療機関の診療録から個人を軸とする健康医療記録へ。第50回日本頭痛学会総会アフタヌーンセミナー、2022年11月26日

松村泰志 : 事務連絡「画像診断報告書等の確認不足に対する医療安全対策の取り組みについて」発出に向けた厚労科研研究班での検討内容について。医療安全全国フォーラム2022、Zoomウェビナー開催、2022年11月23日

松村泰志：医療現場におけるデジタル化推進への期待。医療現場デジタル化推進マッチングフォーラム、大阪、2022年10月24日

松村泰志：個人起点での医療ヘルスケアデータの利活用の課題と展望 SUNDRED。NTT西日本、Bioock パーソナルデータ分科会共催セミナー、現地+Web配信、2022年8月30日

松村泰志：医療機関のネットワークのニーズと情報セキュリティ対策の課題—病院管理者の立場から—。第1回医療機関のセキュリティセミナー、Zoom ウェビナー開催、2022年7月30日

松村泰志：デジタルヘルス活性化の取り組みでDXを進める。2022年度第2回 Health Outcomes & Technology Forum、2022年4月28日

B-9

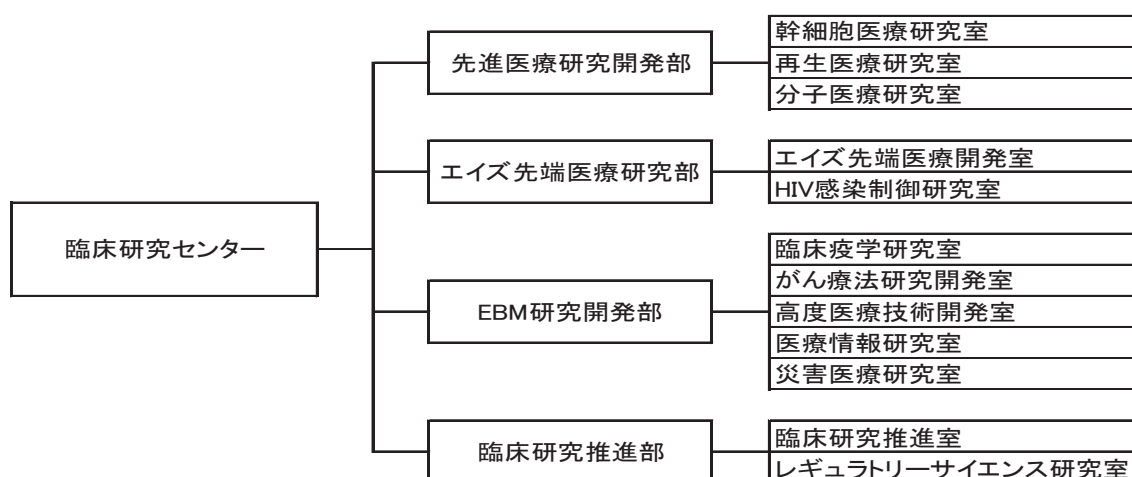
松村泰志：LOVE FLAP (DOCTOR'S FLAP) FM大阪、2022年7月7日

-臨床研究センター-

臨床研究センター

臨床研究センター長 白阪琢磨

当臨床研究センターは、前身の臨床研究部として昭和54年（1979年）4月に設置されて43年が経過し、平成20年（2008年）に現在の臨床研究センターとなって本年度で15年目を迎えた。国立病院機構では平成17年（2005年）度より新たな研究業績評価が開始されたが、当院は常に1-2位の座を獲得している。この業績評価は、治験、臨床研究プロトコール作成、特許の取得、競争的研究費の獲得、論文著書、国内外の学会発表などの総合力で分析される。日常臨床が多忙を極める中で、大阪医療センターの治験を含めた臨床研究への積極的な取り組みが評価されたものとする。当臨床研究センターは平成20年（2008年）度臨床研究部から臨床研究センターへランクアップされたのにもない、1部5室体制から2部9室体制へと改編され、従来病院内の組織であった治験管理部門を新たに臨床研究も含めた支援室、臨床研究推進室として研究センターの元におくこととなった。平成23年（2011年）度からは、新たに高度医療技術開発室、レギュラトリーサイエンス研究室を開設し、3部11室となった。これまでと同様、文部科研、厚労科研、AMEDの研究に従事する医師については、併任発令を行い、これに対応した。また、院内の多くの医師が臨床研究に携わっていること、本部からの研究助成金を研究業績に応じて一部分配することにより研究推進を図る目的で、平成18年（2006年）度より医長以上の併任、英文論文筆頭著者併任をおこなうこととした。平成25年（2013年）度DMAT西日本拠点に指定されたのに伴い、平成26年度から災害医療研究室を加え4部12室体制となった。令和4年（2022年）度の構成は以下のとおりである。



臨床研究センター長 白阪琢磨

臨床研究センターは以下の部門により構成される。

I 先進医療研究開発部

部長：金村米博（専任）

①幹細胞医療研究室

室長：正札智子（専任）

再生医療研究室と共同で、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）より、神経幹細胞（自己複製と、神経系細胞を供給する能力を持つ細胞）への分化誘導技術と、細胞品質評価法の開発をメインテーマとして研究を実施している。更に、分子医療研究室と共同で、脳腫瘍の分類と治療法の判断に必須となる遺伝子の解析（分子診断）を行うとともに、新規診断法や、ヒト iPS 細胞や由来細胞の腫瘍化に関するマーカー遺伝子の探索を実施している。

②再生医療研究室

室長：金村米博（兼任）

各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を実施している。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施している。

③分子医療研究室

室長：金村米博（兼任）

各種遺伝子検査を用いた悪性脳腫瘍、難治性脳形成障害症等の難治性神経疾患の分子診断技術の開発と、分子診断結果を用いた病態解析研究、および新規治療法開発を実施している。

II エイズ先端医療研究部

部長：白阪琢磨（兼任）

①エイズ先端医療開発室

室長：白阪琢磨（兼任）

大阪医療センターは薬害 HIV 裁判の和解に基づく恒久対策の一環として、平成 9 年にエイズ診療における近畿ブロックのブロック拠点病院に選定され、診療、研究、教育・研修、情報発信の機能が求められている。その中で、当研究室は、HIV 感染制御研究室および院内設置の感染症内科や HIV/AIDS 先端医療開発センターと連携し、HIV 感染症の診療におけるさまざまな問題に対して研究を行って

いる。

② HIV 感染制御研究室

室長：渡邊大（専任）

HIV 感染制御研究室では、HIV 感染症に対する臨床における諸問題に対する研究を行っている。近年では、殆どの症例でウイルス抑制が得られるようになったが、現在の抗 HIV 薬では潜伏感染細胞を駆逐できないが故に、ほぼ一生の薬物治療が必要となる。これまでに、多くの症例でウイルス抑制が得られるようになった（Jpn J Infect Dis. 2017）。その他、市中感染型 MRSA 感染（J Infect Chemother. 2020）、脳構造への影響（J Neurovirol. 2020）について研究報告を行い、厚生労働省エイズ対策政策研究事業を中心に、多施設共同研究を行っている。

Ⅲ EBM 研究開発部

部長：三田英治（併任）

① 臨床疫学研究室

室長：三田英治（併任）

臨床疫学研究室は主に難治性疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討している。

② がん療法研究開発室

室長：平尾素宏（併任）

最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しいがん治療法の開発を目的として、基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究を行っている。

③ 高度医療技術開発室

室長：松村泰志（併任）

本研究室では、情報処理や画像処理技術、AI 応用などの新技術を取り入れ、また、COVID-19 等の新しい医療ニーズに対応するために、これまでにない新しい医療技術開発の基盤を構築していく。

④ 医療情報研究室

室長：岡垣篤彦（併任）

医療情報研究室では、医療への IT 応用に関するソフト、ハードの両側面の研究を行っている。病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム 本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治

験・臨床研究や医療安全に関する システム的検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っている。早急に実用化することを求められている災害時の国内標準 電子カルテについて、あるいは FHIR、SS-MIX、SS-MIX2、MML、openEHR といった標準規格を通して異なる 電子カルテシステム間のスムーズな連携についても研究を行なっている。

⑤災害医療研究室

室長：大西光雄（併任）

当研究室の災害研究は“オールハザードアプローチ（あらゆる危機・障害に対して事業を継続し続ける）”の方策を研究している。特に化学物質が関連する災害に関して、世界安全保障イニシアティブ（Global Health Security Initiative : GHSI）における化学イベントワーキンググループ（Chemical Event Working Group : CEWG）の会議に参加しており、この WG で得た知見を活かし、日本における災害対応に取り組んでいきたい。

IV 臨床研究推進部

部長：白阪琢磨（併任）

①臨床研究推進室

室長：白阪琢磨（併任）

臨床研究事業は、従来から国立病院機構が果たすべき先駆的な政策医療の一分野である。当院では治験・臨床研究の円滑な運営・管理、支援を行うことを目的に、臨床研究センター4部12室の中に「臨床研究推進部」、「臨床研究推進室」を配置している。臨床研究推進室は“治験管理部門”と“臨床試験支援部門”の2つの部門から成るが、治験管理部門が、治験以外の臨床研究支援も含め専ら活動の中心となっている。

②レギュラトリーサイエンス研究室

室長：松村泰志（併任）

レギュラトリーサイエンスは、科学技術の成果を人と社会に役立てることを目的に、根拠に基づく的確な予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学とされている。当研究室は、レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成23年4月に設立された。

先進医療研究開発部

部長：金村米博（併任）

スタッフ：松田由香子

①幹細胞医療研究室

スタッフ：正札智子（室長）、福角勇人（室員）、山本篤世（流動研究員）

令和4年度の活動実績：

1. ヒト iPS 細胞由来神経系細胞を用いた再生医療、及び神経毒性評価系の構築を目的とした、細胞分化誘導法と品質評価法技術の改良

ヒト iPS 細胞を用いて、再生医療応用や神経毒性評価系の構築を目指し、使用目的に応じた、安全性と有効性が担保された神経系細胞への分化誘導技術と、分子生物学的な手法を用いた細胞品質評価法の探索を実施した。

2. 神経疾患細胞の変異解析と特性解析

神経疾患患者由来の細胞試料を用い、疾患を起因する原因遺伝子の変異解析と、細胞形質の特性を、分子生物学と細胞生物学的解析を進めている。更に、患者由来 iPS 細胞を用いた解析のため、神経科学的解析が可能な十分に成熟した神経細胞の誘導技術の開発を行った。

3. 脳腫瘍の分子診断精度の向上に寄与する解析技術の開発と、ヒト iPS 細胞を用いた再生医療の安全性に関わるマーカーの探索

分子医療研究室で実施している脳腫瘍組織の分子診断の向上を目指し、予後との関連が示唆されている遺伝子の解析を行った。また医療応用を目指す iPS 細胞由来神経細胞の腫瘍化リスクの指標となるマーカーの探索を実施した。

今後の活動方針：

AMED 事業等において、細胞品質評価業務を遂行する。また、再生医療事業で培われた細胞特性解析の知見を、創薬や神経疾患、及び脳腫瘍の各分野に活用して解析を進める。

②再生医療研究室

スタッフ：金村米博（室長）、隅田美穂（室員）、兼松大介（室員）、半田有佳子（流動研究員）、勝間亜沙子（流動研究員）、渡部耕治（流動研究員、Bi-AMPS 研究コーディネーター）、高田愛（診療情報管理士）

令和4年度の活動実績：

1. iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた再生医療開発

AMED「再生医療実現拠点ネットワークプログラム・疾患・組織別実用化研究拠点（拠点 A）」事業において、慶應義塾大学病院との共同研究として令和3年度に開始された HLA3 座ホモ iPS 細胞（京都大学 iPS 細胞研究所から分与）から作製した iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた亜急性期脊髄損傷の再生医療の臨床研究を継続実施した。また、同一規格の iPS 細胞由来神経前駆細胞を脳梗塞モデル動物に移植し、その有効性と in vivo 分化能を評価し、iPS 細胞由来神経前駆細胞

胞を用いた脳梗塞の再生医療の開発を実施した。

2. 2.5次元共培養系を用いたヒト神経細胞シナプス成熟法の開発

AMED「再生医療実現拠点ネットワークプログラム・疾患特異的 iPS 細胞の利活用促進・難病研究加速プログラム」において、ヒトグリア系細胞との共培養により、iPS 細胞由来神経前駆細胞から成熟シナプスを有するヒト神経細胞を分化誘導させるロバストな培養技術（2.5次元共培養系）開発を実施した。

今後の活動方針：

iPS 細胞由来神経前駆細胞を用いた脳梗塞の再生医療開発に関しては、その臨床応用実現に向けてさらに研究を加速させていく予定である。新たに開発に成功した 2.5次元共培養系に関しては、医薬品等の安全性評価試験への応用を目指し、更なる技術改良を実施していく計画である。

③分子医療研究室

スタッフ：金村米博（室長）、松山裕美（室員、遺伝カウンセラー）、吉岡絵麻（臨床検査技師）

令和4年度の活動実績：

悪性脳腫瘍の分子遺伝学的解析として、令和3年度に継続して、悪性グリオーマを対象として、関西地域を中心とした70以上の医療機関で構成される「関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク」を主宰し、脳腫瘍検体レジストリーを行い、WHO 脳腫瘍分類に基づく中央遺伝子診断の実施と、大規模症例を用いた悪性グリオーマの分子遺伝学的特性解析を実施した。また、小児悪性脳腫瘍の中で最も頻度の高い腫瘍の一つである髄芽腫に関して、「日本小児がん研究グループ（JCCG）」が実施する「小児固形腫瘍観察研究」と特定臨床研究「小児髄芽腫に対し新規リスク分類を導入したチオテパ／メルファラン大量化学療法併用放射線減量治療の有効性と安全性を検討する第II相試験」（jRCTs051200021）において、全国レベルで収集された髄芽腫標本の中央分子診断を実施した。

今後の活動方針：

悪性脳腫瘍の分子診断実施体制に関しては、今後も引き続き関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク並びに JCCG での活動を継続して実施していく予定である。また、関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークでの脳腫瘍検体レジストリーに関しては、その実施体制を更に充実させていきたいと考える。

エイズ先端医療研究開発部

部長：白阪琢磨（併任）

①エイズ先端医療研究開発室

スタッフ名：白阪琢磨（室長）、西田泰治

令和4年度の活動実績：

臨床研究では厚生労働科学研究費補助金等によるエイズ対策政策研究事業（令和4年度は「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」（研究代表者 白阪琢磨））などを実施し、臨床研究の主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療、メンタルヘルスや認知機能障害に関する研究と患者中心の医療の提供に関する研究に取り組んだ。教育・研修では院外ならびに院内を対象とし、看護部・医療相談室・臨床心理室等と共に職員研修部と協働で実施し、多くの参加者を得ることができた。これらの研究成果は学会あるいは論文として発表した。

今後の活動方針：

今後も、HIV/AIDS 先端医療開発センターの研究部門として HIV 感染症/AIDS に関する臨床研究、教育・研修、情報発信を進め、治癒を目指した治療に関する研究や高齢 HIV 陽性者に対する新たな課題に関する研究を推進して行きたい。

②HIV 感染制御研究室

スタッフ：渡邊大（室長）、上平朝子、安尾利彦

令和4年度の活動実績：

新規抗 HIV 薬が投与された透析症例の薬物血中濃度について、高速液体クロマトグラフィーを用いて測定を行い、薬物動態および透析除去率を明らかにした（J Infect Chemother. 2023）。

また、HIV 感染症治療薬の投与による臨床検査値の変化を規定する薬物トランスポーターの探索を行い、その遺伝子多型の影響について検討、解析を行なった。

今後の活動方針：

長期にわたる薬物治療の成功を見据えた、治療レジメンの個別化の実現をメインテーマとして、薬物治療が有効かつ安全に実施できるよう、Pharmacokinetics(PK)、Pharmacodynamics(PD)、Pharmacogenomics (PGx) および製剤学観点からアプローチしていく。

EBM 研究開発部

部長：三田英治（併任）

①臨床疫学研究室

スタッフ：三田英治（室長）、上田恭敬、岩谷博次、山上宏、永野恵子、阪森亮太郎、藤中俊之、渋谷博美、上尾光弘、東将浩、西村洋、大鳥安正、藤井順也、辻本豊、加藤研、天野栄三、青野博之、松田理、田宮裕子、吉龍正雄、木村良紀、榊原祐子、山本司郎、井上耕一、西宏之、井上敦夫、辻野千栄子、矢田弘史、安田直弘、尾崎友彦

令和4年度の活動実績：

インターフェロンフリー治療によってC型肝炎はHCV排除が期待できる時代になったが、残された少数の難治例に対する最適治療法を検討している。インターフェロンフリー治療は非代償性肝硬変にまで適応が拡大されたが、肝予備能が低下した症例に投薬するため、死亡例が出ている。より安全に治療できる条件とその有効性を検証している。同じく心機能低下や腎機能低下症例に対する治療法も検討している。HIV感染合併例でのインターフェロンフリー治療の成績もまとめ、論文化している。

次にB型肝炎では、核酸アナログの長期投与成績から導かれる耐性化の問題点を検討している。そしてラミブジン・アデホビル併用療法効果不良例に対し、アデホビルをTDFに切り替えることの有効性と安全性を明らかにした。現在はさらにTDFからTAFへの切り替えを検証している。近年散発的に発生しているB型急性肝炎ではgenotype Aが大半を占めるが、その特徴を解析し、慢性化への関与についても検討している。またHIV感染がB型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討している。

肝細胞癌に対する治療では肝動注化学療法に注目し、現在症例の蓄積中である。また分子標的薬と免疫チェックポイント阻害剤との併用も治療選択肢に入った。病状に応じた最適治療の方向性を示していけるよう検証すると同時に、特有の副反応についても検討を加えている。

今後の活動方針：

消化器疾患、循環器・腎臓疾患、脳神経疾患を始め、幅広い領域の病勢と疫学の相関を検証していく。特に遺伝的背景を有する疾患は興味ある領域である。また、新しい疾患概念、たとえばMASH（metabolic dysfunction-associated steatohepatitis）などは国立病院機構ネットワーク研究など多施設でのデータ収集と解析を行いたいと考える。また疫学データを基にして、疾患を「未病」の段階で予防するための知識啓発につとめるため、ショート動画コンテンツを作成することも企画している。

②がん療法研究開発室

スタッフ：平尾素宏（室長）、小河原光正、高見康二、加藤健志、久田原郁夫、巽啓司、吉龍澄子、小澤健太郎、西村健作、田中英一、眞能正幸、廣瀬由美子、森清、飛梅孝子、後藤邦仁、鹿野学、松本久宣、竹野淳、柴山浩彦、八十島宏行、吉本仁、土井貴司

令和4年度の活動実績：

がんが日本人の死因のトップとなって久しい。国立がん研究センターのがん情報サービスによれば、2019年の年間がん罹患数は99万人を超え、2021年のがんによる死亡者数は約38万人と報告されている。最近、がん免疫治療法が脚光を浴び、臨床の場において使用され、その評価が明らかになってきたが、すべてのがんに効果があるわけではなく、がんに対する有効な治療法の開発の重要性は依然変わっていない。

免疫治療を含め従来の多くのがん治療法の有効性は、症例ごと、施設ごとの経験から得られたものであり、複数施設における大規模な臨床試験による治療効果の検証が必須となっている。そのような状況において、現在、がん治療成績向上を目的として科学的根拠に基づいた効果的ながん治療法の開発が求められている。さらに、発がん、増殖、転移といったがん自体やそれに伴う病態に関わる遺伝子や蛋白、糖鎖といった数多くの分子の異常が報告され、これらの分子の特徴や機能が新しいがんの診断法や治療に応用され、個別化医療やオーダーメイド医療という語に代表されるような各個人のがんの種類や病態の特徴に応じた医療が進められつつある。実際、2019年よりがん遺伝子パネル検査が保険診療可能となった。

本研究室では、最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しいがん治療法の開発を目的として、基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究を行っている。

今後の活動方針：

今後も引き続き、多施設共同臨床研究や自主的臨床試験研究に参画し、がん診療の開発を目指していきたい。

③高度医療技術開発室

スタッフ：松村泰志（室長）、安部晴彦、上田麻里

令和4年度の活動実績：

令和4年度は、COVID-19 ワクチン関連劇症型心筋炎の報告（EHJ Case Reports 2022 doi:10.1093/ehjcr/ytac290.）を行うとともに、AMED 医工連携イノベーション推進事業で「人工知能による心不全患者胸部レントゲン画像診断支援」に関する提案を行い、企業と連動して医療技術開発を進める準備段階に入った。

今後の活動方針：

情報処理や画像処理技術、AI応用などの新技術を取り入れ、医療現場で技術的解決が求められるニーズを抽出し、こうしたニーズに対し技術的に解決させるた

めのアイデアをまとめ、企業等に提示する。

④医療情報研究室

スタッフ：岡垣篤彦（室長）、三木秀宣、宮本隆司

令和4年度の活動実績：

2022年は「RRSへの臨床現場への対応—病院情報システムを用いた診療補助の可能性—」というタイトルでワークショップを主宰した。今後も医療情報学会、災害情報学会などで発表を予定している。

今後の活動方針：

病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム 本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治験・臨床研究や医療安全に関する システム的検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っていく。引き続き以下の研究プロジェクトに参加する。国立病院機構の「電子カルテデータ標準化等のためのIT基盤構築事業」、および大阪大学が主導する「病院情報システムデータを利用した横断的研究基盤構築に関する研究」、「大阪がん診療実態調査」、「癌診療きんてん化のための臨床情報データベース構築と活用に関する研究」、「新型コロナウイルス感染症がリアルワールドのがん診療に及ぼした影響：癌登録を基礎とした調査」。

⑤災害医療研究室

スタッフ：大西光雄（室長）、島原由美子

令和4年度の活動実績：

今年度も昨年度に引き続き、COVID-19への対応をもとにした災害医療の研究を行った。感染症への対応における人的・物的・空間的な不足（需要と供給のアンバランス）がもたらす事態という意味においては“災害”と捉えることができる。しかし、一般的な自然災害とは違い、いつから災害と認識できるのか？、ライフラインは全く影響を受けていない、といった災害をイメージしにくい状況があることから、当院では事業継続計画（BCP）を軸にした対応をおこなってきた。この取り組みは当初よりユニークであり、学会発表では注目されたと言える。

また、他の災害医療における研究としては、高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（文部省科研19K10532）があるが、今年度はあまり進展させることができなかった。さまざまな高齢者施設、あるいは在宅医療を行う医療機関と連携し災害時に“災害時要配慮者”に分類される、これらの医療・介護の利用者をいかにしてアセスメントし、医療への負荷を軽減させ、生命を守るかといった課題に取り組んでいく。

臨床研究推進部

部長：白阪琢磨（併任）

①臨床研究推進室

スタッフ名：白阪琢磨（室長）、中塚真太、羽田かおる、仁谷めぐみ、小林恭子、松尾友香、柚本育世、奥村葵美、三井知子、千賀明日香、福岡利恵、名畑優保、池田佐知子、濱充代、阿久津さえ子、堀田千恵子、上崎頼子、朝比奈雅子、信谷宗平、松田里美

令和4年度の活動実績：

臨床研究推進室は、CRCおよび治験事務局・受託研究審査委員会（IRB）事務局を配置し、治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している。

当院のIRBは独立した2つのIRB（第1委員会・第2委員会）から構成されており、第1委員会は主に治験等受託研究を、第2委員会は「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が適応となる自主研究を審査している。令和4年度も新型コロナウイルス感染防止対策からWeb会議形式とした。審査件数では、第1委員会は月1回（計12回）開催し、新規課題36件、継続課題98件、迅速審査75件を含む1749件の審査を行った。第2委員会では本審査を12回、迅速審査を23回開催し、新規課題6件、継続課題275件、迅速審査87件を含む600件の審査を行った。

令和4年度の治験実績（受託研究費請求額）は、新規受託件数24件、総件数109件であり、研究請求金額総額は2億円を越え、国立病院機構施設では全国6位の成績であった。新規の治験受託件数を増やすため、治験依頼者やSMO（Site Management organization）と、平素より積極的にコミュニケーションをとり、獲得に向けて努力している。また令和3年度に、日本医師会治験促進センターの電磁化システムを用いて、治験に関連した文書の電磁化を図ったが、令和4年度に同センターが廃止となったことから、2月から後継システムへ移行した。さらに臨床研究においても、各種書類を電磁化できるよう取り組み、令和5年度には体制を整備する予定である。

自主研究の支援については、基本的に先進医療Bまたは国立病院機構EBM研究の治療介入のある研究を支援しているが、新型コロナワクチンコホート調査については、国策に係る重要な研究であることから当室でも支援を行った。また、臨床研究法や倫理指針に基づいた質の高い臨床研究の実施を進めるために、研究機関の長が行う点検（自己点検）を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。

その他、地域治験ネットワークの活動では大阪府内の16医療機関で形成する「治験ネットおおさか」に参加し、他医療機関との意見交換を行い、CRC養成研修での講師やファシリテーターを務めた。

学術的活動および教育・啓発については、学会等でも積極的に発表を行い、国立病院機構本部主催初級者CRC養成研修では講師を務めたほか、「臨床研究推進

室 News」(年3回)の発行、「治験セミナー」、「臨床研究セミナー」を開催し職員等への啓発も実施した。

今後の活動方針：

- ・ 当院版 ARO (Academic Research Organization) 機能を兼ね備えた臨床研究の支援体制を強化し、当院主導の多施設共同研究の支援が実施できる組織を構築する
- ・ 新規治験獲得に向け、未受託診療科の治験受託を1つでも多く増やす
- ・ 治験、臨床試験支援の質を保ちつつ、品質マネジメント、業務の効率化を進めていく。

②レギュラトリーサイエンス研究室

スタッフ：松村泰志(室長)、是恒之宏

令和4年度の活動実績：

令和4年度においては Real World Data のソースである電子カルテデータを活用した臨床研究のあり方についての検討を継続して行った。大阪大学との共同により進めている OCR-net の臨床研究基盤システムを充実させ、これを活用した多施設共同研究を実施した。また、Personal Health Record (PHR) のシステムの開発を進め、個人が施設をまたがって診療を受けている場合でも、個人に重要な診療データが構造化されて集積する仕組みについて研究開発を継続させた。これにより、長期の予後を追跡することが容易となる。これらのプロジェクトについて、各方面からの依頼を受けて講演を行った。

今後の活動方針：

研究を推進する上で必要な臨床データ収集を診療現場に負担をかけずに適切に行う方法について研究開発し、当院で予定しているバイオバンク事業等で利用することを旨とする。また、PHR の基盤となるシステムの助言及び設計を行い、PHR の実用化を目指し、PHR を活用した長期フォローアップの臨床研究の実現を目指す。また、当院も PHR に参加するよう準備を行う。

【2022年度 研究発表業績】

A-2

白阪琢磨：抗 HIV 薬。治療薬ハンドブック 2023、P.450-475、株式会社じほう(2023年1月)

種田灯子、光井絵理、河本佐季、西村英里香、山口大旗、是近彩香、岸由衣加、秦 誠倫、山本裕一、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤 研：抗 HIV 療法開始後に1型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関与が疑われた3症例「糖尿病」66(1): P.18-25、日本糖尿病学会、2023年1月30日

A-4

白阪琢磨：ガイドライン改訂の Points “DHHS ガイドライン改訂のポイント” 「HIV 感染症と AIDS の治療」 13(1)：P.11-15、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

白阪琢磨、矢倉裕輝、今橋真弓：Q&A 形式 Case Study “ART 開始、もしくは変更後に体重増加を認め、さらに INSTI 服薬における不眠を認める症例について、ART を継続するうえで注意すべき点、対処法はなにか” 「HIV 感染症と AIDS の治療」 13(1)：P32-38、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

松下修三、白阪琢磨、立川夏夫、Cal Cohen：座談会 “LTTS を見据えた HIV 診療の現状と課題” 「HIV 感染症と AIDS の治療」 13(1)：P.52-61、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

白阪琢磨：HIV 感染症患者に対する医療体制の現状と展望「公衆衛生」87(1)：P.32-41、医学書院、2023 年 1 月

満屋裕明、白阪琢磨、岡 慎一、南 留美、生島 嗣：座談会 HIV 診療の過去・現在・未来-医学はどう戦ったか、教訓とされた課題「医学のあゆみ」284(9)：P.628-639、医歯薬出版、2023 年 3 月

白阪琢磨：HIV 感染症の治療の原則とその進展「医学のあゆみ」284(9)：P.648-656、医歯薬出版、2023 年 3 月

A-5

白阪琢磨：エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和 4 年度研究報告書、P.4-8、2023 年 3 月 31 日

白阪琢磨、山崎厚司：高校生世代に向けた予防啓発の実践と教材開発の検討。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和 4 年度研究報告書、P.56-57、2023 年 3 月 31 日

白阪琢磨：HIV 感染症への対応等に関するアンケート調査。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和 4 年度研究報告書、P.58-63、2023 年 3 月 31 日

白阪琢磨：エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究。公益財団法人友愛福祉財団委託事業「エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究」令和 4 年度報告書、2023 年 3 月 31 日

B-3

白阪琢磨：HIV 感染症：治療の手引き「What's New」。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 20 日

B-4

白阪琢磨、川戸美由紀、橋本修二、三重野牧子、天野景裕、大金美和、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、八橋 弘、岡 慎一：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 1 報 健康状態と生活状況の概要。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

川戸美由紀、三重野牧子、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 2 報 悪性新生物、循環器疾患、その他の疾患。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

三重野牧子、川戸美由紀、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績 第 3 報 健康意識とこころの状態。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

渡邊 大、大菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、瀧永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、杉浦 互：2021 年度の国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

照屋勝治、横幕能行、南 留美、遠藤知之、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、岡 慎一：実臨床でのビクテグラビル/エムトリシタピン/テノホビルアラフェミナド(B/F/TAF)の有効性、安全性及び忍容性の評価:BICSTaR Japan の 12 ヶ月解析結果(2 回目)。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

四本美保子、木内 英、渡邊秀裕、渡邊 大、白阪琢磨：早期治療開始が必要な HIV 感染症患者に対する抗 HIV 療法開始までの期間。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：コロナ禍における HIV 陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年

11月18日

矢倉裕輝、藤原綾乃、櫛田宏幸、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大、白阪琢磨：HPLC法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピピリンの同時定量に関する検討。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、冨田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：AIDS発症に影響する心理的要因に関する研究。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

米田奈津子、渚るみ子、中瀆智子、東 政美、佐井木梨花、大楠裕子、白阪琢磨、渡邊 大：当院に通院するHIV陽性者の大規模災害に対する備えの現状と課題の検討－災害への備えと避難行動について－。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

B-6

佐倉彩佳音、矢倉裕輝、藤原綾乃、松本絵梨奈、駒野 淳、渡邊 大、白阪琢磨：日本人HIV-1感染症患者におけるビクテグラビル投与に伴う、代謝酵素及び腎尿細管トランスポーターの遺伝子多型と臨床検査値の変化との関連性。第35回近畿エイズ研究会学術集会、奈良、2022年6月4日

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV感染者におけるヒトヘルペスウイルス8型関連バイオマーカーに関する検討。第35回近畿エイズ研究会学術集会、奈良、2022年6月4日

平賀紀行、白阪琢磨、四本美保子、川津友佳、原岡正志、小野誠之：エイズ予防指針の提唱する医療体制下で現在認められている臨床的課題についての検討。第74回日本泌尿器科学会総会、北九州、2022年11月4日

B-7

白阪琢磨：HIV治療薬の変遷から考える積極的な切り替えの意義。ViiV HIV Webinar2022、WEB開催、2022年4月7日

白阪琢磨：ARTガイドラインをどう読むか～患者ニーズを加味したART選択。HIVインターネット講演会、WEB開催、2022年4月19日

白阪琢磨：HIV感染症治療 最新の知見。HIV UP-TO-DATE Webinar、WEB開催、2022年8月19日

白阪琢磨：将来を見据えた薬剤選択の意義。ViiV HIV Webinar 2022、WEB開催、2022年11月8日

B-8

白阪琢磨：政策医療「HIV/AIDS医療の現状と当院の役割」。令和4年度新規採用

職員研修、大阪、2022年4月5日

白阪琢磨：医学の進歩がどう感染症を克服してきたかーHIV感染症を例に挙げて。大阪大学医学部講義「医学序説」、大阪、2022年6月3日

白阪琢磨：症例検討：HIV陽性者を診る。大阪大学医学部講義「臨床医学持論」、大阪、2022年7月12日

白阪琢磨：HIV陽性者の人権課題ーHIV、AIDS等の現状と課題。大阪府人権総合講座（前期）人権問題科目、大阪、2022年8月31日

白阪琢磨：HIV/エイズの基礎知識～医療と最新の治療について。大阪府令和4年度HIV/エイズ基礎研修、WEB配信、2022年9月2日

白阪琢磨：HIV感染症の疫学。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月9日

白阪琢磨：疫学と抗HIV治療ガイドライン。令和4年度HIV感染症研修会、大阪、2022年10月3日

白阪琢磨：HIV講義。大阪大学4年次臨床導入実習講義、大阪、2022年12月2日

白阪琢磨：HIV/AIDS総論・感染対策。令和4年度医療従事者のためのHIV研修会、大阪、2022年12月18日

白阪琢磨：HIV感染症で期待される病診連携と新たな課題。令和4年度HIV地域医療連携研修会、大阪、2023年1月23日（大阪府医師会）

白阪琢磨：地域におけるHIV陽性者支援のためのHIV/エイズの基礎知識。大阪府高齢者支援に関わる介護サービス事業者等向けHIV/エイズ研修会、WEB配信、2023年3月10日

白阪琢磨：HIV/エイズ予防と治療に関する最新情報と今後の検査機関に期待するもの。スマートらいふネットスタッフ研修会、大阪、2023年3月11日

B-9

白阪琢磨：HIV/エイズについての基礎講座。厚生労働省主催「レッドリボンライブ2022～みんながエイズを話に来た！～」、WEB配信、2022年12月28日

【概要】

幹細胞医療研究室では、再生医療研究室と共同で、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）より、神経幹細胞（自己複製と、神経系細胞を供給する能力を持つ細胞）への分化誘導技術と、細胞品質評価法の開発をメインテーマとして研究を行っています。その成果は、脊髄損傷や脳梗塞患者への移植治療を視野に入れた再生医療や、ハイスループットの神経毒性評価試験に使用する細胞の提供に役立っています。また神経疾患の発症メカニズムの解明にも有用な細胞技術です。更に、分子医療研究室と共同で、脳腫瘍の分類と治療法の判断に必須となる遺伝子の解析（分子診断）を行うとともに、新規診断法や、ヒト iPS 細胞や由来細胞の腫瘍化に関与するマーカー遺伝子の探索を実施しています。

【研究テーマ】

1. ヒト iPS 細胞由来神経系細胞を用いた再生医療、及び神経毒性評価系の構築を目的とした、細胞分化誘導法と品質評価法技術の改良

ヒト iPS 細胞を用いて、再生医療応用や神経毒性評価系の構築を目指し、使用目的に応じた、安全性と有効性が担保された神経系細胞への分化誘導技術と、分子生物学的な手法を用いた細胞品質評価法の探索を行っています。

2. 神経疾患細胞の変異解析と特性解析

神経疾患患者由来の細胞試料を用い、疾患を起因する原因遺伝子の変異解析と、細胞形質の特性を、分子生物学と細胞生物学的解析を進めています。更に、患者由来 iPS 細胞を用いた解析のため、神経科学的解析が可能な十分に成熟した神経細胞の誘導技術の開発を行っています。

3. 脳腫瘍の分子診断精度の向上に寄与する解析技術の開発と、ヒト iPS 細胞を用いた再生医療の安全性に関わるマーカーの探索

分子医療研究室で実施している脳腫瘍組織の分子診断の向上を目指し、予後との関連が示唆されている遺伝子の解析を行っています。また医療応用を目指す iPS 細胞由来神経細胞の腫瘍化リスクの指標となるマーカーの探索を実施しています。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Takeuchi H, Takahashi Y, Tanigawa S, Okamoto T, Kodama Y, Shishido-Hara Y, Yoshioka E, Shofuda T, Kanemura Y, Konishi E, Hashimoto N: Genetic Alteration May Proceed with a Histological Change in Glioblastoma: A Report from Initially Diagnosed as Nontumor Lesion Cases. 「NMC Case Rep J」 9:199-208、2022年7月

Umehara T, Arita H, Miya F, Achiha T, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Nakagawa T,

Kinoshita M, Kagawa N, Fujimoto Y, Hashimoto N, Kiyokawa H, Morii E, Tsunoda T, Kanemura Y, Kishima H: Revisiting the definition of glioma recurrence based on a phylogenetic investigation of primary and re-emerging tumor samples: a case report. 「Brain Tumor Pathol」 39(4):218-224、2022年10月

B-3

金村米博、正札智子、吉岡絵麻、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：脳腫瘍の中央分子診断体制の構築. 第40回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022年5月27日

福岡講平、栗原 淳、正札智子、佐々木惇、西川 亮、伊達 勲、永根基雄、康 勝好、市村幸一、金村米博：低線量全脳脊髄照射での治療歴のある髄芽腫における予後分子マーカーの探索. 第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月4日

川内 豪、荒川芳輝、勝間亜沙子、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、竹内康英、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、宮本 享、金村米博：WHO2021 中枢神経系腫瘍分類に則った当院における膠芽腫の分子遺伝学的特徴. 第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月5日

森 鑑二、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、隅田美穂、勝間亜沙子、眞能正幸、児玉良典、金村米博：グリオーマ分子診断の可能性と課題. 第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月5日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：正中部位とその近傍におけるH3 K27M 変異グリオーマの臨床学的特徴. 第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月5日

中戸川裕一、川路博史、林 宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midlineglioma の臨床的特徴について. 第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月5日

B-4

川内 豪、荒川芳輝、竹内康英、正札智子、吉岡絵麻、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、宮本 享：BRAV600E 変異を有する神経膠腫の臨床・組織像の解析. 一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web 配信、2022年9月28日～11月30日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークにおける Diffuse midline glioma の臨床学的特徴. 一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

中戸川裕一、川路博史、林宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midlineglioma の臨床的特徴について。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 28 日

Fukuoka K, Kurihara J, Shofuda T, Sasaki A, Nishikawa R, Date I, Nagane M, Koh K, Ichimura K, Kanemura Y: 低線量全脳脊髄照射にて治療を行った高リスク Group3/4 髄芽腫における予後バイオマーカーの探索。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022 年 11 月 27 日

勝間亜沙子、兼松大介、正札智子、稲垣直之、金村米博：Elucidation of the invasion mechanism of human-derived glioma cells via L1CAM. 日本生理学会第 100 回記念大会、京都市、2023 年 3 月 16 日

再生医療研究室

室長 金村米博

【概要】

再生医療研究室では、各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を行なっています。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤安全性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 治療用ヒト細胞培養プロセスの開発

治療に使用する各種ヒト細胞を培養・加工するヒト細胞培養専用施設（セルプロセッシングセンター）の管理・運用を担当し、セルプロセッシングセンター内でのヒト細胞培養プロトコールの開発を行っています。また、細菌・真菌検査や遺伝子検査などを組み込んだ治療用ヒト細胞の品質検査法の開発などを行なっています。

2. 医療用ヒト幹細胞の品質管理技術の開発

再生医療に使用する細胞として、組織幹細胞であるヒト神経幹細胞および間葉系幹細胞さらにヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞などを主な研究対象として、細胞増殖能、染色体構造、細胞表面マーカー発現様式、細胞分化能等を詳細に解析してこれら細胞の生物学的特性を明らかにし、医療応用するための細胞の品質管理に必要な項目の策定とその検査方法の開発を行っています。

3. ヒト幹細胞を応用した薬剤安全性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索

ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞、ヒト iPS 細胞由来神経細胞を主に使用して、各種薬剤の薬効および毒性評価を実施するためのハイスループットスクリーニングシステムの開発を行っています。また、ヒト神経前駆細胞やグリオーマ幹細胞を標的とする新規治療薬候補化合物の探索を実施しています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Okamoto N, Miya F, Tsunoda T, Kanemura Y, Saitoh S, Kato M, Yanagi K, Kaname T, Kosaki K: Four pedigrees with aminoacyl-tRNA synthetase abnormalities. 「Neurol Sci」 43(4):2765-2774、2022 年 4 月

Yamamoto T, Sato Y, Yasuda S, Shikamura M, Tamura T, Takenaka C, Takasu N,

Nomura M, Dohi H, Takahashi M, Mandai M, Kanemura Y, Nakamura M, Okano H, Kawamata S: Correlation Between Genetic Abnormalities in Induced Pluripotent Stem Cell-Derivatives and Abnormal Tissue Formation in Tumorigenicity Tests. 「Stem Cells Transl Med」 11(5):527-538、2022 年 5 月

Ozaki T, Fujinaka T, Kidani T, Nishimoto K, Yamazaki H, Sawada H, Taki K, Kanemura Y, Nakajima S: Coil Embolization of Unruptured Cerebral Aneurysms Using Stents in Small Arteries Less Than 2 mm in Diameter. 「Neurosurgery」 90(5):538-546、2022 年 5 月

Yamazaki H, Fujinaka T, Ozaki T, Kidani T, Nishimoto K, Taki K, Nishizawa N, Murakami K, Kanemura Y, Nakajima S: Staged treatment for ruptured wide-neck intracranial aneurysm with intentional partial coiling in the acute phase followed by definitive treatment. 「Surg Neurol Int」 13:322、2022 年 7 月

Takeuchi H, Takahashi Y, Tanigawa S, Okamoto T, Kodama Y, Shishido-Hara Y, Yoshioka E, Shofuda T, Kanemura Y, Konishi E, Hashimoto N: Genetic Alteration May Proceed with a Histological Change in Glioblastoma: A Report from Initially Diagnosed as Nontumor Lesion Cases. 「NMC Case Rep J」 9:199-208、2022 年 7 月

Okada M, Kawagoe Y, Takasugi T, Nozumi M, Ito Y, Fukusumi H, Kanemura Y, Fujii Y, Igarashi M: JNK1-Dependent Phosphorylation of GAP-43 Serine 142 is a Novel Molecular Marker for Axonal Growth. 「Neurochem Res」 47(9):2668-2682、2022 年 9 月

Umehara T, Arita H, Miya F, Achiha T, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Nakagawa T, Kinoshita M, Kagawa N, Fujimoto Y, Hashimoto N, Kiyokawa H, Morii E, Tsunoda T, Kanemura Y, Kishima H: Revisiting the definition of glioma recurrence based on a phylogenetic investigation of primary and re-emerging tumor samples: a case report. 「Brain Tumor Pathol」 39(4):218-224、2022 年 10 月

Sanada T, Yamamoto S, Sakai M, Umehara T, Sato H, Saito M, Mitsui N, Hiroshima S, Anei R, Kanemura Y, Tanino M, Nakanishi K, Kishima H, Kinoshita M: Correlation of T1- to T2-weighted signal intensity ratio with T1- and T2-relaxation time and IDH mutation status in glioma. 「Sci Rep」 12(1):18801、2022 年 11 月

Nakagawa T, Kijima N, Hasegawa K, Ikeda S, Yaga M, Wibowo T, Tachi T, Kuroda H, Hirayama R, Okita Y, Kinoshita M, Kagawa N, Kanemura Y, Hosen N, Kishima H: Identification of glioblastoma-specific antigens expressed in patient-derived tumor cells as candidate targets for chimeric antigen receptor T cell therapy. 「Neurooncol Adv」 5(1):vdac177、2022 年 11 月

Nakamura Y, Inoue A, Nishikawa M, Ohnishi T, Yano H, Kanemura Y, Ohtsuka Y, Ozaki

S, Kusakabe K, Suehiro S, Yamashita D, Shigekawa S, Watanabe H, Kitazawa R, Tanaka J, Kunieda T: Quantitative measurement of peritumoral concentrations of glutamate, N-acetyl aspartate, and lactate on magnetic resonance spectroscopy predicts glioblastoma-related refractory epilepsy.「Acta Neurochir (Wien)」164(12):3253-3266、2022 年 12 月

A-4

金村米博：小児脳腫瘍の分子診断「病理と臨床」41(2):170-176、2023 年 2 月 1 日

B-3

金村米博：脳腫瘍の分子遺伝学：分子診断の現状と今後の課題。第 111 回日本病理学会総会、神戸市、2022 年 4 月 15 日

金村米博、正札智子、吉岡絵麻、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：脳腫瘍の中央分子診断体制の構築。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 27 日

園田順彦、松田憲一郎、金村米博、菊地善彰：TERT プロモーター変異のある膠芽腫は FLAIRectomy の適応である。第 22 回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022 年 7 月 22 日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、斉藤仁十、三井宣幸、広島覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像 /T2 強調画像比 (rT1/T2) による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。第 22 回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022 年 7 月 22 日

木嶋教行、中川智義、長谷川加奈、黒田秀樹、館 哲郎、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、保仙直毅、貴島晴彦：患者由来初代培養株を用いた膠芽腫の新規免疫治療の開発。第 22 回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022 年 7 月 22 日

岡田正康、金子奈穂子、玉田篤史、棗田 学、大石 誠、河崎洋志、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：リン酸化プロテオミクスを駆使したヒト神経成長マーカーの検討。第 22 回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022 年 7 月 23 日

尾崎友彦、木谷知樹、中島 伸、金村米博、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次郎、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：細径母血管をもつ未破裂動脈瘤に対するステントアシストコイル塞栓術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 28 日

金村米博、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：小児脳腫瘍の中央分子診断の現状

と展望。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

館 哲郎、木嶋教行、中川智義、黒田秀樹、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、保仙直毅、貴島晴彦：膠芽腫に対する患者由来腫瘍細胞を用いた CAR-T 療法の開発。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

山崎夏維、前林勝也、副島俊典、加藤実穂、瀧本哲也、市村幸一、金村米博、信澤純人、平戸純子、義岡孝子、荒川芳輝、山本哲哉、坂本博昭、隈部俊宏、西川 亮、原 純一：JCCG 中央診断に基づいた小児脳腫瘍の前向き臨床研究。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

金村米博：小児脳腫瘍における基礎・トランスレーショナル研究の現状と展望。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、オンラインライブ配信、2022 年 11 月 27 日

福岡講平、栗原 淳、正札智子、佐々木惇、西川 亮、伊達 勲、永根基雄、康 勝好、市村幸一、金村米博：低線量全脳脊髄照射での治療歴のある髄芽腫における予後分子マーカーの探索。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

川内 豪、荒川芳輝、勝間亜沙子、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、竹内康英、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、宮本 享、金村米博：WHO2021 中枢神経系腫瘍分類に則った当院における膠芽腫の分子遺伝子学的特徴。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

森 鑑二、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、隅田美穂、勝間亜沙子、眞能正幸、児玉良典、金村米博：グリオーマ分子診断の可能性と課題。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：正中部とその近傍における H3 K27M 変異グリオーマの臨床学的特徴。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

中戸川裕一、川路博史、林 宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midlineglioma の臨床的特徴について。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

B-4

里見介史、藤本健二、有田英之、山崎夏維、松下裕子、中村大志、宮北康二、梅原 徹、小林啓一、田村 郁、田中將太、樋口芙未、沖田典子、金村米博、深井順

也、阪本大輔、宇田武弘、前原健寿、永根基雄、西川 亮、鈴木博義、澁谷 誠、小森隆司、成田善孝、市村幸一：IDH 野生型びまん性星細胞腫は存在するか？。第 111 回日本病理学会総会、神戸市、2022 年 4 月 15 日

金村米博：小児脳腫瘍の分子分類。第 42 回日本脳神経外科コンgres 総会、大阪市、2022 年 5 月 13 日

福岡講平、中澤温子、市村香代子、金村米博、市村幸一、平戸純子、義岡孝子、大宅宗一、栗原 淳、康 勝好：特徴的な分子遺伝学的異常を認めた Large cell/Anaplastic Medulloblastoma の 2 症例。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 28 日

石毛良実、水戸部祐太、松田憲一朗、浦野由佳、大江倫太郎、二口 充、鈴木修平、吉岡孝志、金村米博、園田順彦：ミスマッチ修復遺伝子異常により発生した膠芽腫に対しペムブロリズマブの投与を行い奏功が得られた一例。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 28 日

深井順也、三笠友理奈、岩元竜太、中井康雄、佐々木貴浩、横矢美穂、金村米博、村田晋一、中尾直之：てんかん発症した小児側頭葉腫瘍の一例。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 28 日

岡田正康、河寄麻実、金子奈穂子、野住素広、山崎博幸、福角勇人、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：齧歯類とヒトの成長軸索における複数の JNK 依存的 GAP-43 リン酸化サイトの同定。NEURO2022、沖縄県宜野湾市、2022 年 7 月 1 日

館 哲郎、木嶋教行、阿知波孝宗、中川智義、黒田秀樹、香川尚己、沖田典子、平山龍一、金村米博、貴島晴彦：グリオブラストーマの浸潤における ALCAM の機能的役割についての検討。第 22 回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022 年 7 月 22 日

岡田正康、金子奈穂子、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：JNK 制御リン酸化 GAP-43 はヒトの神経成長を同定できる。第 47 回日本医用マスペクトル学会年会、オンライン、2022 年 9 月 10 日

西澤尚起、尾崎友彦、井筒伸之、木谷知樹、中島 伸、金村米博、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：くも膜下出血後水頭症に対するシャント手術におけるシャント閉塞の危険因子の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

山本祥太、真田隆広、酒井美緒、有澤亜津子、下瀬川恵久、中西克之、金村米博、香川尚己、貴島晴彦、木下 学：T1/T2ratio を用いた膠芽腫における T2high 非造影病変の推定。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、

2022年9月28日～11月30日

村上慶次郎、木谷知樹、尾崎友彦、井筒伸之、中島伸、金村米博、瀧 毅伊、川本早希、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：脳膿瘍の手術術式と再発・転帰に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

松田憲一郎、大江倫太郎、二口 充、鹿戸将史、金村米博、園田順彦：膠芽腫における FLAIR 高信号域の変化と予後の関連。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

武内勇人、高橋義信、谷川成佑、岡本貴成、金村米博、橋本直哉：初回病理所見では診断が確定できなかった molecularGBM の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

川内 豪、荒川芳輝、竹内康英、正札智子、吉岡絵麻、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、宮本 享：BRAFV600E 変異を有する神経膠腫の臨床・組織像の解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、Web配信、2022年9月28日～11月30日

中川智義、香川尚己、平山龍一、黒田秀樹、館 哲郎、木嶋教行、沖田典子、金村米博、市村幸一、貴島晴彦：当院における小児期悪性神経膠腫の病理診断と発生母地、予後に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

五十嵐晃平、水戸部祐太、松田憲一郎、金村米博、園田順彦：膠芽腫患者の日常生活能力に関する因子についての解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークにおける Diffuse midline glioma の臨床学的特徴。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

中戸川裕一、川路博史、林宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midline glioma の臨床的特徴について。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、齊藤仁十、三井宣幸、広島覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像/T2 強調画像比 (rT1/T2) による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。一般社団

法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月29日
木谷知樹、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、瀧 毅伊、川本早希、井筒伸之、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外傷性中硬膜動脈損傷のリスクファクターと経過に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月30日

川野晴香、羽柴哲夫、内藤信晶、李 強、宮田真友子、小森裕美子、李 一、亀井孝昌、武田純一、吉村晋一、天神博志、金村米博、埜中正博、浅井昭雄：膠芽腫における重複癌の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月30日

瀧 毅伊、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療による造影剤脳症のリスク因子および予防策についての検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月30日

Fukuoka K, Kurihara J, Shofuda T, Sasaki A, Nishikawa R, Date I, Nagane M, Koh K, Ichimura K, Kanemura Y: 低線量全脳脊髄照射にて治療を行った高リスク Group3/4 髄芽腫における予後バイオマーカーの探索。第64回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022年11月27日

Irikura T, Fukuoka K, Kanemura Y, Hirato J, Yoshioka T, Tanami Y, Kurihara J, Oysa S, Nakazawa A, Koh K: 腫瘍内に不均一な MYC 増幅が認められ、不良な転帰をたどった Group3 髄芽腫の1例。第64回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022年11月27日

瀧 毅伊、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、川本早希、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療後の造影剤脳症発生リスク因子についての検討。第38回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022年11月10日

木谷知樹、藤見洋佑、小林弘治、村上慶次朗、西澤尚起、瀧 毅伊、川本早希、井筒伸之、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：ONYX を用いた外傷性中硬膜動脈偽性動脈瘤に対する塞栓術の有用性。第38回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022年11月10～12日

井筒伸之、西澤尚起、中島 伸、金村米博、尾崎友彦、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：下位脳神経麻痺をきたした頸部内頸動脈解離性動脈瘤に対するフローダイバーター留置により症状が改善した1例。第38回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022年11月10～12日

村上慶次朗、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、西

澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、井筒伸之、藤中俊之：内頸動脈終末部大型動脈瘤に対し同側前大脳動脈起始部閉塞を併用したフローダイバーターステント留置術を行った1例。第38回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022年11月10～12日

藤見洋佑、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤中俊之：フローダイバーターステントを用いて治療した真菌性症候性脳動脈瘤の一例。第38回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022年11月10～12日

小林弘治、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、藤見洋佑、藤中俊之：フローダイバーターステント治療不応の内頸動脈瘤に対して後交通動脈経路のコイル塞栓術による追加治療を試みた2例の検討。第38回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022年11月10～12日

館 哲郎、木嶋教行、宇津木玲奈、黒田秀樹、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、貴島晴彦：グリオブラストーマの浸潤におけるALCAMの機能的役割についての検討。第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月4日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、斉藤仁十、三井宣幸、広島覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1強調画像/T2強調画像比(rT1/T2)による神経膠腫のIDH遺伝子変異予測。第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月4日

松田憲一朗、大江倫太郎、二口 充、鹿戸将史、金村米博、園田順彦：膠芽腫におけるFLAIR高信号域の変化と予後の関連。第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月4日

武内勇人、高橋義信、谷川成佑、岡本貴成、金村米博、橋本直哉：分子遺伝学的所見が組織学的な腫瘍性変化に先行して膠芽腫の特徴を呈した病態の解析。第40回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022年12月5日

勝間亜沙子、兼松大介、正札智子、稲垣直之、金村米博：Elucidation of the invasion mechanism of human-derived glioma cells via L1CAM.。日本生理学会第100回記念大会、京都市、2023年3月16日

B-8

金村米博：遺伝子診断。小児神経外科教育セミナー2022、Web開催（オンデマンド配信）、2022年6月9日～7月3日

金村米博：WHO2021脳腫瘍分類の概要と分子診断実施におけるポイント。第36回多摩脳腫瘍研究会、オンライン、2022年10月29日

分子医療研究室

室長 金村米博

【概要】

分子医療研究室では各種遺伝子検査を用いた悪性脳腫瘍、難治性脳形成障害症等の難治性神経疾患の分子診断技術の開発と、分子診断結果を用いた病態解析研究、および新規治療法開発を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 悪性脳腫瘍の分子遺伝学的解析

悪性グリオーマを対象として、関西地域を中心とした70以上の医療機関で構成される「関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク」を主宰し、脳腫瘍検体レジストリーを行い、WHO分類に基づく中央遺伝子診断の実施と、大規模症例を用いた悪性グリオーマの分子遺伝学的特性解析を実施しています。また、小児悪性脳腫瘍の中で最も頻度の高い腫瘍の一つである髄芽腫に関して、「日本小児がん研究グループ (JCCG)」に参加し、全国レベルで収集された髄芽腫標本の中央分子診断を実施しています。

2. 難治性脳形成障害症の分子遺伝学的解析

L1CAM変異で発症するX連鎖性遺伝性水頭症を中心に、各種難治性脳形成障害症患者の臨床情報、画像情報、患者由来生体試料(組織・細胞・DNA)を収集し、次世代シーケンサーを駆使した遺伝子解析研究を実施すると同時に、患者由来試料から分離した線維芽細胞、神経幹細胞、間葉系細胞(臍帯由来)、血液細胞の特性解析を行い、並行してそれら細胞から疾患iPS細胞の樹立を実施し、その特性解析を実施しています。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Okamoto N, Miya F, Tsunoda T, Kanemura Y, Saitoh S, Kato M, Yanagi K, Kaname T, Kosaki K: Four pedigrees with aminoacyl-tRNA synthetase abnormalities. 「Neurol Sci」 43(4):2765-2774、2022年4月

Yamamoto T, Sato Y, Yasuda S, Shikamura M, Tamura T, Takenaka C, Takasu N, Nomura M, Dohi H, Takahashi M, Mandai M, Kanemura Y, Nakamura M, Okano H, Kawamata S: Correlation Between Genetic Abnormalities in Induced Pluripotent Stem Cell-Derivatives and Abnormal Tissue Formation in Tumorigenicity Tests. 「Stem Cells Transl Med」 11(5):527-538、2022年5月

Ozaki T, Fujinaka T, Kidani T, Nishimoto K, Yamazaki H, Sawada H, Taki K, Kanemura Y, Nakajima S: Coil Embolization of Unruptured Cerebral Aneurysms Using Stents in

Small Arteries Less Than 2 mm in Diameter. 「Neurosurgery」 90(5):538-546、2022 年 5 月

Yamazaki H, Fujinaka T, Ozaki T, Kidani T, Nishimoto K, Taki K, Nishizawa N, Murakami K, Kanemura Y, Nakajima S: Staged treatment for ruptured wide-neck intracranial aneurysm with intentional partial coiling in the acute phase followed by definitive treatment. 「Surg Neurol Int」 13:322、2022 年 7 月

Takeuchi H, Takahashi Y, Tanigawa S, Okamoto T, Kodama Y, Shishido-Hara Y, Yoshioka E, Shofuda T, Kanemura Y, Konishi E, Hashimoto N: Genetic Alteration May Proceed with a Histological Change in Glioblastoma: A Report from Initially Diagnosed as Nontumor Lesion Cases. 「NMC Case Rep J」 9:199-208、2022 年 7 月

Okada M, Kawagoe Y, Takasugi T, Nozumi M, Ito Y, Fukusumi H, Kanemura Y, Fujii Y, Igarashi M: JNK1-Dependent Phosphorylation of GAP-43 Serine 142 is a Novel Molecular Marker for Axonal Growth. 「Neurochem Res」 47(9):2668-2682、2022 年 9 月

Umehara T, Arita H, Miya F, Achiha T, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Nakagawa T, Kinoshita M, Kagawa N, Fujimoto Y, Hashimoto N, Kiyokawa H, Morii E, Tsunoda T, Kanemura Y, Kishima H: Revisiting the definition of glioma recurrence based on a phylogenetic investigation of primary and re-emerging tumor samples: a case report. 「Brain Tumor Pathol」 39(4):218-224、2022 年 10 月

Sanada T, Yamamoto S, Sakai M, Umehara T, Sato H, Saito M, Mitsui N, Hiroshima S, Anei R, Kanemura Y, Tanino M, Nakanishi K, Kishima H, Kinoshita M: Correlation of T1- to T2-weighted signal intensity ratio with T1- and T2-relaxation time and IDH mutation status in glioma. 「Sci Rep」 12(1):18801、2022 年 11 月

Nakagawa T, Kijima N, Hasegawa K, Ikeda S, Yaga M, Wibowo T, Tachi T, Kuroda H, Hirayama R, Okita Y, Kinoshita M, Kagawa N, Kanemura Y, Hosen N, Kishima H: Identification of glioblastoma-specific antigens expressed in patient-derived tumor cells as candidate targets for chimeric antigen receptor T cell therapy. 「Neurooncol Adv」 5(1):vdac177、2022 年 11 月

Nakamura Y, Inoue A, Nishikawa M, Ohnishi T, Yano H, Kanemura Y, Ohtsuka Y, Ozaki S, Kusakabe K, Suehiro S, Yamashita D, Shigekawa S, Watanabe H, Kitazawa R, Tanaka J, Kunieda T: Quantitative measurement of peritumoral concentrations of glutamate, N-acetyl aspartate, and lactate on magnetic resonance spectroscopy predicts glioblastoma-related refractory epilepsy. 「Acta Neurochir (Wien)」 164(12):3253-3266、2022 年 12 月

A-4

金村米博：小児脳腫瘍の分子診断「病理と臨床」41(2):170-176、2023年2月1日

B-3

金村米博：脳腫瘍の分子遺伝学：分子診断の現状と今後の課題。第111回日本病理学会総会、神戸市、2022年4月15日

金村米博、正札智子、吉岡絵麻、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：脳腫瘍の中央分子診断体制の構築。第40回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022年5月27日

園田順彦、松田憲一朗、金村米博、菊地善彰：TERT プロモーター変異のある膠芽腫は FLAIRectomy の適応である。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、斉藤仁十、三井宣幸、広島 寛、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像 / T2 強調画像比 (rT1/T2) による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

木嶋教行、中川智義、長谷川加奈、黒田秀樹、館 哲郎、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、保仙直毅、貴島晴彦：患者由来初代培養株を用いた膠芽腫の新規免疫治療の開発。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月22日

岡田正康、金子奈穂子、玉田篤史、棗田 学、大石 誠、河崎洋志、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：リン酸化プロテオミクスを駆使したヒト神経成長マーカーの検討。第22回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022年7月23日

尾崎友彦、木谷知樹、中島 伸、金村米博、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：細径母血管をもつ未破裂脳動脈瘤に対するステントアシストコイル塞栓術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月28日

金村米博、市村幸一、中野嘉子、平戸純子、佐々木惇、義岡孝子、山崎夏維、原 純一、隈部俊宏、伊達 勲、永根基雄、西川 亮：小児脳腫瘍の中央分子診断の現状と展望。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月30日

館 哲郎、木嶋教行、中川智義、黒田秀樹、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、保仙直毅、貴島晴彦：膠芽腫に対する患者由来腫瘍細胞を用いた CAR-T 療法の開発。一般社団法人日本脳神経外科学会第81回学術総会、横浜市、2022年9月30日

山崎夏維、前林勝也、副島俊典、加藤実穂、瀧本哲也、市村幸一、金村米博、信澤純人、平戸純子、義岡孝子、荒川芳輝、山本哲哉、坂本博昭、隈部俊宏、西川 亮、原 純一：JCCG 中央診断に基づいた小児脳腫瘍の前向き臨床研究。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

金村米博：小児脳腫瘍における基礎・トランスレーショナル研究の現状と展望。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、オンラインライブ配信、2022 年 11 月 27 日

福岡講平、栗原 淳、正札智子、佐々木惇、西川 亮、伊達 勲、永根基雄、康 勝好、市村幸一、金村米博：低線量全脳脊髄照射での治療歴のある髄芽腫における予後分子マーカーの探索。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

川内 豪、荒川芳輝、勝間亜沙子、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、竹内康英、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、宮本 享、金村米博：WHO2021 中枢神経系腫瘍分類に則った当院における膠芽腫の分子遺伝学的特徴。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

森 鑑二、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、隅田美穂、勝間亜沙子、眞能正幸、児玉良典、金村米博：グリオーマ分子診断の可能性と課題。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：正中脳とその近傍における H3 K27M 変異グリオーマの臨床学的特徴。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

中戸川裕一、川路博史、林 宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midlineglioma の臨床的特徴について。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

B-4

里見介史、藤本健二、有田英之、山崎夏維、松下裕子、中村大志、宮北康二、梅原 徹、小林啓一、田村 郁、田中將太、樋口芙未、沖田典子、金村米博、深井順也、阪本大輔、宇田武弘、前原健寿、永根基雄、西川 亮、鈴木博義、澁谷 誠、小森隆司、成田善孝、市村幸一：IDH 野生型びまん性星細胞腫は存在するか？。第 111 回日本病理学会総会、神戸市、2022 年 4 月 15 日

金村米博：小児脳腫瘍の分子分類。第 42 回日本脳神経外科コンgres総会、大阪市、2022 年 5 月 13 日

福岡講平、中澤温子、市村香代子、金村米博、市村幸一、平戸純子、義岡孝子、大宅宗一、栗原 淳、康 勝好：特徴的な分子遺伝学的異常を認めた Large cell/Anaplastic Medulloblastoma の 2 症例。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 28 日

石毛良実、水戸部祐太、松田憲一朗、浦野由佳、大江倫太郎、二口 充、鈴木修平、吉岡孝志、金村米博、園田順彦：ミスマッチ修復遺伝子異常により発生した膠芽腫に対しペムブロリズマブの投与を行い奏功が得られた一例。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 28 日

深井順也、三笠友理奈、岩元竜太、中井康雄、佐々木貴浩、横矢美穂、金村米博、村田晋一、中尾直之：てんかん発症した小児側頭葉腫瘍の一例。第 40 回日本脳腫瘍病理学会、埼玉県川越市、2022 年 5 月 28 日

岡田正康、河寄麻実、金子奈穂子、野住素広、山崎博幸、福角勇人、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：齧歯類とヒトの成長軸索における複数の JNK 依存的 GAP-43 リン酸化サイトの同定。NEURO2022、沖縄県宜野湾市、2022 年 7 月 1 日

館 哲郎、木嶋教行、阿知波孝宗、中川智義、黒田秀樹、香川尚己、沖田典子、平山龍一、金村米博、貴島晴彦：グリオブラストーマの浸潤における ALCAM の機能的役割についての検討。第 22 回日本分子脳神経外科学会、金沢市、2022 年 7 月 22 日

岡田正康、金子奈穂子、金村米博、澤本和延、藤井幸彦、五十嵐道弘：JNK 制御リン酸化 GAP-43 はヒトの神経成長を同定できる。第 47 回日本医用マスペクトル学会年会、オンライン、2022 年 9 月 10 日

西澤尚起、尾崎友彦、井筒伸之、木谷知樹、中島 伸、金村米博、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：くも膜下出血後水頭症に対するシャント手術におけるシャント閉塞の危険因子の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

山本祥太、真田隆広、酒井美緒、有澤亜津子、下瀬川恵久、中西克之、金村米博、香川尚己、貴島晴彦、木下 学：T1/T2ratio を用いた膠芽腫における T2high 非造影病変の推定。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

村上慶次朗、木谷知樹、尾崎友彦、井筒伸之、中島 伸、金村米博、瀧 毅伊、川本早希、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：脳膿瘍の手術術式と再発・転帰に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

松田憲一朗、大江倫太郎、二口 充、鹿戸将史、金村米博、園田順彦：膠芽腫における FLAIR 高信号域の変化と予後の関連。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

武内勇人、高橋義信、谷川成佑、岡本貴成、金村米博、橋本直哉：初回病理所見では診断が確定できなかった molecularGBM の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

川内 豪、荒川芳輝、竹内康英、正札智子、吉岡絵麻、牧野恭秀、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、宮本 享：BRAFV600E 変異を有する神経膠腫の臨床・組織像の解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、Web 配信、2022 年 9 月 28 日～11 月 30 日

中川智義、香川尚己、平山龍一、黒田秀樹、館 哲郎、木嶋教行、沖田典子、金村米博、市村幸一、貴島晴彦：当院における小児期悪性神経膠腫の病理診断と発生母地、予後に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 28 日

五十嵐晃平、水戸部祐太、松田憲一朗、金村米博、園田順彦：膠芽腫患者の日常生活能力に關与する因子についての解析。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 28 日

林 宣秀、深井順也、中戸川裕一、川路博史、沖田典子、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、中尾直之、森 鑑二、金村米博：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワークにおける Diffuse midline glioma の臨床学的特徴。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 28 日

中戸川裕一、川路博史、林宣秀、深井順也、木嶋教行、正札智子、吉岡絵麻、兼松大介、勝間亜沙子、隅田美穂、稲永親憲、森 鑑二、金村米博：H3F3A 遺伝子の変異をもつ non-midline glioma の臨床的特徴について。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 28 日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、齊藤仁十、三井宣幸、広島 寛、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像/T2 強調画像比 (rT1/T2) による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 29 日

木谷知樹、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、瀧 毅伊、川本早希、井筒伸之、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外傷性中硬膜動脈損傷のリスクファクターと経過に関する検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

川野晴香、羽柴哲夫、内藤信晶、李 強、宮田真友子、小森裕美子、李 一、亀井孝昌、武田純一、吉村晋一、天神博志、金村米博、埜中正博、浅井昭雄：膠芽腫における重複癌の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

瀧 毅伊、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療による造影剤脳症のリスク因子および予防策についての検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 81 回学術総会、横浜市、2022 年 9 月 30 日

Fukuoka K, Kurihara J, Shofuda T, Sasaki A, Nishikawa R, Date I, Nagane M, Koh K, Ichimura K, Kanemura Y：低線量全脳脊髄照射にて治療を行った高リスク Group3/4 髓芽腫における予後バイオマーカーの探索。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022 年 11 月 27 日

Irikura T, Fukuoka K, Kanemura Y, Hirato J, Yoshioka T, Tanami Y, Kurihara J, Oysa S, Nakazawa A, Koh K：腫瘍内に不均一な MYC 増幅が認められ、不良な転帰をたどった Group3 髓芽腫の 1 例。第 64 回日本小児血液・がん学会学術集会、東京都港区、2022 年 11 月 27 日

瀧 毅伊、尾崎友彦、小林弘治、藤見洋佑、西澤尚起、村上慶次朗、川本早希、井筒伸之、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療後の造影剤脳症発生リスク因子についての検討。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10 日

木谷知樹、藤見洋佑、小林弘治、村上慶次朗、西澤尚起、瀧 毅伊、川本早希、井筒伸之、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：ONYX を用いた外傷性中硬膜動脈偽性動脈瘤に対する塞栓術の有用性。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

井筒伸之、西澤尚起、中島 伸、金村米博、尾崎友彦、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、村上慶次朗、小林弘治、藤見洋佑、藤中俊之：下位脳神経麻痺をきたした頸部内頸動脈解離性動脈瘤に対するフローダイバーター留置により症状が改善した 1 例。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

村上慶次朗、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、小林弘治、藤見洋佑、井筒伸之、藤中俊之：内頸動脈終末部大型動脈瘤に対し同側前大脳動脈起始部閉塞を併用したフローダイバーター留置術を行った 1 例。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

藤見洋佑、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊

伊、西澤尚起、村上慶次朗、小林弘治、藤中俊之：フローダイバーターステントを用いて治療した真菌性症候性脳動脈瘤の一例。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

小林弘治、尾崎友彦、中島 伸、金村米博、木谷知樹、井筒伸之、川本早希、瀧 毅伊、西澤尚起、村上慶次朗、藤見洋佑、藤中俊之：フローダイバーターステント治療不応の内頸動脈瘤に対して後交通動脈経由のコイル塞栓術による追加治療を試みた 2 例の検討。第 38 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術集会、大阪市北区、2022 年 11 月 10～12 日

館 哲郎、木嶋教行、宇津木玲奈、黒田秀樹、平山龍一、沖田典子、香川尚己、金村米博、貴島晴彦：グリオブラストーマの浸潤における ALCAM の機能的役割についての検討。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

真田隆広、山本祥太、酒井美緒、梅原 徹、佐藤広崇、斉藤仁十、三井宣幸、広島覚、安栄良悟、金村米博、谷野美智枝、中西克之、貴島晴彦、木下 学：T1 強調画像/T2 強調画像比(rT1/T2)による神経膠腫の IDH 遺伝子変異予測。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

松田憲一朗、大江倫太郎、二口 充、鹿戸将史、金村米博、園田順彦：膠芽腫における FLAIR 高信号域の変化と予後の関連。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 4 日

武内勇人、高橋義信、谷川成佑、岡本貴成、金村米博、橋本直哉：分子遺伝学的所見が組織学的な腫瘍性変化に先行して膠芽腫の特徴を呈した病態の解析。第 40 回日本脳腫瘍学会学術集会、鴨川市、2022 年 12 月 5 日

勝間亜沙子、兼松大介、正札智子、稲垣直之、金村米博：Elucidation of the invasion mechanism of human-derived glioma cells via L1CAM.。日本生理学会第 100 回記念大会、京都市、2023 年 3 月 16 日

B-8

金村米博：遺伝子診断。小児神経外科教育セミナー2022、Web 開催（オンデマンド配信）、2022 年 6 月 9 日～7 月 3 日

金村米博：WHO2021 脳腫瘍分類の概要と分子診断実施におけるポイント。第 36 回多摩脳腫瘍研究会、オンライン、2022 年 10 月 29 日

エイズ先端医療研究部（エイズ先端医療開発室）

白阪琢磨

エイズ先端医療研究部はエイズ先端医療開発室と HIV 感染制御研究室から構成されている。

当院は薬害 HIV 裁判の和解に基づく恒久対策の一環として、平成 9 年にエイズ診療における近畿ブロックのブロック拠点病院に選定され、診療（全科対応体制）、臨床研究、教育・研修、情報発信の 4 機能を担っている。院内設置の HIV/AIDS 先端医療開発センターが関連部署と緊密な連携を取り任務を遂行している。HIV 感染症の専門的診療は感染症内科が担い、他の機能はエイズ先端医療研究部がコーディネートしている。臨床研究では厚生労働科学研究費補助金等によるエイズ対策政策研究事業（令和 4 年度は「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」（研究代表者 白阪琢磨）、指定研究「HIV 感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究」（研究代表者 渡邊大）指定研究「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」（研究分担者 渡邊大、矢倉裕輝）などを実施し、臨床研究の主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療に関する研究と患者中心の医療の提供に関する研究に取り組んでいる。血液製剤による感染者の多くは加齢に伴う長期療養が重大な課題となっており、厚生労働行政推進調査事業費補助金によるエイズ対策政策研究事業「非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者に合併する腫瘍への包括的対策に関する研究」班の研究分担（渡邊大）を担当し研究協力も行っている。重複感染の肝移植に対しては厚生労働行政推進調査事業費補助金によるエイズ対策政策研究事業指定研究班（江口班（研究分担者 上平朝子））の研究分担を担当している。教育・研修では院外向けと共に、院内での研修については、看護部、医療相談室、臨床心理室等と共に職員研究部と協働で実施し、多くの参加者を得ている。これらの研究成果は学会あるいは論文として発表した。情報発信については当院のホームページ内に HIV/AIDS 先端医療開発センター（<https://osaka.hosp.go.jp/department/khac/>）を設け、厚労科研の成果の一部や HIV 感染症/AIDS に関する情報（<https://osaka-hiv.jp/index.htm>, <https://hiv-ppr.jp/index.htm>）を発信しており、ホームページは 1999 年に開設以来アクセス数は約 81 万件と、多くの方の利用を得ている。

平成 25 年 4 月には大阪大学大学院医学系研究科の連携大学院（エイズ先端医療学）が併設され、平成 26 年度から 1 名の大学院生を受け入れた。

今後も、HIV/AIDS 先端医療開発センターの研究部門として HIV 感染症/AIDS に関する臨床研究、教育・研修、情報発信を進め、急性感染期の HIV 感染症の診断と治療などの新たな課題に関する研究を推進して行きたい。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Yoshihara Y, Kato T, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T : Altered white matter microstructure and neurocognitive function

of HIV-infected patients with low nadir CD4. 「J Neurovirol.」 28(3): P.355-366, 2022 年 7 月

Kushida H, Watanabe D, Yagura H, Nakauchi T, Hirota K, Ueji T, Nishida Y, Uehira T, Yoshino M, Shirasaka T : Evaluation of plasma doravirine concentrations in patients with HIV-1 undergoing hemodialysis. 「J Infect Chemother.」, Online ahead of print. 2023 年 2 月

Sekine Y, Kawaguchi T, Kunimoto Y, Masuda J, Numata A, Hirano A, Yagura H, Ishihara M, Hikasa S, Tsukiji M, Miyaji T, Yamaguchi T, Kanai E, Amano K : Adherence to anti-retroviral therapy, decisional conflicts, and health-related quality of life among treatment-naïve individuals living with HIV: a DEARS-J observational study. 「Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences」, Online. 2023 年 3 月

A-1

四本美保子、渡邊 大 : 抗 HIV 治療ガイドライン 2023 年 3 月、令和 4 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV 感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究」、2023 年 3 月 31 日

A-2

白阪琢磨 : 抗 HIV 薬。治療薬ハンドブック 2023、P.450-475、株式会社じほう（2023 年 1 月）

A-3

石井聡一郎、阿部憲介、榎田崇志、大道淳二、近藤 旭、藤井健司、田中まりの、大東敏和、藤井輝久、畝井浩子、矢倉裕輝、松尾裕彰 : 学校薬剤師における HIV 感染症/AIDS をはじめとした性感染症予防啓発活動の実態調査「日本薬剤師会雑誌」74(10) : P.1123-1128、2022 年 10 月 1 日

種田灯子、光井絵理、河本佐季、西村英里香、山口大旗、是近彩香、岸由衣加、秦 誠倫、山本裕一、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤 研 : 抗 HIV 療法開始後に 1 型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関与が疑われた 3 症例「糖尿病」66(1): P.18-25、日本糖尿病学会、2023 年 1 月 30 日

川村依世、大塚晃子、岡本 学 : 抗 HIV 療法の開始・継続と身体障害者認定について「日本エイズ学会」25(1): P.28-32、日本エイズ学会、2023 年 2 月

A-4

白阪琢磨 : ガイドライン改訂の Points “DHHS ガイドライン改訂のポイント”「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1) : P.11-15、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

白阪琢磨、矢倉裕輝、今橋真弓：Q&A 形式 Case Study “ART 開始、もしくは変更後に体重増加を認め、さらに INSTI 服薬における不眠を認める症例について、ART を継続するうえで注意すべき点、対処法はなにか” 「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1)：P.32-38、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

松下修三、白阪琢磨、立川夏夫、Cal Cohen：座談会 “LTTS を見据えた HIV 診療の現状と課題” 「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1)：P.52-61、メディカルレビュー社、2022 年 11 月

矢倉裕輝：抗ウイルス薬 Evidence Update 2023 最新の薬物治療のエビデンスを付加的に利用する、P111-115、南山堂、2023 年 1 月 1 日

白阪琢磨：HIV 感染症患者に対する医療体制の現状と展望「公衆衛生」87(1)：P.32-41、医学書院、2023 年 1 月

満屋裕明、白阪琢磨、岡 慎一、南 留美、生島 嗣：座談会 HIV 診療の過去・現在・未来-医学はどう戦ったか、教訓とされた課題「医学のあゆみ」284(9)：P.628-639、医歯薬出版、2023 年 3 月

白阪琢磨：HIV 感染症の治療の原則とその進展「医学のあゆみ」284(9)：P.648-656、医歯薬出版、2023 年 3 月

A-5

白阪琢磨：エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和 4 年度研究報告書、P.4-8、2023 年 3 月 31 日

白阪琢磨、山崎厚司：高校生世代に向けた予防啓発の実践と教材開発の検討。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和 4 年度研究報告書、P.56-57、2023 年 3 月 31 日

白阪琢磨：HIV 感染症への対応等に関するアンケート調査。厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）「エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究」令和 4 年度研究報告書、P.58-63、2023 年 3 月 31 日

白阪琢磨：エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究。公益財団法人友愛福祉財団委託事業「エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究」令和 4 年度報告書、2023 年 3 月 31 日

上平朝子：大阪医療センターにおける HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の検討。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「血液製剤による HIV/HCV 重複感染患者に対する肝移植を含めた外科治療に関する研究」令和 4

年度分担研究報告書、2023年3月31日

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和4年度研究報告書、P.42-47、2023年3月31日

矢倉裕輝：適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和4年度分担研究報告書、P.88-95、2023年3月31日

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和2～4年度総合研究報告書、P.52-59、2023年3月31日

矢倉裕輝：適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和2～4年度総合研究報告書、P.104-112、2023年3月31日

B-2

Oka S, Holohan V, Shirasaka T, Choi J Y, Kim Y-S, Chamay N, Patel P, Polli J W, Garside L, D'Amico R, Talarico C, Baugh B, Wyk J : Asian phase 3/3b experience with long-acting cabotegravir and rilpivirine: efficacy, safety and virologic outcomes through week 96. Asia-Pacific AIDS & Co-Infections Conference (APACC) 2022, 16-18 June 2022, virtual program.

B-3

上平朝子、坪倉美由紀：CRE アウトブレイクの経験。第37回日本環境感染学会総会・学術集会、横浜、2022年6月17日

矢倉裕輝：HIV 感染症に関わる研究活動について。第5回日本病院薬剤師会 Future Pharmacist Forum、WEB、2022年7月16日

渡邊 大：LTTS 達成のために BIC/TAF/FTC が果たす役割について。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

西田恭治：薬害保因者遺族にとっても欠くことのできない保因者健診。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

矢倉裕輝：HIV 治療における「Patient Empowerment」を考える。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022年11月18日

東 政美：HIV 看護師育成の実際と課題。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会
浜松、2022 年 11 月 18 日

白阪琢磨：HIV 感染症：治療の手引き「What's New」。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 20 日

矢倉裕輝：最新治療の導入と多職種連携の実際。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 20 日

B-4

矢倉裕輝、阿部憲介、増田純一、長島浩二、廣永竜太、平野 淳、山梨領太、野村直幸、河野泰宏、濱砂恵理香、小山朋子、合原嘉寿、内藤義博、澤田大介、西村富啓、吉田知由、田村浩二、引地正人、橋本雅司、吉野宗宏、山下大輔：HIV 診療に対する薬剤師の関わりおよび介入状況に関するアンケート調査。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

白阪琢磨、川戸美由紀、橋本修二、三重野牧子、天野景裕、大金美和、岡本 学、潟永博之、日笠 聡、八橋 弘、岡 慎一：血液製剤による HIV 感染者の調査成績第 1 報 健康状態と生活状況の概要。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

川戸美由紀、三重野牧子、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡 慎一、岡本 学、潟永博之、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績第 2 報 悪性新生物、循環器疾患、その他の疾患。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

三重野牧子、川戸美由紀、橋本修二、天野景裕、大金美和、岡 慎一、岡本 学、潟永博之、日笠 聡、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績第 3 報 健康意識とこころの状態。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

渡邊 大、菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、潟永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、杉浦 互：2021 年度の国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

照屋勝治、横幕能行、南 留美、遠藤知之、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、岡 慎一：実臨床でのビクテグラビル/エムトリシタビン/テノホビルアラフェミナド(B/F/TAF)の有効性、安全性及び忍容性の評

価:BICSTaR Japan の 12 ヶ月解析結果 (2 回目)。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

四本美保子、木内 英、渡邊秀裕、渡邊 大、白阪琢磨：早期治療開始が必要な HIV 感染症患者に対する抗 HIV 療法開始までの期間。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

阪野文哉、川畑拓也、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：MSM 向け HIV・性感染症検査キャンペーン (2021 年度実績報告書)。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

大谷眞智子、椎野禎一郎、西澤雅子、林田庸総、湯永博之、佐藤かおり、豊嶋崇徳、渡邊 大、今橋真弓、俣野哲朗、菊地 正：薬剤耐性 HIV 調査ネットワーク：国内 HIV-1 CRF07_BC の流行動向に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：コロナ禍における HIV 陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

山田富秋、早坂典生、橋本謙、種田博之、入江恵子、小川良子、宮本哲雄：薬害 HIV 感染被害者のかかえる「生きづらさ」に折り合いをつける—当事者の語りから—。第 36 回日本エイズ学会学術集会総会、浜松、2022 年 11 月 18 日—20 日

矢倉裕輝、藤原綾乃、櫛田宏幸、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大、白阪琢磨：HPLC 法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピビリンの同時定量に関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

増田純一、矢倉裕輝、長島浩二、西村富啓：外来 HIV 感染症診療における新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策調査。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：AIDS 発症に影響する心理的要因に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

米田奈津子、渚るみ子、中濱智子、東 政美、佐井木梨花、大楠裕子、白阪琢磨、渡邊 大：当院に通院する HIV 陽性者の大規模災害に対する備えの現状と課題の

検討－災害への備えと避難行動について－。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、浜松、2022 年 11 月 18 日

B-5

渡邊 大：将来を見据えた薬剤選択の意義。第 92 回日本感染症学会西日本地方会学術集会、長崎、2022 年 11 月 5 日

B-6

佐倉彩佳音、矢倉裕輝、藤原綾乃、松本絵梨奈、駒野 淳、渡邊 大、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染症患者におけるビクテグラビル投与に伴う、代謝酵素及び腎尿細管トランスポーターの遺伝子多型と臨床検査値の変化との関連性。第 35 回近畿エイズ研究会学術集会、奈良、2022 年 6 月 4 日

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関する検討。第 35 回近畿エイズ研究会学術集会、奈良、2022 年 6 月 4 日

平賀紀行、白阪琢磨、四本美保子、川津友佳、原岡正志、小野誠之：エイズ予防指針の提唱する医療体制下で現在認められている臨床的課題についての検討。第 74 回日本泌尿器科学会総会、北九州、2022 年 11 月 4 日

B-7

白阪琢磨：HIV 治療薬の変遷から考える積極的な切り替えの意義。ViiV HIV Webinar2022、WEB 開催、2022 年 4 月 7 日

白阪琢磨：ART ガイドラインをどう読むか～患者ニーズを加味した ART 選択。HIV インターネット講演会、WEB 開催、2022 年 4 月 19 日

渡邊 大：長期療養時代を見据えた治療ゴールの再設定。HIV 感染症 Dr. & Pharmacist collaboration セミナー、WEB 開催、2022 年 5 月 28 日

渡邊 大：LTTS 達成のための抗ウイルス効果、耐性バリアとアドヒアランス。Gilead Infectious Disease Symposium 2022 BICTARVYR® 3rd Anniversary Meeting、WEB 開催、2022 年 6 月 25 日

岡本 学：大阪での地域連携の実際～具体的な事例を通して～。Osaka Hemophilia Network 2022、WEB 開催、2022 年 6 月 30 日

矢倉裕輝：長期療養時代における薬剤師目線の服薬支援。Gilead Infectious Disease web seminar 2022、WEB 開催、2022 年 7 月 22 日

矢倉裕輝：これまでの臨床経験から考える 2 剤療法(DTG/3TC)の使い方。ViiV Pharmacist Forum、WEB 開催、2022 年 7 月 25 日

白阪琢磨：HIV 感染症治療 最新の知見。HIV UP-TO-DATE Webinar、WEB 開催、2022 年 8 月 19 日

矢倉裕輝：最新治療の導入と多職種連携の実践。HIV Forum 2022-持効性注射剤による新しい HIV 感染症治療-、WEB 開催、2022 年 9 月 3 日

岡本 学：地域の医療・介護連携で支える血友病患者の暮らし。ヘモフィリアセミナー2022、浜松、2022 年 9 月 3 日

渡邊 大：長期服薬歴のある HIV 感染症患者の治療について～HIV 感染症と併発症の治療、高齢化に向けた課題など。北陸ブロック医療等相談会、福井、2022 年 10 月 1 日

白阪琢磨：将来を見据えた薬剤選択の意義。ViiV HIV Webinar 2022、WEB 開催、2022 年 11 月 8 日

長谷部茂：免疫再構築症候群により ART 変更に難渋した症例。令和 4 年度関西 HIV 臨床カンファレンス薬剤師部会主催 症例検討会、大阪、2023 年 1 月 21 日

上平朝子：長期合併症を踏まえた HIV 治療戦略。第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス第 2 部 Web 講演会、WEB 開催、2023 年 1 月 28 日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の処方トレンド、特徴と留意点～最適なレジメン提案を目指して～。第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス第 2 部 Web 講演会、WEB 開催、2023 年 1 月 28 日

B-8

白阪琢磨：政策医療「HIV/AIDS 医療の現状と当院の役割」。令和 4 年度新規採用職員研修、大阪、2022 年 4 月 5 日

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。神戸薬科大学講義 先端医療論、神戸、2022 年 5 月 18 日

上平朝子：COVID-19 感染対策。2022 年度第 1 回院内定期講演会（感染管理）、大阪、2022 年 5 月 26 日

矢倉裕輝：HIV 感染症治療における薬剤師の関わり～日常診療から臨床研究まで～。令和 4 年度第 1 回愛知県病院薬剤師会 HIV 部会学術講演会、WEB 開催、2022 年 5 月 26 日

白阪琢磨：医学の進歩がどう感染症を克服してきたかーHIV 感染症を例に挙げて。大阪大学医学部講義「医学序説」、大阪、2022 年 6 月 3 日

上平朝子：大阪医療センターのコロナ診療の現状。第 55 回法円坂地域医療フォー

ラム、大阪、2022年6月11日

白阪琢磨：症例検討：HIV陽性者を診る。大阪大学医学部講義「臨床医学持論」、大阪、2022年7月12日

上平朝子：HIV感染対策と病診連携。大阪府医師会令和4年度HIV医療講習会、大阪、2022年8月5日

西田恭治、田沼順子、長谷川康、長尾 梓、曾山明彦：HIV/HCV重複感染患者に対する肝移植を含めた外科治療のこれから。令和4年度市民公開シンポジウム、東京、2022年8月6日

東 政美：HIV陽性者の支援の実際。大和郡山市障害者支援センター HIV/AIDS研修会、奈良、8月9日

白阪琢磨：HIV陽性者の人権課題－HIV、AIDS等の現状と課題。大阪府人権総合講座（前期）人権問題科目、大阪、2022年8月31日

白阪琢磨：HIV/エイズの基礎知識～医療と最新の治療について。大阪府令和4年度HIV/エイズ基礎研修、WEB配信、2022年9月2日

佐井木梨花：HIV/AIDSの概要。令和4年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2022年9月5日

渡邊 大：HIV/AIDSの基礎知識：HIV感染症・検査・日和見疾患・治療。令和4年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2022年9月5日

西田恭治：HIV/AIDS患者の背景：薬害エイズについて。令和4年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2022年9月5日

矢倉裕輝：抗HIV療法について～服薬支援の重要性～。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月5日

廣田和之：STD（性行為感染症）の診断。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月6日

上平朝子：HIV感染症の基礎知識。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月6日

米田奈津子：HIV陽性者の看護①療養支援 外来患者の動向・外来療養支援の実際。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月6日

岡本 学：社会資源の活用。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大

阪、2022年9月6日

森田眞子：HIV陽性者の心理的支援。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月6日

東 政美：HIV陽性者の看護② HIV陽性者の療養支援における課題。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月6日

HIV診療チーム：HIV陽性者の看護③ チーム医療-チーム医療の実際。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月6日

渡邊 大：HIV感染症の診断。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月7日

東 政美：HIV陽性者の看護支援。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月7日

西田恭治：薬害HIV。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月7日

上地隆史：日和見感染症。令和4年度/奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月7日

上平朝子：事例紹介。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月8日

東 政美：HIV陽性妊婦の看護支援。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月8日

長谷部茂：薬剤師の役割と服薬指導。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月8日

岡本 学：地域で暮らすHIV陽性者の療養生活を支える～医療ソーシャルワーカーにできること～。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月8日

森田眞子：HIV感染症と心理支援。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月8日

白阪琢磨：HIV感染症の疫学。令和4年度奈良県立医科大学公衆衛生学実習、大阪、2022年9月9日

東 政美：HIV陽性者の支援の実際。牧訪問看護ステーション HIV/AIDS研修会、

大阪、9月12日

東 政美：広島県臨床心理士会主催 令和4年度包括的 HIV カウンセリング研修会、9月18日

岡本 学：HIV 陽性者が老後に向けて備えておくことと利用できる福祉制度～今からできることと、その時考えること。北陸ブロック医療等相談会、福井、2022年10月1日

白阪琢磨：疫学と抗 HIV 治療ガイドライン。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月3日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月3日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の特徴と薬剤師の役割。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月3日

渡邊 大、矢倉裕輝：初回抗 HIV 療法の実際。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月3日

東 政美：外来・病棟看護と療養支援。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月3日

上平朝子：日和見感染症診療－PCP を中心に－。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月4日

上平朝子、矢倉裕輝：症例検討。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月4日

東 政美、長谷部茂、岡本 学、西川歩美：症例検討－多職種との連携－。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪・WEB、2022年10月4日

岡本 学：地域で暮らす HIV 陽性者の療養生活を支える～医療ソーシャルワーカーにできること～。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪・WEB、2022年10月4日

西田恭治：血友病診療・凝固因子製剤の使い方。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月4日

安尾利彦：HIV とカウンセリング。令和4年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022年10月4日

矢倉裕輝：チームで行う持効性注射剤の導入。HIV Team conference、WEB 開催、

2022 年 10 月 4 日

東 政美: 令和 4 年度 HIV 医療におけるコミュニケーションとチーム医療研修会、大阪、10 月 5 日

西田恭治: 薬害 HIV。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 7 日

東 政美: HIV 陽性者の在宅療養支援。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 11 日

渡邊 大: 新規抗 HIV 薬。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 12 日

上平朝子: 免疫再構築症候群 (IRIS)。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 13 日

東 政美: HIV 陽性者の理解と看護。兵庫医科大学講義、神戸、10 月 13 日

岡本 学: HIV 感染症と薬物依存。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 18 日

宮本哲雄: 神経心理検査と事例検討。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 19 日

廣田和之、坪倉美由紀: インフルエンザの診療と感染対策。2022 年度 ICT/感染制御部主催研修会、大阪、2022 年 10 月 21 日

東 政美: 陽性妊婦の看護支援。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 24 日

廣田和之: STD (性行為感染症) の診療。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 25 日

上地隆史: 日和見感染症。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 25 日

松村拓朗: 入院症例の管理の実際。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 26 日

渡邊 大: HIV 急性感染。令和 4 年度 HIV 感染症医師実地研修会 (1 ヶ月コース)、大阪、2022 年 10 月 27 日

佐井木梨花：HIV/AIDS の概要。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・検査・日和見疾患・治療。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

西田恭治：HIV/AIDS 患者の背景 薬害エイズについて。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

長谷部茂：抗 HIV 療法について～服薬支援の重要性～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

米田奈津子：HIV 陽性者の看護①療養支援 外来患者の動向・外来療養支援の実際。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 8 日

岡本 学：社会資源の活用。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 8 日

森田眞子：HIV 陽性者の心理的支援。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 8 日

東 政美：HIV 陽性者の看護② HIV 陽性者の療養支援における課題。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 8 日

HIV 診療チーム：HIV 陽性者の看護③ チーム医療-チーム医療の実際。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 8 日

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。兵庫医科大学薬学部講義 感染制御学、神戸、2022 年 11 月 25 日

安尾利彦：臨床心理士による HIV 陽性者とのかかわり。第 6 回関西 HIV・薬剤 Workshop、特定非営利法人 薬と医療の啓発塾、大阪、2022 年 11 月 26 日

矢倉裕輝：最近の処方動向と長期療養を見据えた薬剤選択。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー 第 1 部、WEB 開催、2022 年 12 月 1 日

白阪琢磨：HIV 講義。大阪大学 4 年次臨床導入実習講義、大阪、2022 年 12 月 2 日

矢倉裕輝：患者さんと一緒に目指す最適な薬剤選択。HIV セミナー in 京都滋賀、WEB 開催、2022 年 12 月 12 日

宇津本理夫、廣田和之：暴言暴力への「具体的な」対応術。第 9 回医療安全研究会、大阪、2022 年 12 月 14 日

白阪琢磨：HIV/AIDS 総論・感染対策。令和 4 年度医療従事者のための HIV 研修会、大阪、2022 年 12 月 18 日

安尾利彦：HIV 陽性者に対する心理士の関わりの実際。令和 4 年度医療従事者のための HIV 研修会、大阪、2022 年 12 月 18 日

岡本 学：HIV 陽性者の精神科受診ニーズと受診支援・調整。令和 4 年度医療従事者のための HIV 研修会、大阪、2022 年 12 月 18 日

白阪琢磨：HIV 感染症で期待される病診連携と新たな課題。令和 4 年度 HIV 地域医療連携研修会、大阪、2023 年 1 月 23 日（大阪府医師会）

上地隆史：日和見疾患の病態と治療 ニューモシスチス肺炎・HIV 脳症・サイトメガロウイルス網膜炎。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

矢倉裕輝：服薬支援の実際～服薬スケジュールの組み方・服薬継続への関わり～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

廣田和之：性感染症の基礎知識。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

東 政美：HIV 陽性妊婦の治療と周産期看護の実際。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

米田奈津子：困難症例の実際（外来）。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

東 政美：初診時の問診について 問診のポイント。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 24 日

東 政美、冨田亜沙美：患者教育 患者教育の実際。令和 4 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 24 日

東 政美：HIV 陽性者の看護支援。HIV 感染症認定薬剤師研修、2023 年 1 月 27 日

上平朝子：長期合併症を踏まえた HIV 治療戦略。第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス第 2 部 Web 講演会、WEB 開催、2023 年 1 月 28 日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の処方トレンド、特徴と留意点～最適なレジメン提案を目指して～、第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス、WEB、2023 年 1 月 28 日

宮本哲雄：HIV 感染症と物質依存、認知症。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2023 年 2 月 1 日

森田眞子：服薬支援～カウンセラーの視点から。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2023 年 2 月 1 日

森田眞子：服薬支援ロールプレイ指導。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2023 年 2 月 1 日

廣田和之：薬剤耐性（AMR）対策。2022 年度第 2 回院内定期講演会（感染管理）、大阪、2023 年 2 月 9 日

矢倉裕輝：長期療養患者さんに薬剤師ができること、HIV フォーラム～生活習慣病を考える～、WEB、2023 年 2 月 17 日

東 政美：新しい治療選択肢～看護師の立場から～。HIV Team Conference 沖縄、2023 年 3 月 4 日

矢倉裕輝：継続服薬時の情報提供～レジメン変更も視野に入れた服薬相談～。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー 第 2 部、Web 開催、2023 年 3 月 9 日

白阪琢磨：地域における HIV 陽性者支援のための HIV/エイズの基礎知識。大阪府高齢者支援に関わる介護サービス事業者等向け HIV/エイズ研修会、WEB 配信、2023 年 3 月 10 日

白阪琢磨：HIV/エイズ予防と治療に関する最新情報と今後の検査機関に期待するもの。スマートらいふネット スタッフ研修会、大阪、2023 年 3 月 11 日

東 政美：HIV 看護。大阪医療センター附属看護学校 特別講義、大阪、2023 年 3 月 14 日

B-9

白阪琢磨：HIV/エイズについての基礎講座。厚生労働省主催「レッドリボンライブ 2022～みんながエイズを話にきた！～」、WEB 配信、2022 年 12 月 28 日

HIV 感染制御研究室

室長 渡邊 大

当研究室は、HIV 感染症の診療における問題に対して研究を行っております。この 10 年で HIV 感染の発生率は低下したものの、CD4 数が低い状態で診断される患者さんも少なくはありません (J Epidemiol. in press)。治療に関しては多くの症例でウイルス抑制が得られるようになりました (Jpn J Infect Dis. 2017)。しかし、潜伏感染細胞を駆逐できないが故に、一生の内服加療を強いられます。我々は潜伏感染細胞数に相当する残存プロウイルス量の測定を行い、早期に治療を開始した症例では残存プロウイルス量が低く抑えられていることを明らかにしました (BMC Infect Dis. 2011)。残念ながら、抗 HIV 療法を行っても免疫系は完全に回復しません。ウイルス抑制が得られた症例で血中インターフェロン γ が持続的に高値を示す症例 (Viral Immunol. 2010) が存在し、それらの症例では CD4 数の回復が不十分であること (BMC Infect Dis. 2019) を報告しました。抗 HIV 薬の副作用の課題も残されています。テノホビル DF によって血中ミトコンドリア CK 活性が上昇すること (J Infect Chemother. 2012)、ドルテグラビルの神経精神系有害事象は血中濃度や UGT1A1 遺伝子多型と関連すること (BMC Infect Dis. 2017)、ドルテグラビル投与例における腎機能評価が困難であること (J Infect Chemother. 2018)、ddI の長期内服に伴う非硬性門脈圧亢進症を呈した症例 (J Infect Chemother. 2014) を報告しました。

薬剤耐性検査や薬剤血中濃度は HIV 感染者の治療において欠かすことのできない検査です。当研究室ではこれらに関する研究も行っております (Antiviral Res. 2010, J Infect Chemother. 2015, Inter Med. 2016, J Infect Chemother. in press)。また、急性 HIV 感染症 (AIDS Res Ther. 2015)、ヒトヘルペスウイルス 8 型感染症 (J Infect Chemother. 2017, Inter Med. 2014)、帯状疱疹 (J Med Virol. 2013) 急性 A 型肝炎 (Hepatol Res. 2019)、悪性リンパ腫 (J Clin Immunol. 2018)、市中感染型 MRSA 感染 (J Infect Chemother. 2020)、脳構造への影響 (J Neurovirol. 2020, J Neurovirol. 2022) などにも取り組み、厚生労働省エイズ対策政策研究事業を中心に、多施設共同研究を行っています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Kushida H, Watanabe D, Yagura H, Nakauchi T, Hirota K, Ueji T, Nishida Y, Uehira T, Yoshino M, Shirasaka T. Evaluation of Plasma Doravirine Concentrations in Patients with HIV-1 Undergoing Hemodialysis. 「J Infect Chemother.」、印刷中

Yoshihara Y, Kato T, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T. Altered white matter microstructure and neurocognitive function of HIV-infected patients with low nadir CD4. 「J Neurovirol.」 28(3):355-366、2022 年 6 月

A-1

四本美保子、渡邊 大：抗 HIV 治療ガイドライン 2023 年 3 月、令和 4 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV 感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究」、2023 年 3 月 31 日

A-3

石井聡一郎、阿部憲介、榎田崇志、大道淳二、近藤 旭、藤井健司、田中まりの、大東敏和、藤井輝久、畝井浩子、矢倉裕輝、松尾裕彰：学校薬剤師における HIV 感染症/AIDS をはじめとした性感染症予防啓発活動の実態調査「日本薬剤師会雑誌」74(10):1123-1128、2022 年 10 月 1 日

種田灯子、光井絵理、河本佐季、西村英里香、山口大旗、是近彩香、岸 由衣加、秦 誠倫、山本裕一、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤 研：抗 HIV 療法開始後に 1 型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関与が疑われた 3 症例。「糖尿病」66(1): 18-25、2023 年 1 月 30 日

A-4

矢倉裕輝：Q&A 形式 Case Study 「HIV 感染症と AIDS の治療」13(1): 32-35、メディカルレビュー社、2022 年 11 月 30 日

矢倉裕輝：抗ウイルス薬「Evidence Update 2023 最新の薬物治療のエビデンスを付加的に利用する」P.111-115、南山堂、2023 年 1 月 1 日

A-5

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 4 年度研究報告書、P.42-47、2023 年 3 月 31 日

矢倉裕輝：適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 4 年度研究報告書、P.88-95、2023 年 3 月 31 日

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 2～4 年度総合研究報告書、P.52-59、2023 年 3 月 31 日

矢倉裕輝：適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 2～4 年度総合研究報告書、P.104-112、2023 年 3 月 31 日

B-3

矢倉裕輝: HIV 感染症に関わる研究活動について。第 5 回日本病院薬剤師会 Future Pharmacist Forum、WEB、2022 年 7 月 16 日

渡邊 大: 将来を見据えた薬剤選択の意義。長期的な観点から考える抗 HIV 感染症治療。ランチョンセミナー10。第 92 回日本感染症学会西日本地方会学術集会、2022 年 11 月 5 日、長崎

渡邊 大: LTTS 達成のために BIC/TAF/FTC が果たす役割について。ランチョンセミナー1。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

矢倉裕輝: HIV 治療における「Patient Empowerment」を考える（共催シンポジウム）。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、静岡、2022 年 11 月 18 日

矢倉裕輝: 最新治療の導入と多職種連携の実践（共催シンポジウム）。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、静岡、2022 年 11 月 20 日

B-4

矢倉裕輝、阿部憲介、増田純一、長島浩二、廣永竜太、平野淳、山梨領太、野村直幸、河野泰宏、濱砂 恵理香、小山朋子、合原嘉寿、内藤義博、澤田大介、西村富啓、吉田知由、田村浩二、引地正人、橋本雅司、吉野宗宏、山下大輔: HIV 診療に対する薬剤師の関わりおよび介入状況に関するアンケート調査。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

大谷眞智子、椎野禎一郎、西澤雅子、林田庸総、湯永博之、佐藤かおり、豊嶋崇徳、渡邊 大、今橋真弓、俣野哲朗、菊地正、薬剤耐性 HIV 調査ネットワーク: 国内 HIV-1 CRF07_BC の流行動向に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、浜松

安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨: コロナ禍における HIV 陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、浜松

四本美保子、木内 英、渡邊秀裕、渡邊 大、白阪琢磨: 早期治療開始が必要な HIV 感染症患者に対する抗 HIV 療法開始までの期間。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、浜松

矢倉裕輝、藤原綾乃、榎田宏幸、吉野宗宏、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨: HPLC 法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピピリンの同時定量に関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、浜松

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨: AIDS 発症に影響する心理的要因に関する研究。第 36 回

日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、浜松

渡邊 大、照屋勝治、横幕能行、南 留美、遠藤知之、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、岡 慎一：実臨床でのビクテグラビル／エムトリシタビン／テノホビルアラフェナミド（B/F/TAF）の有効性、安全性及び忍容性の評価：BICSTaR Japan の12ヵ月解析結果（2回目）。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、浜松

阪野文哉、川畑拓也、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：MSM向けHIV・性感染症検査キャンペーン（2021年度実績報告）。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、浜松

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV感染者におけるヒトヘルペスウイルス8型関連バイオマーカーに関する検討。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、浜松

菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、渦永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、杉浦 互：2021年の国内新規診断未治療HIV感染者・AIDS患者における薬剤耐性HIV-1の動向。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、浜松

米田奈津子、渚るみ子、中濱智子、東 政美、佐井木梨花、大楠裕子、白阪琢磨、渡邊 大：当院に通院するHIV陽性者の大規模災害に対する備えの現状と課題の検討ー災害への備えと避難行動についてー。第36回日本エイズ学会学術集会・総会、2022年11月18日、浜松

B-6

佐倉彩佳音、矢倉裕輝、藤原綾乃、松本絵梨奈、駒野 淳、渡邊 大、白阪琢磨：日本人HIV-1感染症患者におけるビクテグラビル投与に伴う、代謝酵素及び腎尿細管トランスポーターの遺伝子多型と臨床検査値の変化との関連性。第35回近畿エイズ研究会学術集会、2022年6月4日、奈良

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV感染者におけるヒトヘルペスウイルス8型関連バイオマーカーに関する検討。第35回近畿エイズ研究会学術集会、2022年6月4日、奈良

B-7

渡邊 大：長期療養時代を見据えた治療ゴールの再設定。HIV感染症 Dr. & Ph. Collaborationセミナー、2022年5月28日、WEB

渡邊 大：LTTS達成のための抗ウイルス効果、耐性バリアとアドヒアランス。Gilead Infectious Disease Symposium 2022. BIKTARVY® 3rd Anniversary Meeting. 2022年6月25日、WEB

渡邊 大：長期服薬歴のあるHIV感染症患者の治療について～HIV感染症と併発症の治療、高齢化に向けた課題など。北陸ブロック医療等相談会。2022年10月1日、福井

長谷部茂：免疫再構築症候群により ART 変更に難渋した症例。令和4年度関西HIV臨床カンファレンス薬剤師部会主催 症例検討会、大阪、2023年1月21日

B-8

矢倉裕輝：HIV感染症と抗HIV薬の現状と薬剤師の役割。神戸薬科大学講義 先端医療論、神戸、2022年5月18日

矢倉裕輝：HIV感染症治療における薬剤師の関わり～日常診療から臨床研究まで～。令和4年度第1回愛知県病院薬剤師会 HIV部会学術講演会、WEB開催、2022年5月26日

矢倉裕輝：長期療養時代における薬剤師目線の服薬支援。Gilead Infectious Disease web seminar 2022、WEB開催、2022年7月22日

矢倉裕輝：これまでの臨床経験から考える2剤療法(DTG/3TC)の使い方。ViiV Pharmacist Forum、WEB開催、2022年7月25日

矢倉裕輝：最新治療の導入と多職種連携の実践。HIV Forum 2022-持効性注射剤による新しいHIV感染症治療-、WEB開催、2022年9月3日

渡邊 大：HIV/AIDSの基礎知識：HIV感染症・検査・日和見疾患・治療。令和3年度HIV/AIDS看護師研修初心者コース、大阪、2022年9月5日

矢倉裕輝：抗HIV療法について～服薬支援の重要性～。2022年度HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2022年9月5日

渡邊 大：HIV感染症の診断。令和4年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2022年9月7日

渡邊 大：HIV感染症の診断。令和4年度HIV感染症研修会、大阪、2022年10月3日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の特徴と薬剤師の役割。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 4 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2022 年 10 月 3 日

矢倉裕輝：チームで行う持効性注射剤の導入。HIV Team conference、WEB、2022 年 10 月 4 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・検査・日和見疾患・治療。令和 3 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

長谷部茂：抗 HIV 療法について～服薬支援の重要性～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修会初心者コース、大阪、2022 年 11 月 7 日

矢倉裕輝：HIV 感染症と抗 HIV 薬の現状と薬剤師の役割。兵庫医科大学薬学部講義 感染制御学、神戸、2022 年 11 月 25 日

矢倉裕輝：最近の処方動向と長期療養を見据えた薬剤選択。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー 第 1 部、Web 開催、2022 年 12 月 1 日

矢倉裕輝：患者さんと一緒に目指す最適な薬剤選択。HIV セミナー in 京都滋賀、Web 開催、2022 年 12 月 12 日

矢倉裕輝：服薬支援の実際～服薬スケジュールの組み方・服薬継続への関わり～。2022 年度 HIV/AIDS 看護師研修応用コース、大阪、2023 年 1 月 23 日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の処方トレンド、特徴と留意点～最適なレジメン提案を目指して～、第 13 回沖縄 HIV 臨床カンファレンス、WEB、2023 年 1 月 28 日

矢倉裕輝：長期療養患者さんに薬剤師ができること、HIV フォーラム～生活習慣病を考える～、WEB、2023 年 2 月 17 日

矢倉裕輝：継続服薬時の情報提供～レジメン変更も視野に入れた服薬相談～。薬剤師のための！HIV 感染症長期療養マネジメントセミナー 第 2 部、Web 開催、2023 年 3 月 9 日

臨床疫学研究室

室長 三田英治

臨床疫学研究室は主に消化器疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討しています。代表的な研究内容を示します。

インターフェロンフリー治療によって C 型肝炎は HCV 排除が期待できる時代になりましたが、残された少数の難治例に対する最適治療法を検討しています。インターフェロンフリー治療は非代償性肝硬変にまで適応が拡大されましたが、肝予備能が低下した症例に投薬するため、死亡例が出ています。より安全に治療できる条件とその有効性を検証しています。同じく心機能低下や腎機能低下症例に対する治療法も検討しています。HIV 感染合併例でのインターフェロンフリー治療の成績もまとめ、論文化しています。

次に B 型肝炎では、核酸アナログの長期投与成績から導かれる耐性化の問題点を検討しています。そしてラミブジン・アデホビル併用療法効果不良例に対し、アデホビルを TDF に切り替えることの有効性と安全性を明らかにしました。現在はさらに TDF から TAF への切り替えを検証しています。近年散発的に発生している B 型急性肝炎では genotype A が大半を占めますが、その特徴を解析し、慢性化への関与についても検討しています。また HIV 感染が B 型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討しています。

肝細胞癌に対する治療では肝動注化学療法に注目し、現在症例の蓄積中です。また分子標的薬と免疫チェックポイント阻害剤との併用も治療選択肢に入りました。病状に応じた最適治療の方向性を示していけるよう検証すると同時に、特有の副反応についても検討を加えています。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Tanabe G, Yamamoto S, Takeuchi Y, Mita E. Salvage underwater endoscopic mucosal resection for recurrent gastric cancer after endoscopic submucosal dissection. *Endoscopy*. 2022 Apr 25. 2022 年 4 月

Murai H, Kodama T, Maesaka K, Tange S, Motooka D, Suzuki Y, Shigematsu Y, Inamura K, Mise Y, Saiura A, Ono Y, Takahashi Y, Kawasaki Y, Iino S, Kobayashi S, Idogawa M, Tokino T, Hashidate-Yoshida T, Shindou H, Miyazaki M, Imai Y, Tanaka S, Mita E, Ohkawa K, Hikita H, Sakamori R, Tatsumi T, Eguchi H, Morii E, Takehara T. Multiomics identifies the link between intratumor steatosis and the exhausted tumor immune microenvironment in hepatocellular carcinoma. *Hepatology*. 2022 May 14. 2022 年 5 月

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Miyazaki M, Mita E, Yamamoto K, Ohkawa K, Kaneko A, Ito T, Doi Y, Yakushijin T, Hijioka T, Fukui H, Imanaka K, Yoshida Y, Yamada Y, Tatsumi T, Takehara T. Risk of

hepatocellular carcinoma after sustained virologic response in hepatitis C virus patients without advanced liver fibrosis. *Hepatol Res.* 2022 Jun 24. 2022 年 6 月

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Doi A, Tahata Y, Miyazaki M, Ohkawa K, Mita E, Iio S, Nozaki Y, Yakushijin T, Imai Y, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Comparison of atezolizumab plus bevacizumab and lenvatinib in terms of efficacy and safety as primary systemic chemotherapy for hepatocellular carcinoma. *Hepatol Res.* 2022 Jul;52(7):630-640. 2022 年 7 月

Shirai K, Hikita H, Sakane S, Narumi R, Adachi J, Doi A, Tanaka S, Tahata Y, Yamada R, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Mita E, Tomonaga T, Takehara T. Serum amyloid P component and pro-platelet basic protein in extracellular vesicles or serum are novel markers of liver fibrosis in chronic hepatitis C patients. *PLoS One.* 2022 Jul 7;17(7):e0271020. 2022 年 7 月

Matsumae T, Kodama T, Myojin Y, Maesaka K, Sakamori R, Takuwa A, Oku K, Motooka D, Sawai Y, Oshita M, Nakabori T, Ohkawa K, Miyazaki M, Tanaka S, Mita E, Tawara S, Yakushijin T, Nozaki Y, Hagiwara H, Tahata Y, Yamada R, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Circulating Cell-Free DNA Profiling Predicts the Therapeutic Outcome in Advanced Hepatocellular Carcinoma Patients Treated with Combination Immunotherapy. *Cancers (Basel).* 2022 Jul 11;14(14):3367. 2022 年 7 月

Yamamoto S, Takeuchi Y, Uedo N, Kawakami Y, Hayata N, Mita E. Underwater endoscopic mucosal resection for gastric neoplasms. *Endosc Int Open.* 2022 Aug 15;10(8):E1155-E1158. 2022 年 8 月

Mita E, Liu LJ, Shing D, Force L, Aoki K, Nakamoto D, Ishizaki A, Konishi H, Mizutani H, Ng LJ. Real-world Safety and Effectiveness of 24-week Sofosbuvir and Ribavirin Treatment in Patients Infected with Rare Chronic Hepatitis C Virus Genotypes 3, 4, 5, or 6 in Japan. *Intern Med.* 2022 Aug 30. 2022 年 8 月

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Miyazaki M, Mita E, Yamamoto K, Ohkawa K, Kaneko A, Ito T, Doi Y, Yakushijin T, Hijioka T, Fukui H, Imanaka K, Yoshida Y, Yamada Y, Tatsumi T, Takehara T. Risk of hepatocellular carcinoma after sustained virologic response in hepatitis C virus patients without advanced liver fibrosis. *Hepatol Res.* 2022 Oct;52(10):824-832. 2022 年 10 月

Takigawa A, Sakamori R, Tahata Y, Yoshioka T, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Yakushijin T, Ohkawa K, Hiramatsu N, Mita E, Hagiwara H, Ito T, Imai Y, Tatsumi T, Takehara T. Prediction Model for Intrahepatic Distant Recurrence After Radiofrequency Ablation for Primary Hepatocellular Carcinoma 2 cm or Smaller. *Dig Dis Sci.* 2022 Dec;67(12):5704-5711. 2022 年 12 月

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Tahata Y, Imai Y, Ohkawa K, Miyazaki M, Mita E, Ito T, Hagiwara H, Yakushijin T, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T. Hyperprogressive disease in patients with unresectable hepatocellular carcinoma receiving atezolizumab plus bevacizumab therapy. *Hepatol Res.* 2022 Mar;52(3):298-307. doi: 10.1111/hepr.13741. Epub 2021 Dec 28. 2022 年 12 月

Tahata Y, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Hagiwara H, Oshita M, Imai Y, Hiramatsu N, Mita E, Kaneko A, Miyazaki M, Ohkawa K, Hijioka T, Fukui H, Ito T, Yamamoto K, Doi Y, Yoshida Y, Yamada Y, Yakushijin T, Tatsumi T, Takehara T; Osaka Liver Forum. Improved Liver Function After Sustained Virologic Response Enhanced Prognosis in Hepatitis C with Compensated Advanced Liver Fibrosis. *Dig Dis Sci.* 2022 Dec 16. 2022 年 12 月

Harada S, Sakakibara Y, Ishida H, Mori K, Mita E. Early Gastric Cancer Arising From Hyperplastic Polyps After Argon Plasma Coagulation for Gastric Vascular Ectasia. *ACG Case Rep J.* 2023 Jan 13;10(1):e00953. 2023 年 1 月

Yamamoto S, Ishida H, Mita E. Purple haze: a useful sign for detecting gastric intestinal metaplasia. *Gastrointest Endosc.* 2023 Jan 12. S0016-5107(23)00022-6. 2023 年 1 月

B-1

Yuki T, Sakamori R, Yamada R, Kodama T, Hikita H, Nozaki Y, Oshita M, Hiramatsu N, Miyazaki M, Mita E, Ohkawa K, Kaneko A, Doi Y, Yakushijin T, Hijioka T, Imanaka K, Yoshida Y, Yamada Y, Tatsumi T, Takehara T : RISK FACTOR OF HEPATOCELLULAR CARCINOMA OCCURRENCE AFTER SUSTAINED VIROLOGIC RESPONSE IN HEPATITIS C VIRUS PATIENTS WITHOUT ADVANCED LIVER FIBROSIS. AASLD The Liver Meeting, Oral 42, Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

B-2

Yamamoto S, Ishida H, Mita E. Acetic acid with NBI/BLI for pit pattern diagnosis of the colorectal polyps. ESGE Days2022, Poster, Prague, 2022 年 4 月 28 日-30 日

Hamada T, Sakakibara Y, Kuwai T, Kusunoki R, Mannami T, Wakatsuki T, Toyokawa T, Katsushima S, Esaka N, Kanda A, Shimada M, Kuramochi M, Hamada S, Fujii H, Kagaya T, Watanabe N, Sasaki Y, Uraoka T, Mabe K, Kubo K, Kato M, Mita E, Harada N : Efficacy and Safety of Continuous Intravenous Midazolam Infusion and Pethidine Hydrochloride in Double-Balloon Small Intestine Endoscopy: A Multicentre Randomised Controlled Trial、UEGW2022, Poster, Wien, 2022 年 10 月 8-11 日

Toyokawa T, Sakakibara Y, Mita E, Takahashi Y, Kubo K, Mabe K, Watanabe N, Hamada H, Kusunoki R, Kuwai T, Wakatsuki T, Mannami T, Fujimoto A, Uraoka T, Hayashi T, Esaka N, Katsushima S, Kanda A, Takazoe A, Saito H, Shimada M, Kagaya T, Sasaki Y, Fujii H, Uehara S, Ara M, Bunpitsu T, Masuda E, Kato M, Nakazuru S, Harada N :

Usefulness of enzymatic cleaning in a thermostatic chamber for endoscope cleaning: A multicenter prospective study. UEGW2022、Poster、Wien, 2022 年 10 月 8-11 日

Shirai K, Hikita H, Sakane S, Narumi R, Adachi J, Doi A, Tanaka S, Tahata Y, Yamada R, Kodama T, Sakamori R, Tatsumi T, Mita E, Tomonaga T, Takehara T : SERUM AMYLOID P COMPONENT AND PRO-PLATELET BASIC PROTEIN IN EXTRACELLULAR VESICLES OR SERUM ARE NOVEL MARKERS OF LIVER FIBROSIS. AASLD The Liver Meeting, Poster 1263, Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

Maesaka K, Sakamori R, Tahata Y, Doi A, Miyazaki M, Ohkawa K, Mita E, Iio S, Nozaki Y, Yakushijin T, Oshita M, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T : COMPARISON OF ATEZOLIZUMAB PLUS BEVACIZUMAB AND LENVATINIB IN TERMS OF EFFICACY AND SAFETY AS PRIMARY SYSTEMIC CHEMOTHERAPY FOR HEPATOCELLULAR CARCINOMA. AASLD The Liver Meeting, Poster 4430, Washington DC, USA, 2022 年 11 月 4 日-8 日

B-3

前阪和城、阪森亮太郎、山田涼子、土居哲、田畑優貴、小玉尚宏、疋田隼人、宮崎昌典、大川和良、三田英治、飯尾禎元、野崎泰俊、薬師神崇行、今井康陽、巽智秀、竹原徹郎：切除不能肝細胞癌に対する初回薬物療法としてのアテゾリズマブ+ベバシズマブとレンバチニブの比較検討。第 58 回日本肝癌研究会、パネルディスカッション 5、虎ノ門、2022 年 5 月 12 日

田畑優貴、阪森亮太郎、小玉尚宏、疋田隼人、野崎泰俊、尾下正秀、平松直樹、三田英治、宮崎昌典、巽智秀、竹原徹郎：肝線維化非進展 C 型慢性肝炎症例における SVR 後肝発癌予測モデルの検討。第 58 回日本肝癌研究会、ワークショップ 7、虎ノ門、2022 年 5 月 13 日

松前高幸、小玉尚宏、前阪和城、田畑優貴、澤井良之、尾下正秀、中堀輔、大川和良、宮崎昌典、田中聡司、阪森亮太郎、三田英治、俵誠一、薬師神崇行、野崎泰俊、萩原秀紀、疋田隼人、巽智秀、竹原徹郎：リキッドバイオプシーを用いた肝細胞癌における複合免疫療法治療効果予測。第 27 回日本肝がん分子標的治療研究会 PL2-5、大阪、2023 年 1 月 14 日

B-4

山本俊祐、竹内洋司、川上裕史、早田菜保子、上堂文也、三田英治：胃の病変に対する Underwater EMR の有用性-2 施設での遡及的検討-。第 103 回日本消化器内視鏡学会総会、京都、2022 年 5 月 13 日

山本俊祐、石田永、三田英治：酢酸併用画像強調内視鏡観察による大腸 pit pattern 診断の可能性。第 103 回日本消化器内視鏡学会総会、京都、2022 年 5 月 13 日

榊原祐子、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、宮崎哲郎、早田菜保子、清木祐介、石原朗雄、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田永、三田英治：小腸内視鏡におけるミダゾラム持続静注と塩酸ペチジン併用の有用性と安全性。第 103 回日本消化器内視鏡学会総会、京都、2022 年 5 月 15 日

田畑優貴、阪森亮太郎、前阪和城、宮崎昌典、萩原秀紀、伊藤敏文、尾下正秀、今井康陽、三田英治、今中和穂、平松直樹、金子晃、大川和良、小玉尚宏、疋田隼人、巽智秀、竹原徹郎：Sofosbuvir/velpatasvir 治療が C 型非代償性肝硬変症例の予後に与えるインパクト—多施設共同研究—。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2 日

高橋実佑、田中聡司、清木祐介、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、西村佑子、早田菜保子、宮崎哲郎、石原朗雄、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、中水流正一、石田永、三田英治：肝細胞癌の多発肺転移に対してアテゾリズマブ・ベバシズマブ併用療法を導入し、ギラン・バレー症候群を来した一例。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

原田理史、石原朗雄、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、中水流正一、石田永、三田英治：高度脈管浸潤を伴う肝細胞癌に対して New FP 療法が奏功し Conversion Surgery を施行しえた一例。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

田邊元太郎、石原朗雄、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榊原祐子、中水流正一、石田永、三田英治：高度腎機能障害を伴う肝硬変患者の門脈血栓症の診断に EUS が有用であった一例。第 58 回日本肝臓学会総会、横浜、2022 年 6 月 2-3 日

中江陽彦、松島健祐、榊原祐子、宮崎愛理、原田理史、上月美穂、高橋実佑、伊藤典明、川端将生、津室悠、西本菜穂、阿部友太朗、福武伸康、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎、塚本美輝、木村良紀、岩谷博嗣、三田英治：クローン病に合併した IgA 腎症の 1 例。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

上月美穂、榊原祐子、宮崎愛理、原田理史、高橋実佑、伊藤典明、川端将生、津室悠、西本菜穂、松島健祐、阿部友太朗、福武伸康、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、阪森亮太郎、石田永、三田英治：繰り返す腹膜炎が契機となり診断に至った家族性地中海熱の一例。第 13 回日本炎症性腸疾患学会学術集会、大阪、2022 年 11 月 26 日

川端将生、阿部友太朗、原田理史、宮崎愛理、伊藤典明、上月美穂、高橋実佑、

津室悠、西本菜穂、松島健祐、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、榑原祐子、俊山礼志、酒井健司、後藤邦仁、阪森亮太郎、三田英治：多発肝細胞癌の破裂後に分子標的薬を含む集学的治療により腫瘍フリーを達成できた1例。第27回日本肝がん分子標的治療研究会 OS10-6、大阪、2023年1月14日

B-6

原田理史、榑原祐子、高橋実佑、東浦玲意、川端将生、田邊元太郎、三好真央、宮崎哲郎、早田菜保子、清木祐介、石原朗雄、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田永、三田英治：GAVEに対するAPC後の過形成ポリープに発生した早期胃癌の1例。第108回日本内視鏡学会近畿支部例会、京都、2022年6月11日

川端将生、榑原祐子、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、高橋実佑、津室悠、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、山本俊祐、石田永、三田英治：当院での炎症性腸疾患患者の中心静脈カテーテル留置による血栓症の発症とそのリスク因子の検討。第117回日本消化器病学会近畿支部例会 Y14-3、大阪、2022年10月8日

高橋実佑、長谷川裕子、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、川端将生、津室悠、西村佑子、西本奈穂、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、山本俊祐、榑原祐子、石田永、三田英治：高度狭窄により内視鏡的拡張術を要した好酸球性食道炎の1例。第117回日本消化器病学会近畿支部例会 Y1-2、大阪、2022年10月8日

上月美穂、長谷川裕子、宮崎愛理、原田理史、伊藤典明、高橋実佑、津室悠、川端将生、西本菜穂、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、山本俊祐、榑原祐子、阪森亮太郎、三田英治：経口摂取不良な胃原発GISTに対してイマチニブが著効した一例。第118回日本消化器病学会近畿支部例会 Y1-2、京都、2023年1月21日

伊藤典明、山本俊祐、原田理史、宮崎愛理、上月美穂、高橋実佑、津室悠、川端将生、松島健祐、阿部友太郎、田中聡司、福武伸康、長谷川裕子、榑原祐子、阪森亮太郎、森清、加藤健志、三田英治：ESDによる治癒切除1年後に短期間で進行大腸癌として再発を来した大腸粘膜癌の一例。第118回日本消化器病学会近畿支部例会 Y7-1、京都、2023年1月21日

吉田翼、西本菜穂、長谷川裕子、田中聡司、福武伸康、榑原祐子、阪森亮太郎、渡邊大、三田英治：腹痛を主訴に来院し、大腸内視鏡検査を契機にランブル鞭毛虫が確認された1例。第239回日本内科学会近畿地方会、大阪、2023年3月4日

B-8

三田英治：法円坂GIカンファレンス 座長、大阪、2023年3月23日

がん療法研究開発室

室長 平尾素宏

がんが日本人の死因のトップとなって久しい。国立がん研究センターのがん情報サービスによれば、2019年の年間がん罹患数は99万人を超え、2021年のがんによる死亡者数は約38万人と報告されている。最近、がん免疫治療法が脚光を浴び、臨床の場において使用され、その評価が明らかになってきたが、すべてのがんに効果があるわけではなく、がんに対する有効な治療法の開発の重要性は依然変わっていない。

免疫治療を含め従来の多くのがん治療法の有効性は、症例ごと、施設ごとの経験から得られたものであり、複数施設における大規模な臨床試験による治療効果の検証が必須となっている。そのような状況において、現在、がん治療成績向上を目的として科学的根拠に基づいた効果的ながん治療法の開発が求められている。さらに、発がん、増殖、転移といったがん自体やそれに伴う病態に関わる遺伝子や蛋白、糖鎖といった数多くの分子の異常が報告され、これらの分子の特徴や機能が新しいがんの診断法や治療に応用され、個別化医療やオーダーメイド医療という語に代表されるような各個人のがんの種類や病態の特徴に応じた医療が進められつつある。実際、2019年よりがん遺伝子パネル検査が保険診療可能となった。

本研究室では、このような最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しい癌治療法の開発を目的として、がん細胞やがん組織を用いた基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、外科手術時などに得られたがん組織を利用してがんにおける分子異常を探り、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究（橋渡し研究、トランスレーショナルリサーチ）を行っている。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Udagawa H, Takahashi S, Hirao M, Tahara M, Iwasa S, Sato Y, Hamakawa T, Shitara K, Horinouchi H, Chin K, Masuda N, Suzuki T, Okumura S, Takase T, Nagai R, Yonemori K : Liposomal eribulin for advanced adenoid cystic carcinoma, gastric cancer, esophageal cancer, and small cell lung cancer. 「Cancer Medicine」 P1-10、2022年6月

Makino T, Yamasaki M, Tanaka K, Yamashita K, Urakawa S, Ishida T, Shiraishi O, Sugimura K, Miyata H, Motoori M, Fujitani K, Takeno A, Hirao M, Kimura Y, Satoh T, Yano M, Eguchi H, Doki Y, Yasuda T: Multicenter randomised trial of two versus three courses of preoperative cisplatin and fluorouracil plus docetaxel for locally advanced oesophageal squamous cell carcinoma. 「Br J Cancer」 126(11):P1555-1562、2022年6月

Motoori M, Kurokawa Y, Takeuchi H, Sano T, Terashima M, Seiji Ito S, Komatsu S, Hosoya Y, Hirao M, Yamashita K, Kitagawa Y, Doki Y: Risk Factors for Para-Aortic Lymph Node Metastasis in Esophagogastric Junction Cancer: Results from a Prospective Nationwide Multicenter Study. 「Ann Surg Oncol」 29(9):P5649-5654、2022年9月

Kurokawa Y, Doki Y, Mizusawa J, Yoshikawa T, Yamada T, Kimura Y, Takiguchi S, Nishida Y, Fukushima N, Cho H, Kaji M, Hirao M, Sasako M, Terashima M: Five-year follow-up of a randomized clinical trial comparing bursectomy and omentectomy alone for resectable gastric cancer (JCOG1001). 「Br J Surg」 110(1):P50-56、2022年12月

Aoyama S, Motoori M, Yamasaki M, Shiraishi O, Miyata H, Hirao M, Takeo A, Sugimura K, Makino T, Tanaka K, Hamakawa T, Yamashita K, Kimura Y, Fujitani K, Yasuda T, Yano M, Doki Y: The impact of weight loss during neoadjuvant chemotherapy on postoperative infectious complications and prognosis in patients with esophageal cancer: exploratory analysis of OGS1003. 「Esophagus.(E-Pub)」、2022年

Sakai D, Omori T, Fumita S, Fujita J, Kawabata R, Matsuyama J, Yasui H, Hirao M, Kawase T, Kishi K, Taniguchi Y, Miyazaki Y, Kawada J, Satake H, Miura T, Miyake A, Kurokawa Y, Yamasaki M, Yamada T, Satoh T, Eguchi H, Doki Y: Real-world effectiveness of third- or later-line treatment in Japanese patients with HER2-positive, unresectable, recurrent or metastatic gastric cancer: a retrospective observational study. 「International Journal of Clinical Oncology」 27:P1154-1163、2022年

Kajiwara T, Nishina T, Nakaya A, Yamashita N, Yamashita R, Nakamura Y, Shiozawa M, Yuki S, Taniguchi H, Hara H, Ohta T, Esaki T, Shinozaki E, Takashima A, Moriwaki T, Denda T, Ohtsubo K, Sunakawa Y, Horita Y, Kawakami H, Kato T, Satoh T, Ando K, Mizutani T, Yasui H, Goto M, Okuyama H, Yamazaki K, Yoshino T, Hyodo I: NOTCH gene alterations in metastatic colorectal cancer in the Nationwide Cancer Genome Screening Project in Japan (SCRUM-Japan GI-SCREEN). 「Journal of Cancer Research and Clinical Oncology」 148(10):P2841-2854、2022年10月

Kanai M, Kawaguchi T, Kotaka M, Manaka D, Hasegawa J, Takagane A, Munemoto Y, Kato T, Eto T, Touyama T, Matsui T, Shinozaki K, Matsumoto S, Mizushima T, Mori M, Sakamoto J, Ohtsu A, Yoshino T, Saji S, Matsuda F: Poor association between dihydropyrimidine dehydrogenase (DPYD) genotype and fluoropyrimidine-induced toxicity in an Asian population. 「Cancer Medicine(On-line)」、2022年12月

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Suzuki Y, Matsumoto T, Terazawa T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Naito A, Ishizuka Y, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y: TRESBIEN (OGSG 2101): encorafenib, binimetinib and cetuximab for early

recurrent stage II/III BRAF V600E-mutated colorectal cancer. 「Future Oncol(E-Pub)」 、
2022 年

Kotani D, Oki E, Nakamura Y, Yukami H, Mishima S, Bando H, Shirasu H, Yamazaki K, Watanabe J, Kotaka M, Hirata K, Akazawa N, Kataoka K, Shrutu Sharma, Vasily N. Aushev, Alexey Aleshin, Misumi T, Taniguchi H, Takemasa I, Kato T, Mori M, Yoshino T: Molecular residual disease and efficacy of adjuvant chemotherapy in patients with colorectal cancer. 「nature medicine」 、2023 年 1 月

Kato T, Kudo T, Kagawa Y, Murata K, Ota H, Noura S, Hasegawa J, Tamagawa H, Ohta K, Ikenaga M, Miyazaki S, Komori T, Uemura M, Nishimura J, Hata T, Matsuda C, Satoh T, Mizushima T, Ohno Y, Yamamoto H, Doki Y, Eguchi H: Phase II dose titration study of regorafenib in progressive unresectable metastatic colorectal cancer. 「nature portfolio」 13: P2331、2023 年

Fang W, Gotoh K, Kobayashi S, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Noda T, Takahashi H, Doki Y, Eguchi H, Umeshita K: Short- and Long-Term Impacts of Overweight Status on Outcomes Among Living Liver Donors. 「Transplant Proc.」 54(3):P690-695、2022 年 4 月

Yano K, Onishi H, Tsuboyama T, Nakamoto A, Ota T, Fukui H, Tatsumi M, Tanigaki T, Gotoh K, Kobayashi S, Honma K, Eguchi H, Tomiyama N: Noninvasive Liver Fibrosis Staging: Comparison of MR Elastography with Extracellular Volume Fraction Analysis Using Contrast-Enhanced CT. 「J Clin Med.」 11(19):P5653、2022 年 9 月 25 日

Nakachi K, Ikeda M, Konishi M, Nomura S, Katayama H, Kataoka T, Todaka A, Yanagimoto H, Morinaga S, Kobayashi S, Shimada K, Takahashi Y, Nakagohri T, Gotoh K, Kamata K, Shimizu Y, Ueno M, Ishii H, Okusaka T, Furuse J: Adjuvant S-1 compared with observation in resected biliary tract cancer (JCOG1202, ASCOT): a multicentre, open-label, randomised, controlled, phase 3 trial. 「Lancet」 401(10372):P195-203、2023 年 1 月 21 日

Matsusita K, Kobayashi S, Akita H, Konno M, Asai A, Noda T, Iwagami Y, Asaoka T, Gotoh K, Mori M, Doki Y, Eguchi H, Ishii H: Clinicopathological significance of MYL9 expression in pancreatic ductal adenocarcinoma. 「Cancer Rep」 5(10):P1582、2022 年 10 月

Ueno G, Iwagami Y, Kobayashi S, Mitsufuji S, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Asaoka T, Noda T, Gotoh K, Mori M, Doki Y, Eguchi H: ACAT-1-Regulated Cholesteryl Ester Accumulation Modulates Gemcitabine Resistance in Biliary Tract Cancer. 「Ann Surg Oncol」 29(5):P2899-2909、2022 年 5 月

Takayama H, Kobayashi S, Gotoh K, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Asaoka T, Noda T, Wada H, Takahashi H, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: Prognostic value of functional SMAD4 localization in extrahepatic bile duct cancer. 「World J Surg Oncol」 20(1):P291、2022年9月

Sakano Y, Noda T, Kobayashi S, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Gotoh K, Takahashi H, Asaoka T, Tanemura M, Wada H, Doki Y, Eguchi H: Tumor endothelial cell-induced CD8⁺ T-cell exhaustion via GPNMB in hepatocellular carcinoma. 「Cancer Sci」 113(5):P1625-1638、2022年5月

Mitsufuji S, Iwagami Y, Kobayashi S, Sasaki K, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Asaoka T, Noda T, Gotoh K, Takahashi H, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: Inhibition of Clusterin Represses Proliferation by Inducing Cellular Senescence in Pancreatic Cancer. 「Ann Surg Oncol」 29(8):P4937-4946、2022年8月

Sakano Y, Noda T, Kobayashi S, Kitagawa A, Iwagami Y, Yamada D, Tomimaru Y, Akita H, Gotoh K, Asaoka T, Tanemura M, Umeshita K, Mimori K, Doki Y, Eguchi H: Clinical Significance of Acylphosphatase 1 Expression in Combined HCC-iCCA, HCC, and iCCA. 「Dig Dis Sci」 67(8):P3817-3830、2022年8月

Toya K, Tomimaru Y, Kobayashi S, Hongyo H, Higashihara H, Ito T, Sasaki K, Iwagami Y, Yamada D, Akita H, Noda T, Gotoh K, Takahashi H, Asaoka T, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: A Case of Successfully Treated Varices at the Anastomosis Between the Native Jejunum and the Duodenal Graft After Pancreas Transplantation. 「Pancreas」 51(3):P e60-e61、2022年3月

Yamada D, Kobayashi S, Takahashi H, Yoshioka T, Iwagami Y, Tomimaru Y, Shigekawa M, Akita H, Noda T, Asaoka T, Gotoh K, Tanemura M, Doki Y, Eguchi H: Pancreatic CT density is an optimal imaging biomarker for earlier detection of malignancy in the pancreas with intraductal papillary mucinous neoplasm. 「Pancreatolgy」 22(4):P488-496、2022年5月

Yasui H, Takeo A, Hara H, Imamura H, Akamatsu H, Fujitani K, Nakane M, Kondoh Nakayama C, Yukisawa S, Nasu J, Miyata Y, Makiyama A, Ishida H, Yoshida N, Matsumura E, Ishigami M, Sugihara M, Ochiai A, Doi T: Prospective analysis of the expression status of FGFR2 and HER2 in colorectal and gastric cancer populations: DS-Screen Study. 「Int J Colorectal Dis.」 37(6):P1393-1402、2022年6月

Sakaue M, Sugimura K, Masuzawa T, Takeo A, Katsuyama S, Shinke G, Ikeshima R, Kawai K, Hiraki M, Katsura Y, Ohmura Y, Hata T, Takeda Y, Murata K: Long-term survival of HER2 positive gastric cancer patient with multiple liver metastases who obtained pathological complete response after systemic chemotherapy: A case report. 「Int J Surg Rep.」 94(107097):2022年5月

Takahashi T, Saito Y, Nakatsuka R, Imamura H, Motoori M, Makari Y, Takeo A, Kishi K, Adachi S, Miyagaki H, Kurokawa Y, Yamasaki M, Eguchi H, Doki Y: Analysis of the risk factors for osteoporosis and its prevalence after gastrectomy for gastric cancer in older patients: a prospective study. 「Surg Today(OnLine)」、2022年9月

Kurokawa Y, Kawase T, Takeo A, Furukawa H, Yoshioka R, Saito T, Takahashi T, Shimokawa T, Eguchi H, Doki Y: Phase 2 trial of neoadjuvant docetaxel, oxaliplatin, and S-1 for clinical stage III gastric or esophagogastric junction adenocarcinoma. 「Ann Gastroenterol Surg.」、2022年10月

Ikeda M, Takiguchi N, Morita T, Matsubara H, Takeo A, Takagane A, Obama K, Oshio A, Nakada K: Quality of life comparison between esophagogastrectomy and double tract reconstruction for proximal gastrectomy assessed by Postgastrectomy Syndrome Assessment Scale (PGSAS)-45. 「Ann Gastroenterol Surg」 1(11)、2022年11月

Masuda N, Ono M, Mukohara T, Yasojima H, Shimoi T, Kobayashi K, Harano K, Mizutani M, Tanioka M, Takahashi S, Kogawa T, Suzuki T, Okumura S, Takase T, Nagai R, Semba T, Zi-Ming Zhao, Min Ren, Yonemori K: Phase 1 study of the liposomal formulation of eribulin (E7389-LF): Results from the breast cancer expansion cohort. 「European Journal of Cancer」 168:P108-118、2022年

Sato H, Nishikawa K, Hamakawa T, Kusunoki C, Miyake M, Miyamoto A, Kato T, Mano M, Takami K, Hirao M: Evaluating Neoadjuvant Chemotherapy for Lower Esophageal Squamous Cell Carcinoma by Measuring Esophageal Wall Thickness. 「Anticancer Research」 42(11):P5655-5662、2022年11月

Hayashi C, Takahashi Y, Mori K, Kawai K, Miyo M, Toshiyama R, Sakai K, Hamakawa T, Doi T, Takeo A, Gotoh K, Miyazaki M, Takami K, Hirao M, Kato T: A case of infectious heterotopic ossification in the appendectomy scar, which formed an inflammatory granuloma. 「Journal of Surgical Case Reports」 8:P1-4、2022年8月

A-2

八十島宏行: 特殊な病態－潜在性乳癌「乳腺腫瘍学第4版」: P.401-402、2022年

A-3

今村沙弓、林千恵、水谷麻紀子、森清、眞能正幸、八十島宏行: 血球減少・DICを契機に診断され、抗HER2療法が奏効した乳癌骨髄癌腫症の1例「乳癌の臨床」37(6): P.513-519、2022年

坂野悠、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、森清、平尾素宏: 根治切除後に急速な転移再発を認め Trousseau 症候群を合併した食道 mixed neuroendocrine-non-neuroendocrine neoplasms の1例「日本消化器外科学会雑誌」55(6): P.351-359、2022年6月

宮原智、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：術前 docetaxel + oxaliplatin + S-1 療法により組織学的完全奏効を得た進行胃癌の1例「日外科系連合学会誌」47(4)：P.525-533、2022年4月

宮原智、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：fluorouracil + folinate + oxaliplatin 療法が奏効し経口摂取可能となった切除不能進行胃癌の2例「日外科系連合学会誌」47(4)：P.534-544、2022年4月

林千恵、酒井健司、俊山礼志、森清、後藤邦仁：腎細胞癌異時性胆嚢転移の1切除例「胆道」36(4)：P.537-543、2022年10月

梅津匡宏、竹野淳、浜川卓也、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：COVID-19 肺炎罹患後に根治手術を施行した胸部食道癌の一例「癌と化学療法」49(13)、2022年12月

本持知子、高見康二、加藤健志、後藤邦仁、竹野淳、土井貴司、酒井健司、浜川卓也、高橋佑典、河合賢二、俊山礼志、平尾素宏：外科領域で診療看護師（NP）が行う特定行為と有用性「日外会誌」123(5)：P.474-476、2022年4月

B-1

Hirao M, Kimura Y, Yamamoto K, Imamura H, Omori T, Kurokawa Y, Eguchi H, Doki Y: Preferred anastomosis method after distal gastrectomy in Japan. -From the results of a multi-institutional randomized controlled trial-. KINGCA WEEK 2022, Suwon, Korea, 2022年9月1日

B-2

Kagawa Y, Kotani D, Hideaki B, Takahashi N, Hamaguchi T, Kanazawa A, Kato T, Ando K, Satake H, Shinozaki E, Sunakawa Y, Takashima A, Yamazaki K, Yuki S, Nakajima H, Nakamura Y, Wakabayashi M, Taniguchi H, Ohta T, Yoshino T : Plasma RAS dynamics and anti-EGFR rechallenge efficacy in patients with RAS/BRAF wild-type metastatic colorectal cancer: REMARRY and PURSUIT trials. ASCO 2022, Chicago, USA, 2022年6月3日

Yoshino T, Watanabe J, Shitara K, Yasui H, Ohori H, Shiozawa M, Yamazaki K, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Hihara M, Soeda J, Yamamoto K, Akagi K, Ochiai A, Uetake H, Tsuchihara K, Muro K : Panitumumab (PAN) plus mFOLFOX6 versus bevacizumab (BEV) plus mFOLFOX6 as first-line treatment in patients with RAS wild-type (WT) metastatic colorectal cancer (mCRC): Results from the phase 3 PARADIGM trial. ASCO 2022, Chicago, USA, 2022年6月3日

Kotaka M, Shirasu H, Watanabe J, Yamazaki K, Hirata K, Akazawa N, Matsuhashi N, Yokota M, Ikeda M, Kato K, Alexey Aleshin, Shruti Sharma, Kotani D, Oki E, Takemasa I, Kato T, Nakamura Y, Taniguchi H, Mori M, Yoshino T: Association of circulating tumor DNA dynamics with clinical outcomes in the adjuvant setting for patients with colorectal cancer from an observational GALAXY study in CIRCULATE-Japan. ASCO2022, Chicago, USA, 2022年6月3日

Shirasu H, Taniguchi H, Matsuhashi N, Kotaka M, Nakamura Y, Oki E, Miyamoto Y, Masuishi T, Komatsu Y, Teraishi F, Yamazaki K, Goto M, Shiozawa M, Kanazawa A, Takemasa I, Yi-Hsin Liang, Kun-Huei Yeh, Yoshino T, Sato A, Kato T: A randomized, double-blind, phase III study comparing t ippifluridine/tipiracil hydrochloride therapy versus placebo in resected colorectal cancer patients who are positive for blood circulating tumor DNA after standard adjuvant therapy (EPOC 1905): ALTAIR trial in CIRCULATE-Japan (trial in progress). ASCO2022, Chicago, USA, 2022年6月3日

Kagawa Y, Kotani D, Bando H, Takahashi N, Horita Y, Kanazawa A, Kato T, Ando K, Satake H, Shinozaki E, Sunakawa Y, Takashima A, Yamazaki K, Yuki S, Nakajima H, Nakamura Y, Wakabayashi M, Taniguchi H, Ohta T, Yoshino T: Plasma RAS dynamics and efficacy of anti-EGFR rechallenge in patients with RAS/BRAF wild-type metastatic colorectal cancer: REMARRY and PURSUIT trials. ESMO GI 2022, Barcelona, Spain, 2022年6月29日

Masuishi T, Bando H, Satake H, Kotani D, Hamaguchi T, Shiozawa M, Ikumoto T, Kagawa Y, Yasui H, Moriwaki T, Kawakami H, Boku S, Oki E, Komatsu Y, Taniguchi H, Muro K, Kotaka M, Yamazaki K, Misumi T, Yoshino T, Kato T, Tsuji A: A multicenter randomized phase II study comparing CAPOXIRI plus bevacizumab and FOLFOXIRI plus bevacizumab as the first-line treatment for metastatic colorectal cancer: A safety analysis of the QUATTRO-II study. ESMO GI 2022, Barcelona, Spain, 2022年6月29日

Sawada K, Nitta H, Nakamura Y, Okamoto W, Taniguchi H, Komatsu Y, Hara H, Kato T, Nishida T, Ohta T, Esaki T, Yoshino T, Fujii S: HER2 intratumoral genetic and non-genetic heterogeneity in metastatic colorectal cancer. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Kobayashi S, Bando H, Taketomi A, Takamoto T, Shinozaki E, Shiozawa M, Hara H, Yamazaki K, Komori K, Matsuhashi N, Kato T, Kagawa Y, Yokota M, Oki E, Takahashi S, Yoshino T: A multicenter phase II clinical study evaluating the efficacy and safety of perioperative encorafenib, binimetinib plus cetuximab combination treatment in patients with surgically resectable BRAFV600E-mutant colorectal oligometastases (NEXUS). ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Boku S, Satake H, Ohta T, Mitani S, Kawakami K, Suzuki Y, Matsumoto T, Terazawa T, Yamazaki E, Hasegawa H, Ikoma T, Uemura M, Yamaguchi T, Naito A, Ishizuka Y,

Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Tsujinaka T, Kato T, Satoh T, Kagawa Y: TRESBIEN (OGSG 2101): Encorafenib, binimetinib and cetuximab for early relapse stage II/III BRAF V600E-mutated CRC. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Muro K, Watanabe J, Shitara K, Yamazaki K, Ohori H, Shiozawa M, Yasui H, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Hihara M, Soeda J, Yamamoto K, Akagi K, Ochiai A, Uetaka H, Tsuchihara K, Yoshino T: Early tumor shrinkage (ETS) and depth of response (DpR) analyses in metastatic colorectal cancer (mCRC) treated with first-line mFOLFOX6 plus panitumumab (PAN) or bevacizumab (BEV): Results from the phase III PARADIGM trial. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月10日

Yuki S, Yamazaki K, Sunagawa Y, Taniguchi H, Matsuishi T, Shiozawa M, Bando H, Nishina T, Yasui H, Ohta T, Takahashi N, Denda T, Yoshida K, Kato T, Oki E, Okugawa Y, Ebi H, Abe Y, Nomura S, Yoshino T: Analysis of plasma angiogenesis factors on the efficacy of 2nd-line (2L) chemotherapy (chemo) combined with angiogenesis inhibitors (AIs) in metastatic colorectal cancer (mCRC): Results from GI-SCREEN CRC Ukit study. ESMO2022, Paris, France, 2022年9月9日

Shitara K, Muro K, Watanabe J, Yamazaki K, Ohori H, Shiozawa M, Yasui H, Oki E, Sato T, Naito T, Komatsu Y, Kato T, Soeda J, Yamamoto K, Yamashita R, Akagi K, Ochiai A, Uetake H, Tsuchihara K, Yoshino T: Negative hyperselection of patients with RAS wild-type metastatic colorectal cancer for panitumumab: A biomarker study of the phase III PARADIGM trial. ASCO-GI2023, San Francisco, 2023年1月19日

Watanabe J, Kagawa Y, Kotani D, Ando K, Chida K, Oba K, Bando H, Hoji H, Shimamoto S, Sakashita S, Kuwata T, Tsuboyama T, Uemura M, Uehara K, Ito M, Oki E, Takemasa I, Misugi E, Kato T, Yoshino T: Ensemble study: A multicenter, randomized, phase III trial to test the superiority of consolidation irinotecan, capecitabine and oxaliplatin vs capecitabine and oxaliplatin following short course radiotherapy as total neoadjuvant therapy in patients with locally advanced rectal cancer. ASCO-GI2023, San Francisco, 2023年1月19日

Tsukada Y, Bando H, Inamori K, Wakabayashi M, Togashi Y, Koyama S, Kotani D, Yuki S, Komatsu Y, Homma S, Taketomi A, Uemura M, Kato T, Fukui M, Kojima M, Sato A, Nishikawa H, Ito M, Yoshino T: Survival outcomes and functional results of VOLTAGE-A: Preoperative chemoradiotherapy (CRT) and consolidation nivolumab (nivo) in patients (pts) with both microsatellite stable (MSS) and microsatellite instability-high (MSI-H) locally advanced rectal cancer (LARC). ASCO-GI2023, San Francisco, 2023年1月19日

Sakamoto Y, Morizane C, Okusaka T, Mizusawa J, Hiraoka N, Shiota T, Ueno M, Ikeda M, Ozaka M, Yamaguchi H, Mizuno N, Nishina T, Katanuma A, Kojima Y, Gotoh K,

Okamura K, Kawamoto Y, Sugimori K, Terashima T, Furuse J: Impact of ERCC1 on the outcomes of chemotherapy against advanced biliary tract cancer: an ancillary study of the Japan Clinical Oncology Group randomized phase III trial (JCOG1113). APASL oncology 2022, Takamatsu, 2022 年 9 月 1 日

Mitsunaga S, Ikeda M, Nomura S, Morizane C, Todaka A, Kamei K, Yanagibashi H, Mizuno N, Gotoh K, Kawamoto Y, Shirakawa H, Okano N, Nomura T, Takahashi A, Makino I, Anbo Y, Ohta K, Katayama H, Konishi M, Ueno M: Effects of gene expression in 5-FU metabolic pathways in a phase III trial evaluating adjuvant S-1 therapy compared to surgery alone following curative resection for biliary tract cancer (JCOG1202A1). ASCO-GI2023, San Francisco, 2023 年 1 月 19 日

Yasojima H, Imoto S, Nagashima T, Onishi T, Takashima T, Kitada M, Kawada M, Hayashida T, Naoi Y, Aihara T, Wada N, Kawabata H, Yoshida M, Uhi Toh, Yoneyama K, Yamada A, Tsuda H, Masuda N, Saito M, Oba, Sakamoto J: Observational study of axilla treatment for breast cancer patients with 1 to 3 positive micrometastases or macrometastases in sentinel lymph nodes. ASCO2022, Chicago, USA, 2022 年 6 月 3 日

Hattori M, Naito Y, Yamanaka T, Yasojima H, Nakamura R, Watanabe J, Yoshinami T, Ozaki Y, Fujisawa T, Nakamura Y, Bando H, Yoshino T, Yamaguchi R, Imoto I, Iwata H: Detection of presumed germline pathogenic variants of hereditary breast cancer predisposition genes in circulating tumor DNA: SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN. ASCO2022, Chicago, USA, 2022 年 6 月 3 日

Futamura M, Nakayama T, Yoshinami T, Oshiro C, Ishihara M, Morita M, Watanabe A, Taniguchi A, Tsukabe M, Shimoda M, Mitta K, Chihara Y, Yasojima H, Ouchi Y, Tokumaru Y, Ishihara T, Masuda N: Detection of high-risk patients resistant to CDK4/6 inhibitors with hormone receptor-positive HER2-negative breast cancer in Ja.SABCS 2022, an Antonio, USA, 2022 年 12 月 6 日

B-3

Oki E, Ando K, Takemasa I, Kato T, Kotaka M, Watanabe J, Nakamura Y, Kotani D, Yoshino T, Mori M: The first 1365 patients results of CIRCULATE Japan: The ctDNA Dynamics after Surgery ctDNA の術後ダイナミクス: CIRCULATE Japan の中間結果報告。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜、2022 年 7 月 21 日

植村 守、瀧口暢生、中上勝一郎、楠誓子、関戸悠紀、紀波多 豪、浜部敦史、荻野崇之、三吉範克、高橋秀和、加藤健志、池田正孝、関本貢嗣、土岐祐一郎、江口英利：直腸癌局所再発に対する外科治療の現状。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

植村 守、瀧口暢生、中上勝一郎、楠誓子、関戸悠、紀波多 豪、浜部敦史、荻野崇之、三吉範克、高橋秀和、加藤健志、池田正孝、土岐祐一郎、江口英利：進行

再発直腸癌に対する腹腔鏡下手術の要点。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 9 日

山下公太郎、田中晃司、牧野知紀、金村剛志、百瀬洸太、浜川卓也、竹野淳、白石治、西塔拓郎、山本和義、高橋 剛、黒川幸典、中島清一、宮田博志、平尾素宏、安田卓司、江口英利、土岐祐一郎：高齢者食道癌に対する術前補助療法を含めた手術治療の短期長期成績。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 16 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：膵癌肺転移に対する外科的切除の有用性に関する検討。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜、2022 年 7 月 20 日

後藤邦仁：肝臓切除におけるエネルギーソースとそれに伴う視野の確保。JDDW2022 第 20 回日本消化器外科学会大会共催セミナー、福岡、2022 年 10 月 28 日

竹野 淳、本告正明、岸漣太郎、文 正浩、中原裕次郎、大森 健、原 尚志、新野直樹、平尾素宏、浜川口也、西川和宏、杉村啓二郎、益澤 徹、宮崎安弘、藤谷和正、山本和義、黒川幸典、土岐祐一郎：StageIV胃癌に対する Conversion Surgery の予後因子解析～他施設共同後方視研究の結果から～。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

本告正明、黒川幸典、西川和宏、宮垣博道、大森 健、古川陽菜、木村 豊、今村博司、竹野 淳、益澤 徹、松山仁、土岐祐一郎：胃癌術後補助化学療法中の支持療法の有用性についての多施設共同ランダム化比較試験。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

服部正也、内藤陽一、山中隆司、八十島宏行、中村力也、渡邊純一郎、吉波哲大、尾崎由記範、中村能章、坂東英明、吉野孝之、山口類、井本逸勢、岩田広治：ctDNA による遺伝性乳癌原因遺伝子の生殖細胞系列病的バリエーションの推定：SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 7 月 1 日

Yasojima H, Sakai S, Yamashita R, Sawada K, Yoshikawa A, Horasawa S, Fujisawa T, Nakamura Y, Yamashita T, Yamanaka T, Hattori M, Mukohara T, Yoshino T, Naito Y, Iwata H : Gut microbiome comparison between metastatic breast cancer and other cancers, and its association with subtype and efficacy of immune checkpoint inhibitors。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 21 日

高橋佑典、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：ロボット支援側方リンパ節郭清における安全性に留意したエネ

ルギーデバイスの選択。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

本持知子、高見康二、加藤健志、後藤邦仁、竹野 淳、平尾素宏：外科領域で診療看護師 (NP) が行う特定行為と有用性。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

B-4

高見康二、土井貴司、安藤性實、宮本智、小河原光正、井上敦夫、森 清：3 回手術後に切除不能となり EGFR-TKI 耐性となった多発肺癌に、コンバージョン手術と放射線治療を行った 1 例。第 63 回日本肺癌学会学術集会、福岡、2022 年 12 月 掲示

本告正明、青山修宇、山崎 誠、平尾素宏、宮田博志、白石 治、牧野知紀、安田卓司、矢野雅彦、土岐祐一郎：食道癌術前化学療法中の体重減少が術後感染性合併症におよぼす影響について。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜、2022 年 7 月 20 日

畑 裕基、山下大輔、村津圭治、竹野淳、平尾素宏、吉野宗宏：病院薬剤師による Web ミーティングツールを用いた内服抗がん剤患者に対する薬学的介入。第 30 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日

太田高志、山崎健太郎、賀川義規、小谷大輔、坂東英明、加藤健志、沖 英次、篠崎英司、砂川 優、結城敏志、中島裕理、中村能章、若林将史、谷口浩也、吉野孝之：RAS/BRAF 野生型進行再発大腸癌患者における血中バイオマーカーのダイナミクスと抗 EGFR 抗体リチャレンジの有効性。REMARRY 試験/PURSUIT 試験。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 20 日

澤田憲太郎、Hiroaki Nitta、中村能章、岡本 渉、谷口浩也、小松嘉人、原 浩樹、加藤健志、仁科智裕、太田高志、薦田正人、吉野孝之、藤井誠志：切除不能大腸がんにおける腫瘍内 HER2 不均一性の検討。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 20 日

森脇俊和、坂東英明、佐竹悠良、小谷大輔、濱口哲弥、沖 英次、小松嘉人、谷口浩也、室 圭、小高雅人、山崎健太郎、三角俊裕、吉野孝之、辻晃仁、加藤健志：切除不能大腸癌に対する CAPOXIRI+BEV vs FOLFOXIRI+BEV:QUATTRO-II 試験の安全性解析。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 22 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：高齢者腺癌に対する外科的治療の安全性に関する検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月

Gotoh K, Sakai K, Toshiyama R, Yanagisawa K, Miyo M, Takahashi Y, Hamakawa T, Takeno A, Kato T, Hirao M : Long-term outcomes for pT1 pancreatic ductal adenocarcinoma。第 34 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、松山、2022 年 6 月 10 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、柳澤公紀、河合賢二、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏 : 多発リンパ節転移を疑われ化学療法施行後に根治切除を施行した肝内胆管癌の 2 症例。第 58 回日本胆道学会学術集会、横浜、2022 年 10 月 14 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏 : 高齢者膵癌に対する術後補助化学療法の有用性に関する検討。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 26 日

後藤邦仁、酒井健司、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏 : 肝静脈に接する肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除術。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

竹野 淳、平尾素宏、浜川卓也、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、岡田公美子、高橋佑典、酒井健司、水谷麻紀子、八十島宏行、土井貴司、後藤邦仁、増田慎三、加藤健志、高見康二 : 食道浸潤長に基づく食道胃接合部癌に対する治療戦略の検証。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

竹野 淳、平尾素宏、浜川卓也、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志 : 80 才以上の高齢者に対する食道癌手術の治療成績の検討。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 20 日

竹野 淳、平尾素宏、浜川卓也、柳澤公紀、俊山礼志、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志 : ロボット支援下食道切除導入期の治療成績。第 76 回日本食道学会学術集会、東京・WEB、2022 年 9 月

広田将司、高橋剛、斎穎百合奈、川端良平、中塚梨絵、今村博司、本告正明、間狩洋一、竹野 淳、岸健太郎、足立真一、宮垣博道、黒川幸典、山崎 誠、江口英利、土岐祐一郎 : 胃癌切除術後骨障害に対するミノドロン酸治療の服薬継続における課題：多施設ランダム化比較試験の解析から。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

岸 健太郎、文 正浩、中原裕次郎、山本和義、大森 健、原 尚志、益澤 徹、杉村啓二郎、本告正明、竹野 淳、浜川卓也、黒川幸典、藤谷和正、土岐祐一郎 : pCR 胃癌の予後と術後補助療法に関する検討～多施設後向き研究～。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

杉村啓二郎、本告正明、山本和義、岸健太郎、益澤 徹、大森 健、原 尚志、中原裕次郎、竹野 淳、浜川卓也、黒川幸典、土岐祐一郎：術前化学療法を施行した進行胃癌に対する開腹 vs 腹腔鏡手術の治療成績の検討。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 24 日

土井貴司、高見康二、小河原光正、木村 剛、宮本 智、安藤性實：偽陽性の肺門縦隔リンパ節腫脹を伴った混合型小細胞癌の 1 切除例。第 45 回日本呼吸器内視鏡学会学術集会、WEB、2022 年 5 月 27 日

土井貴司、高見康二、徳永拓也、森 清、井上敦夫：限局性悪性中皮腫の 1 切除例。第 3 回日本石綿・中皮腫学会学術集会、西宮、2022 年 9 月 17 日

土井貴司、徳永拓也、高見康二：縮小ののちに急速な際増大がみられた胸腺癌の 1 切除例。第 42 回日本胸腺研究会、WEB、2023 年 2 月

八十島宏行、林 千恵、今村沙弓、岡田公美子、清水幸生、水谷麻紀子：T4a-c 乳癌の臨両病理学的因子と予後との検討。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 6 月 30 日

多田 寛、増田紘子、安立弥生、岩谷胤生、上本康明、大谷陽子、梶原友紀子、北川大、古川孝広、相良安昭、枝園忠彦、田辺裕子、谷岡真樹、服部正也、原文堅、八十島宏行、吉村健一、岩田広治、増田慎三：転移・再発乳癌における遺伝子パネル検査 F1CDx と F1LCDx の治療方針決定に与える影響を検討する観察研究。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 7 月 1 日

増田紘子、多田 寛、安立弥生、岩谷胤生、上本康明、北川 大、古川孝広、相良安昭、枝園忠彦、原文堅、八十島宏行、吉村健一、岩田広治、増田慎三：転移・再発乳癌における遺伝子パネル検査の観察研究 REIWA study の中間解析。第 60 回日本癌治療学会学術集会、神戸、2022 年 10 月 20 日

水谷麻紀子、林 千恵、今村沙弓、岡田公美子、八十島宏行：転移・再発乳癌に対する一次治療としてのフルベストラント+CDK4/6 阻害剤。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 6 月 30 日

浜川卓也、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：噴門側胃切除術後の体重減少の影響とリスク因子に関する検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月

浜川卓也、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：胃癌肝転移切除例の治療成績。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 20 日

浜川卓也、竹野淳、柳澤公紀、俊山礼志、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：HALS 胃管作成の膈上縁郭清における術野展開の工夫。第 76 回日本食道学会学術集会、東京、2022 年 9 月 25 日

浜川卓也、竹野淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：プロクター指導下のロボット支援腹腔鏡下胃切除術の導入と初期成績。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 9 日

浜川卓也、竹野淳、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：Internal Organ Retractor をコンソール操作のみで体腔内装脱着する工夫。第 15 回日本ロボット外科学会学術集会、名古屋、2023 年 2 月 2 日 優秀演題

浜川卓也、竹野淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：困難症例（進行胃癌、肥満症例）に対する腹腔鏡下胃切除術におけるガーゼテーピング法。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 25 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：胆嚢癌疑診例に対する Laennec 被膜を意識した腹腔鏡下全層胆嚢摘出術症例の検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月

Sakai K、Gotoh K、Toshiyama R、Terakawa K：Radical resection of an initially unresectable intrahepatic cholangiocarcinoma after chemotherapy with gemcitabine plus S-1: a case report。第 34 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、松山、2022 年 6 月 10 日

酒井健司、俊山礼志、後藤邦仁、柳澤公紀、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：下大静脈腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対し肝動注療法後体外循環を用いて肝切除し得た一例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

酒井健司、後藤邦仁、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、平尾素宏：Unresectable , Borderline resectable 膵癌に対する化学(放射線)療法後 Conversion surgery の治療成績。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 21 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、福武伸康：膵頭十二指腸切除後に発症した魚骨による胆管内異物の一例。第 58 回日本胆道学会学術集会、横浜、2022 年 10 月 14 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、大崎真央、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：当院における抗血栓薬内服下の急性胆嚢

炎に対する緊急胆嚢摘出術の検討。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 25 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：抗血栓薬内服下の急性胆嚢炎に対する緊急腹腔鏡下胆嚢摘出術の検討。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

高橋佑典、三代雅明、柳澤公紀、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：当院における直腸癌に対する TaTME、ロボット支援下手術の治療成績。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 15 日

高橋佑典、柳澤公紀、三代雅明、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏、加藤健志：当院における直腸癌に対するロボット支援下手術。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 22 日

高橋佑典、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、平尾素宏、加藤健志：当院における若年者大腸癌症例の検討。第 98 回大腸癌研究会学術集会、東京、2023 年 1 月 27 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、宮崎道彦、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：sT4b 結腸癌に対する腹腔鏡下手術の工夫と治療成績。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月 14 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏：閉塞性大腸癌に対する大腸ステントを用いた Bridge to Laparoscopic Surgery。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 22 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、宮崎道彦：他臓器合併切除を伴う進行結腸癌に対する低侵襲手術。第 77 回日本大腸肛門病学会学術集会、幕張、2022 年 10 月 15 日

三代雅明、加藤健志、柳澤公紀、高橋佑典、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、平尾素宏：COVID-19 パンデミックの大腸癌診療に対する影響。JDDW2022、福岡、2022 年 10 月 28 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典：急性胆嚢炎の緊急手術症例の検討。第 112 回日本外科学会定期学術集会、熊本・WEB、2022 年 4 月

Toshiyama R, Sakai K, Gotoh K : Two cases of lymphoepithelial cyst of the pancreas.
第 34 回日本肝胆膵外科学会・学術集会、松山、2022 年 6 月 10 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏、原修一郎 : 切除不能肝内胆管癌に対して GCS 療法を施行し、Conversion surgery を施行した 1 例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏 : 当院における急性胆嚢炎に対する緊急手術例の治療成績。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 21 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、梅津匡宏、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、河合賢二、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏 : 胆嚢癌との鑑別が困難であった黄色肉芽腫性胆嚢炎の 1 例。第 58 回日本胆道学会学術集会、横浜、2022 年 10 月 14 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、寺川航基、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏 : TAPP 法で修復した Plug 法術後の再発鼠径部膀胱ヘルニアの 1 例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、豊後雅史、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏 : 腹腔鏡下 IPOM 修復術後の腹壁癒痕ヘルニア再発に対して再度腹腔鏡下 IPOM 修復術を行った 1 例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

柳澤公紀、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏 : 超高齢患者における閉塞性大腸癌に対する bridge to surgery。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

大崎真央、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏 : 閉塞性膵炎を合併した膵管内乳頭粘液性腺癌に対して根治切除を施行した 1 例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

今村紗弓、森 清、水谷麻紀子、林千恵、岡田公美子、眞能正幸、八十島宏行、増田慎三 : HER2 陽性乳癌に対する術前薬物療法の効果予測に関する臨床病理学的研究。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 7 月 1 日

林 千恵、増田慎三、今村紗弓、岡田公美子、水谷麻紀子、八十島宏行 : 再発乳癌の発見契機と再発診断における NCC-ST-439 の有用性の検討。第 30 回日本乳癌学会学術総会、横浜、2022 年 6 月 30 日

林 千恵、赤澤香、岡田公美子、八十島宏行：術後 13 年目再発治療中に、確定診断に難渋した HER2 陽転化胃転移の一例。第 20 回日本乳癌学会近畿地方会、和歌山、2022 年 12 月 3 日

梅津匡宏、竹野 淳、柳澤公紀、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、酒井健司、土井貴司、後藤邦仁、加藤健志、高見康二、平尾素宏：COVID-19 肺炎罹患後に根治手術を施行した胸部食道癌の一例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

梅津匡宏、三代雅明、加藤健志：手術治療が奏功した急性偽性結腸閉塞症(Ogilvie 症候群) の 2 例。第 77 回日本消化器外科学会総会、横浜・WEB、2022 年 7 月 22 日

梅津匡宏、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：腓神経鞘腫に対して外科的切除を行った一例。第 84 回日本臨床外科学会総会、福岡、2022 年 11 月 24 日

梅津匡宏、浜川卓也、竹野 淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：骨肉腫術後肺転移に対し Pazopanib 投与中に消化管穿孔をきたした一例。第 59 回日本腹部救急医学会総会、沖縄、2023 年 3 月 10 日

阿部優、俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、柳澤公紀、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：放射線治療後に膈転移を来した子宮頸癌の 1 例。第 44 回日本癌局所療法研究会、大阪、2022 年 7 月 1 日

阿部優、浜川卓也、竹野淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：喉摘後咽頭狭窄を有する患者の早期残胃癌に対し経口細径内視鏡補助下胃内手術を施行した 1 例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 9 日

阿部 優、浜川卓也、竹野淳、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、後藤邦仁、加藤健志、平尾素宏：幽門側胃切除術後の単独脾転移に対し腹腔鏡下残胃温存脾臓摘出術を施行した一例。第 95 回日本胃癌学会総会、札幌、2023 年 2 月 25 日

今西涼華、高橋佑典、加藤健志、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏：骨盤内に進展した臀部 epidermal cyst に対して外科的切除を行った一例。第 35 回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022 年 12 月 8 日

萩原佳菜、俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：血友病患者に発症した出血性

胆嚢炎に対して緊急腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した1例。第84回日本臨床外科学会総会、福岡、2022年11月25日

萩原佳菜、河合賢二、加藤健志、徳山信嗣、高橋佑典、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、竹野 淳、後藤邦仁、平尾素宏：下行結腸穿孔を来した血管型 Ehlers-Danlos 症候群の一例。第59回日本腹部救急医学会総会、沖縄、2023年3月10日

徳永拓也、土井貴司、高見康二：FDG-PET で集積を示し、胸腺腫と鑑別が困難であったコレステリン肉芽腫の一切除例。第84回日本臨床外科学会総会、福岡、2022年11月25日

豊後雅史、俊山礼志、後藤邦仁、酒井健司、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：重症筋無力症（myasthenia gravis：MG）患者に発症した臍ヘルニアに対して外科手術を行った1例。第35回日本内視鏡外科学会総会、名古屋、2022年12月10日

豊後雅史、酒井健司、後藤邦仁、萩原佳菜、梅津匡宏、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：広範囲の腸管嚢胞様気腫症に対して保存的治療で軽快した3例。第59回日本腹部救急医学会総会、沖縄、2023年3月9日

豊後雅史、高橋佑典、加藤健志、徳山信嗣、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：非代償性肝硬変を合併する大腸癌症例に対して腹腔鏡手術を行った2例。第206回近畿外科学会、大阪、2023年3月18日

竹内太郎、東山智彦、土井貴司、高見康二：新型コロナウイルス感染後に手術を施行した若年者の自然気胸の1例。第84回日本臨床外科学会総会、福岡、2022年11月25日

B-5

加藤健志：大腸癌の遺伝子変異と治療戦略。第36回兵庫大腸癌治療研究会、神戸、2022年4月22日

加藤健志：進行・再発大腸癌グレードに見合った治療戦略とガイドライン 2022。第9回平成大腸癌カンファレンス、神戸・WEB、2022年5月11日

加藤健志：大腸がんとは。日本人が一番かかる大腸がん～実は身近にある「がん」、まずは知ることから～WEB シンポジウム、大阪・WEB、2022年5月22日

加藤健志：進行再発大腸癌 up date。第2回川崎北部大腸セミナー、横浜・WEB、2022年5月26日

加藤健志：進行再発大腸癌治療 update。第 12 回城北大腸癌治療セミナー、東京・WEB、2022 年 6 月 24 日

加藤健志：若手外科医への提言。OSAKA U18C-STAR-Colorectal Surgeon's Chemotherapy Seminar-、大阪、2022 年 7 月 29 日

加藤健志：進行・再発大腸がん薬物療法 Update。Chugai Colorectal Cancer web Symposium in 新潟、大阪、2022 年 8 月 6 日

加藤健志：大腸がん個別化医療の新たな展開。Chugai Colorectal Cancer web Symposium in HOKKAIDO、札幌、2022 年 8 月 26 日

加藤健志：進行・再発大腸がん薬物療法 Update。第 47 回日本大腸肛門病学会九州地方大会/第 38 回九州ストーマリハビリテーション研究会アフタヌーンセミナー、長崎、2022 年 10 月 1 日

加藤健志：大腸がん個別化医療～国内外ガイドラインを踏まえて～。Chugai Colorectal Cancer web Symposium in KYUSHU、福岡、2022 年 10 月 7 日

加藤健志：進行・再発大腸がん薬物療法 Update。高知大腸癌薬物療法セミナー、高知・WEB、2022 年 10 月 12 日

加藤健志：BEST な大腸癌治療を目指して～進行・再発大腸癌化学療法戦略を UPDATE～。消化器癌カンファレンス in 香川、高松、2022 年 12 月 23 日

加藤健志：大腸癌の治療戦略について。CRC Seminar in Hokuriku、金沢、2023 年 2 月 25 日

竹野淳：肥満 2 型糖尿病患者に対する減量・代謝改善手術について。法円坂地域医療フォーラム、大阪、2022 年 5 月 21 日

竹野淳：胃癌治療ガイドラインと薬物療法について。Gastric Cancer Web Seminar、大阪、2022 年 7 月 7 日

八十島宏行：HER2 陽性乳癌で TCbHP を選ぶ意義とマネジメント。乳がん Web セミナー、大阪、2022 年 7 月 13 日

八十島宏行：企業が実施する従業員向け乳がん検診に対する助言。アドバイザー一会議、大阪、2022 年 7 月 28 日

八十島宏行：TNBC の治療戦略。Chugai Nakanoshima Breast Cancer Seminar、大阪、2022 年 11 月 26 日

安井翔之介、浜川卓也、河部彩香、関舞、宮城正和、梅津匡宏、竹野 淳、藪みなみ、荒川和子、和田紋佳、石田みどり、大土彩子、山本真弓、内川巖志、内藤裕子、石田永、平尾素宏：がん患者に対する NST 早期介入の意義に関する検討。第 30 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2022 年 9 月 17 日 優秀演題

B-6

八十島宏行：HER2 陽性乳がん周術期における治療戦略。Breast Cancer Professional Conference、大阪、2022 年 5 月 24 日

八十島宏行：HER2 陽性乳癌で TCbHP を選ぶ理由とマネジメント。はりま乳癌治療を考える会 2022、兵庫、2022 年 7 月 21 日

八十島宏行：患者目線で考える乳がん治療～あなたが乳がん治療を受ける立場なら～。乳がん診療サポートセミナー～本当に知りたい乳がん治療～、大阪、2022 年 8 月 24 日

八十島宏行：病院・薬局連携体制のために知っておくべき乳癌治療のこと。薬薬連携 Web セミナー、大阪・WEB、2023 年 3 月 8 日

八十島宏行：複雑化する乳癌診療において各施設が果たすべき役割について。がん診療セミナー、八尾・WEB、2023 年 3 月 24 日

酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、竹野 淳、加藤健志、平尾素宏：切除不能肝内胆管癌に対して化学療法後二期的肝切除(ALPPS)を施行した一例。第 50 回近畿肝臓外科研究会、大阪、2023 年 1 月 28 日

今西涼華、高橋佑典、加藤健志、河合賢二、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：骨盤内に進展した臀部 epidermal cyst に対して外科的切除を行った一例。第 642 回大阪外科集談会、大阪、2022 年 5 月 14 日

今西涼華、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、徳山信嗣、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏：十二指腸乳頭部原発 mixed adenoneuroendocrine carcinoma(MANEC) の 1 切除例。第 114 回大阪胆道疾患研究会、web、2023 年 3 月 17 日

萩原佳菜、河合賢二、加藤健志、高橋佑典、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、高見康二、平尾素宏：下行結腸穿孔を来した血管型 Ehlers-Danlos 症候群の一例。第 644 回大阪外科集談会、大阪、2022 年 9 月 10 日

徳永拓也、徳山信嗣、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、酒井健司、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、後藤邦仁、宮崎道彦、高見康二、平尾素宏、加藤健志：成人回腸重複腸管穿孔の一例。第 647 回大阪外科集談会、大阪、2023 年 3 月 4 日

豊後雅史、酒井健司、後藤邦仁、俊山礼志、河合賢二、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、竹野 淳、加藤健志、高見康二、平尾素宏：広範囲の腸管嚢胞様気腫症に対して保存的加療で軽快した 3 例。第 645 回大阪外科集談会、大阪、2022 年 11 月 19 日 最優秀演題 2022 年度優秀演題

B-9

竹野 淳：DOCTOR's FRAP。FM 大阪 LOVE FLAP、大阪、2022 年 11 月 21 日

高度医療技術開発室

室長 松村泰志
室員 安部晴彦

近年における医療を取り巻く情報処理や画像処理の技術革新により、診断、治療における医用画像診断装置の利用範囲は拡大しており、著しいイノベーションを引き起こしている。昨年より新型コロナウイルスの世界的パンデミックによって我々の生活や産業構造は大きな変革を余儀なくされた。そのような変革の中で画像が果たす役割は大きくなってきている。遠隔モニタを用いた遠隔診療などはさらに推進されていくであろう。診断技術に関しても AI などのサポートを受けながら今まで以上に向上していくものと考えられる。本研究室ではこれまでにない新しい医療技術開発の基盤を構築していく。

平成 24 年度より循環器系研究室員を配置し、医用画像診断装置の技術開発を大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座とともに推進した。

平成 27 年度より、院内臨床症例（特に心房細動症例、大動脈弁狭窄症症例）の心臓超音波画像解析も並行して推進した。

平成 29 年度は、院内臨床症例で僧帽弁輪石灰化、大動脈弁石灰化を CT 画像から解析し、心臓超音波画像と組み合わせることで解析することによって、冠動脈石灰化のリスク層別化が可能であること。また心エコー検査と生体インピーダンス分析を併用することによって心不全患者の再入院リスク層別化が可能であることを報告した。(AHA2017、ACC2018)

平成 30 年度は、昨年の CT 画像検査、心エコー検査に関する研究を進め、それぞれ報告を行った。(AHA2018) この研究が、心エコー学会に認められ海外発表優秀論文賞を受賞した。

平成 31 年度（令和元年）は、大阪大学大学院医学系研究科循環器内科学において多施設で実施している心不全レジストリ登録を行っているデータから、心エコーによるうっ血の指標をスコア化し、層別化することによって心不全患者の予後を予測することを報告した。

(AHA2019) さらに、尿検査の結果から心不全患者の予後が予測可能であることも報告した (ACC2020)。

令和 2 年度は、心臓リハビリテーションにおいて、心不全患者の栄養状態と身体活動性が生命予後に影響していることを報告した (ESC Heart Fail 2020;7:1801-1808)。

令和 3 年度は、COVID-19 パンデミックの影響もあったが、心エコー検査の簡便な指標を用いて、収縮の保たれた心不全患者の予後予測が可能であることを報告した (JACC Asia 2022;1:73-84)。

令和 4 年度は、COVID-19 ワクチン関連劇症型心筋炎の報告 (EHJ Case Reports 2022 doi:10.1093/ehjcr/ytac290.) を行うとともに、AMED 医工連携イノベーション推進事業で「人工知能による心不全患者胸部レントゲン画像診断支援」に関する提案を行い、企業と連動して医療技術開発を進める準備段階に入った。

【2022 年度 研究発表業績】

A-0

Horiuchi K, Kosugi S, Abe H, Ueda Y : Fulminant myocarditis after the first dose of mRNA-1273 vaccination in a patient with previous COVID-19: a case report. 「European Heart Journal Case Reports」

A-3

相木佐代、安部晴彦、吉村麻美、柿本由美子、交久瀬綾香、田中奈桜、西菌博章、河瀬安紗美、安井博規：心不全患者に対する退院前段階における多職種 Web カンファレンスの実施報告「Palliative Care Research」 17(3) : P.105-106、日本緩和医療学会、2022 年 9 月 26 日

B-3

柳 善樹、安部晴彦、小元真生、鳥飼真依、赤嶺和昭、中川紗希、谷口久美、水松千香子、末武 貢、眞能正幸：心エコー機器の基本機能を使い倒す -知るべき基礎編-。日本心エコー図学会第 33 回学術集会、鳥取市、2022 年 4 月 8 日

安部晴彦、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、玉置俊介、矢野正道、中川彰人、中川雄介、山田貴久、安村良男、土肥智晴、砂 真一郎、彦惣俊吾、中谷大作、是恒之宏、坂田泰史：心不全チーム医療における Echocardiographic Congestion Grade の役割。日本心エコー図学会第 33 回学術集会、鳥取市、2022 年 4 月 8 日

B-4

近藤信吾、中村雅之、安部晴彦、柳 善樹、大崎 慧、大里和樹、家原卓史、福島貴嗣、堀内恒平、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、松村泰志、上田恭敬：経胸壁心エコー図検査で診断が困難であった縦隔奇形種の一例。日本心エコー図学会第 33 回学術集会、米子市、2022 年 4 月 9 日

大崎 慧、家原卓史、安部晴彦、上田恭敬、井上耕一、池岡邦泰、三嶋 剛、尾崎立尚、小杉隼平、山根治野、高安幸太郎、中村雅之、大橋拓也：去勢抵抗性前立腺癌のホルモン治療中に発症したアピラテロン関連心不全の一例。第 8 回日本心筋症研究会、高知市、2022 年 5 月 14 日

小杉隼平、上田恭敬、安部晴彦、池岡邦泰、三嶋 剛、尾崎立尚、高安幸太郎、大橋拓也、山根治野、中村雅之、福島貴嗣、堀内恒平、家原卓史、大崎 慧、大里和樹、井上耕一、是恒之宏、松村泰志：体外循環式心肺蘇生を施行した心筋梗塞患者における予後の検討。第 30 回日本心血管インターベンション治療学会、WEB、2022 年 7 月 23 日

安部晴彦、中村雅之、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋 剛、池岡 邦泰、井上耕一、上田恭敬、瀬尾昌裕、矢野正道、林隆治、山田貴久、安村良男、外海洋平、彦惣俊吾、坂田泰史：左室駆出率の保たれた心不全における機能性僧帽弁および三尖弁閉鎖不全症の有病率と予後への影響。第 26 回日本心不全学会学術集会、奈良市、2022 年 10 月 23 日

中村雅之、安部晴彦、大橋拓也、高安幸太郎、福島貴嗣、堀内恒平、家原卓史、水森祐樹、村岡直哉、南 慎哉、鶴飼一穂、坂本麻衣、山根治野、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋 剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、是恒之宏、松村泰志：Effects of Sodium-Glucose Cotransporter 2 Inhibitors on Exercise Intensity in Outpatient Cardiac Rehabilitation。第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 10 日

堀内恒平、高安幸太郎、安部晴彦、家原卓史、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：A Case of Suspected COVID-19 Vaccine Associated Chronic Myocarditis。第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 10 日

鵜飼一穂、家原卓史、安部晴彦、中村雅之、福島貴嗣、堀内恒平、水森祐樹、村岡直哉、南慎哉、坂本麻衣、大橋拓也、山根治野、高安幸太郎、小杉隼平、尾崎立尚、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：Left Ventricular Thrombus in a Patient with Nephrotic Syndrome Associated with Hepatitis C。第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2022 年 3 月 10 日

Iehara T, Abe H, Nakamura M, Fukushima T, Horiuchi K, Mizumori Y, Muraoka N, Minami S, Ukai K, Yamane H, Ohashi T, Takayasu K, Kosugi S, Ozaki T, Mishima T, Ikeoka K, Inoue K, Ueda Y, Matsumura Y：Impact of Advanced Chronic Kidney Disease on 5-Year Outcomes in Patients with Heart Failure. 第 87 回日本循環器学会学術集会、福岡市、2023 年 3 月 11 日

B-6

安部晴彦：最新のガイドラインに沿った心不全治療～SGLT2 阻害薬への期待～。大阪城循環器連携の会、WEB、2022 年 10 月 6 日

余田拓海、中村雅之、家原卓史、水森祐樹、村岡直哉、南慎哉、鵜飼一穂、坂本麻衣、福島貴嗣、堀内恒平、大橋拓也、山根治野、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋剛、池岡邦泰、安部晴彦、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：運動負荷心エコー図検査にて虚血による拡張障害の改善を観察しえた左室駆出率が保たれた心不全の 1 例。第 134 回日本循環器学会近畿地方会、大阪市、2022 年 12 月 10 日

村岡直哉、家原卓史、安部晴彦、中村雅之、水森祐樹、南慎哉、鵜飼一穂、坂本麻衣、堀内恒平、福島貴嗣、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、三嶋剛、池岡邦泰、井上耕一、上田恭敬、松村泰志：サクビトリル・バルサルタンを用いて速やかに急性期を離脱した高度肥満の若年心不全の 1 例。第 134 回日本循環器学会近畿地方会、大阪市、2022 年 12 月 10 日

B-8

安部晴彦：心不全患者教育・地域連携への取り組みとハートクラブネットワーク事業紹介。大阪ハートクラブ、WEB、2022 年 6 月 30 日

安部晴彦：心不全治療の新展開。脳卒中・心不全予防を考える会、WEB、2022 年 8 月 18 日

安部晴彦：心不全患者さんをいかに外来でフォローするか？：エビデンスとコツ。法円坂循環器フォーラム、大阪市、2023 年 3 月 2 日

安部晴彦：症例から学ぶ心不全の最近の診断と治療。循環器病談話会、大阪市、2023 年 3 月 25 日

医療情報研究室

室長 岡垣篤彦

医療情報研究室では、医療への IT 応用に関するソフト、ハードの両側面の研究を行っている。病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム 本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治験・臨床研究や医療安全に関する システム的検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っている。また、ネットワーク技術や画像処理技術の応用・改良など、情報処理の基盤技術 に関連した研究も行っている。早急に実用化することを求められている災害時の国内標準 電子カルテについて、あるいは FHIR、SS-MIX、SS-MIX2、MML、openEHR といった標準規格を通して異なる 電子カルテシステム間のスムーズな連携についても研究を行なっている。国内で行なわれている医療機関間のデータ共有に関する主要な研究プロジェクトのうち代表的な 2 つのプロジェクト、すなわち、国立病院機構の「電子カルテデータ標準化等のための IT 基盤構築事業」、および大阪大学が主導する「病院情報システムデータを利用した横断的研究基盤構築に関する研究」、に参加している。さらに、がん登録関連の研究として、「大阪がん診療実態調査」、「癌診療きんてん化のための臨床情報データベース構築と活用に関する研究」、「新型コロナウイルス感染症がリアルワールドのがん診療に及ぼした影響:癌登録を基礎とした調査」に参加している。2014 年 1 月より実用化された救命救急外来経過表は、救命救急外来の診療速度についてける国内で最も進んだ電子カルテとして大きな注目を集め、東京大学、京都大学、沖縄中部病院、国立病院機構名古屋医療センター、松波総合病院など、国内の一流研究・医療機関より見学を受け入れた。2020 年 1 月に更新した電子カルテシステムは、システムの応用範囲が広くなり、データ利用についても 多彩な可能性が考えられる。2022 年にはこれに加えて入院患者の急変予測を可能とする Rapid Response System を実用化した。2013 年度は災害医療研究室と共同で厚労省指定研究「南海トラフ巨大地震の被害想定に対する DMAT による急性期医療対応に関する研究」において GIS の技術を用いた DMAT 被災地派遣支援ソフトウェアの開発を行い 2014 年度に報告書を上梓した。引き続き災害関連の研究として 2015 年度より厚労省指定研究「首都直下地震に対応した DMAT の戦略的医療活動に必要な医療支援の定量的評価に関する研究」を 2 年間行なった。南海トラフ地震への医療支援に関してはその後も継続的に研究に参加しており、2016 年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）分担研究「南海トラフ地震に関する研究」に共同研究者として参加し、2017 年度、2018 年度も引き続き共同研究者として参加した。医療情報学会において 2017 年に「災害・救急医療へのユーザーメイド IT の貢献」、2018 年には「医療の質向上に貢献する診療支援システムとその効果分析」というテーマでワークショップを主催した。2019 年には災害時の療養病床の支援について研究を行なった。2020 年秋の医療情報学連合大会では、「COVID-19 パンデミック対策としての広域および医療機関内情報システムの検討」というタイトルでワークショップを主宰した。2021 年秋

の医療情報学連合大会には「COVID-19 パンデミックに対し、広域情報システム、単独医療機関の情報システムはいかに 貢献したか」というタイトルでシンポジウムを主宰した。2022 年は「RRS への臨床現場への対応—病院情報システムを用いた診療補助の可能性—」というタイトルでワークショップを主宰した。今後も医療情報学会、災害情報学会などで発表を予定している。

【2022 年度 研究発表業績】

A-3

岡垣篤彦、藤谷茂樹、草深裕光、山本康仁、白鳥義宗：RRS への臨床現場への対応—病院情報システムを用いた診療補助の可能性— 「医療情報学」42(Suppl.)2022 P475-477、2022 年 11 月 17 日

岡垣篤彦：ブルーコール用診療録の作成と運用の評価 「医療情報学」42(Suppl.)2022 P479、2022 年 11 月 17 日

山田章子、下城康史、立堀善久、岡垣篤彦：電子カルテシステムに必要な性同一性障害に対応する機能 「医療情報学」42(Suppl.)2022 P1027-1032、2022 年 11 月 17 日

B-3

岡垣篤彦、藤谷茂樹、草深裕光、山本康仁、白鳥義宗：RRS への臨床現場への対応—病院情報システムを用いた診療補助の可能性—（オーガナイザー）。第 41 回医療情報連合大会シンポジウム、札幌、2022 年 11 月 17 日

岡垣篤彦：ブルーコール用診療録の作成と運用の評価（同上演題発表）。第 41 回医療情報連合大会シンポジウム、札幌、2022 年 11 月 17 日

山田章子、下城康史、立堀善久、岡垣篤彦：電子カルテシステムに必要な性同一性障害に対応する機能。第 39 回医療情報連合大会、札幌、2022 年 11 月 20 日

岡垣篤彦：大阪医療センターの電子カルテ。第 13 回 J-SUMMITS 全国集会、第 21 回日本クリニカルパス学術集会共同企画、岐阜市、2022 年 11 月 12 日

災害医療研究室

室長 大西光雄

台風のような予測可能な災害は少なく、多くの災害は突然発生し、病院機能は一旦低下する。しかし、同時に医療機関への需要が増大することが多いため、病院機能を維持することが求められる。一口に“災害”といってもさまざまな災害がある。

- ・ 地震や風水害に代表されるような自然災害
- ・ 化学物質による汚染、感染症、放射性物質、あるいは爆発といった事案が原因となる CBRNE 災害(化学:Chemical、生物:Biological、放射性物質:Radiological、核:Nuclear、爆発物:Explosive)
- ・ 多数傷病者が発生するような、交通事故や火災、事件などの局地災害、および大規模イベントにおける医療対応
- ・ ライフライン(電気・水道・通信等)の途絶、停止による医療機関の機能低下や地域の衛生状況の悪化
- ・ 診療情報(検査、薬剤、給食などを含む)を司る診療情報システムの麻痺など実にさまざまである。いずれにせよ、c の機能低下を防ぐべく、医療機関の事業継続を念頭においた対応が望まれる。過去の災害を分析し、将来の可能性を想定し、準備・訓練することが重要である。

ここでいう“災害”という概念は、事業を継続するために必要な人的・物的・空間的な資源の需要と供給のバランスが崩れた状態を指す。このことを踏まえた上で、当研究室の災害研究は“オールハザードアプローチ(あらゆる危機・障害に対して事業を継続し続ける)”の方策を研究している。

特に化学物質が関連する災害に関して、世界安全保障イニシアティブ(Global Health Security Initiative: GHSI)における化学イベントワーキンググループ(Chemical Event Working Group: CEWG)の会議に参加しており、このWGで得た知見を活かし、日本における災害対応に取り組んでいきたい。

災害時に健康を失いやすい“災害時要配慮者”に対する研究・取り組みもおこなっている。東日本大震災における災害関連死の統計データより“病院の機能停止”によって“初期治療の遅れ”や“既往症が増悪”の発生、“避難所等への移動”、“避難所等での生活”における肉体・精神的疲労が災害関連死の原因とされていることから、平時より何が取り組めるのか、といった研究が必要と考えている。

また、大阪医療センターは以前より大阪市消防の有志とともに運営されている大阪 EMS (Emergency Medical Service) 研究会を通じて消防との連携のあり方など、15 年以上にわたりプレホスピタルでの活動・研究に取り組んできた。COVID-19 の影響により、WEB 開催が主体となったことが幸いし、非常に広域、かつさまざまな職種からの参加者が得られるようになった。米国で救命士として活躍してい

る人物との意見交換、米国の戦傷救護を学んだ自衛隊員を講師に招き、警察官、刑務官など救護を行う可能性のある多職種での研究会を多数開催でき、取り組みを研究発表してきた。当院の院内救命士も参加しており、医療の質の向上、各組織の視点を理解した上での連携を図るべく活動していきたい。また、対面の研究会開催が可能となってきたため、今後、さらに発展させる予定である。

大阪医療センターでは、以上を勘案した上で、災害訓練等をおこなってきた。COVID-19 禍以前は放射性物質に関わる災害対応を含む広域災害への対応を地域医療機関との連携を考慮した上での大規模災害訓練をおこなってきたが、COVID-19 の影響により訓練形式はワークショップや机上演習へ変更せざるを得なかった。しかし、その中でも自宅を避難所・救護所と見立て、自宅から災害訓練に参加可能なシステム、あるいは病院幹部（災害対策本部）の機能強化を目的とした訓練などさまざまな工夫、開発をおこなった。今後は、従来規模の災害訓練を再開すべく、地域（医師会・薬剤師会・訪問看護ステーション等）との連携を視野に入れた訓練を開催していく予定である。

現在の研究

- ・ 南海トラフ地震における災害医療対応シミュレーション・システムの開発（研究分担者 大西光雄 21K09087）
- ・ 大規模イベントの公衆衛生・医療に関するリスクアセスメント及び対応の標準化に向けた研究（分担研究者 大西光雄 22LA2002）
- ・ CBRNE テロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究（分担研究者 大西光雄 22LA1012）
- ・ 化学テロ発生時に必要な薬剤の国家備蓄等の適正化の研究（分担研究者 大西光雄 23CA2019）

終了した研究

- ・ オールハザード・アプローチによる公衆衛生リスクアセスメント及びインテリジェンス機能の確立に資する研究（研究分担者 大西光雄 21LA2003）
- ・ CBRNE テロリズム等の健康危機事態における対応能力向上及び人材強化に関わる研究（研究分担者 大西光雄 19LA1010）
- ・ プレホスピタルでの心肺蘇生時における脳内酸素飽和度の推移に基づいた脳循環の解明（研究分担者 大西光雄 19H03758）
- ・ 高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（研究分担者 大西光雄 19K10532）

【2022 年度 研究発表業績】

A-6

石田健一郎、寺尾紀昭、飯沼公英、草深 進、山本幸伸、黒田愛実、大西光雄：【必要性が高まる災害・パンデミック対応とその見直し】BCPの見直しとワークショ

ップを通じた職員の理解の促進(解説)「病院経営羅針盤」14 (234) : p19-24 2023年6月

B-4

石田健一郎、吉川吉暁、飯沼公英、平島園子、太田裕子、寺尾紀昭、馬場和美、上尾光弘、大西光雄: 当院における BCP 策定後の取り組みと改定の工夫 COVID-19 対応を包含した BCP と災害訓練。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

石田健一郎、飯沼公英、坂本麻衣、平島園子、太田裕子、上尾光弘、大西光雄 : コロナ禍における医療機関 BCP の改定と訓練の工夫 BCP 部門と感染制御部門を柱とした当院の COVID-19 対策と災害訓練。第 25 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、大阪、2022 年 5 月 26 日

大西光雄 : 救急領域における役割分担と役割解放—働き方改革・BCP を意識しさらに深化した他職種連携へ— : 第 123 回近畿救急医学研究会 メディカルスタッフ部会 教育講演、京都 2022 年 3 月 26 日

平島園子、太田裕子、畑中真優子、大西光雄 : コロナ禍で再認識された多職種連携の重要性 コロナ禍での各専門職の視点を理解し業務継続のための共通認識を構築するための連携 ESW 部門の取り組み。第 24 回日本臨床救急医学会・学術集会、WEB 開催、2021 年 6 月 10 日～12 日

射場治郎、大西光雄、平井亜里砂、若井聡智、嶋津岳士 : コロナ禍で再認識された多職種連携の重要性 救急・災害医が関与した高齢者施設における新型コロナウイルス感染症対策計画の策定にかかわる取り組み。第 24 回日本臨床救急医学会・学術集会、WEB 開催、2021 年 6 月 10 日～12 日

若井聡智、大西光雄 : 列車事故、列車内事件における多職種の連携。日本臨床救急医学会、2022 年 5 月

浦井健、大西光雄、大里幸暉、和田広大、吉川吉暁 : 救急搬送逼迫時における院内救命士による当院への救急搬送～出動した事案から見てきた課題～。第 26 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京、2023 年 7 月 29 日

大西光雄、浦井 健、大里幸暉、和田広大、吉川吉暁 : 院内救命士のアイデンティティ確立のための当院の取り組み。第 26 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京、2023 年 7 月 29 日

海谷雄一、三木大輔、大西光雄、島崎淳也、竹川良介、中島清一 : プレホスピタルにおける負傷者対応能力向上と医療機器開発を視野に入れた wet lab training の開発。第 26 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京、2022 年 7 月 29 日

和田広大、浦井 健、大西光雄、吉川吉暁、大里幸暉：病院救命士の病院間搬送における技術向上への取り組み～消防救急車同乗実習から学ぶ～。第 26 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京、2023 年 7 月 28 日

吉川吉暁、和田広大、浦井 健、大里幸暉、大西光雄：院内救急救命士活用のための整備とシステム構築 -大阪医療センターの場合-。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

浦井 健、大西光雄、吉川吉暁、和田広大、大里幸暉：当院における救急救命士による転院搬送業務の現状報告 多職種におけるタスクシフトの効果。第 76 回国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日

和田広大、吉川吉暁、浦井 健、大里幸暉、大西光雄：院内救急救命士の活用－米国 Emergency Medical Service Communication Specialist を参考に－。第 25 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、大阪、2022 年 5 月 25 日

三木大輔、若井聡智、大西光雄：多職種参加による戦傷者救護研修会 各職種の視点を理解し連携を深めるために。第 25 回日本臨床救急医学会総会・学術集会、大阪 2022 年 5 月

B-8

大西光雄：大阪市消防集中講義。講演“爆傷などテロへの対応－過去の事例から学ぶ”、大阪、2023 年 3 月 6 日

大西光雄：海上保安庁（第五管区海上保安本部）。講演“爆傷などテロへの対応－過去の事例から学ぶ”、大阪、2023 年 3 月 30 日

大西光雄：大阪市消防症例検討会。講演“爆傷への対応 身近な脅威”、大阪、2022 年 7 月 29 日

臨床研究推進室 臨床研究センター長・臨床研究推進室長 白阪琢磨

臨床研究事業は、従来から国立病院機構が果たすべき先駆的な政策医療の一分野である。当院では治験・臨床研究の円滑な運営・管理、支援を行うことを目的に、臨床研究センター4部12室の中に「臨床研究推進部」、「臨床研究推進室」を配置している。臨床研究推進室は“治験管理部門”と“臨床試験支援部門”の2つの部門から成るが、治験管理部門が、治験以外の臨床研究支援も含め専ら活動の中心となっている。

臨床研究推進室の構成員は、部長(室長併任)1名、臨床研究コーディネーター(CRC)9名、治験・臨床研究事務局3名、データマネージャー1名、事務補助5名、研究員1名である(2023年3月末現在)。

臨床研究推進室は、CRCおよび治験事務局として治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している他、受託研究審査委員会(IRB)事務局機能も併せ持っている。受託研究と各種臨床研究関連指針が適応される自主研究は、それぞれ独立した2つのIRB(第1委員会・第2委員会)により毎月審議を行っている。今年度も新型コロナウイルス感染防止対策からWeb会議形式による開催を継続した。

治験実績(受託研究費請求額)では、国立病院機構内施設で全国5位の成績であった。(2023年2月現在)新規受託件数23件、総件数108件、研究請求金額総額は2023年3月見込として2億円を超え、2021年度と比較し減少しているが、目標を達成することが出来た。新規受託件数は昨年度に例年の約半数となったため、治験依頼者やSMO(Site Management Organization)と積極的にコミュニケーションをとり、新規治験受託に向け努力した。2022年度は23課題、2023年度第1四半期のIRB審査予定新規治験課題数は10課題を超え、新規契約数は回復傾向を示している。

治験に関連した文書では昨年度に電磁化を行ったが、日本医師会治験促進センターの廃止に伴い2023年2月に後継システムへ移行した。

自主研究の支援に関しては、先進医療Bまたは国立病院機構EBM研究のうち、治療介入のあるものを支援しているが、国立病院機構本部から要請のあった新型コロナワクチンコホート調査については、観察研究ではあるものの国としても重要な内容であることから支援を行った。また、臨床研究法や倫理指針に基づいた質の高い臨床研究の実施を進めるために、研究機関の長が行う点検(自己点検)を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。

自主研究においても臨床研究推進室への書類提出を電子化できるよう取り組み、2023年度には体制を整備する予定である。

その他、地域治験ネットワークの活動としては大阪府内の16医療機関で形成する「治験ネットおおさか」の活動にも参加し、他医療機関との意見交換を行い、CRC養成研修での講師やファシリテーターを務めた。

学術的活動および教育については、学会・研究会で発表を行い、国立病院機構本部主催の初級者CRC養成研修では講師を務めた。

院内教育および啓発活動としては「臨床研究推進室ニュース」(年3回)の発行、

「治験セミナー」、「臨床研究セミナー」を実施した。

【2022 年度 研究発表業績】

A-6

松尾友香:「第 21 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2021in 横浜」に参加して。
「Clinical Research Professionals」No.88 : P.16-17、株式会社メディカル・パブリケーションズ、2022 年 2 月 1 日（実際は 2022 年 5 月発刊であったため、2022 年度の業績として報告）

B-4

松尾友香、奥村葵美、吉村英美、三井知子、名畑優保、仁谷めぐみ、小林恭子、羽田かおる、白阪琢磨: シミュレーション訓練を通じた災害対応マニュアルの評価。CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2022 in 新潟、現地開催、2022 年 9 月 17 日～9 月 18 日

吉村英美、羽田かおる、瀬野千亜紀、千賀明日香、小林恭子、白阪琢磨: 症例登録促進に向けた PDCA サイクルの実践。CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2022 in 新潟、現地開催、2022 年 9 月 17 日～9 月 18 日

南千華子、鈴木千恵子、小居秀紀、信谷宗平、近藤智子、田村祐子、山原有子、遠藤三彦、植田正樹、津田達志: 治験における医療機関の品質マネジメントシステムを理解・導入するための手引き作成の試み。CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2022 in 新潟、現地開催、2022 年 9 月 17 日～9 月 18 日

千賀明日香、柚本育世、滝尾愛莉、羽田かおる、山上宏、白阪琢磨: 急性期虚血性脳卒中を対象とした治験におけるエントリー促進の取り組み。第 76 国立病院総合医学会、熊本、2022 年 10 月 7 日～10 月 8 日

B-5

名畑優保: 本気のエンロールコミットメント～その後～。第 10 回 DIA クリニカルオペレーション・モニタリング ワークショップ、Web 開催、2022 年 7 月 30 日

B-8

信谷宗平: 医薬品業界について、医薬品開発の流れ、関連法規。摂南大学 医薬品開発演習、大阪、2022 年 11 月 8 日

奥村葵美: CRC の役割と研究協力者として必要な倫理的態度。国立病院機構主催 2022 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修、Web 開催、2022 年 9 月 1 日

小林恭子: 実施計画書及び治験薬概要書の読み方。治験ネットおおさか主催 CRC 養成研修（初級者向け研修）、Web 開催、2022 年 11 月 5 日

羽田かおる: グループワークアドバイザー（日々の業務で困っていること、他施設の

体制についての質問、ディペックスジャパンをみた感想)。治験ネットおおさか主催
CRC 成研修（初級者向け研修）、Web 開催、2022 年 10 月 29 日

レギュラトリーサイエンス研究室

室長 松村泰志

レギュラトリーサイエンスは、科学技術の成果を人と社会に役立てることを目的に、根拠に基づく的確な予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学とされている。また、レギュラトリーサイエンスは、的確な予測、評価、判断によって①限りなく進歩する科学技術を正しく生かして有効に利用する最善の道を見出すことと、②人間の願望から出発した科学技術が、社会や人間を無視して発達することによってもたらされる深刻な影響を未然に防ぐこと、の二つの大きな目的/役割を担っている。当研究室は、レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成 23 年 4 月に設立された。

令和 4 年度においては Real World Data のソースである電子カルテデータを活用した臨床研究のあり方についての検討を継続して行った。大阪大学との共同により進めている OCR-ne の臨床研究基盤システムを充実させ、これを活用した多施設共同研究を実施した。また、Personal Health Record のシステムの開発を進め、個人が施設をまたがって診療を受けている場合でも、個人に重要な診療データが構造化されて集積する仕組みについて研究開発を継続させた。これにより、長期の予後を追跡することが容易となる。これらのプロジェクトについて、各方面からの依頼を受けて講演を行った。

【2022年度 研究発表業績】

A-0

Nakatani, D; Dohi, T; Takeda, T; Okada, K; Sunaga, A; Oeun, Bolrathanak; Kida, H; Sotomi, Y; Sato, T; Kitamura, T; Suna, S; Mizuno, H; Hikoso, S; Matsumura, Y; Sakata, Y. Relationships of Atrial Fibrillation at Diagnosis as well as Type of Atrial Fibrillation during Follow-up with Long-term Outcomes for Heart Failure with Preserved Ejection Fraction. Circ Rep. 2022 Apr 23;4(6):255-263. 2022 年 6 月 10 日

Nagoshi K, Watari T, Matsumura Y. Prospects for Hospital Information Systems and Patient Safety in Japan. Healthc Inform Res. 2022 Apr;28(2):105-111. 2022 年 4 月 30 日

Kikuchi M, Kobayashi K, Itoh S, Kasuga K, Miyashita A, Ikeuchi T, Yumoto E, Kosaka Y, Fushimi Y, Takeda T, Manabe S, Hattori S; Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative; Nakaya A, Kamijo K, Matsumura Y. Identification of mild cognitive impairment subtypes predicting conversion to Alzheimer's disease using multimodal data. Comput Struct Biotechnol J. 22;20:5296-5308. 2022 年 8 月

A-3

松村泰志：患者安全向上のための電子カルテへの期待とその実現のための道筋「月刊新医療」2023年2月号

B-3

松村泰志：医療データの流通と利活用の時代に向けて～未来医療の姿と実現のための課題～。日本医療検査科学会第54回大会、神戸国際会議場、2022年10月8日

B-6

松村泰志：地域医療福祉情報連携における次なる課題とその実現のための青写真。地域医療福祉情報連携協議会総会第15回シンポジウム、現地+Web配信、2022年12月9日

松村泰志：医療機関の診療録から個人を軸とする健康医療記録へ。第50回日本頭痛学会総会アフタヌーンセミナー、2022年11月26日

松村泰志：事務連絡「画像診断報告書等の確認不足に対する医療安全対策の取り組みについて」発出に向けた厚労科研研究班での検討内容について。医療安全全国フォーラム2022、2022年11月23日

松村泰志：医療現場におけるデジタル化推進への期待。医療現場デジタル化推進マッチングフォーラム、大阪、2022年10月24日

松村泰志：個人起点での医療ヘルスケアデータの利活用の課題と展望 SUNDRED、NTT西日本、Biock パーソナルデータ分科会共催セミナー、現地+Web配信、2022年8月30日

松村泰志：医療機関のネットワークのニーズと情報セキュリティ対策の課題—病院管理者の立場から—。第1回医療機関のセキュリティセミナー(シードプランニング特別セミナー)、2022年7月30日

松村泰志：デジタルヘルス活性化の取り組みでDXを進める。2022年度第2回Health Outcomes & Technology Forum、2022年4月28日

B-9

松村泰志：LOVE FLAP (DOCTOR'S FLAP)。FM大阪、2022年7月7日

II. 研究助成一覽

令和4年度 研究助成一覧

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	慢性腎臓病におけるADH1B、ALDH2を考慮した飲酒の残腎機能への影響20k17270	木村 良紀	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(若手研究)	主任	継続	補助金(研究費)	30万円	0万円	9万円	39万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	リンパ管奇形に対するシロリムス薬承認を見据えた病理診断基準の確率21K15384	廣瀬 由美子	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(若手研究)	主任	継続	補助金(研究費)	90万円	0万円	27万円	117万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	血友病A患者・保因者の第四因子遺伝子型に基づく病態解析と新規個別化治療戦略の開発21K07856	矢田 弘史	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	主任	継続	補助金(研究費)	90万円	0万円	27万円	117万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	微小流路を連結した灌流培養系によるα-インスクリン線維化条件の探索22K07530	福角 勇人	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	主任	新規	補助金(研究費)	100万円	0万円	30万円	130万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	脳梗塞に対するips細胞移植と内在性幹細胞による肝細胞コンピネーション治療法開発20K09354	金村 米博	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	10万円	3万円	13万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	深層学習、シミュレーション、統計モデルを融合した人工股関節手術の意思決定支援19H01176	三木 秀宣	科学研究費助成事業(学術研究費補助金)(基盤研究(A))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	40万円	12万円	52万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	南海トラフ地震における災害医療対応シミュレーション・システムの開発21K09087	大西 光雄	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	5万円	2万円	7万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	神経腫瘍の二重微小染色体による診断法とLiquid biopsyの開発20K09324	金村 米博	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	20万円	6万円	26万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	機械学習を用いた画像診断レポートからの情報抽出と利活用に関する研究20K07196	松村 泰志	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	15万円	5万円	20万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	重症二次性三尖弁逆流に対するスバイラル・サスペンション法の有効性に関する臨床研究21K08826	西 宏之	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	3万円	1万円	4万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	定量的MRIによる神経腫瘍の分子診断と可視化技術の開発22K09200	金村 米博	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(C))	分担	新規	補助金(研究費)	0万円	5万円	2万円	7万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	頸動脈波の非侵襲簡易計測による脳動脈閉塞のプレホスピタル診断手法の開発21H01344	山上 宏	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(B))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	25万円	8万円	33万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	頸動脈波の非侵襲簡易計測による脳動脈閉塞のプレホスピタル診断手法の開発21H01344	山上 宏	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(B))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	48万円	0万円	48万円
③科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)	機能亢進型GNAS変異マウスを用いた線維性骨異形成症の病態解明と創薬展開21H03110	廣瀬 由美子	科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(B))	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	15万円	5万円	20万円
⑥厚生労働科学研究費	エイズ予防指針に基づく対策の評価と推進のための研究21HB1002	白阪 琢磨	厚生労働行政推進調査事業費補助金	主任	継続	補助金(研究費)	799万円	0万円	287万円	1,086万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究21HB2003	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	主任	継続	補助金(研究費)	650万円	0万円	850万円	1,500万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究21HB2003	矢田 弘史	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	1,000万円	0万円	1,000万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究21HB2003	安尾 利彦	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	30万円	0万円	30万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究21HB2003	矢倉 裕輝	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	200万円	0万円	200万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究21HB2003	東 政美	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	20万円	0万円	20万円
⑥厚生労働科学研究費	非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染血友病患者に合併する腫瘍への包括対策に関する研究21HB2005	三田 英治	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	30万円	0万円	30万円
⑥厚生労働科学研究費	オーダーメイドな肝炎ウイルス感染防止・重症化予防ストラテジーの確立に資する研究21HC2001	田中 聡司	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	40万円	0万円	40万円
⑥厚生労働科学研究費	非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染血友病患者に合併する腫瘍への包括対策に関する研究21HB2005	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	30万円	0万円	30万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究20HB2001	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	450万円	0万円	450万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑥厚生労働科学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究20HB2001	矢倉 裕輝	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	250万円	0万円	250万円
⑥厚生労働科学研究費	大規模イベントの公衆衛生・医療に関するリスクアセスメント及び対応の標準化に向けた研究22LA2002	大西 光雄	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0万円	100万円	0万円	100万円
⑥厚生労働科学研究費	健診施設を活用したHIV検査体制を構築し検査機会の拡大と知識の普及に挑む研究 20HB1003	渡邊 大	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	60万円	0万円	60万円
⑥厚生労働科学研究費	オールハザード・アプローチによる公衆衛生リスクアセスメント及びインテリジェンス機能の確率に資する研究21LA2003	大西 光雄	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	70万円	0万円	70万円
⑥厚生労働科学研究費	HIV陽性者に対する精神・心理的支援のための身体科主治医と精神科専門職の連携体制構築に資する研究21HB1010	白阪 琢磨	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	70万円	0万円	70万円
⑥厚生労働科学研究費	循環器救急疾患に対する救急医療現場の連携推進のための課題抽出と専門医間の連携構築を目指したガイドブックの作成22FA1017	山上 宏	厚生労働科学研究費補助金	分担	新規	補助金(研究費)	0万円	20万円	0万円	20万円
⑥厚生労働科学研究費	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者に対する肝移植を含めた外科治療に関する研究21HB2002	上平 朝子	厚生労働行政推進調査事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	20万円	0万円	20万円
⑥厚生労働科学研究費	特発性大腿骨頭壊死症の医療水準及び患者のQOL向上に関する大規模多施設研究20FC1010	三木 秀宣	厚生労働科学研究費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	0万円	10万円	0万円	10万円
⑩その他財団等からの研究費	日本外傷データバンクを用いた新型コロナウイルス感染症のエピデミックが厚労湖での重症外傷患者の救急医療に与える影響の解析	小島 将裕	JA共済交通事故医療研究助成	主任	新規	補助金(研究費)	100万円	0万円	0万円	100万円
⑩その他財団等からの研究費	エイズ発症予防に資するための血液製剤によるHIV感染者の調査研究	白阪 琢磨	友愛福祉財団研究助成金	主任	新規	補助金(研究費)	1,030万円	0万円	0万円	1,030万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	切除不能または再発食道癌に対するOF(シスプラチン+5-FU)療法とDCF(biweeklyドセタキセル+CF)療法のランダム化第Ⅲ相比較試験	平尾 素宏	静岡がんセンター	分担	継続	委託研究費	万円	25万円	8万円	33万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	病理学的StageⅡ/Ⅲで“vulnerable”な80歳以上の高齢者胃癌に対する開始量を減量したS-1術後補助化学療法に関するランダム化大腸癌に対する術後補助化学療法に関するランダム化比較第Ⅲ相試験	平尾 素宏	岐阜大学	分担	継続	委託研究費	0万円	20万円	6万円	26万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	国内流行HIV及びその薬剤耐性株の長期的動向把握に関する研究	渡邊 大	AMED(国立感染症研究所)	分担	継続	委託研究費	0万円	60万円	18万円	78万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	小児特有の脳腫瘍に対する標準治療確立のための全国他施設共同研究	金村 米博	大阪市立総合医療センター	分担	継続	委託研究費	0万円	250万円	75万円	325万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	細胞-基質間の力を基盤とした細胞移動と神経回路形成機構の解明およびその破綻による病態の解析	金村 米博	奈良先端科学技術大学院	分担	継続	委託研究費	0万円	500万円	150万円	650万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	全医療職ニーズ/シーズ収集をワンストップで実現する次世代医療機器連携拠点	金村 米博	AMED	主任	継続	委託研究費	1,209万円	0万円	121万円	1,330万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	遺伝子変異に応じたがんシグナルの同定を基盤とした小児脳腫瘍の新規治療法に関する研究開発	金村 米博	国立精神・神経医療研究センター	分担	継続	委託研究費	0万円	350万円	105万円	455万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	2.5次元共培養系を用いたヒト神経細胞シナプス成熟法の開発	金村 米博	AMED	主任	継続	委託研究費	1,600万円	0万円	480万円	2,080万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	iPS細胞研究中核拠点・疾患・組織別実用化研究拠点(拠点A)(01)	金村 米博	AMED(慶応大学)	分担	継続	委託研究費	0万円	5,712万円	1,713万円	7,425万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	高齢者初発肺芽腫に対するテモゾロミド併用分割放射線治療の最適化に関する研究	金村 米博	京都大学	分担	継続	委託研究費	0万円	100万円	30万円	130万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	可及的摘出術が行われた初発肺芽腫に対するカルムステン脳内留置剤を用いた標準治療確立に関する研究	金村 米博	北里研究所	分担	継続	委託研究費	0万円	154万円	46万円	200万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	中性脂肪蓄積心筋血管症の診療に直結するエビデンス創出研究	東 将浩	大阪大学	分担	継続	委託研究費	0万円	10万円	3万円	13万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	StageⅡ大腸癌に対する術後補助化学療法の有用性に関する研究	加藤 健志	AMED	分担	継続	委託研究費	0万円	20万円	6万円	26万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	BRAF V600E変異型切除可能大腸癌遠隔転移に対する個別化周術期治療の医師主導治験の実施	加藤 健志	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	0万円	100万円	30万円	130万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	切除可能な高頻度マイクロサテライト不安定性結腸直腸癌に対して免疫チェックポイント阻害薬を用いた根治治療の有効性・安全性を検討する研究	加藤 健志	国立がん研究センター	分担	新規	委託研究費	0万円	300万円	90万円	390万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑨日本医療研究開発機構研究費	肝硬変患者のQOLの向上及び予後改善に資する研究	三田 英治	長崎医療センター	分担	継続	委託研究費	0 万円	30 万円	9 万円	39 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	脳出血超急性期患者への遺伝子組換え活性化型VII因子投与の有効性と安全性を検証する研究者主導国際臨床試験	藤中 俊之	国立循環器病研究センター	分担	継続	委託研究費	0 万円	31 万円	9 万円	40 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	子宮頸癌のリスク低減を目的としたヒトパピローマウイルス(HPV)標的粘膜免疫療法の医師主導治験とコンパニオン診断の開発	廣瀬 由美子	日本大学医学部	分担	継続	委託研究費	0 万円	300 万円	90 万円	390 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	局所切除術後pT1 大腸癌の新たな根治度判定基準の確立	三代 雅明	AMED	主任	継続	委託研究費	980 万円	0 万円	294 万円	1,274 万円
⑩民間セクターからの寄附金	心血管疾患における石炭化評価と冠動脈疾患リスク層別化に関する研究	安部 晴彦	日本ベーリンガーインゲルハイム㈱	主任	新規	委託研究費	30 万円	0 万円	0 万円	30 万円
⑩民間セクターからの寄附金	血管内視鏡を用いた冠動脈疾患等動脈硬化性疾患患者の予後予測に関する観察研究他	上田 恭敬	日本ライフライン株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑩民間セクターからの寄附金	慢性肝疾患における新規バイオマーカーの探索	田中 聡司	中外製薬株式会社	主任	新規	委託研究費	30 万円	0 万円	0 万円	30 万円
⑩民間セクターからの寄附金	再発進行直腸癌に対する根治的拡大手術についての検討	加藤 健志	中外製薬株式会社	主任	新規	委託研究費	100 万円	0 万円	0 万円	100 万円
⑩民間セクターからの寄附金	腰椎変性疾患による下垂足の手術成績 術前下腿周径からの予測	青野 博之	ビー・フラウンエス・クラフ株式会社	主任	新規	委託研究費	150 万円	0 万円	0 万円	150 万円
⑩民間セクターからの寄附金	ポリ-L乳酸(PLLA)製の胸骨ピン又はPLLAとハイドロキシアパタイト(HA)粒子の複合体プレートを用いた閉胸法の検討	西 宏之	日本ライフライン株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑩民間セクターからの寄附金	DES留置後のDES Failure予防のために強化LDLコレステロール低下療法が有効か検討する単施設無作為化試験	上田 恭敬	第一三共株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑩民間セクターからの寄附金	慢性肝疾患における新規バイオマーカーの探索	田中 聡司	日本イーライリリー株式会社	主任	新規	委託研究費	30 万円	0 万円	0 万円	30 万円
⑩民間セクターからの寄附金	慢性肝疾患における新規バイオマーカーの探索	田中 聡司	EAファーマ株式会社	主任	新規	委託研究費	40 万円	0 万円	0 万円	40 万円
⑩民間セクターからの寄附金	血管内視鏡を用いた冠動脈疾患等動脈硬化性疾患患者の予後予測に関する観察研究他	上田 恭敬	オーパスネイチメディカル株式会社	主任	新規	委託研究費	100 万円	0 万円	0 万円	100 万円
⑩民間セクターからの寄附金	腰椎変性疾患による下垂足の手術成績 術前下腿周径からの予測	青野 博之	京セラ株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	0 万円	0 万円	50 万円
⑩民間セクターからの寄附金	腰椎変性疾患による下垂足の手術成績 術前下腿周径からの予測	青野 博之	株式会社ロバート・リード商会	主任	新規	委託研究費	100 万円	0 万円	0 万円	100 万円
⑩民間セクターからの寄附金	心臓血管外科手術における長時間人工心肺後凝固異常に対する薬物療法の検討	西 宏之	株式会社メディコスヒラタ	主任	新規	委託研究費	40 万円	0 万円	0 万円	40 万円
⑩民間セクターからの寄附金	脳動脈瘤コイル塞栓術後再発瘤に対する治療成績の検討	木谷 知樹	株式会社 アルム	主任	新規	委託研究費	90 万円	0 万円	0 万円	90 万円
⑩その他財団等からの研究費	ヒトiPS細胞由来神経細胞を用いたインビトロ薬剤評価手法の開発	金村 米博	倉敷紡績株式会社	主任	継続	共同研究費	174 万円	0 万円	26 万円	200 万円
⑩その他財団等からの研究費	放射線治療用クッションの開発	水野 雄貴	日本ケミカル工業株式会社	主任	新規	共同研究費	9 万円	0 万円	1 万円	10 万円

III. 全研究業績の区分分類と 業績件数の総括表

診療科の研究業績

診療科名	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
総合診療部	22				2			12				6				1	1
腎臓内科	12	3				1						3		2		2	1
糖尿病内科	28	3		1	1							5	4			13	1
輸血療法部	2															2	
血液内科	77	6				1			2	1	5	1	3		56	2	
血友病科	49	4				2		1	1	10	1		1	25	3	1	
呼吸器内科	10	1			1		1				1		2		3	1	
脳卒中内科	43	21	1		1	4		5		8		1	2				
感染症内科	93	2	1	1	1	6	7		1	4	14		3	8	44	1	
精神科	9									1		1			7		
消化器内科	106	28			2			1	2	13	7	14	3	8	1	26	1
循環器内科	159	13			1	9			2	1	25	33	3	21			51
小児科	2				1						1						
外科	186	31		2	7				1	19	12	76	21	13		1	3
形成外科	10	4			1						1	2		2			
整形外科	34	5	1		1	1	1			3	7	13	1				1
脳神経外科	119	12		5		1	12			3	25	36	1	8		15	1
心臓血管外科	23	1			1						4	4	10	3			
皮膚科	13				4							2		3		4	
泌尿器科	13	3			3							6				1	
産科・婦人科	13				6						6		1				
眼科	21		3		2						1	2	4			8	1
耳鼻咽喉科	3	1										2					
放射線診断科・放射線治療科	62	5				2		2			1	20	1	14	1	16	
口腔外科	4				1							1		1		1	
救命救急センター	59	26		1	1							23				8	
麻酔科	6							1				2		2		1	
臨床検査科	38	12	5	1	4	1					6		5	4			
リハビリテーション科	3											3					1
臨床腫瘍科	26	5			1					3		4		4		8	1
薬剤部	54	2			1	1	1				4	9	1	3	3	29	
看護部	14													14			
栄養管理部	3											3					
ケアサポートチーム	24	2			1						3	3		3		11	1
臨床心理室	19											3				16	
メンタルヘルsteam「なのはな」	2															2	
臨床工学室	12	1									5		6				
院長室	13	3			1						1			7			1
小計	1,386	194	11	11	45	29	22	17	10	46	132	297	64	123	38	278	69

臨床研究センターの研究業績

研究室名	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
臨床研究センター	44		2			6	4				1	11		3	4	12	1
幹細胞医療研究室	13	2									6	5					
再生医療研究室	64	10				1					16	35				2	
分子医療研究室	64	10				1					16	35				2	
エイズ先端医療開発室	170	3	1	1	3	7	9		1	8	16	1	3	15	101	1	
HIV感染制御研究室	54	2	1		2	2	4				5	11		2	4	21	
臨床疫学研究室	40	14							1	5	3	10		6		1	
がん療法研究開発室	172	30		1	7				1	19	12	71	19	11			1
高度医療技術開発室	19	1			1						2	8		3		4	
医療情報研究室	7				3						4						
災害医療研究室	18							1				14				3	
臨床研究推進室	10							1				4	1			4	
レギュラトリーサイエンス研究室	13	3			1						1			7			1
小計	688	75	4	2	17	17	17	2	2	25	74	220	21	35	23	150	4

全研究業績

分類	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
合計	2,074	269	15	13	62	46	39	19	12	71	206	517	85	158	61	428	73

研究業績の分類基準と記号

著述発表業績区分				口演発表業績区分											
A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
英文 著述	単独執筆	共同執筆 (含連名)	原著	総説			シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)			
	単行書	邦文著述 (学会誌・学術専門誌)	学術医学研究班報告書 講演発表論文	その他	国際学会	国内学会の全国年次学会	国内学会の地方会 及び分科会研究会	乗効調査 研究会発表	文化講演 教育講演等	TV出演 ラジオ 放送出演					

Research Vol.42 (2022)

独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター
臨床研究業績年報

発行者 独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター 院長 松村泰志

編集 臨床研究センター
〒540-0006 大阪市中央区法円坂2丁目1番14号
電話 (06) 6942-1331

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
電話 (06) 6976-8761

